

◇3 めだかボックスに
お気楽転生者が転生
《完結》

こいし

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

リリカル世界に転生した瑛嗶が物語を終えて次に向かった先の世界の話。魔法の力を失い、新たに物語に則ったスキルを手に入れた。チートなスキルばかり保有するキャラクターばかりの世界で、瑛嗶は何をもたらず？

※大幅な原作崩壊とキャラ崩壊などありますので、ご不快に思われる方もいらっしゃると思います。頭を空にして読んでいただける方以外はブラウザバックを推奨いたします！

なお、かなり原作崩壊とキャラ崩壊が激しい場面がありますが、原作を侮辱する意図はございません。あくまで二次創作であることを事前にお伝えいたします。

目次

じゃ、転生しろ	1
ああ、俺は泉ヶ仙瑗。面白い事が大好きな男だよ	2
面白くねえな	13
なじみの痛みを思い知れ	28
スキルって便利	35
さて、それじゃあ何処へ行こうか	40
中学生生活はつまらない	45
半纏、絶対誰にも言うなよ	60
じゃ、行くとしますかあ	68
新たな生徒会長——黒神めだかだ	74
瑗先輩ほどではありません	82
私の名前は、帯刀鞆負	88
うん、面白い事いっぱい教えてね	92
最強って、何だと思う？	96
俺の行動理由はたった一つだけ	105
王様は、ただの奴隷に良い様にされてるただの犬だよ	112
死ねこのクソ野郎おおお!!!	127
久しぶり。元気にしてた？	134

スキルの一つや二つ、持っていないわけがないだろう

が、俺はお前に会いたかったぜ！ 球磨川ア！！

だって、俺——生まれてこの方、傷を負ったことなんてないし

『うん』『まいった！』『強くなったね、善吉ちゃん』

とりあえず、僕から一点取る事。話はそれからだね

僕だって一回くらい勝ちたい。どんなに格好悪くたって、どんなに弱くたって、胸を張って主役を張れるって証明したい

雀が核爆弾を喰らった様な顔をしているよ？

！

あっちには、泉ヶ仙毬喰がいる

球磨川禊は私がこの手で改心させる！！

175 詳しい事は追々知らせに来なさい

217 勝負は一瞬で終わるからだよ

183 俺はお前と会いたくなかった……だ

224 がない

やあ、初めましてめだかちゃん。僕だ

よ ————— 231

『うん』『精々頑張るとするよ』

239

ふふふ、なんだか今日は良い日になり

そうだなあ ————— 256

俺は古賀じゃねえ、雲仙冥利だ！

261

俺はお前じゃないし、お前は俺じゃな

い ————— 268

この学園が減ぶくらいの覚悟はしてお

いてね？ ————— 275

さて、なじみ。話を付けようか

281

俺がお前の現実だよ ————— 286

『えー』『モブキャラの皆さん』『こんに

ちは！』 ————— 294

いらっしやい生徒会長失格の馬鹿野郎

————— 301

面白くない ————— 307

じゃあ世界の半分をお前にやろう

314

だから、景品を寄越せ。黒神めだか

319

まあ黒神めだかの考えた企画だし、こ

んなもんか？ ————— 325

君程度が瑗嗶の何を知ってるって言う
のさ ————— 330

多分、安心院さんは……その、瑗嗶さん
に恋してるんだと思うよ？ ————— 335

全く。ようやく落ち着いてきたのに、
またドキドキしてきちゃったぜ ————— 342

隙もなければ弱点も無しかよ……！
348

世界は平凡か？ 未来は退屈か？ 現
実は適当か？ 安心しろ、それでも生き
ることは劇的だ！ ————— 354

そろそろ面白そうな事件が起きてもよ
さそうだけど、どうなるかな ————— 363

さて———こんな展開もまた、面白い

イカサマという言葉を知れ ————— 375

うん。僕は君のそういう所が好きだよ

『それじゃ、また明日とか！』 ————— 381

善吉、私と結婚してくれ！ ————— 396

美味しい ————— 402

全く持って面白くないぞ、お前ら

410 ああ……本当に、嫌な感じだ……

416 獅子目言彦………いつか、絶対に……

殺してやる……!

424

そいつは聞けない相談だな

436

僕はね、瑛嬢。世界で何よりも、誰より

も君の事が——大好きなんだ。

444

見事、僕はこの戦いを生涯忘れない

453

さて、それじゃあ行こうか。鶴喰梟の

居場所にして不知火半袖の次の仕事場、

そして俺が前働いてた場所、箱庭病院に、

さ

463

これは寿常套のスタイル、『童幼使い』

だよ

469

——喧嘩、しようぜ(ぞ)

476

さて、聞いて驚け、見て沈め、異世界を

渡った俺に出来る、最高最大の娯楽言葉

——

見せてみるよ、俺に。週刊少年ジャン

プみたいな逆転劇を

——

不知火ちゃんを取り戻すんだらう?

——

? ——

そうかい、俺は人吉善吉。一秒だって

一人じゃ生きていけない普通の格好良い

男子高校生だよ

510

——

ばいばい、人間

506

	御帰り、愛してんぜ。人外	516	番外編	I F 悲恋の人外	569
	百輪走	520	番外箱	江迎怒江と泉ヶ仙瑛叟の接点	
	最初の一輪を、お前に贈ろう	526	上		580
	そいつはいいな。さて、しばらくぶり		番外箱	江迎怒江と泉ヶ仙瑛叟の接点	
	に本気を出すでしょう	532	下		587
	『ていうか、さつきからちよくちよく惚		番外箱	瑛叟の異世界旅行	595
	気てくるのは嫌がらせ?』	537	番外箱	瑛叟の異世界旅行	606
	——お前は『最高』だ、めだか		番外箱	瑛叟の異世界旅行	618
543			番外箱	いつか言ってたなじみへの	
	まあこれからじっくり分かりあつてい		ドツキリ話	①	629
	こうよ。箱庭学園へようこそ!	555	番外箱	いつか言ってたなじみへの	
	番外		ドツキリ話	②	633
	結婚しようぜ	561	番外箱	いつか言ってたなじみへの	

ドツキリ話

③

—

639

番外箱

いつか言つてたなじみへの

ドツキリ話

④

—

646

番外箱

いつか言つてたなじみへの

ドツキリ話

⑤

—

652

じゃ、転生しろ

さて、リリカルなのはでは活躍した瑛喰だけど、物語が終わったのでめだかボックスに行っちゃう事にした。なんせ最近ジャンプ読んでると瑛喰とガチで戦わせたい奴がもうゴロゴロ現れちゃったもんだから作者の妄想が頭の中では收拾付かなくなっちゃったんだ。もう文字にしないとパンクするよこれは。

ということとで神様だ。リリカル世界を終えた瑛喰がやってくるのを待っている訳で、そろそろ来るころだと思っただけ

「つと、終わった」

「うん、じゃ早々に転生しろ」

「え」

「さようなら」

「ええ!？」

「一応異能があれば使えるから。あとリリカル世界で身体能力強化しまくってただろ前。そのせいでお前の身体能力ヤバイ事になってるからよろしく。」

そう言った後、俺は瑛喰を次の世界へと飛ばした。

ああ、俺は泉ヶ仙瑛嘎。面白い事が大好きな男だよ

さて、神様の適当な転生の末に新たな世界に生まれました。泉ヶ仙瑛嘎です。いや本当に適当だなあと思う。なんせ、今俺がいるのは上空2000m程の所だから。

どんどん落下していく身体、冷える身体。このままじゃあ地面にたたき付けられてお陀仏だな。どうやら魔法は使えなくなってるみたいだし。

まあでも俺のヤバいほど強化された身体能力なら衝撃を殺して着地する事も十分に可能。

けどまあ何とも適当な転生だな。でも一応この世界の異能のチカラは俺に宿っているようだ。この力が今までで一番全能じゃないかなと思う位チート能力だ。いやスキルと言った方が良いかな。

でもこのスキルだとこの世界にいるあのキャラとキャラが被るんだよなあ……。つと、さつさと着地体勢に入らないと。

そう思い、俺はくるりと身体を宙返りさせて頭を上を持ってくる。迫りくる地面に足を伸ばし、黒い地面に足を付けた——アレ？

「ふぎやゆび」

俺が足を付けたのは、黒い髪の頭だった。巫女服を身に纏い、黒髪を揺らした彼女の後頭部。その勢いは衰えることなく、足を付けた頭はその勢いに沈んでいく。そして、地面にまで沈んだ時……足と地面にその頭が挟まれてガリガリと嫌な音を立てた。

「つとと……」

俺は悪いと思いつつも、その頭を一度蹴つて再度地面に着地した。そして、視線を彼女へと向ける。俺に宿ったスキルが自動的に発動して彼女の詳細を告げた。

「えーと……大丈夫？」

「うん、まあ大丈夫だよ。でもまさか空から人が落ちてくるとは思わなかったぜ」

むくりと立ち上がり、土にまみれたその顔をこちらに向けて彼女……” 安心院なじみ ” はそう言った。

「そいつは良かった。まあ、一応謝っておくよ」

「ああうん、気にしないで。僕からしてみればこんなのかすり傷程度にもならないぜ」

安心院なじみは巫女服をパタパタと叩いて土埃を落しながらそう言った。その顔はとて余裕そうな顔だ。流石は人外だな。転生者なんじゃねえの、こいつ。記憶ないだけで。まあ、そんなことはどうでもいいんだけど。

「で、君の名前を教えてくださいませんか？」

「ん、俺の名前は泉ヶ仙瑛嘸……面白い事が大好きな男だよ」

「そうか。僕の名前は安心院なじみ……親しみをこめて安心院さんと呼びなさい」

「いやだね」

「だろうね」

——これが、俺となじみの初めての出会い。これから数億年単位で付き合っていくことになる、人外と人外の様な人間の、邂逅だった。



あの出会いからという物、俺となじみはずっと一緒に過ごしてきた。なじみから教えてもらったなじみの目的。あらゆる事が出来てしまう全知全能のなじみだからこそ抱えてしまった悩み、「シユミレーテッドリアリテイ」と名の付く病。

自身に「出来ない」事が見当たらないが故に、この世界が仮初めの偽物に見えてしまう。空想の世界の中の、空想の自分。誰かの思い描いた世界の中の一登場人物でしかない、そう思えてしまう病だ。

だから、俺はその病をどうにかする為に一番手っ取り早い方法を取らず、ただなじみに「出来ない」事を持ってくる事をし続けた。その度なじみはそれを「出来る」事に変えていき、その度スキルを増やしていった。

そんな生活を送り続けていたら、気付けば30億年程経過していた。初めて出会った時は、人間など誰もいない、氷河期の終盤。俺が広い世界の中でたった一人の人間である彼女と出会えた事は本当に偶然だったのだろう。というかだから落下時あんなに寒かったのか。

「嗚、出掛けてくるね」

「おう、最近良く出かけるな。何してんだ？」

「ん、いつも通りさ。いつも通り僕は「出来ない」事をやっていくだけだよ」

そう言うと、なじみは俺の作った木造住宅の扉を開いて出て行った。

「……最近良く出かけるなど言ったけど……」

そう、最近なじみは本当に良く出かける。毎日毎日同じ場所へと向かう。数回程度なら気にしない、数十回程度なら気にしつつ何もしない、数百回程度なら直接問う、数千回程度なら少し話を聞く、数万回程度なら付いていこうと提案する。だが、それが数億回に達したならもう付いていくしかないだろう。

「じゃ、行きますか」

俺はそう眩き、同じく扉を開いて俺に宿ったスキルを使用。その場から消えた。



「げっげっげっ、いい加減諦めたらどうだ？　いくら毎回新しいスキルを持つてくるとはいえ、流石の俺も飽きて来たぞ！」

「へっ……僕がスキルだけと思うなよ。まだまだ付き合つて貰うぜ」

俺が辿り着いた場所は、おおよそ上空100m程の空中。俺に宿った最初のスキルを使用して初めて出来る事だ。空に立つなんてね。

それにしても、あの男はなんだ？　なじみ程の奴を一蹴するなんて……アイツもまた化け物か。

「はああああ!!」

なじみは咆哮を上げてスキルをいくつも展開する。そのスキル弾幕は、常人なら確実にブチ殺せるであろう攻撃。この世界の主人公だって、不死身の過負荷(マイナス)だつて耐え抜く事は出来ない最強の一撃。

「新しくないな」

だが、その男はその弾幕をもともせずになじみの頭をその指先で弾いた。

「ガッ!」

そうしてなじみは後方へ吹き飛び、そのまま意識を失った。だが、普通ならなじみはすぐに意識を回復させて来る筈だ。なのに、なじみは一向に立ち上がる様子が無い。どういうことだろうか。

その答えはすぐに出た。つまり、あの男はスキルなのか体質なのか、与えたダメージの回復を許さないようだ。これも俺のスキル参照。

「あーあーあー……全く、派手に——はやってないか。とにかくやってくれちゃって……まいいや、コイツ持つて帰るから」

「む? この展開は新しいな! 貴様、何者だ?」

「ん? ああ、俺は泉ヶ仙瑛嘎。面白い事が大好きな男だよ」

「なるほど。娯楽主義者という訳か! 新しい、実に新しいぞ! 俺は獅子目彦! 貴様流に言うのなら、新しい事を好む男だ!」

どうでもいいけどあの頭は髪なのか? それとも炎なのか? 燃えてるの?

「では瑛嘎、少し待てよ。このまま去るのも新しくないし、面白くないだろう。少し付き合ってくれぬか？」

「何？ お前もなじみ同様に戦闘狂になっちゃったワケ？」

「げげげ、ではこのまま帰ると？」

「誰もそんなことは言っていないさ」

面白いなら、この身を投げ打つだろう。馬鹿みたいな事でも、頭の固い事でも、面白いなら何でもやるべきだ。変な常識なんか気にせず、やりたい事を全部やつちまえ。

「じゃ、ちよつと戯れようか」

手首を鳴らす俺と、目の前に転がるなじみのリボンをしゅるりと取る言彦。どうやらアレが武器らしい。それにしても、与えたダメージをそのまま回復させないとか……まあなじみも変なのに捕まったな……いや、捕まえてたのか。

「では行くぞー！」

「来いよ」

そう言つて、俺と言彦は衝突した。



あーあ、また負けた。これで通算何回目の敗北だろうか。瑛叟に内緒で何度も何度も挑んだけど、駄目だった。どうすりゃいいんだっての。

与えたダメージが回復出来ないとか……チートにも程があるぜ。つと、そろそろ意識も覚醒してきた。まあデコピンされた位じゃ脳を揺らされる程度で身体には何のダメージも無いんだけどさ。

「はあ……」

状態を起こすと、髪に瑛叟から貰ったリボンが付いていない事に気付いた。何処に行っただらう？ まさか言彦の奴が持つて行った？ あいつはそこらへんの物を武器にして戦うような遊び癖があるし、あの後誰か来たんだらうか？ まあ僕としてはもう戦うつもりはないから奪われたなら仕方ないんだけど……勝てないと分かったからね。こうなったら戦わずに目的を達成するでしょう。

「つと……」

立ち上がり、ふと振り返る。時刻は既に夜。言彦のデコピンは随分と僕の意識を深く沈めた様だ。デコピンを受けた額の痛みは既に引いている。まあ元々衝撃を受けた際の一瞬の痛みだった訳だし、ダメージにもならない物だったから当然か。

だが、振り返った先にあった光景はダメーシ云々より、僕に衝撃を与えた。

「瑛嘎……」

「ん？ おお、起きた？」

そこにいたのは、僕の同類にして家族とも呼べるもう一人の人外、泉ヶ仙瑛嘎。瑛嘎は胡坐を掻いて、星空を眺めつつ地面に酒やつまみを置いて寛いでいた。

だが、その地面が問題だ。酒やつまみを置かれていたのは、倒れ伏した言彦の大きな背中。瑛嘎が胡坐を掻いている場所もその大きな背中の上だった。

「そいつ……」

「ん？ ああ、言彦か。いやーなじみが色々とやってるの見て倒れたから回収しようとして行ったんだけど……そしたらこいつが「新しい！」とか言って襲い掛かって来て……こうなった」

「いや、それはおかしい」

「まあ、いいじゃん。よつと……」

そう言って笑うと、瑛嘎は言彦から降りて本当の地面で酒を飲み始めた。すると、言彦が眼を覚ました。

「むう………ん？ おお、瑛嘎。俺は負けたか」

「まあ、負けたんじゃない？ お前がそう思うなら」

「げげげげげげ！ 敗北とは新しいな！」

「そいつはよかった。ほれ、飲むといい」

すると、起きて早々笑う言彦に瑛嗶は持っていた酒瓶を渡した。言彦はそれを微笑して受け取り、一気に飲み干した。そして瑛嗶の隣にあるつまみを一つ取り、口に放り込んだ。

「む、美味しいな！」

「新しいだろ？」

「そうだな！ 新しいぞ！ げっげっげっげっげっげっ！」

「ん、ほらなじみも来いよ。そんな所でポーっとしてないでさ」

瑛嗶が手招きで僕を呼ぶ。その様子を見ると、もう疑問なんてどうでもよくなってくる。なんで言彦と仲良さそうに酒を飲むのか、戦った仲でなんでそこまで笑ってられるのか、そんなことはどうでも良い。

「はあ……全く、君には驚かされるばかりだぜ。瑛嗶」

僕はそう言つてカラカラと笑う瑛嗶の隣に腰を下ろす。見てみれば、全く珍妙な光景だ。人外の僕と化け物の言彦に挟まれて、無敵の馬鹿が座り、並んで一緒に月見酒をしているなんて。

——これが僕と瓊瓊の物語が始まるずっと前、おおよそ五千年前の一つの戦いの話。そして、文字通り瓊瓊の強さが垣間見えて来た最初の一瞬でもあった。

面白くねえな

言彦との勝負を終えて、おおよそ1000年。原作開始まで4000年を残した現在。瑛嗶となじみの関係に若干の変化をもたらす出来事があった。

まず、未だ紀元前のこの時代の中で、瑛嗶となじみは恐らく地上で最強の存在。だが、そんな俺達の前に原作を開始する前の大きな壁の様な存在が立ち上がったのだ。

なじみ曰く、「千年に一人位いるんだよ。勝つ事を約束された存在ってのが」との事だが、言彦がそれに当たたる存在。

そして、言彦と勝負をした千年後の今。新たにそう言う存在が現れてもおおかしくはないという事だ。原作には現れなかった過去の英傑。全能のなじみと戦い、その全てのスキルを薙ぎ払った挙句……全くの無傷でいたぶる実力を持った無名の非登場人物。

その者の名前を……石動いしなり式語ふたごと言った。



さて、最近と言う物、なじみの「出来ない」事探しにも限界が来ていた。何十億年の歳月を経て、毎日毎日やってくれば、そりやあネタも尽きるという物。それに、俺としては最近それに飽きて来ているというのもあった。

俺が一番最初になじみから「シユミレーテッドリアリテイ」の話聞いた時に思いついた手っ取り早い解決法をした方が早いのだと俺は思った。最近ではなじみの様子がピリピリしていて若干一緒に居辛いし、常時臨戦態勢を取っている様な雰囲気なのだ、そりやあ早々に解決したくもなる。

そんなある日、なじみが既視感デジャヴを感じさせる行動を取った。そう、それはかつての彦との勝負を行なっていた千年前と同様。何かと戦う様な雰囲気纏ったなじみは、あの時とは違つて本気で何かを殺そうという意思さえ感じられた。

何故そこまでなじみが本気になっているのか、そんなに殺そうと思えるほどの相手がいるのかと、疑問を抱かない訳ではないが、それを聞かせない程の圧力が今のなじみにはあった。

「……瑛、ちよつと出てくる」

「……ああ、行ってらっしゃい」

なじみを送り出して、俺は一つ息を吐く。何時もへらへらと自分の思うがままに生き

ている俺には、今の心の底から思っている事を成し遂げようとしているなじみは少しだけ眩しい。

俺の持つ、俺に宿った最初のスキルは、その名を『嗜考品』^{プレフェレンス}という。このスキルは、自分の考えた事をそのまま成し遂げるスキルを作るスキル。例えば、俺が空を飛ばたいと思つた時、空を飛ばすスキル『浮遊晴』^{フライングクロニック}が生まれたし、銃が欲しいと思つた時には、銃を精製するスキル『門前の銃頭』^{ピーストドック}が生まれた。

そんな風に、考えた端からスキルが生まれていく俺のスキル量はこの三十億年でなじみを優に超える。正直、出来ない事は何も無い。だが、このスキルだって絶対じゃない。例えば、スキルを無効化するスキル……なんてモノを持つ奴が現れた場合、俺のスキルは全て封じられる。今、スキルを無効化するスキルを考えたせいで、スキルを無効化するスキル『霧抵抗』^{ノレジスタンス}が生まれてしまったが、それだつて結局封じられてしまうのだ。

それに、言彦みたいに大抵のスキルが効かない様な奴とかも天敵になるよね。

だが、まあ今はそんなこと置いておいて……今はなじみの事だ。言彦の様に相手が手心を加えてくれるとも思えない。そうなたらなじみ以上の実力を相手が持つてた場合、なじみが無事で済むとは思えない。

「……まあ、なじみとはたかが三十億年程度の付き合いだし、俺が転生した世界で会つた一人ではない訳だ。そう思うと別に気になかなくても良いんじゃないかな？ うん、

帰ってくればそれでいいし、帰って来なければそれまで。なじみの事は忘れて原作まで過ごしていればいいか！」

そう言葉にした後、二の句が出てこない。なじみを失ってしまった場合、俺はどうなるのか。悲しみに明け暮れるのか……はたまた能天気にも通り過ごすのか、どちらなんだろうか。

過去に行った事のあるハンターハンターの世界では人の生き死になんてとても軽く、周囲の人間が死んでしまっても、仕方無かった。それにはもう慣れたし、いつまでも悲しむ様なへたれた精神もしていない。

だが、俺が今なじみを追い掛けたら……危険な目に会っているかもしれないなじみを助ける事が出来るかもしれない。いや、多分出来るだろう。そうすればなじみは今まで通り俺の傍でいつも通り余裕そうな表情を浮かべるのだろう。

「……………はぁ」

ため息をついて、少しだけ考える。なじみはどうやら俺の中で、随分と大きな存在になっていた様だ。少なくとも、家族と同じ位に思う程には。

「仕方ねえな……行くか。考えてみれば、単純すぎる悩みだったぜ」

俺はそう言つて、なじみを追い掛けるように扉を開いた。



「……安心院なじみ、いや……安心院さんと呼んだ方がいいか？ 俺としては下の名前
で呼びたい所なんだがな」

「黙れ。間違つても下の名前や安心院さんなんて呼ぶな。お前みたいな奴には名前すら
呼ばれたくないね」

安心院なじみは瑗嗶の下を出て、ある人物の下へやって来ていた。その人物は、この
世界にいきなり現れた存在。安心院なじみから見れば、自分と同じく何も無い所から生
まれた3人目の人外という認識になるが、この男の存在を安心院なじみはとても嫌悪し
ていた。

何故なら、この男の放つ雰囲気は未来の最弱の過負荷、球磨川禊とは違う……吐き気
すらする気持ち悪さだったからだ。

何処にいてもその存在の居場所が分かってしまう位にその雰囲気を増して、いつでも
自分達を見ている様な存在感。

「石動式語。俺の名前だ、よろしく頼むぜ」

「いやだね。初対面だけどそういう何もかもが大っ嫌いだ」

「まあそう言うなよ。俺としてはお前とは親しくして行きたいんだから」

そう言つて、式語はなじみの頭の先から足の先までじつとり舐めまわす様に見た。その視線に、なじみはより一層の嫌悪感を抱いて睨みつける。

「残念だけど僕にその気はない。さっさとここで——死ね」

そう言つて、なじみは言彦にした様なスキル弾幕を張る。その種類は、一つ一つで確実に人を殺せるスキル。惨殺刺殺毒殺暗殺絞殺縊殺銃殺撲殺病殺、全ての殺し方を詰め込んだ数百ものスキルを男の身体一つに叩きつける。

だが——

「そう張り切るなよ」

——その全てが男に触れた瞬間、儂い夢の様に粉々に砕けて消えた。

「なっ……」

その事実には、なじみは眼を見開き立ち止まる。

「なんで……」

「ははは、お前のスキル如き効くわけ無いだろう。いいよ、教えてやる……俺のスキルはスキルの効果を変更するスキル。その名も『事後変効』ポストチェンジ。今やったのは、お前のスキルを全て俺の身体強化の効果に変えた訳だ。つまり、今お前は俺を数百のスキルを使って強化してくれた事になる訳」

そのスキルは、先程瑛嗶が考えたスキルを無効化するスキル同様、スキルを大量に持つなじみや瑛嗶の天敵になり得るスキル。全てのスキルが彼の前では意味を持たない。全て彼の思うままに使われてしまうのだから。

「そんなスキル——ガッ!？」

「おいおい、先に仕掛けたのはお前の方だろうか?」

なじみが驚愕していると、数百のスキルで身体強化された式語がその場から消え、次の瞬間にはなじみの腹を肘鉄で穿った。その威力に、なじみは身体をくの字に変えて後方へ吹き飛ぶ。防御や回復のスキルは使った端から全て目の前の男によつて男の都合のいい効果へと変えられてしまう。故に、スキルは使えない。なじみもそれを重々理解していた。

「ゲホツ……ちつ、なんだそれ。言彦並みに規格外だな……」

かの獅子目言彦同様、回復を許さず、スキルは効かない。そんな相手に、人外は敗北を強いられていた。最初は泉ヶ仙瑛嗶、次に獅子目言彦……そして、今回は目の前の

石動式語。人外はこれまで、かなりの信頼と好感を持つている男に一度だけの勝負で負け、世界を破壊する為に生まれた様な男に数億回負けてきた。全能な安心院なじみだからと言って、必ず勝利を約束された存在にはなれなかったのだ。

「で、どうする？ 負けを認めるなら……俺の女として生かしてあげても良いけど？」

その言葉は、文字通り死か生か選べという事だった。死んでもスキルで生きられる安心院なじみだが、肝心のスキルを今封じられているなじみは、死んだらそれまでという状況に追い詰められていた。

なにより、まだ勝負が始まって5分も経っていないのに戦況は最悪だ。自分の最初の数百ものスキルで強化された異常な身体能力とこちらの唯一の武器とも言える膨大なスキルを封じる反則的なスキル。

勝てる要素が見当たらなかった。

「……お前の女として生きる……？」

膝を着き、半ば四つん這いの状態で腹を押さえて口元から漏れる血を片手で拭う。目の前の男の言うとおりに、彼の女としていれば生きる事が出来るだろう。だが、なじみの頭によぎるのはこの世界で初めて出会った人間の男。最強無敵の馬鹿であり、いつもなじみを支えて来た男。

自分の目的を知り、その上でこの三十億年という長い時間を共に過ごしてくれた。

言彦との勝負で、命の危険こそ無かったが言彦を倒してまで来てくれた。

人間の用に会話の出来る生物が生まれるその時まで、孤独であつた筈の時間をかけがえの無い物にしてくれた。

瑛嘎はさして気にも掛けていないし、気付いてもいないだろうが、三十億年という時間をたった一人で過ごすのはどんなに精神の強い奴でも無理だ。精神崩壊は免れないだろう。それは、安心院なじみだつて同じ事。一度孤独で無い時間を味わつた者に、それ以降の孤独の時間は地獄でしかないのだから。

故に、安心院なじみは瑛嘎に絶対的な信頼を寄せているし、家族以上の絆を感じている。これからも一緒に居たいと思うし、一緒に居るのだろうと思つているのだ。

だから――

「そいつは出来ない相談だな」

――安心院なじみは唯一生きられる道を自ら切り捨てる。

「……そうか」

不機嫌に顔を歪める式語は、つまらない物を見る眼で這い蹲る安心院なじみを見下ろし、その拳を握る。振りおろせば、人間の頭くらい簡単に押し潰す威力を身体強化で得た彼の拳は、一撃で命を刈り取る破壊の鉄槌。

「じゃあもう死ぬよ」

そう吐き捨てた式語は、その拳を振りおろす。

「っ……っ！」

だが、安心院なじみは会話の途中で痛みの引いてきた腹を抱えて、転がる様にその拳を避ける。結果、その拳は地面に空振り、そのまま拳の当たった場所を中心に広い範囲で地割れを起こした。

さらに、そこに発生した衝撃波でなじみの身体を吹き飛ばし、まっさらな荒野を転がした。人間がまだ少なく、家を立てるといふ概念もまだ疎らな今、ほとんど荒野が世界。だが、そのおかげで家がある未来の住宅街で同じ事をやった場合よりはダメージも少なかった。

転がる事でダメージも軽減出来、さしてダメージは無かった。なじみはその事を確認し、いたむ腹をさすりながら立ち上がる。

「へえ……まだ動けたんだ」

「生憎……僕はしぶとくてね」

「流石は人外。スキルだけじゃないって訳か？」

「どうだろうね」

笑って返す。こんな男に負けるわけにはいかないからだ。戦いを挑んだ理由こそ、ただの同族嫌悪の様な物だったが、事情が変わった。この男は生かしておけばいずれなじみと瑛の生活に多大な影響を及ぼす。今潰せる内に潰しておくべきだとなじみは判断した。

「……………」

だが、勝算が無いのもまた事実。どうすればいいのか分からず、なじみは唯構える。その様子に嘲笑を浮かべた式語は、地面を蹴ってなじみに肉薄した――



不愉快だ。俺、石動式語は今……あの安心院なじみをいたぶっていた。スキルは俺の

スキルで封じ、身体能力を安心院なじみのスキルで強化した今の俺に、敗北要素は無い。寧ろ、向こうは詰んだと言っているいい状況だ。

なのに、気に入らない。安心院なじみの眼は変わらず俺に勝とうとしている眼だった。どう見ても負けるしかないのに、諦めないで噛みついてくる。

既に、身体は痣だらけになり、口からは血をダラダラと垂らし、鼻血も出して、骨も何本か折れている筈。回復のスキルが使えないから、この状況はどうあがいても覆せない筈だ。

「がっ……はあ……！」

「……何なんだよ。お前」

なぜそこまでするのか俺には分からなかった。所詮——『漫画の中のキャラクターに過ぎない』……という訳か。

ここまで言えば誰にでも分かる。俺は神様の手違いで転生した転生者だ。このスキルだって、神に頼んで貰った物なのだ。他に貰ったのは、不老の肉体。安心院なじみにも負けない要素が俺には揃っているのだ。

「これで終わりだ」

安心院なじみの首を掴んで持ち上げる。両手はだらりと下がり、来ている巫女服は既にボロボロだ。土塗れに汚れ、所々破れており、履いていた下駄は両方壊れて片方は既

に裸足になっている。何より、体中に刻まれた痛々しい青痣と大量の出血によって白かった着物は赤く染まっていた。顔も、口や鼻からは血を漏らし、額を切つて流れ出た血でおそらく片目は見えていない。

なのに、未だこちらを見る片目は殺意ともとれる威圧感を放っており、今にも咬み付いて来そうな迫力を持っていた。

それがどうしても気に入らない。俺に屈しないのが気に入らない。思い通りにならないのが気に入らない。今になつてもまだ勝とうとしている眼が気に入らない。

「……何か言い残す事はあるか？ 安心院なじみ」

「……………」

彼女は、小さな声で何かを言った。聞き取れずもう一度聞く。すると、彼女はより一層殺意を込めた眼を向け、今度は聞き取れる声でこう言った。

「——くたばれ、クソ野郎」

「………そうか」

最後まで、気に入らない女だった。

そう思い、俺は拳を握りトドメの一撃を振りかぶる。そして、そのまま安心院なじみ

の命を絶つ拳を叩きつけた——筈だった。

「面白くねえな」

その一言。たった一言で俺の拳はピタリと止まった。動けない。背後から響いたその一言は、冷たい水をかぶせられた様に、俺の身体にゾクリと悪寒を抱かせた。

見れば、安心院なじみの眼は殺意を失い、逆に驚愕を浮かべていた。背後に居る十二の労力を必要とした。

「……………」

振り向いた先、そこにいたのは俺より少し身長が高く、青黒い少し跳ねた髪に真っ黒な瞳、深い青色の足首まである着物を着て、腰を緑色の布で締めている。下には黒袴を履いて、足には草履。格好を見れば、安心院なじみの巫女服と同じ和服だが、その着こなしはどう見ても通常とは異なっていた。

「手、放せ」

呟き程の言葉が、今は俺の耳に良く響いた。その言葉はそれ事態に何かしらの力が宿っていたかの様に、俺の手は安心院なじみを開放した。解放された安心院なじみはド

シャツとへたり込み、咳き込みながら現れた男を見ていた。

「さて……ウチのなじみをボロクソにやった落とし前は——ちゃんと付けてもらおうぞ」

「!？」

落ちつけ、大丈夫。スキルは俺には効かないし、身体能力だって今の俺は数百ものスキルで強化されている。負ける筈が無い。実際、俺は安心院なじみにだって勝ったのだから。

「さて、まずはお返しだ。安心しろ、楽に死ぬると思うなよ」

奴がそう言った瞬間、俺の身体は宙へと投げ出された。

なじみの痛みを思い知れ

なじみを追って、急いでやって来てみれば……そこにはぐちやぐちやにやられたなじみの首を掴んで持ち上げる光景があった。なじみに出会う前の俺であれば、ああやられてんな……と特に気にも留めずに軽い気持ちで助けに行っただろう。

だが、俺の中でなじみは既にそこそこ大きな存在となっていたのだ。家族であり、仲間であり、親友である、何か良く分からない関係でありながら、それなりに深い関係なのだ。

だから、この光景は俺の機嫌を損ねるには十分すぎるほどの物だった。

「ガッ……！ 何だと……？」

なじみを開放させた次の瞬間、そいつの懐に入り込み顔を蹴り飛ばした。転がる身体をなんとか立て直して、鼻血の漏れた顔を押さえてこちらを見るそいつ。

良いザマだ、とは思うが……これだけでは足りない。最低でもなじみと同じ位の惨状になって貰う。そう思い、俺はとりあえず相手の考察を開始した。心は熱く、頭は冷静にだ。

まず、なじみを此処までポロカスにしておいて奴は無傷な所を見れば、なじみのスキ

ルを一切通さなかったという事になる。となれば、奴の保有スキルはスキル無効化スキルか、それに準じる様な何かと推測出来る。

「……これは少し確かめてみるか」

そう思い、俺は自身の持つスキルの一つ、銃を精製するスキル『ビーストドック門前の銃頭』を発動させた。目の前の空間が歪み、透明な力が段々形を持ち始める。そして、その姿を銃へと変えようとした瞬間、それは破裂音を立てて消え去った。

驚愕しつつも、その変化の原因を探る為、奴を見る。すると、そこには不敵な笑みを浮かべたそいつがいた。ゆらりと立ち上がり、勝機を得た様な表情でこちらを見た。

「くっはは………！ テメエ、良くもやってくれたな」

「別にまだ何もやってないけどな」

「俺の顔を蹴つただろうが！ 許さねえぞ………！」

その顔を怒りに歪めて、憎しみを隠さずに俺へとぶつけて来た。

「死ねっ!!」

「馬鹿だろ、お前」

俺の言葉の意味は、そのままの意味だ。確かに、とてつもなく速いスピードで動いて突撃してきたが、馬鹿みたいに直線的な動き。非常に素人臭く、読みやすい動きなのだ。これならいくら早くてもカウンターを行なうのは容易。

「ぐがア!？」

クロスカウンターで拳を顔面に叩きつける。その勢いと反動で大ダメージを受けつつ、奴は後方へと吹き飛んで行った。だが、なるほど……これではなじみがやられたのも納得がいく。なじみもなじみでかなりの身体能力を保有しており、近接格闘も出来たが、スキルでの先読みと威力や身体能力の強化、回避の向上を行なって初めて出来る事なのだ。

そこに、この男の身体能力はちと相性が悪い。これなら言彦とやらせた方がまだ勝負になる。

「……此処に到着した時、お前の動きは一度だけ見たが……速度が上がってるな。俺のスキルが消えた事と合わせて考えると……スキルの効果を自身の身体強化に変えるスキルか……または効果を好きに変更出来るスキルか。その身体能力はなじみのスキル弾幕を全部身体強化に変えたとかそんな所か」

考察は終了。手の内は分かったし、大した相手でもない事が分かった。身体能力のみでの近接格闘が通じるのはよほど格下の相手か近接格闘が素人の奴だけだ。だから俺みたいに近接戦に特化した戦闘スタイルを持つ奴を相手取ったら、勝てる筈も無いのだ。

「ペツ……クソツ……!」

口に溜まった血を吐き捨てて俺を未だに睨むそいつ。名前も知らない何処の誰かも分からない男だが、なじみを傷つけた。それだけで殺すに十分だ。

「げほっ…げほげほっ！ ……お、瓊瓊……そいつはスキルの効果を全部思い通りに変えるスキルを持つてる……気を付けて…」

四つん這いのまま、這うように顔を上げてそう言うなじみ。口に溜まった血のせいで声は枯れていたが、伝えたい事は伝わった。

だが、そのスキルには大きな弱点がある。それはスキル自体では無く、人間自体に出来る事でスキルを使用する条件を封じられれば使えないという事。それはつまり

「こうすればいい」

身体能力を強化するスキル『ストロングサイレント疾実剛拳』を発動。俺の身体能力が大きく強化される。

そして、このスキルは奴のスキルで効果を変更されなかった。

何故か？

それは、奴のスキルの発動は奴自身の意識で行なわれるという事実がそのまま弱点になるからだ。奴のスキルの効果は、奴自身が俺達のスキルの発動を察知しないと発揮しないのだ。

そこで奴のスキルの攻略法その1。奴にスキルの発動を悟られなければ良い。

そして、もう一つ。効果の変更というのもまた奴の意識で行なわなければならない

物。だが、戦闘中に一々効果を選んでいる暇はない。そこで、変更先に選ばれたのが単純な『身体能力の強化』。

つまり、変更先である身体能力強化のスキルなら使えるという事だ。なにせ、変更前と変更後の効果が同じなのだから、奴のスキルの効果は何の意味も持たない。

「掛かって来い三下。スキルの使い方って奴をその身に叩きこんで死なせてやるよ」
「ちく……しょおおお!!」

雄叫びを上げ、奴は俺に向かって駆けだす。その動きはやはり直線的で無理矢理にでもその拳を俺に当てようとしていた。だが、そんな攻撃に当たってやるほど俺の機嫌は良くない。

「ふっー」

真っ直ぐに放たれた右ストレートをくるりと回る様に躲し、裏拳で奴の後頭部を殴った。理論上、人間の弱点である後頭部を攻撃され、脳が若干揺れたそいつは無理矢理意識を保って俺に後ろ蹴りを繰り出す。

だがそれも読んでいる。伸ばされた足に手を添える様にして軌道を逸らし、膝と肘を使って同時に挟むように奴の膝関節を砕く。

「がアアアア!!」

その痛み転んで足を押さえてもがく奴のもう片足の骨も踏みつける様にして押し

折った。更に痛みには耐える様に叫び声を上げ、懸命に足を抱える。だが、まだ終わらない。

俺はそいつの首を掴んで持ち上げた。先程のコイツとなじみの様に、俺はコイツを持ちあげた。苦しうにもがく奴の抵抗は、俺にとって大した抵抗にならない。

「さて、なじみの痛みを思い知れ」



「ふう………帰るぞ。なじみ」

瑛嗶は動かなくなった式語の身体を放り投げ、ぐしゃりという音を背後になじみにその声を掛けた。未だボロボロの身体は痛々しいにも程があったので、時間を巻き戻すスキル『跡戻り』バックトラックを発動。家を出ていく時の時間までなじみの時間を巻き戻し、傷を治した。

「ご、ごめん。ありがとう瑛嗶」

「心配させるなよ」

「ごめん………ん？」

なじみはふと疑問を抱く。今まで、瑛嗶は自分の心配なんてした事は無かったから

だ。なのに、今回は自分の心配をして駆けつけ、ボロボロの自分を見て怒りの感情を垣間見せた。

「……心配してくれたの？」

「当たり前だ。お前はどうか知らないが、俺はお前の事を家族と同じ位には大切に思ってる」

「……………えへへ、そっか」

瑛嗶が滅多に言わない自分に対する評価に、満足家に微笑みを見せるなじみ。瑛嗶の先を歩く背中に、何時も以上の温かさを感じとり、胸がポカポカと熱くなるのを感じた。未だ、並の人間並みの知能を持った人間が生まれていないこの時代に、恋という概念は存在しない。

だが、安心院なじみが感じていたその温かさは、間違い無く『恋』と呼ばれる感情だった。

——こうして現れた一人の転生者が命を終わらせた結果、恋愛感情を抱いた安心院なじみはその事実が気付く日までは、あと4000年程後の話になるのだが……それはまた別の時に話すとしよう。

スキルつて便利

石動式語をこの世から消してからおおよそ4000年。原作を開始される16年前という時代、俺となじみは別行動を取っていた。いや別に仲違いをしたとか、そういう訳じゃない。

ただ単にまたなじみの病気が効果を発揮しただけ。「出来ない」ことを探し続けること3兆年、俺と一緒にになってから40億年、色々と挑戦してきた俺達なのだが、最近なじみが諦め気味なのだ。多分、今なじみを取り組んでる「出来ない」が最後になると思う。

だからこそ、俺はいつも通り手を出さずに見守ろう。彼女が一人で成し遂げて初めて「出来ない」が「出来る」になるのだから。

「……さて、どうしたものか」

そんな中、俺がやっている事と言えば……まあ色々だな。気まぐれにデカイ組織を創立させたり、どこぞの人々を襲撃したり、未だ少ない友人の一人を罫に嵌めたりしてた。まあそれに関してはいずれ話す事になるだろう。

だからか、正直今はとてつもなく暇だ。既に俺と言えばこの服装と言える様な着流し

の着物をゆらゆらとはためかせながらお気に入りに入りスポットの一つである楠の大木の枝上で座っている訳だが、広がる光景は変わらずただの草原のみ。今の日本では珍しい位の広大な草原の光景、だということのいつも通り過ぎて変化のしない光景に俺はもううんざりしていた。

面白い事を何より好む俺が、変化の無い毎日を望む筈も無く、でも自分で何かを起こすのは面白みも無いからしないこのジレンマ。吹き抜ける緩やかな風が俺の身体を通り抜けていく中、揺れる前髪を一瞥した。

「……この生活も飽きたし……なじみに何かやる事無いか紹介してもらおうかな……」
そうと決まれば有言実行、善は急げ。久々になじみの所へと行くとしよう。



「それで僕の所に来たのかい？」

「そうだよ。何かない？」

「仕方ないなあ……それじゃあここの病院の職員をやってもらおうかな。仕事をしてみるっていうのは存外、楽しいと感じるかもしれないぜ？」

仕方ないと言いながら、どこか嬉しそうに頬を主に染めて俺に書類を差し出してく

る。そこには俺の履歴書とスキルで作られた必要書類が数枚。

全く、私がないとダメなんだから……。というお節介な委員長の様な雰囲気醸し出しながら、最近流行の服装を着ておしやれを気にする様になったなじみは、最近病院やら寺子屋やら色々作りだしていた。その様子はさながら積み木を組み立てる子供の様だが、面白そうでも何でもない淡々とした感じだった。例えるなら積み木で面倒そうに遊ぶ大人、というのが当てはまった。

「ふーん……なるほど。良いね、やろう」

「頼んだよ」

「任せろ」

踵を返して書類を後ろ手にひらひらとさせながらその病院へと向かう。笑みを浮かべて早着替えのスキル『メイクアップ衣換え』を発動し、着物姿から白衣へと姿を変える。黒いTシャツに、ジーンズを履いて緩やかに白衣を着たこの姿は、着物の時と重さを変えない。何故なら着物自体を白衣の姿に変えているだけだからだ。まあ重さが変わらないだけでそれ以外は素材も色も形でさえも変えてしまっているのだ。これだからこう思うのだ。

——本当、スキルって便利。



で、病院にやって来た。職員もなじみの創立した病院故に、異色すぎる奴らばかりだ。個性的過ぎてしばらく面白い事には欠かないだろう。

「えー……本日よりこの病院の一職員として働く事になりました。泉ヶ仙瑛嘎です。一つよろしく」

これまで俺の人間関係を見ていれば分かるかもしれないが、これまで俺と共にいたのは、なじみに言彦、そしてあの石動とかいうあの男の三名を中心としたどれもこれも^{アブノーマル}マイナス^{バケモノ}異常や過負荷に人外といった面々ばかり。それもそのはず……俺のスキルは人外と称される程の物で、その影響は俺の中だけに留まらない。普通の一般人が俺と同じ空間に居ればそれこそ発狂とか性格変わるとか気絶するとか変化をもたらしてしまう。

だから、俺はこの影響を防ぐためのスキルを一々作っている。故に、俺の人外性は人に影響しない。なじみを超えてしまった人外性は思考すればするほど加速するのだから、これくらいやらないと駄目だろう。

あーあ、せめてオン／オフの切り替えが出来るようになればいいんだけど……ん？

「解決しちゃったよ……」

スキルにオン／オフを付与するスキル『^{オルテイン}切替嗜』が俺の中に生まれた。全く、なんで今まで思い付かなかったんだ……ああ、俺の周りの奴らが異質な奴らしかいないか

らか。

「瑗叟君」

「んん？」

そんな思いに耽っていた俺に、声を掛ける人物がいた。その声に視線を向けると、そこには同じく白衣を着た小さい女の子がいた。薄茶色の髪に、子供っぽい容姿に反する凛々しい雰囲気。微笑む表情にはどこか成熟した様な物を感じさせる。

「誰っすか」

「ああ、私は人吉瞳。ここじゃ貴方の上司に当たるわね」

「へえ……」

面白い物を見つけた、という風な感情をこめて彼女を見る。俺の胸下程の身長しかない彼女は、その俺の視線の意味を目聡く感じ取ったのか、苦笑して更に言葉が続けた。

「この事については私が貴方に教える事になってるの。まあ、気軽に何でも聞いてね」
「そうかい。んじやまあ……これから宜しく——瞳センパイ？」

「ん、よろしくね」

そう言つて彼女は笑顔を浮かべ、俺は口元を歪めた。

さて、それじゃあ何処へ行こうか

さて、俺が病院の職員になっておおよそ二年ほどが経った。まあいままで数億年単位で時間が飛んだりしていたからまだマシな時間飛びだと思う。

で、なんで二年後かというと、ついにやってきたからだ。あの子供達がやってくる日が。

目の前に居るのは、瞳センパイと向かい合っている不気味な少年。無造作に伸ばされた髪に見え隠れする大きく底の深い瞳にボロボロのウサギのぬいぐるみ。何もかもが不気味に歪んでいるその少年は、暗い表情を浮かべて瞳センパイに向かって話し始めた。

『人吉先生……：お願いがあるんです。』『どうか僕の事は異常なしと診断してくれませんか?』

「それはどういう事?」

『だって、異常があつたら親に心配掛けるじゃないですか。』『僕としては親に心配かけたくないんです。』

傍から見れば、親思いの出来た息子さん。だが、彼の事を見ればそんな考え浮かぶこ

とすら無いだろう。何故なら、彼の顔は何処までも過負荷^{マイナス}で、何処までも不気味^{マイナス}だったから。

「……それは一人の医者として見逃せないわ。私は正しく診断する」

「『困ったなあ……』『あ』『そうだ、先生は僕の後に続く子供達の診察をして』『データを取りたいんですよね?』『だったら、取引しましょう。』」

「取引……ねえ」

少年、球磨川禊はへらへらと笑いながらそう言いかけた。その言葉に俺はぼつりと眩く様にそう漏らす。聞こえていないと思ったのだが、少年には聞こえていたようで、くるつとこちらを向いて言葉を紡いだ。

「『えーと』『泉ヶ仙瑛嗶先生ですか。』『そうです。取引をしましょう。』『ここに、まだ検査を受けていない異常者二千人分のデータが入ってます。これを差し上げますから僕の事を異常無しと判断してください。』」

「なっ……そんなの何処で……」

「『何処で手に入れたか』『なんてどうでもいいです。』『どうしますか?』」

「『そんなの受け取る訳——』『そういえば、さつき託児室にいた子』『人吉先生の息子さんなんですか?』『……?!』」

彼は瞳センパイの言葉を遮って、そう言った。その言葉に瞳センパイは言葉を詰めら

せ、黙ってしまおう。

『可愛い子ですね。』『もしこのまま異常ありと判断されて入院したら』『彼と友達になるうかな』

それは、あからさまな脅し。息子を危険にさらしたくなかったら、見逃せ。そう言っているのだ。

しかし、それは瞳だけの場合のみ通じる手段。この場には、瑛嗶という怪物（イレギュラー）がいた。

「善吉君か。確かに可愛い子だよ、将来グレル原因になりそうな母親がいるけど」

『……で』『どうするんですか？』

「で、でも……」

『まあ、結局の所……このままこのデータを受け取れば貴方は誇り無き医者になり』『受け取らなければ息子を見捨てた使命無き医者になる。』『どちらにせよ貴方の生き方はこの時を境に折れ曲がりますから』

躊躇する瞳にさらに畳みかける球磨川。だが、いつまでも躊躇している瞳の目の前で、差し出されたデータを横から掻つ攫って行く手があった。

「それじゃあこのデータは俺が貰う。お前は異常無しだ、さっさと帰りな。生憎と、俺は医者という仕事になんの思い入れも無いんでね。お前の目論見は外れだ、残念だった

な

『……ありがとうございます』

球磨川はそう言うのと、少し不満げな表情を浮かべながらぬいぐるみを引き摺って部屋を出て行った。

「良かったねえ、瞳センパイ。これでアンタはまだ……医者でいられるぜ？」

「……………」

そう語りかける瑛唄だが、瞳の表情は既に医者としての矜持を粉々に砕かれた後。如何に医者としての誇りも使命も守られたとはいえ、このままやっていくには遅すぎた。

「……ま、いいや」

瑛唄はそう言うのと、瞳の膝の上に辞表と書かれた書類を置いた。それをみた瞳は視線を瑛唄の顔に移す。すると、瑛唄はにたりと笑い、言う

「医者にも飽きたし、辞めるわ。後の始末は宜しく頼んだ」

言い終わると、反論なんか聞かないといった風に瑛唄はスキルを使ってその場から消えた。



「——で、また僕の所に来たと」

「うん。正直、気にしてた球磨川君も見れたし？ もういいかなって」

「はあ……随分とまた自由だねえ」

そう言つて、俺はなじみと話していた。既に、辞職届けは出したし、白衣も前の着物に戻して辞める気満々だ。何を言われたとしても逃げてやるわ。

「んー……まあいいか。僕としても、あの病院はもう用済みだし……もうじき今やつてる事も次の段階に進むしね」

「そいつは重畳。それじゃ、俺は久しぶりにうんざりしてた自由の時間を楽しむとするよ」

そう言つて、2年前の様に書類は持つてないが、後ろ手でひらひらと手を振りながら着物を翻し、部屋を出たのだった。

——さて、それじゃあ何処へ行こうか。

「さしあたっては……そうだな。まずはゆっくりするとしよう。久々の休日だし……ね」

中学生生活はつまらない

俺が病院を去ってからという物、俺となじみのいる街ではめざましい変化が表れていた。それは確実になじみのせいであり、確実に原作を辿った結果なのだった。

まず、なじみが病院以外で作りあげた教育施設。つまり学校だが、創立当初の名前は黒箱塾。そして、13年経った現在は箱庭学園として有名な進学校になっていた。まあ、凄いな。

で、俺はというと、そんな変化にも……ああそうなのかと思いつつ、なじみに誘われるままに中学校へと入学していた。スキルを使えば年齢とかいろんなアレコレはどうにかなるので問題ない。とりあえず、高身長な俺だが、中学3年になった頃にはあまり気にされなくなった。

現在の俺となじみの学校での立ち位置は、生徒会会計と副会長。ああ、会計は俺で副会長はなじみ。それで肝心の会長だが、13年前病院にやってきたあの不気味な少年だ。名前は球磨川禊。今ではその凶悪性マイナスを随分と退化しんかさせていた。

別名、ブックメーカー「却本作り」改め「大嘘憑き」《オールフィクション》。最凶最悪の過負荷マイナスと称された最弱の男。

そんな男となじみと俺はいつものように学校生活を送っていた。

「とうか、よくもまあ会長なんかなれたもんだ」

『『そんなの当然だよ！』『だって僕は真面目で正直な少年だからね！』』

「嘘ばっか吐いてる君が言っても信憑性ゼロだぜ」

なじみと俺に辛辣に当たられて少ししよんぼりする球磨川君。だが、気にせず俺となじみの会話は続いた。

「それはそうと、会長に対する不満や批判が殺到してるんだけど、球磨川君……さつさと始末付けて来い」

なじみは球磨川君のケツを蹴り飛ばして生徒会室から放り出し、殺到した意見用紙を投げ付け、扉を閉めた。

「やつぱりお前は最高だな。球磨川君みたいなマイナスでもやつぱり石ころ程度にしか捕えてないのか」

「当たり前じゃないか。僕はただ平等なだけの悪平等さ。それに、それを言うなら君こそ異質じゃないか。異常アブノーマル以上に異常で、過負荷マイナス以下に最低で、悪平等ノットイコール以上に平等。何処にも分類出来ないのに、普通ノーマルや特別スペシャルともいえない曖昧さ。それなのに、言彦や僕といった化物以上の規格外。君ほど意味不明な存在を僕は知らない」

まあ、随分と長々と語ってくれたけど、俺はそこまで複雑じゃない。ただ単に、ハンターハンターの世界で身体能力を鍛え、リリカルなのはの世界でそれを極限まで強化し、この世界で全能のスキルを手に入れただけの一般的な人間なのだから。

「とは言っても、大した事はしてないけどね」

「コードネームとか検体名とかを君に付けるなら、さしずめ【逸孤軍隊】パーソナルソサエティとかかな」

中二病みたいな名前を付けるな。大体、あぶのーまるくだのまいなすくだののつといこーるくだの色々と呼び方変えてるけど、良いじゃないか異常と過負荷と平等で。無駄に変換しなくてもさあ……。

「まあいいけど……そんな名前、一切使わないし」

「だろうね」

「分かっているなら作るなよ」

「良いじゃないか。君とのくだらないやり取りが、僕にとってはとても楽しい時間なんだから」

「ふーん……」

なんだか、最近なじみが俺に対して随分と好意的になってきた。いや、なんかタガが外れた様な感じでべたべたしてくる。おしやれに気を配る様になったし、俺が数億年前に上げたりボン……あの言彦が武器に使おうと奪った奴な。アレもスキルで嚴重に保

護して今も大事に使っているし、なにより俺に良く関わってくるようになった。

今までは一カ月に一回会いにくるか来ないかという所だったのに、今では毎日の様に俺の下へやってくる。そして一日一回は俺にひつついてくるし、この中学生生活では何度か自作自演で俺の彼女という噂を流したこともある。まあその度に俺が揉み消したんだだけさ。

ま、噂の件は俺への悪戯だろうけど……あの時だけはマジで中学生か！ とツツコミたくなつた。

「ま、それは置いとこうか。さて、もう仕事も球磨川君がやってる奴以外は終わったんだし……先に帰ろうぜ」

「うん」

そう言つて、俺となじみは席を立つ。ちなみに、俺となじみの住んでいる家は、昔から変わらぬあの木造建築。俺が作った家を外見は木造建築なのにスキルで内側の空間を豪邸並みに広くして住んでいる。強度は核爆弾を何発ぶち込んでも壊れない安心スキルシエルター。スキルによる破壊や消滅なんかも受け付けず、侵入者は警備スキルによつてその者の自宅へと強制的に転移させられる。実際にあの家に入れるのは俺となじみ、そして両名のどちらかが認めた客人だけだ。

「じゃあ、帰りに夕飯の買い物でもしていこうか」

「良いね。今日は何にする?」

「じゃあ、瑛喰の好きなオムライスでどう?」

「昨日は和食だったし……うん、いいんじゃない?」

「それじゃいこっか」

そう言つて、俺となじみは扉を開けて帰路に着くのだつた。

——そして事件は起きた。



「球磨川……!」

「『あ、めだかちゃん!』『どうしたの? そんな血相変えて』」

「その人を……何故」

「『え? ああ、安心院さんの事?』『何言ってるんだよ。僕が来た時には既にこうなつてたんだ』『だから』『僕は悪くない』」

卒業間近の時期に、球磨川禊は事件を起こした。安心院なじみの殺害事件。まあ、この時は俺は居合わせていないので、後になじみから聞いた事を語っている訳だ。

なんでも、なじみの事が好きになった球磨川君は、その気持ちの本物かどうか確かめる為に、顔の皮を剥いても愛せるかを試したとの事。

結果、なじみはその日死んでしまい、その現場を1年の新入生徒会役員である黒神めだかに見つかってしまった訳だ。ちなみに、俺は黒神めだかとはまだ知り合っていない。

「……………球磨川ああああ!!」

一気に怒りが頂点に達した黒神めだかは髪を薄紫色に染め上げ、我を忘れた瞳で球磨川禊に殴りかかった。その豹変ぶりに、驚愕した球磨川は為すがままに殴られる。抵抗も空しく、殴られ続ける。

「私は貴様を許さない!」

「『ぐっ……………!』『がふっ……………!』」

一撃ごとに床に罅が入り、校舎が段々と軋み、壊れていく。しかし、球磨川は未だに殴られ続けている。黒神めだかは、校舎なんて気にも留めずに殴り続けた。

しばらくすると、球磨川の抵抗がぱったり無くなる。いや、抵抗する力も残されていないのだ。

「ふー……ふー……ふー……！」

『……ごめんよ、めだかちゃん』『反省したよ』『僕はもう君達の目の前には現れない』『約束するよ』『だからもう許してよ』『めだかちゃんなら、信じてくれるよね？』

口からは血を流し、似合っている学ランもボロボロになり、身体は既に死ぬ瀬戸際という程にダメージを受けていて尚、球磨川はそう言った。

それに対し、幾分怒りも収まってきた黒神めだかは、釈然としない様だが人間好きの性分が功を奏し、球磨川に言った。

「っ……分かった……信じよう……っ！」

『……ふ』

その言葉を聞いた球磨川が、不敵に笑った事は黒神めだかも気付く事は無かった。

こうして、安心院なじみは死に、スキルによって全校生徒からその存在を消し去った。球磨川禊も、会長を辞めて転校、この学校を去って行った。

生徒会会長と副会長の同時不在により、急遽会長は俺へと委任され、副会長に黒神めだかが収まった。

この事件を知るのは、去って行った球磨川と俺、そして死んで行ったなじみと黒神めだかの4人だけだった。



「会長、仕事してください」

「面倒だ。めだかちゃん……やっというて」

「……はあ」

まあ、あの事件は良いんだよ別に。問題なのは俺が生徒会長に収まってしまった事で、仕事がめんどすぎるんだよ。現在は2学期の中盤だから卒業間近とはいえまだ任期があるのだ。ということでは会長職を全うする義務を押し付けられてしまった訳だ。球磨川め……覚えてろよ、次会った時が貴様の命日だ。

そうそう、このまえなじみが球磨川君に封印された。で、ようやくあの子がブックメーカー「却本作り」からオールマイクシヨン「大嘘憑き」へとスキルの鞍替えをした。やっぱ俺からしたら球磨川君は最初のスキルより、大嘘憑きの方が合ってると思う。

「はい、これに承認判子を押ししてください」

すると、副会長の黒神めだかが俺の会長机の上に大量の書類を置いた。山の様に詰まれた書類に判子を押し作業だけはやれとめだかちゃんがうるさいので引き受けたのだが、他の仕事を全部やってきているから文句は言えない。

「はいはい……」

ここで、役に立つのがスキルだ。課題を想像通りに終わらせるスキル【ワーカホリック休み休み言え】を発動させる。すると、次の瞬間には承認判が全ての書類に押されていた。本当、スキルって便利。

「……ふあ……めんどくせえ……」

なじみもいなくなり、球磨川君もいない。ただ中学生生活を送る事の何が楽しいのか。学校に通えない奴らもいるんだから贅沢言うな、と前に言って来た大人もいた。まあ俺より遥かに年下で、100年も生きていない子供だったが、言っている事は正論。しかし、俺はそんな言葉を聞いても全く響かなかった。

だって、そうだろう。学校に行けない事が不幸なんじゃない。学校に行きたいと思える事が幸せなのだ。なんせ、学校に行ける奴らは皆——学校に行きたくないと少なからず思っているのだから。

「ま、どうでもいいんだけど」

「? ……何か言いましたか?」

「何も。ただ、もうすぐ文化祭だなーと」

「ああ、確かにそうですね」

黒神めだかと俺だけの生徒会。そんな二人が文化祭での予算の決算やポスターの作

成、資材の注文、クラス毎の出し物の管理等々、二人だけでやるには随分と仕事が多い。面倒極まりないな。

「面倒だよね」

「そんなことないですけど」

実を言うと、俺とめだかちゃんの仲は結構良いとは言えない。それはそうだ、仕事しない会長と尻拭いさせられる副会長。そんな二人が仲良くなるケースなんて滅多にないだろう。それこそ、副会長側が会長に恋でもしてなきや無理。まあ、双方の性格次第だよね。

「怒ってる?」

「ええ」

「そっか」

カラカラと笑う俺。正直、俺はめだかちゃんの事が嫌いでは無い。かといって好きという訳でもないけど。なんやかんやで仕事をしてくれるし、俺の仕事しない態度を見かねた教師達に色々フォローを入れてくれた事もあつたし、まあフォローの方はいらなかったな……生徒会辞められるし。

「さて……何をしようかな」



私は、黒神めだか。現在は生徒会副会長を務めている中学一年生だ。突然だが、最近の私が良く考える事は、生徒会長であり、私の先輩に当たる人物の事でいっぱいだ。

別に、恋をしているという訳でもない。ただ、その人物……泉ヶ仙瑗先輩には良く迷惑を掛けられる事が多く、毎度毎度ため息を吐かされるばかりだから。

「さて……何をしようかな」

私がワークデスクで自分と会長の分の書類を処理している傍で、窓の外を眺めながら力なくそう呟く瑗先輩。何故こんな人が生徒会長なのかと思うが、前会長である球磨川よりはマシだと思う。

だが、こんな人でも私は尊敬している部分がある。何故かは知らないが、この人は全校生徒に随分と信頼を得ている。良く分からないがこの人には人を引き付ける魅力があるようで、仕事をしない癖に高いカリスマ性を垣間見せる事がある。

善吉曰く、私には高いカリスマ性があるとのことだが、先輩の方がより高い事は分かる。実際、私がこの人を尊敬する様になった日、あの時私は、確かに見た。この人のカリスマ性を。

「会長！ いい加減仕事をしてください！」

「面倒だよ」

「そんなの言い訳にしかありません！」

めだかは会長を引き継いだ瑗瑗に対し、憤慨していた。仕事をせず、その後始末を全てめだかに回してくるからだ。

仕事が辛いという訳ではない。この程度の仕事ならめだかの処理能力を持ってすればどうにでも出来る。だが、仕事をしない会長に何の意味があるのかと考えるのだ。また、そんな会長は全生徒に示しがつかないとも思うのだ。

「……会長。ここまで貴方の態度にはほとほと呆れ返っていましたけど……見逃してました。でも、もう無理です。これ以上そんな態度を取り続けるのなら、私にも考えがあります」

「へえ、どうするの？」

「殴つてでも仕事をさせます」

この時、めだかの中には本気でそうしようという考えがあった。自慢じゃないが、めだかは今まで喧嘩や武道で負けた事はないし、多少自分は強いのだという自負もあったのだろう。故に、先輩だろうと一生徒であるだけの一般生徒に負ける筈が無いと思つていた。

「やってみると良いよ。なんなら、また球磨川君みたいに……追い出してみるかい？」

「っ……いいえ、追い出しはしません。更生させてしつかり仕事させます」

「なるほど。そいつは分かりやすい」

やってみろという風に瑛叟は両手を広げてにたりと笑つた。

「……ふっー」

めだかは地面を蹴つて一歩で間合いを詰める。そしてそのまま人間の弱点である鳩尾にその拳を叩き込んだ。めだかの全盛期である現在の拳、ダンブカーにも匹敵する威力を持つソレは確実に瑛叟の鳩尾に入った

筈だった。

「やっぱりこの程度か」

「っ!？」

真上から聞こえて来た瑛叟の声。視線を上げると、そこには変わらず笑みを浮かべて

いる、だがどこかつまらないそうだった。

「全く、やっぱり中学生生活はつまらない」

「なっ……」

めだかは気付けば顔を掴まれ、宙に持ち上げられていた。

「なあ、めだかちゃん。やっぱり俺は生徒会長には向いてないよ」

「む?! けほっ……どうして」

めだかはぱつと放され、地面に足を着ける。

「俺はさ、流されるままに生徒会に入り、流されるままに会長になった。でも、実際会長に向いてるのは球磨川君とか俺みたいな奴じゃなくて、めだかちゃんみたいな子だよ」

「なら、どうして会長なんか……」

「それは俺が面白い事が好きだからだ。生徒会長なら色々とやれることも多いだろ？」

全生徒と面白い事が出来れば中学生生活も面白くなるだろ」

「……それで、会長を」

めだかは瑛夏の言葉を曲解した。瑛夏からしてみれば、全生徒を使って面白い事を出来たらいいなあ程度の考えだったのだが、めだかからしたら、全生徒と共に楽しい中学生生活を送る為に尽力したい……という風に聞こえたのだ。やはりというか、めだかは都合のいい性格をしていた。

「すいません会長。私、会長を見くびってました」
「え？ ああ、うん……そうか」

そう、この人は仕事をしないけど、何時も皆の事を考えているのだ。だから、今だつて何も起きないこの現状を嘆いている。文化祭を話に持ち出したのもそのせいだろう。
「はあ……仕方ない。文化祭まで待つとしよう」

そう呟いた先輩。とはいえ、仕事をしないのは変わらない。少しは反省して欲しいものだ。

半纏、絶対誰にも言うなよ

さて、中学校生活を続けて早3年。遂に卒業の時が来た。なじみが死に、球磨川君がどっか行つてからという物、仕事は多いわイベントは何も起きないわで面倒な事ばかりだった。

めだかちゃんは微妙に俺に尊敬の念を抱いてくれてたみたいだし、女生徒に告白された事もあるし、文化祭じゃめだかちゃんが色々とはっちゃけてやらかすし、会長を引き継ぎする際のあれこれを放棄したらめだかちゃんに徹夜で追いかけて回されるし、色々小さなイベントは有つただけど、まあ普通の学校生活の範囲内だよ。

ああ、それとなじみの奴が懐かしい奴を連れて帰つて来た。しばらく死んでいたんだけど、戻つて来たんだけど、その際に不知火半纏の奴を連れて帰つて来たんだよ。まあ俺としてもしばらく会つてなかった奴だから懐かしいねえと思つたりした。

まあ、なんにせよ卒業式の日がようやくやって来た訳だよ。高校受験なんかしてないし、行く宛てもないからしばらくニート生活を送るんだだけね！ 退屈な毎日だろうけど、中学生活と言うデカイ生活を乗り越えた俺はさながら五月病の如く気だるさに包まれているのだ。しばらくの間のんびりダラダラした生活を送りたい。

『——では続いて、卒業生代表挨拶。泉ヶ仙瓊君宜しくお願いします』

へ？ あれあれ、おかしいな。俺が卒業生挨拶するなんて聞いてないぞ？

「瓊君、呼ばれてるよ。」

「あ、うん」

隣に座つてた同級生の女子が俺に促すので、とりあえず立ち上がり壇上へ進む。その途中でめだかちゃんを見つけたのでアイコンタクトを取る。

——何故俺が挨拶する事になつてるんだ？

——毎年挨拶は前生徒会長がやる事になつてます。

——何故教えてくれなかった？

——聞かれませんでしたので

しれつとそんな事を眼で語り、ピイツとそっぽを向いてしまつたためだかちゃん。これはあれだな、昨日めだかちゃんの仕事を暇潰しに邪魔し続けたのを拗ねてるな絶対。くそ、教えてくれても良いじゃないか。

そんな事を考えている内にマイクの前に立つていた。とりあえず軽く頭を下げた前に出る。んー……この分じやめだかちゃんの奴教師陣にも手を回して口封じしてたな。

全く、良くやるぜ。

『あー……何処かの誰かさんが手を回してこの挨拶の事を俺に知らせてくれなかったの
で、言葉は何も考えてません。なので、とりあえず何かしら即興で話そうと思います』

この言葉にくすくすと笑う声が聞こえてくる。まあ、受けてればいいかな。

『さてさて、今日で俺達卒業生は文字通り卒業する訳だが……中学生生活は楽しかったか
？ 辛かったか？ 幸せだったか？ なんにせよ、何も思っていない奴はいないと思
う。俺も弄れる後輩とかいきなり消えた同級生とか慕ってくれた女子とか色々関わり
持ってなんやかんやで楽しかったよ。まあ、いつでもリア充になれる状況に嫉妬を抱い
て襲い掛かってくる奴もいたけどね』

さらに笑い声上がる。

『ま、これから先高校生活が待っている訳だが……何、不安がる事はない。現実には適当
で、未来は退屈で、世界は平凡かもしれない。だが、安心しろ。自分自身が動けば、生
きる事は劇的になるから』

これは受け売り。原作で黒神めだかが第一声で発した台詞を色々変えただけのパク
リ台詞。だが、この世界においては名言は言ったもん勝ち。この時点で俺のもんだ。

『じゃ、高校でも頑張つて。以上、そつぎよーせーだいひよー泉ヶ仙坂噺でした』

また一つ頭を下げて席に戻っていく。その際に、何を思ったか適当な演説に大きな拍

手が鳴り響いた。ワーワーと騒ぎ立てる全校生徒にうんざりした表情で席に着く俺。なるほど、だから俺の席は一番前だったのか。出席番号順だと思ってたのに。

まあなんにせよ、こうして俺の卒業式は終わったのだった。

「先輩、卒業おめでとうございます」

「白々しいなめだかちゃん。あんな意地悪をするとか陰湿だぜ」

「毎度毎度仕事をしなかった罰です」

「ま、なんにせよ。卒業した訳だ。ありがとさん」

「はい」

そう言うと、めだかちゃんは少し俯いた。どうしたのだろうか？

「先輩。私は常に生徒会長として生徒の模範となれる様に努めています。だからという訳ではないですが、私は小学校でも卒業式という行事で涙を流した事はないです。悲しくはありましたが、別れを惜しむ程では無かったので」

「うん」

「だから、泣いている者を見ているなんて泣いているのか分からなかったのです」

「うん」

「でも……今なら分かります。別れを惜しむ人が出来るというのは、こんなにも胸をぎわつかせるものなんですわね」

めだかちゃんが顔を上げた。その顔にはほろほろと涙が溢れていて、表情もくしゃくしゃに歪んでいた。

「……そうかい」

多分、めだかちゃん的に見て俺は恋愛の対象と言う訳では無いだろう。この子には人吉善吉というパートナーもいる訳だし、そう言う風に見る相手は彼以外にはいないだろう。

しかし、めだかちゃんが小なり小なり俺の事を尊敬していると以前言ったのを聞いた。この子の万能性を見れば、今まで尊敬出来る様な人物などいなかったのだろう。だからこそ、尊敬できる俺がいなくなるのは少し寂しく思うのかもしれない。

「先輩……寂しいですが、こればかりは仕方ありません。折角だし、この際今まで思ってた事聞いてもらえますか？」

「うん、いいよ」

「すう……先輩は私の目標です。いつか、先輩の様に全ての生徒から慕われる様なそんな人物になりたいと思います。いままで、ありがとうございました」

「……ん、確かに聞いたよ。でも、俺みたいになつちや駄目だな」

「……ですね」

二人で笑う。そして、しばらく談笑した後、俺は帰路に着き、めだかちゃんと別れた。最後の最後まで俺に対して敬語だったなあ……他の三年生には敬語なんか使わなかったのに。

「さて、ニート生活満喫しますかあ……」

俺はそう呟いて、制服から着物に早着替えして家に転移したのだった。

◇ ◇ ◇

はい、それじゃ今からしばらく主人公はこの僕、安心院あんしんいんなじみだよ。親しみをこめて安心院さんと呼びなさい。

え？ 死んだはずの僕がなんで此処にいるのかって？ 馬鹿だな死ぬはずないじゃないか。ちゃんとスキルで対策してあったさ。瑛嗶風に言うなら……スキルって本当便利！ だね。

中学生生活を終えた瑛嗶は今部屋のベッドでぐーすか寝てるよ。寝顔がね、凄く可愛いんだよ、もう抱きしめたい位。流星は瑛嗶、僕の好みドストライクをいつも貫いてくれるじゃないか。

瑛嗶がカッコ可愛過ぎて悶え死にそうだよ！

「つとと、いつまでも瑛嗶を見てる訳にはいかないか。早くこの封印解かないとなあ」

瑛嗶に頼ればこんな封印すぐに解く事が出来るんだけど、それは僕の矜持と言うかプライド的ななにかが許さない。とりあえずは自分で何とかするとしよう。

「んー……でもなあ、しばらく何かする訳じゃないし……」

ちらりと瑛嗶の方を見る。

「ぐー……すびー……」

「……もう少し瑛嗶を眺めてようかなっ」

そう言つて、僕は瑛嗶の傍で寝顔を見る。ああ、両手がふさがれてなかったらカメラを使ったのになあ。あ、そうだ半纏使えば良いじゃん。

「なあ半纏。写真撮つて写真」

「……」

「……今だけは動いても良いんだぜ？」

「……」

尚も動かない半纏。チツ……役に立たない男だぜ。ちくしよう。

「ああ、でも瑛嗶の寝顔で癒されるから良いや」

——翌日の朝、僕はいつのまにか玖噎のとなりで添い寝していたのだけど………それは僕だけの秘密だ。

「半纏、絶対誰にも言うなよ」

「……………」

「……少しは反応を示せよ。そんなんじや週刊少年ジャンプだとすぐに忘れられるモブキャラになっちまうぜ？」

それでもやっぱり、半纏は反応を示す事は無かった。

じゃ、行くとしますかあ

瑛嗶が中学を卒業して2年。瑛嗶は2年前からずっとぐーすか寝ているばかりだ。本当なら瑛嗶は高校三年を始める頃なのだが、ニート生活をすっかり気に入ってしまったのか全く学校へ行く気配が無い。

実際、高校に行くだけでなく僕が手を回して箱庭学園に通わせることも可能なのだが、瑛嗶が行こうとしない限り無理だろうなあ。それに、13組に入ったら永久自習の校則で結局学校に行かないかもしれない。

これが不登校の息子を持った母親の心情という物なのかな？ 確かにこれは辛い物があるね。

「zzzz……」

「全く……そんなことしてたら何時まで経っても面白い事なんか味わえないよ？」

文字通り、寝てばかりいる瑛嗶。それは、起きて寝てを繰り返している訳じゃない。本当に2年間という年月を寝て過ごしているのだ。一度も起きることなく、一度も食事や会話をする事もなく。

当然、そんなことしてたら身体は衰弱して栄養失調で死んでしまうだろう。だが、瑛

嗶には僕と同様膨大な数のスキルがある。寝ていても以前と同様の肉体を保っている。まさに、健康そのもの。

「ああ、そういえば……瑛嗶の注目してた黒神めだかが箱庭学院に入学するんだっけ？時間が経つのは本当に早い物だね」

最近ではすっかり独り言が多くなってしまった僕。当然、瑛嗶とは2年間会話して無いし、夢の中に現れようとしてもスキル無効化スキルが常時彼を護っているのでそれも出来ない。

「……さて、それじゃあそろそろ計画を次の段階に進めようかな」

以前から始めた新しい僕の「出来ない」。それは、「完全な人間作り」。箱庭学園を創つたのも、病院を設置して異常者や過負荷の子供達のデータを集めたりしたのも全てがこの為だ。

「じゃ、瑛嗶。僕はちよつと出てくるね」

僕は寝ている瑛嗶にそう告げ、家を出た。いい加減封印も解けてくれないかなあ……家の中なら瑛嗶のスキル防護が働いているから封印も消えてくれるんだけど……外に出たら途端に復活するねちつこさ、全く嫌になるぜ



——なじみが外へ出た次の瞬間。泉ヶ仙瑛喰の瞼がピクリと動いた。ゆっくりとその青黒い眼を開き、布の擦れる音を出しながら、ゆらりと上体を起こした。

「——分かってるさ。だから、今まで寝てたんだしね」

瑛喰はそう言つて2年前と同様口元をゆがませて不敵に笑う。2年間寝ていたのは、その間何も面白い事が無いと知っていたから。あと、普通に休みたかつたから。

どちらにせよ、スケールのでかい休憩だつた。

「さて、そろそろ物語が始まる訳だし……必要な情報はなじみの独り言から最低限得ているし……まあイケるだろ」

睡眠中に意識を外に向けられるスキル スリーピングデスク【睡眠学習】

「じゃ、行くとしますかあ……」

瑛喰は一つ伸びをして、その瞳を輝かせながら家を出たのだった。



さて……この2年の間、なじみの奴が主観でやってたみたいだけど……それは大幅カットで。正直、物語に関係ないし、読者からしてもさっさと本編やれよって感じで飽きてくるだろうからね。

まあ？　なじみが俺の分身を作って擬似デートしてたり、俺の寝ている傍で色々とシテいたり、一生懸命女子力なるものを磨いていたりとか可愛いサイドストーリーもあつたのだが……まあ語らなくても良いよね。

「さて、箱庭学園も久しぶりに見たな。中学三年の受験生に混ざって一回見学しに来た事もあつたし」

見上げれば、とても大きな時計塔を中心に広大な面積を誇る超マンモス校、箱庭学園の校門が俺を迎える。そこには、新入生が在校生と共に登校しているのが見えた。そんな中、色々制服を改造している生徒がちらほらと見えるのだが、それ以上に俺の着物姿は目立っていた。

「んー……とりあえず、俺がこの高校に受かつた事にして教室行くか」

過去を塗り替えるスキル【三回廻ってやり直せ】を発動。俺が過去に箱庭学園を受験して合格し、13組に入ってから以降来ていないという方向へ塗り替えた。これにより、今

から俺もこの学校の生徒。しかも三年生だ。

さて、それじゃあ教室に向かうとしよう。現実の受験生にとってこれほど欲しいスキルはないだろうな。ホント、スキルって便利。

そう思いつつ、歩き出すと、背後から話し掛けてくる声があった。

「——見ない顔だな」

「んあ?」

背後にいたのは、巨大な人影。2 mに届いているかと思わせるほどの巨大な肉体に、長い薄黄土色の髪、鋭い瞳にはこちらを窺う様な意思を感じさせる。

「……うん、やっぱり起きて正解だな。面白そうだ」

「何を言ってるんだ?」

「ああ、自己紹介しようか。俺の名前は泉ヶ仙瑛、面白い事が大好きな男だよ。ちなみに3年13組の生徒だよ。今まで来なかったんだけど、気まぐれで来てみた」

「……なるほど、俺の姿を確認出来つつ忘れる様な素振りもないトコを見ると異常なのは確かだな。俺も3年13組の生徒だ。クラスメイトだな」

「へえ……」

見れば見る程、会話すればする程面白そうな雰囲気醸し出す彼。名前は日之影空洞、【知られざる英雄】と呼ばれなかった男にして、前生徒会長か。

ちなみに、この情報もスキル参照。視認した人物の情報を得るスキル【人権診慨】（ノンブライバシー）を使っている。なじみと初めて会った時もコレ使ってるから。

でも、答えを知るスキルは創っていない。いや、一回保有してた事もあったんだけど……正直、展開が分かかってつまらないから、スキルを削除するスキル【スキルロス葬失陥】で一回削除した。

今は一番最初の考えたスキルを創り出すスキル【嗜考品（プレフェレンス）】もスキルのオンオフが付けられる様になってよっほどの事が無い限り常時オフにしている訳だし、現在はスキルが増える事もない。

まあソレは置いておいて、今は目の前の彼の事。

「それじゃあまあ、これから登校するからよろしく」

「おう、わかんねえ事があつたら何でも聞いてくれ」

そう言つて、俺と空洞君は教室に向かつて歩き出す。制服の空洞君と、相変わらず着物姿の俺、傍目から見たら俺が一人で歩いている様に見えるのだろうが、それはつまり俺しか目立ってないわけで、少しだけ気配を消せる空洞君のキャラを羨ましく思ったのだった。

まあ、スキル使えば出来るんだけどね？

新たな生徒会長——黒神めだかだ

さて、それからという物、俺はクラスメイトである日之影空洞君に連れられて講堂へと足を踏み入れていた。何をしに来たか、その答えは簡単。生徒総会に参加するのである。無論、永久自習生である13組生がそういるものでは無く、椅子に座るのも気が引けたので、座席の最後列にある通路の所に男二人並んで視聴する事にした。

空洞君曰く、新しい生徒会長の演説があるらしい。なんでも、その新生徒会長は今年入学したばかりの女生徒で、投票の結果支持率98%という驚異的な数値を叩き出してその地位に就いたらしい。なるほど、つまりは今日が原作開始の第一日。黒神めだかの箱庭学園での物語が始まる訳ですな？

そこまで考えて、俺は〔プレフェレンス嗜好考品〕のオンオフを解除し、オン状態に戻す。そして、記憶を操作するスキル〔テンプレアイリソングメモリー記憶改竄〕を作製。またオフ状態に戻した。

そして、そのままそのスキルを使って俺の頭の中にある。原作知識の記憶を——

——封印した。

これで、このスキルを解除しない限り俺の中に原作知識が戻ってくる事はない。まあ、原作知識があつたという認識は残る訳だけど、内容は思いだせなくなった訳だ。

「……出て来たな」

「おう、アレが俺の跡継ぎ。新たな生徒会長——黒神めだかだ」

久々にみたな、黒神めだか。中学時代の時とは違つてこの2年間で随分と大きくなつたじゃないか。ツインテールだった髪はストレートに流されて、一本ぴよこんとでたアホ毛が特徴的だ。その凜とした雰囲気は、中学時代とは比べ物にならない程高まつており、なんかもう完璧超人という評価が全く気にならないな。

『世界は平凡か？ 未来は退屈か？ 現実 is 適当か？ 安心しろ！ それでも生きることは劇的だ！』

俺の中学時代の最後の言葉をそっくり真似た様な台詞。いや、多分元々はあの子の言葉だつたのを俺が真似たのだ。原作知識が無くなつておぼろげだが、あの時は確かそんな事を思つてた筈だ。

『そんなわけで、本日から私が貴様達の生徒会長になつた黒神めだかだ！ 学業・恋愛・仕事・友人関係全てに渡つてなんでも相談を受け付ける。本日より、箱庭学園生徒会執

行部は24時間365日いつでも相談を受け付ける！」

そう言つて、彼女……黒神めだかは凜と胸を張つた。

「……なんか、つまんねえな」

「そうか？ あんな演説する奴アイツ以外ないぜ？」

「だけどな空洞君。他人の演説は結局他人の物であり、いくら聴衆に聞かせようがいくら心に響く物だろうが、この講堂を出たら『凄かったねー』の一言で終わつてしまふんだよ。とどのつまり何が言いたいのかというと——人の演説で人は動かない」

そう、動く筈が無い。選挙であるなら、この人の演説凄かった。だから投票しよう、くらしいの認識位しか与えられない。結局の所、どれだけ多くの聴衆の心を理解し、インパクトを残せば選挙は勝てる。まあ、それが出来ないから今時の政治家達は選挙活動だの、宣伝だの色々とやる訳だけど。

まあ俺が選挙を舐めていると言われても否定しない。だが、俺の言つた事も少なからず当たっている筈なのだ。心を本当に動かせるのは、自分だけだ。

「ま、そんなことどうでもいいんだけどね」

毎度の如く、不確か極まりない疑問や問題は全て投げ捨てる。考えるだけ無駄な事は、考えない。そんなことしている暇があるのなら面白い事の一つや二つを持つてこい。

「さて、それじゃ演説も終わった事だし……教室に戻ろうか」

「ん、そうだな——つと？」

「ん……やっぱり面白い事があつた。中学より断然面白いわ」

「ケケツ☆」

踵を返し、教室へ戻ろうとする俺の目の前に立ち塞がったのは、白髪の癖毛を持った明らかに異常な雰囲気を持った子供。おそらく見た目からして10歳程だろう。

だが、その子供の腕に付いているのは、「風紀委員の腕章」。詳しい思い出はないが、確実に2年間学校生活を送った筈の俺の知識には、風紀委員の情報もあつた。風紀委員、学園警察とも名高い校則を厳重に取り締まる委員会で、校則を破った者には暴力による制裁も厭わない集団。

そして、今年の委員長は飛び級で即座にその地位に付いた子供。その名も——雲仙冥利。

「何か用か、クソ餓鬼」

面白くなつてきたと口元を歪ませて、見下ろす様に言い放つ。

「んな事分かりきつてんだろボケが。テメエの格好はどう見ても校則違反だ。正規の制服じゃない上、改造制服って訳でもないただの着物。そんなのがこの風紀委員長雲仙冥利の眼が黒い内に許されると思うなよ？」

「——なるほど」

「おい、瑛嗚……」

空洞君が心配そうに話し掛けてくる。おそらく、助けを求めれば彼は雲仙冥利を退けてなんとかこの場を収めてくれるだろう。

だが、そんなのは必要ないし、して欲しくもない。

異常な雰囲気をつらつら纏った、異常な子供。ああ、確かに凄くそりゃあなんか色々出来るんだらうな。

でも

「所詮は異常な程度。^{アブノーマル}俺の前に立つて意見するなら……せめて千年は生きてからにしろ」

ぐしやりとひしやげた音を響かせ、講堂の床に雲仙冥利の頭が沈む。床には罅が入り、雲仙冥利の頭からは確実に赤い血液が漏れていた。

その目の前に立つ。何をしたのか、空洞君には分からなかった様だが、俺のした行動は単純明快。雲仙冥利の身体に仕込んであった跳躍球（スパーボール）を一瞬の内に回収、同時に真上へと投げたのだ。勿ねかえったボールが雲仙冥利の頭を連続で攻撃、

結果的に雲仙冥利は一発目で地面へと頭を叩き付け、後に5発のボールがそこへ追い打ちを掛けて地面に罅が入る程の衝撃を与えたのだ。

そんな攻撃を受けた雲仙冥利の意識は完全に不意を突かれたことからあつて既に無くなつており、そのまま倒れ伏していた。

「時間を巻き戻すスキル【バックトラック跡戻り】」

そう言つて、雲仙冥利の傷を受ける前の状態に戻す。意識は失つたままだが、肉体の時間が巻き戻つたので、ダメージは0だ。

「さて、そんじゃあ改めて……教室に戻ろうか」

「お、おう」

空洞君は俺の言葉に若干どもりながらも返事を返し、並んで教室へと戻つて行つた。



一方、瑛嗶宅では――

「ただいま……って、瑛嗶がいらない？ まさか、起きた……う？ 瑛嗶が起きたー！」

帰って来たなじみはベッドの上に瑛嗶の姿が無い事を確認し、瑛嗶の起床を確信する。その事実喜び、さっそく瑛嗶に会いに行こうと部屋を出るが

「あ」

現在封印中のなじみは、瑛嗶の創ったスキルシエルターであるこの家の外では顕現出来ない。夢や精神世界でしか活動が出来ないのだ。つまり、瑛嗶には彼が帰ってくるまで会う事は出来ない。

「ちくしょう……こんな封印が無ければ……覚えておけよ球磨川君……うふ、うふふふふふ」

この時、人外安心院なじみが初めて本気で誰かに怒りを向けたのだった。

「『!?』『……なんだろう、今の寒気』『理不尽な怒りを向けられた様な……』『ま、いつか』」
なじみの怒りに反応して身体を震わせた男が何処かの学校の教室の真ん中でそう言

う。

「僕は悪くない」

瑛嗶が起きた今、彼の登場もまた近い未来に迫っていた。

瑛叟先輩ほどではありません

さて、演説やら風紀委員長の邪魔やら色々面白い事が起きた後の事だが、その後は淡々と俺のクラスである3年13組の教室へやってきた。まあ、俺としては永久自習で何も起きる訳もない教室に長居する理由もないので、早々に出て来た訳だが。

空洞君はあのまま教室に残る様で、放課後まで座っているらしい。何がしたいんだアレは。面白みも何もないな。

で、なんやかんややって来たのは1年13組。つまりはあの新生徒会長黒神めだかの教室。やはり永久自習の様で、中にはだれ一人として生徒はいなかった。まあ当たり前か。

となると、黒神めだかの向かい先として挙げられるのは、生徒会室か……おそらく入学しているであろう彼女の幼馴染、人吉善吉のいる1年1組。彼は平凡な普通だから、きつとそこだろう。

「そんじゃまあ……1組から寄りますかあ」

生徒会室より断然早い。なにせ、廊下を真っ直ぐに歩いた先にあるんだから。

「……それにしても、目立つなあこの服装」

歩きながらそう呟く。殆どの生徒が白い制服を着ているのに対し、改造制服ですらなただの着物を着ている奴がいれば、まず間違ひなく目立つ。それはもう亀が大量にいる所に一匹だけウサギがいる様な感じに目立つだろう。

まあ気にしないんだけどさ。

そんな感じで俺は歩き、1組の教室に辿り着いた。中からは13組とは違い、新入生達の騒々しい話し声が聞こえて来た。その中でも、大きく良く通る声が二つ。

「——あいつは人前に立つのに慣れてんじやねえ、人の上に立つ事に慣れてんだ！」
「あひゃひゃ☆そうだよねーそれでもなけりや支持率98%なんて出せる訳ないか♪」

中から聞こえてくるまだ高い子供の様な声とハキハキとした男の声。その内の片方は以前に聞いた事のある声だ。無論、言うまでもなく……人吉善吉の声だった。

それを聞いた俺は教室の扉を開き、中に入る。全員が入って来た俺へと視線を向けた。ある者は好奇の視線で、ある者は嫌悪の視線で、ある者は好意の視線でと色々な感情の籠った視線が俺へと注がれた。

「——やあ新入生諸君。面白い事はあるか？」

俺はそんな視線の中、不敵に笑ってそう言った。



「瑛唄先輩！」

「おー善吉ちゃん。久しぶり〜」

「いや、先輩なんでこの学校に？ 先輩がこの学校に来たことなんて知らなかったですよ」

入って来た俺に駆け寄り、話しかけて来た人吉善吉。一応この子とも面識がある。俺とめだかちやんのみの生徒会だった頃にちよいちよい生徒会室にやって来たのだ。目的はめだかちやんのお出迎え。やっぱりパートナーとするならとてつもなく最適な性をしている。

「それにしても……いやはや全く変わってないなあ善吉ちゃん。全く、つまらないな……変化が無いって事はとてもつまらない」

「いや、そんな事言われても……」

「おっと、そうそう。めだかちやんはどこかな？」

「先輩もアイツに会いに来たんですか？」

「いや違うな。俺はめだかちやんを見に来たんだ」

「何か違うんですか？」

「違うなあ、大きく違う。全く、全然なつてないぜ。決まってるだろうが、めだかちゃんみたいなものについてりや面白い事が起こる物だと決まってるんだよ」

そう、なじみ風に言わせるのなら……彼女の様な主人公体質のキャラクターの傍にいれば、間違い無く何かしらトラブルが起きるだろ。それはきつと、俺にとつて面白い事極まりない展開に違いない。

「ああ、そうだ。それはそうと……善吉ちゃん。お前、生徒会に入れ。これは命令だ」

「ええ!? そんな、嫌ですよ。先輩に言われたからといって、これだけは譲れないです。俺は……俺は絶対生徒会には入らない！」

「うん、とりあえず後ろの子を見てからそう言う事言おうか」

「え?」

振り向く善吉ちゃん。そこには、こちらに指をさす彼と同ポーズをとる黒神めだかの姿があつた。彼女はこちらに気付いてぱつと表情を輝かせた。

「瑛唄先輩ではないですか！ お久しぶりですね、御無沙汰しております！」

「ああうん久しぶり。そつちも随分と高校生活をエンジョイしてるね」

「いえ、瑛唄先輩ほどではありません」

なんというか、会話しているところの子がかなり変わった事が分かる。中学時代は卒業

式の時を除けばかなりツンケンした態度だったのに、随分と丸くなったというか……素直になったね。

「それで、今回は善吉ちゃんの勧誘かい？」

「はい。善吉、行くぞ！ 貴様には私の生徒会に入つて貰わねばならんのだからな！」

めだかちゃんの理不尽すぎる言葉。善吉にとっては随分と身勝手な言い分だろう。俺からしたら微笑モノの言葉だけ。

まあソレは良いとして……生徒会か。今の俺ならまだ入れるんだよね。入つといた方が面白そうという意見もあるのだが、いまいち入るような踏ん切りはつかない。正直、俺が入つて課せられる仕事と面白いイベントを天秤に掛けると、生徒会に入るよりゲリラ参加した方が早そうという感じにも思えるのだ。

「どうしたものかな……」

そんな風に考えていると、めだかちゃんと善吉ちゃんは既にいなくなっており、恐らく生徒会室へと向かったのだろうと辺りを付けた。

すると、そんな俺の目の前から最初に聞こえた幼い声が響いた。

「あひやひや☆あのお嬢様はいつ見ても面白いですな。で、泉ヶ仙瑛嗶……なんで貴方がこんなところにいるんですか？」

「おう、半袖ちゃんじゃないか。いつ見ても惚れ惚れする位の役者根性だな」

「……………まあいい。私の邪魔だけはするなよ。でないと、喰らうぞ」

「クハツ！ いいねえ、出来るものならやってみるといい。それはそれで面白いし」

「……………じゃ、私は食堂にでも行きますんで！ さよならです瑛唄先輩！ あひやひや☆」

そう言つて、半袖ちゃんは去つて行つた。まあ、あの子とは少なからず因縁的な物があるのだ。その事はまあ……………もう少し先に話すとしよう。

「さて……………それじゃあ帰るとしますか」

今日はそんなに面白い事なさそうだしね。あつてもめだかちゃんや善吉ちゃんがどこかの部活の更生活動に勤しむ程度だろう。ソレ位ならまあ……………見る必要はないしね。

この後、瑛唄が家に帰つた時安心院なじみが凄い勢いで抱き着いてきたのは、言うまでもない。

私の名前は、帯刀靱負

さて、その日からという物、瑛嗶は一切学校へ行っていないかった。というのも、家にも戻らず何処かへ行っているのが原因だ。なにかと面白い物を探してあちらこちらへとフラフラ出回る瑛嗶なのだが、今回は随分と長い間家を空けていた。

その間安心院なじみが瑛嗶とコミュニケーションを取れない事に悶え死にそうになったり、箱庭学園でめだかと新生徒会メンバーの善吉、阿久根、喜界島が色々と依頼をこなしたりしていた。

で、そんな中瑛嗶はというと――



「ん、やつぱりこつちだな。俺の面白レーダーが反応しておる」

そう言つて、道なき道を歩く瑛嗶。いや、道なき道というよりも道はあるがもう誰も通らない道といった方がいだろう。何せ、今瑛嗶が歩いているのは、廃墟と化した街。瑛嗶の自宅のある街ではなく、そこからずっと遠い街だ。恐らく、日本からは随分と離

れているだろう。おおよそ地球の北側の方に面している土地で、雪がしんしんと降っている場所。

そんな場所に、瑛嗶はいた。

まあ、何故いきなり物語の舞台である箱庭学園を離れてこんな所に来ているのかと問われれば、何故だろうとしか言いようがない。

何故なら、瑛嗶は気まぐれにただ面白そうなモノがありそうな場所に行っているだけのだから。

「——見つけた」

不敵に笑みを浮かべて、誰もいない閑散とした廃墟街の中にたった一人だけ、膝を抱えて暗い瞳をしており、まるで窓の内側から外を眺めている様な、壁を挟んで視界を得ている様な、そんな視線を瑛嗶に向けていた。

所々はねている真つ黒で傷んでいる髪と同様の黒く深い瞳、雪国なのにかなりポロポロになったブレザータイプの制服、そして、雪国で育った影響なのか全く焼けていない真つ白な肌。そのせいかな髪と黒い目と白い肌がお互いを強調していた。

おそらく年齢は13歳程の少女。動く様子もない所から、かなり衰弱しているのだと

思われる。

「……………誰？」

「泉ヶ仙瑛唄、面白い事が大好きな男だ」

瑛唄は少女の言った言葉が日本語である事に少し驚いたが、いつも通り自己紹介した。まあ、言語がどうであれ翻訳スキルを使えば関係はないのだが。

「……………そう」

「お前は……………なんでこんな所に一人でいるんだ？」

「……………私は、小さな頃にお母さんに連れられて此処に来たの……………でも、皆死んじやった。大きな嵐が来て……………皆死んじやった」

「お前は生きてるじゃないか」

「私はその時、お母さんに頑丈な箱に詰められて嵐が過ぎるのを待ってたの……………それで、収まった時には街は壊れて、人は全部死んじやった」

少女の言葉は、瑛唄の笑みを更に濃くさせた。そう、瑛唄にとってなにより大切な、面白い事を運ぶ物だと思ったからだ。

「で、お前はここでこのまま野垂れ死ぬ訳か？」

「……………仕方ないもの」

「いや、お前にはまだチャンスがある」

「……………?」

「俺と共に来て、面白く生きるか……………このままつまらなく死ぬか、選べ」

その言葉は、少女の深い瞳にわずかな光を浮かばせた。

「……………一緒に行っても良いの?」

「いいよ。お前は多分、俺にとって面白い物を運んできそうだ」

「……………分かった。私と一緒に連れて行って」

「オツケー、お前は俺の手を取った。さあ行こうぜ、面白おかしい生活を送らせてやるよ」

瑛嗶はそう言って、少女のか細い手を取った。

「お前の名前はなんていうんだ?」

「……………私の名前は、”帯刀鞆負”たてわき ゆきえ」

「へえ、なんにせよ……………良い名前だ」

瑛嗶はそう言って、彼女を背負って転移したのだった。

うん、面白い事いっぱい教えてね

さて、鞆負ちゃんを連れて箱庭学園まで長旅を続けて約1週間。戻って来た時、箱庭学園の校舎は……崩壊していた。

何があればこうなるのか、なんて考える訳もない。なんか面白い事があったのを見逃したのを少し悔やんだ。隣ではこの1週間で俺による悪魔的な強化修行を受けた鞆負ちゃんが、笑みを浮かべてその光景を見た。

「……………面白い、ね?」

「んー、ああまあ面白いな。この光景よりもこの光景を作り出した出来事の方を見たかったけどな」

「……………そう」

笑みを浮かべた、と言ってもかなり微妙な物で、笑みというより微笑みと言った方がいいな。とりあえず修行の最初に、いついかなる状況でも笑い飛ばせるようになってくるといったのが不味かったかなあ?

ま、この子は不敵に笑うより微笑んでいた方がいいかもな。見た目的にも。

「さて、とりあえず鞆負ちゃんはこの学校の飛び級三年生って事にしとくから。箱庭学

園に通うと良い」

「……………いいの？」

「いいさ。どうせ、金には困らないし——君をぶち込んだらそれはそれは面白いだろう。きつとこの学園の強い生徒ランキングが大きく更新されるだろうな。俺1位、鞆負ちゃん2位みたいなの？」

まあなじみが入ってきたら2位の座は奪われるだろうけど。

「じゃ、行くうか。俺の面白い知人を紹介しよう」

「……………うん、面白い事いっぱい教えてね」

「当然だぜ」

そう言った俺と鞆負ちゃんは、崩壊していない校舎の方へと手を繋いで入って行った。

あ、ロリコンじゃないよ？ 考えてみる。見た目13歳と数十億歳のコンビだぞ、孫とおじいちゃん的な感じと思えや。

◇ ◇ ◇

「む？ オイその二人。偉大なる俺が許す、俺の前に立つても良いぞ」

「……」

「……面白い人？」

「いや、違うだろ。これは痛い人というんだ」

「……痛い？」

歩いていたら、目の前から痛い人がやってきた。金髪を逆立たせ、制服の襟を立たせた、立たせまくりな人。痛々しい、ああ痛々しい、痛々しい。字余り。

思わず一句読んでしまう程の痛さ。うん、まあ別の意味では面白いかもしれない。

「で、何の用だ」

「フン……まあ、今の無礼は偉大なる俺が許してやろう。ああ、気にしなくてもいい、と

りあえず——

『ヒザマツ
「ヒザマツ 跪け』」

「………？」

その言葉に、鞆負ちゃんは勿論俺も全く動く様子はないのだが、空気を読んであげたのか、それとも天然か知らないが……鞆負ちゃんが首を捻りながらゆつくりとした様子で跪いてあげた。

「………面白くない」

「だろうね。立っていいよ」

「………うん」

すごくすごと立ち上がる鞆負ちゃん。それを目にした痛い人は凄く面白そうなものを
見つけた様な眼をして言った。

「ほう……お前達、^{アップノーマル}こちら側の人間か。なるほど、では今度は本気で行くぞ——
『平伏せ』」

「ああ、メンドクサイからスキップで」

バチンと音を立てて吹き飛んで行った痛い人。その音の正体は、俺の指先。所謂デコ
ピンで吹き飛ばしたのだ。まあ、スキル補正も掛かって俺の身体能力はめっちゃ神掛
かってるからね。言彦なんて目じやないぜ。

「さて、じゃ行くかうか」

視線の先では壁にめり込んだ痛い人が気絶しているが、興味はないので放置。さっさと
めだかちゃん達の所へと急ぐのだった。

最強って、何だと思う？

「——38192738、39729721? (最強って、何だと思う?)」

鞆負ちゃんと共に歩き続け、やっと見つけた黒神めだかの姿は、なんとポロポロのやられていた所だった。ただでさえ校舎を一つ破壊した後なのに、床をぶち抜くというさらなる破壊活動に勤しんでいた。なんでだろう、学校ってこういう所だったっけ？

「……………面白い」

珍しく、鞆負ちゃんがぐすりと笑ってそう言った。どうやら、先程の数列を言った女生徒の格好に面白みを感じたようだ。まあ、確かに笑えなくはないけどね。メイド服を思わせる改造された制服に、腕に付けられた鉄製の腕輪から伸びた鉄球が数個。とてもじゃないが普通の格好じゃない。

「4981828、3709182。37921732821 (絶対的な最強とは何か。私が目指すのはソレだ)」

「ねえ、鞆負ちゃん。俺は君ほど世間知らずで何も知らない子はいないと思うってたんだ。でも、訂正するよ。あの子は君より馬鹿だ。だって、日本語喋れてないもん」

「……………あれは数列を用いた彼女特性の言語だと思う」

「なんで分かるの？ もしかして、君実は頭良い？」

「……………街では一番頭の良い子で通ってたもん」

なるほど、彼女は随分と頭の良い子らしい。あの数列を理解出来るという事は、きつと俺より頭いいだろうなあ。もしかして黒神めだかにも匹敵するんじゃないかな。

まあ、俺もスキル補正使えばそれくらい出来るけどね。ぶつちやけ答えだけなら普通に出せる。

「3279217——」

「まあとにかく言語なら理解出来ないきや意味が無い。とりあえず翻訳しようか」

言語を翻訳するスキル【マイネームイズGoogle社構成のある自分】を発動。ネーミングセンスにかなり引つ掛かるものがあるが、気にしない。これも味があつていいだろう、うん。

「最強になる為には(382729737281)、モルモット集団(3791272727197)——「サーティーンパーティ」への加入は必須だ。(279379217297372173971)」

「ふむふむ、なるほど……………中々面白い単語が聞こえて来たな。「サーティーンパーティ」か、この件が終わったらちよつと関わってみようかな」

「!……………お前(32789)、私の言葉が分かるのか(279739729721797)?」

あ、そういうえばこの翻訳スキルは会話を目的としてるから相手側にもこちらの言葉が翻訳されて伝わるんだった。まるでどこぞの青いネコ型ロボットの『ほん〇くこん〇やく』みたいと思つた君、その通りだよ。

「あー……まあ分かるよ」

「そうか(37922)、なら聞こう(3739712)。最強つて何だと思う(3719729723)?」

「んー……じゃあ一つ教えてやるよ。最強は——俺だ」

別に心の底からそんな事を思つてる訳じゃないが、こう言つた方が多分面白いだろ。それに、黒神めだかだつてまだ死んでない。これは非常に面白い展開だ。

「最強はお前だと(279172732821)? 確かにお前も私と同じ異常の様だが(271928209828172727298)、私はお前を最強とは思えない(327197287938127)」

「なら、証明する方法がある。そこの黒神めだか……そいつに俺は勝つた事がある。まずは彼女に勝つてみるんだな」

「は(373)? 黒神めだかは既に潰した(37912739128318)。何を言つている(3271972289)?」

「いやいや、黒神めだかは俺の誇るべき(笑)後輩だぞ。お前程度に負ける筈が無いだろ

う」

俺のこの言葉に反応したのか、床をぶち抜いた下の階に転がっていた黒神めだかがゆつくりと立ちあがった。凜とした瞳で上階にいる俺と彼女を見て、言った。

「——すまない……貴様から攻撃される理由が無い、よつて避ける理由が無いと言つたが……私には今、闘う理由が出来た！」

そう、それでこそ黒神めだかだ。

「……………なるほど（28201）、確かにアイツはやりそうだ（2379731972927）」

彼女はそう言うと、鉄球を引き摺って下に飛び降りる。そして、その鉄球を黒神めだかに向けて振り下ろした。その攻撃は、まさしく巨人の一撃。人なんて一瞬で潰す事が出来る。

その一撃が、黒神めだかに迫ったその時——

「私は、尊敬する泉ヶ仙瑛の後輩だ！　こんな所で先輩の誇りに泥を塗るなど、私には出来ん!!」

——全ての鉄球が黒神めだかの拳の前に崩壊した。

後に残るのは、鉄球と腕輪を繋いでいた鎖のみ。その鎖は拳の威力に吹き飛び、上階にいる俺の方まで伸びて来た。

「ま、こんなもんか」

勝負は決した。俺は鎖を掴みとり、その先に繋がっている名前も知らぬ彼女を引っ張り上げた。

「なっ（279）……………!?!」

そして、上階に上がってきた彼女の身体を鎖を操って縛り上げる。そして、すかさず鞆負ちゃんに支持を出した。

「鞆負ちゃん。ちよつと鎖の真ん中辺りを持って天井に張り付けてくれ」

「……………分かった」

一つそう返事をした鞆負ちゃんは、鎖の中心部を持って天井へ跳躍。蹴る様にして天井に足を埋め、そこに留まる。

「やっ……………」

この状態を説明するなら。俺が鉄球に繋がっていた鎖の端を持ち、天井に留まった鞆負ちゃんが鎖の中心を持ち、反対側の端に腕輪を付けた彼女が縛られてぶら下がっている

る。いわゆる、吊り上げ状態。

「くっ(279)……何を(372973)！」

「ああ、うん。まあこれ以降何かと突つかかられても面倒だし？　ここらで思い知らせとこうと思つてさ」

そう言いつつ、彼女の靴を脱がせて窓の外へ全力投球した。俺の腕力で投げられた靴はとも見えない所へ消えて行つた。うん、多分もう戻つて来ない。

「ああ(38982)！　私の靴(732791)！」

「さて……ねえ君、昔から伝わつてきた『拷問』つて物を知つてるかな？　その中にさあ、『天井吊り』つてのと、『くすぐり』つて奴があるんだ。こいつは他の色々道具を使う拷問とは違つて、家庭でも出来る簡単にキツイ拷問方法なんだけど、この状況はその二つの内『天井吊り』を再現した状態な訳」

「何を言つて(3797127)……」

「いやいや、此処まで言つたらやる事は一つだろう。『天井吊り』をした後の、『くすぐり』」

「！……まさか(37197)」

その通り、これからその光景を再現しようじゃないか。窒息して死んでしまつても大丈夫、俺のスキルで蘇生してあげるから。とりあえず……時間を止めるスキル

【停止制】^{ステイールタイム}を発動。俺と彼女以外の時間が停止した。

これは指定した物以外の時間を完全に停止させるスキル。まあ、時間を止めている間は停止した物に干渉する事は出来ないし、動いている物は当然その分老化や風化したりするが。

「それじゃあ—— It is the beginning of the to r (拷問の始まりだ)」



「あ、あひつ………い！ あはつ………い！ ひつ………い！」

びくびくと身体を痙攣させて、紅潮させた顔に笑みの表情を浮かべた少女は、メイド服を彷彿とさせるその制服を暴れた事でかなり着崩し、右肩やへそが見えている。全身は汗まみれで、足の着いていない地面にそのスカートの中から業界用語で聖水と呼ばれる物をぼたぼたと垂らしている。

さらに、口元からは涎が垂れて強気だった瞳は既に光を失っていた。

「んー……流石に150時間耐久くすぐり拷問はやりすぎたかな？」

拷問の途中でこの子の名前を聞き出したが、雲仙冥加というらしい。というか、この子50時間経った頃から数字言語やめて普通に喋ってたぞ。キヤラ崩壊も甚だしいな。

まあ何回か窒息死してたけど、そこは持ち前のスキルでなんとかした。

とりあえず、女の子の喘ぎ声はとでも良かったとだけ言っておこう。でも、もう飽きたからいいや。そろそろ終わらせよう。

「んじゃ、まあ……この子の服を直して、気絶させて、汗とかお漏らしの後を拭いて、下着の時間戻して濡れてない状態に戻して、時間を元に戻すつと」

時間の流れが元に戻る。

「さて、鞆負ちゃん。この子連れてくから、手伝って」

「……………分かった」

「じゃ、めだかちゃん。よくやったよ。またね」

「はい」

そう言つて、俺はとりあえず3年13組の教室に彼女を連れていくのだった。



——で、どうしたこうなった？

「さっきのもう一回（279737271）、もういつかいやつてく（37973971
82）！」

「……………さっきのって何？」

どうやら、俺は彼女の開けてはいけない扉を開けてしまったようだ。

俺の行動理由はたった一つだけ

さて、冥加ちゃんを150時間に及ぶくすぐり地獄に叩き落して、性的な意味で墮としちゃった後、俺は一旦冥加ちゃんを風紀委員長の冥利君に預けて、また鞆負ちゃんと二人別の場所へ歩き出した。

まあ、一応引き渡す前に俺の教室で例の『サーティーンパーティ』について聞きだしたから、墮としちゃったのは別にその方が良かったのではないかと結論付けた。なんでも正直答えてくれたしね。

で、その『サーティーンパーティ』だが、どうやらこの学園の理事長である不知火袴の発案した計画の実験素体である13人の生徒の事をそう呼ぶらしい。正式な明表記は『十三組の十三人』と書いて、サーティーンパーティと読むらしい。

で、その計画というのが、天才を人為的に作り出すという、その名も『フラスコ計画』。凡人と天才の垣根を破壊してしまおうという事らしい。

それでその計画の素体である『十三組の十三人』の強さは異常で、それはまさしく最強と呼べる物なのだそう。だから、冥加ちゃんはその中に入りたかったらしい。

まあそんな事はどうでもいいとして……この事件の真相は、俺の身内である安心院な

じみにある。だって、フラスコ計画ってなじみ発案の計画だし、本来は天才を人為的に作るんじゃないかって、『完全な人間』を作るのが目的だったし、そもそもこの学園がなじみの作りだした物だと考えればもう決定的だよな。

「でもまあ……それはそれで面白いかな。なじみは今動けない訳だし、完全な放置状態のフラスコ計画がどういう風に進むのか……見てみようか」

「……………それは面白いの？」

「ああ、きつと面白いさ」

「……………なら、私も見てみたい」

鞆負ちゃんは本当に俺中心的な考えだな……俺が面白いと言えば何でもやりそうでおじいちゃん不安になって来たよ。まあまだ小さい子供だし、常時俺にひっついて行動している訳だし、ちゃんと見ていれば大丈夫だろう。

「じゃ、行こうか。不知火袴の所へさ」

「……………うん」

そうやって、俺と鞆負ちゃんは歩く速度を少しだけ上げたのだった。



「ほっほっほ……流石の怪物生徒会長も君達に掛ければ形無しですねえ」

理事長室では、例の不知火袴と『十三組の十三人』サートインパーティの中の6人が話していた。少し前まで黒神めだかと話していたのだが、彼女が退室した後、部屋にいた6人と話していたのだ。まあ、その黒神めだかはその後雲仙冥加による襲撃を受けたのだが。

そして、そう笑った不知火袴の言葉が終わったと同時に、理事長室に不敵な声が響いた。

「やっぱり、面白い事になってるじゃないか」

その言葉は、おおよそ4000年前に瑛嗶によって殺された石動式語の様に、不知火袴と『十三組の十三人』の6人の動きをピタリと静止させた。

「この声は……まさか」

その声の主は、当然の事泉ヶ仙瑛嗶である。にたりと笑ったその顔は、まるで人を殺す事を楽しむ殺人快楽者の様でいて、また玩具を与えられた子供の様でもあった。正反對な印象を同時に感じさせるその雰囲気と、青黒く輝く両の瞳。

そして、先程の瑛嗶の言葉の三つに不知火袴を始めとする7名は完全に呑み込まれていた。

「———」

「!」

最初に言葉を絞り出したのは、不知火袴。息を吐く音にも似たたったの一音だったが、その一音が、他の6人の意識をハッと取り戻させた。

「……泉ヶ仙……瑛嗶。何故貴方が此処に……」

「いやいや、知っているだろう不知火袴。俺の行動理由はたった一つだけだぜ」

それは、かつて言彦が瑛嗶を形容した言葉が良く当てはまった。それはすなわち——
— 『娯楽主義者』

ただただ、面白い事を求めて行動する様は周囲の人々から見れば、十分に異常な事だった。瑛嗶にとつては、ただアニメの世界を楽しみたいというだけの事なのだが、己と他人の判断は、必ずしも一致するとは限らない。それはつまり、見解の相違という事なだけだ。

「なるほど……それで、貴方はフラスコ計画に何か干渉してくるつもりなのですか？」
「当たり前前の事言わせるなよ。ああでも安心しなよ。俺自身は干渉するつもりはないから」

「………と、いうと……」

「この子にやらせる」

そう言つて、瑛嗶は後ろにいた鞆負を前に押し出した。彼女の姿を見て、不知火袴と都城王土の二人だけは警戒したが、他の5人はそうでは無かつた。瑛嗶が出てこないのなら、不安になる事もないと鞆負の13歳という年齢より随分と幼く見えるその姿を見て判断したのだ。

「今、ああ良かつたつて思つた？」

その言葉は、瑛嗶ではなく前に押し出された鞆負の口から零れた。その鈴の様に良く響く声に、凶星を突かれた5人は先程の瑛嗶の言葉同様動きをピタリと止めた。目の前の少女から、瑛嗶には劣るが自分達よりも強大な気配を感じ取つたのだ。

一人は刀を持ち、一人は改造人間、一人は肉弾戦なら敵無しを歌い、一人は異常な解析力、一人は相手の精神を読み解く。そんな力を持つ五人の男女は、何の力も持たない小さな少女にただ圧倒されていた。

「おかしいなあ、私みたいな貧弱な子供になんで怯えているの？」

彼女が言葉を紡ぐ度に、5人は冷や汗を流し、一步後ろに下がった。彼女の表情は、これまで彼女の物とは一変し、喋り方も大きく変化していた。話す前にはかなり間を入れ、無表情に喋っていた彼女は、今では瑛嗶の様にヘラヘラと笑い、その黒い瞳をキラキラと輝かせてはつきりと話していた。

これは、瑛嗶の一週間に及ぶ地獄の修行の成果。彼女の本来の性格を引き出した結果。以前に瑛嗶と同じ中学生生活を送り、途中で消えた最弱の男と同じ雰囲気。つまり、彼女は――

――
マイナス
 過負荷だった。

「面白いなあ、楽しいなあ……本当に、面白い事がいっぱい幸せ！」

彼女は過負荷マイナスで不幸な目に合い、死んでいく所を不幸にも瑛嗶に拾われてしまった少女。元々、あの街で嵐など起きていない。あの街ではもつと別の何かが起きたのだ。そう、彼女とナニカがその人生の中で出会い、あの惨状を引き起こした。

「さて……とりあえず、用事はこれだけだ。今は一度帰るとしよう。行くよ、鞆負ちゃん」

「……………うん」

瑛噺の呼び掛けで、少女は元の雰囲気に戻り、ゆっくりとした動きで瑛噺と手をつないで部屋を出て行った。彼女の変貌の切っ掛けはなんだったのか、彼女の街に何が起こったのか、それはまだ分からないが、不知火袴達7人は、確実に思った事があった。

——あの二人は、危険だ。

挿絵：帯刀靱負キヤラデザ

王様は、ただの奴隷に良い様にされてるただの犬だよ

瑛叟と鞆負の二人が不知火袴達と接触した翌日。ついに、黒神めだかとフラスコ計画は交差し、互いに関与する事になった。

黒神めだかへの最初の接触は、不知火袴による勧誘。だがそれを黒神めだかは一蹴し、断る。しかし、二度目の接触があった。それが、雲仙冥加による黒神めだか潰し。だが、それも黒神めだかは泉ヶ仙瑛叟の名の下に返り討ちにし、続いてやってきた13組生の襲撃を難無く一蹴した。

その後、三度目の接触が黒神めだかに迫った。フラスコ計画のモルモット集団『十三組サーティーンパーティの十三人』の一人、都城王土と行橋未造の襲撃である。それに対し黒神めだかと一緒にいた人吉善吉の両名は応戦するも、都城王土の「言葉の重み」の前に敗北した。そして、敗北した二人は、フラスコ計画を全面的に潰す事を決め、その為の対策として黒神めだかの兄である黒神まぐるを訪ねる事にしたのだった。

また、そんな中泉ヶ仙瑛叟は家にも帰らず帯刀鞆負と共にフラスコ計画の行なわれている時計塔地下へと潜り込んでいた。黒神めだかによって空白になった雲仙冥利の空間である地下1階を無断占領。

その階は、泉ヶ仙瑛叟のスキルによって帯刀鞆負専用の部屋へと改造された。そして、その階に黒神めだかがやってくるのを待つのだった。



「んー……やることもなくなつたし、ちよつと見てみようか。めだかちゃん達の様子を」
「……………見る?」

俺は、鞆負ちゃんと共に地下1階にてめだかちゃん達を待つていた。だが、やる事はもうないし流石に半日ずつと部屋に引きこもつてしていると暇すぎて死にそうになる。

よつて、俺と鞆負ちゃんには暇つぶしの道具が必要なのだ。それじゃあ持ち前のスキルを使うとしよう。

別場所の光景を観るスキル【進光景】
プレイバック

スキルを発動すると、俺と鞆負ちゃんの脳に直接別の場所の光景が現在進行形で流れる。観る場所は、黒神めだかのいる場所。

既に地下に入り、戦闘を一回終えた所だつた。地に伏せているのは不知火袴に会いに行つたときに居た内の一人、検体名【棘毛布】ハイドラツピング——高千穂仕種。人物の詳細を知るスキルを発動させて視た所、彼の異常は【反射神経】オートバイロツト。異常なまでの反射神経を持ち近接

格闘を得意とする男だ。

黒神めだかがボロボロなのを見た所、勝負したのは黒神めだかで双方共に色々とか
を得た後に勝利したようだ。大方、黒神めだかは反射神経を得て、高千穂仕種は反射神
経のオンオフを会得したのだろう。

一つ戦闘を見逃したのは少し惜しいかなと思う所があるが、まあいいだろう。直に彼
女達は此処へやってくる。となれば、ここからまた別の戦闘を二、三繰り返すだろうし。

「……………面白くない」

「まあ、勝負はまだあるし、仕方ないさ」

「……………むう」

この光景に鞞負ちゃんは少し不満気だが、まあ放っておこう。それに…………鞞負ちゃん
の過負荷性が発動したせいか、彼が近づいて来ている様だし…………まだまだ面白い事が起
こりそうだ。

「さて、それじゃあもうしばらく待つとしようか」

「……………うん」

そう言つて、**【進光景】**を解除。また光景が元の部屋に戻る。正直、この部屋は何の改
造もされてないんだよね。真っ白の壁紙を部屋全面に貼つて、そこらじゆうにあった
ゲーム類を全て破壊して撤去しただけのただの部屋。レイアウトもクソもないな。

「あーあー……暇だなあ」

「……………面白い」

……………何が？



それからしばらく。いきなりエレベーターが動いてガガン！ という音を立てて止まった。ああ、そういえばこの部屋を改造するに当たって階段とエレベーターも改造しちゃったんだよね。階段は下に行けなくなって、エレベーターもこの階より下に行けない様に埋めちゃった。

「む、ここは1階ではないか」

「……………」

現れたのは、都城王土と理事長室に居た6人のうちの1人、名瀬天歌。非戦闘要員らしいが、その頭脳と解析力、改造能力は異常らしい。そして、最後に抱えられた黒神めだかがいた。

「ん……………全然状況が読めない。仕方ないか」

会話ログを視るスキル【議字恋愛^{キヤルゲトク}】。指定した人物の行なった過去の会話を文字にし

て読む事が出来るスキルである。以前の翻訳スキルの様にめちやくちやアホなネーミングセンスだが、かなり便利な物だ。さて、それじゃあ一緒に見ていくとしようか。なに、かなり簡単かつシンプルに纏めるから大丈夫だよ。

【ログ】

『この薬実験したいんだ！』

『じゃ、私が素体になるよー』ぐさっ

『馬鹿め！ それは記憶消去薬だ！』

『ここはどこだ、私は誰だ？』

『今のうちだ、古賀ちゃんやっちなえ』

『ぐあーやられたー』

『じゃあ王たる俺が黒神めだかを改造するから後はよろしくー』

『待て！ めだかちゃんを返せえ……！』

【ログ終了】

こういう訳である。ダイジエストとはいえさっぱり分かんねえ。まあ簡単に説明すると、黒神めだか率いる生徒会メンバーは目の前の名瀬天歌改めめだかちゃんのお姉ちゃんに再会。めだかちゃんの馬鹿正直な性格が災いし、名瀬天歌の用意した記憶消去薬を何のためらいもなく投与。記憶を失ってしまった。

その隙を突いてめだかちゃんは名瀬天歌の改造した女生徒、「指切り骨折ベストベイン」と呼ばれた改造人間に敗北、そこへ現れた都城王土に黒神めだかはピーチ姫よろしく連れ去られてきた訳だ。

で、一緒に現れた行橋未造が足止めに残ったと。

「分かった？ 鞆負ちゃん」

「……………察した」

「流石、頭いいねえ」

「……………えへん」

さてさて、この状況でやるべき事と言ったら一つだろう。なにせ、此処にはフラスコ計画の総元締めである都城王土と名瀬天歌がいて、俺が介入させると宣言した鞆負ちゃんが居るんだぜ？ そりゃあやり合わせるだろう。元々、この介入は鞆負ちゃんの実力の最終確認の意味を含めてるからな。

「さて——」

「ー。」

俺がじろりと視線を二人に移すと、二人はびっくりと身体を震わせて身構えた。

「ああ、安心しろよ。ちゃんと俺は介入しないから。つてことで、靱負ちゃん。行つてこい」

「分かった♪」

既に性格は過負荷側に成っている様だ。これが彼女の過負荷性の一つ、【狂人格モード】。黒神めだかで言う所の【乱神モード】の様に、自身の感情を高めて引き出す過負荷性格だ。

これを出すと、まさしく過負荷の人格が出てくる。所謂二重人格という奴だ。この状態になって初めて過負荷としての実力を出す事が出来る訳だ。

「じゃあ、お兄ちゃん達——靱負と遊ぼう？」

「……………名瀬天歌、ここは俺がやろう。先に黒神めだかの改造を始めている」

「……………おー、分かったよ。気をつけろよ？ あいつは何かある」

「分かっている」

さて、どうなるかな？



帯刀鞆負と都城王土は対峙して、同時に動き出す。鞆負は王土に接近し、王土は「言葉の重み」を発動させる。

「――『ヒザマス跪け』」

前の様に、鞆負には聞かないと思っていたのだが、何故か今回はぐしやりと音を立てて鞆負を地面へと沈めた。

その様子を驚愕する王土だが、効くのなら問題は無い。寧ろ嬉しい誤算だ。

「あはは、いったーい！ 痛い痛い、痛いよー？ でも、遊んでくれてるんだよね。だから怒ってないよ？」

「ぐっ……………！」

地面に叩き付けられても笑うばかり、ましてや感謝の言葉すら投げかけてくる。その様子を王土はおぞましさを感じて一歩下がってしまう。

「あー、駄目だよ。全然駄目だよ。闘う奴が下がつちやおしまいなんだよ？ 週刊少年ジャンプじゃあ闘う人達は皆一歩たりとも下がらない。下がった奴は、その瞬間に負けちゃうんだ」

それが、引き金だった。一步下がった瞬間、「言葉の重み」なんて最初から効いてなかったかのように立ち上がった。鞭負が王土の懐まで入り込んできた。

「なにっ——がふっ!？」

「ほら、こんな風に」

鞭負の小さな掌が王土の鳩尾を的確に打ち抜いていた。貧弱な身体でも、人体の弱点を突けばそこそこ大きなダメージを負わせる事が出来るのだ。更に言えば、鞭負の近接格闘能力は瑛叟の一週間に及ぶ特訓で殺人的なまでに成っている。

貧弱な身体で出来る最速の動きを、最適なタイミングを読んで、実行に移す技術や目的の場所に精密に打撃を打ち込む精確性、またダメージを最大限与える為の衝撃伝達法、等々いろんな物を瑛叟のスキルを使った特訓によって叩き込まれている。

身体の貧弱性を補って余りある戦闘技術。それを保有する彼女はまさしく、最強の格闘少女。おそらく、高千穂仕種と勝負すれば、引き分ける位には強い。

「げほっ……なるほど、小さき女兒と思って油断したぞ。中々やるではないか」

「えへへ、褒められちゃった。嬉しいな、嬉しいな! とつても面白いよ」

「そうか……では次はこちらの番だ」

「え?」

王土の【言葉の重み】が更に発動する。今度は更に強力な物だ。

「——『平伏せ』」

「ふぎぢゅ?」

王土の言葉に鞆負は地面に頭を叩きつけられ、土下座の体勢を強いられた。そのまま、間髪いれずに王土の足が鞆負の頭を踏んだ。

「ぐぎゃ……」

「ふん……これでも勝負は喫した。まだ抵抗するようなら、今度はこの頭を踏み砕くぞ?」

「うーん、それはそれで面白いかも! でも私はまだ負けてないよつ」

鞆負はそう言つて、踏まれつつ笑う。その笑みに、王土はさらなる不気味さを感じ取つたが、足は放さない。

「えへへ!」

「むう!」

鞆負が笑つた瞬間、王土は膝を着いて座る体勢に強制された。まさしくそれは、王土の【言葉の重み】と同じ現象。その事に、王土は驚愕する。

「よつ!こしよつとー!」

鞆負が頭を踏んでいた足がどいた事でゆつくりと立ち上がる。

「えへへ、面白いでしょ? これが私のスキル——【誤烙少女】だよ!」

「鞆負の^{マイナス}過負荷スキル。【^{ラブドール}誤烙少女】。これは、鞆負に一定以上ダメージを与えた人間を鞆負の玩具にするスキル。」

身体を傷つけてでも、面白さを求める様になった鞆負に目覚めた欠点（ちようしよ）。身体で対価を払って、払った相手を玩具にする。その行動の一切を鞆負の思うままにする事が出来る最悪のスキル。

更に言えば、自我は残したままというのがなおさら最悪だ。このスキルを使えば、操られた人間は鞆負が飽きるまで玩具としてずっと使われる。自殺に追い込むことも、その場で全裸に剥く事も、骨を折ったり傷を負わせたりすることも出来る。息をするなど指示すれば、窒息するまで必ず止めていないと駄目なのだ。

「それに、このスキルの良い所はコレクションすることが出来るんだよー」

それは、このスキルの最も最悪な部分。一度玩具にされた人間は、何時如何なる時でも鞆負がスキルを発動して指定すれば、また玩具に戻る。

——つまり、鞆負に一定ダメージを一度でも与えた者は、生涯鞆負の玩具となる。

「な、に……!!?」

「凄いでしょ？ 皆々私を楽しませてくれる面白い玩具！ 面白いよね、面白いよね？」

鞆負はそのスキルに全く罪悪感など感じておらず、むしろ当然と考えている様な純粋な笑み。だが、その事実を教えられた王土は、青ざめた様な顔をしていた。

「そういえば、お兄ちゃんは自分が王様だと思っっているんだっけ？　じゃあお人形さんごっこをしよう？　お兄ちゃんは悲劇の王様役、私はその王様を殺そうとやってきた奴隷なの！」

「なっ……」

「じゃ、スタート！」

そう言った鞆負は、王土を四つん這いのポーズにして固定させた。そして、声帯を動かして指定通りの言葉を言わせる。

「ぐう……お、俺はどうなってしまったのだ？　ここはどこだ……！」

「あはは！　王様、とても無様な格好だね。私の顔を覚えているかな？」

「き、貴様は……私が買い取った奴隷の娘……！」

「そう、いつもいつも貴方に虐げられてきた奴隷だよ。でも、今は違う。今は私が貴方より上で、貴方が私の下の人間なの」

奴隷の少女を演じる鞆負は、王土の上に座って首輪と鎖を取り出す。それを王土の首に嵌めてぐいっと引っ張った。

「ぐっ………！　貴様あ………」

「あはははは！ 無様だね、王様。今の君の姿を見たら、貴方の親友はどう思うかな？ 王女はどう思うかな？ きつと失望するよね。きつと貴方から離れていつちやうよね！」

その言葉に、王土が思い浮かべるのは親友である行橋未造の失望した顔、そして己が妻と定めた黒神めだかの幻滅し離れていく光景。その光景は、王土の心をメキリと押し折っていく。

「王様は、ただの奴隷に良い様にされてるただの犬だよ」

靱負は、ただ下剋上を成し遂げる奴隷を演じているだけ。悪意なんかは持ち合わせていないし、王土の心を押し折ろうと思ってるわけでもない。

だが、その純粹さは、王土の心を完全に押し折ってしまった。

「こうして、王様は奴隷の娘によつてその生涯を一生犬の様に過ごすのでした！ おーしまい！」

靱負はそう言って、演劇の終了を告げて王土の上から飛び降り、玩具化を解く。これにより、王土は既に動ける様になったのだが、心を折られた反動で、王土は四つん這いのまま動かない。

まさしくこれが過負荷^{マイナス}。人と関わるだけで不幸をばらまく人種だ。

だが、その靱負の背中に注射器が数本突き刺さった。

「いい加減にしろよ。お嬢ちゃん」

「あれ？ 身体が痺れて……」

身体を痙攣させて崩れ落ちる靱負。投与されたのは、痺れ薬。身体を麻痺させた相手は、名瀬天歌だった。

「この勝負は俺の勝ちだ。最後の最後で油断したのがお前の敗因だぜ」

「んー……仕方ないなあ。あーあ、また勝てなかった」

靱負は痺れて倒れた身体をどうにも思っていないのか、視線を名瀬天歌に移してへらへら笑ってそう言った。

「ま、こんなもんか」

その結末を見届けた瑛嗶がそう言って靱負を背負う。

「あつゝゝゝゝ！ 痺れてるんだから不用意に触らないでよう」

「え？ その痺れて足が痺れた感じなの？」

「おい、アンタ……これからどうすんだよ」

「え？ 決まってるだろう。家に帰る。目的は達成したしね」

そう、瑛嗶の目的は靱負の実力を図る事。その目的は大体達成された。元より、

過負荷マイナスの靱負が勝負で勝てる筈もない。名瀬の攻撃によって敗北を喫してしまった物の、その実力は示されたのだからもう用はないのだ。

「じゃ、俺達は帰る。この後は好き勝手にやると良いよ」

「えへへ。じゃあ、お兄ちゃんとお姉ちゃん。また明日とか！」

そう言つて、瑛嗶と靱負はスキルによつて部屋を元に戻し、そのまま転移して消えて行つた。

死ねこのクソ野郎おおお!!!

鞆負ちゃんと一緒に帰った後なじみと一悶着起きたのだが、とりあえずは落ち着きを取り戻し、鞆負ちゃんは俺達の家置いて上げる事になった。

そして翌日、俺は鞆負ちゃんと共に登校したのだが、そこには昨日とは違う物があつた。それが――

「『あつれー?』『そこにいるのはもしかしくなくても玖噺さんじゃない?』」

――球磨川禊。

俺の中学時代の同級生にして、俺に生徒会長を押し付け去つて行つた張本人。

さて、ここで思い出して欲しい事がある。俺はこの語りの部分で生徒会長を引き継いだ辺りでこんな感じの事を言った。『球磨川禊……覚えとけよ、次会つた時が貴様の命日だ』と。

そして、一つ俺に付いて一つ教えておこう。

――俺、泉ヶ仙玖噺は……案外しつこく昔の恨みを覚えてる。

「死ねこのクソ野郎おおお!!!」

「げぶるああああ?!」

スキルによる全力の身体強化を行ない、その場からノーアクションで動き出す。そして、動いた時には既に全力で振りかぶった俺の拳が、球磨川禊の顔面を撃ち抜いた。

「安心しろ。スキル無効化は行なわないで置いてやるよ」

その言葉と共に、上半身が拳の威力の前に消し飛んだ球磨川禊の死体がどちやりと倒れる。

「さて……良くRPGゲームとかでダメージを受けると若干の硬直時間があるんだけど……それが終わる直前に攻撃の予備動作を終わらせて、硬直時間が終わると同時に更に攻撃を与える、という無限ループが出来たりするんだけど……現実でも出来るんだよね」

「『全く』『痛いじゃん——ぶぐあ?!』」

例のスキルで復活する球磨川禊だが、二の句を告げる前に頭を踵落として破壊する。二度目の死を迎え、また倒れ伏す球磨川。だが、こんなもんじゃ済まさない。なんせ2年間も待ったんだ、まだまだ付き合って貰う。

「さっさとしろ。あとがつかえてんだ」



『あー、痛かった』『全く……瑛嗶さんは——』『ごめんよ、僕が悪かったよだからその拳を下ろして!』

球磨川君を計13回程殺した後、大分恨みも発散できたので虐殺タイムは終了となった。その間、ずっと横で見てた鞆負ちゃんはやはり無表情で、顔色一つ変えない所はやっぱり過負荷マイナスだなぁと思わせた。

「お前が俺に会長を押しつけたのが悪い」

『いやいや』『僕が推薦した訳じゃないし』『瑛嗶さんに会長を押しつけたのは実質教師達でしょ?』

「原因はお前だけどな」

そんな風に会話しながら校門をくぐる。無論鞆負ちゃんも一緒だ。というか、さつきから鞆負ちゃんの方をちらちら見ている球磨川君は大分ロリコンに見える。

そういえば、瞳センパイの事が一時期好きだったんだっけ? ロリコン疑惑が浮上してきたな。ああでもなじみの事が好きだった時もあつたし、単にストライクゾーンが広いのかね?

『果てしなく失礼な勘違いを受けている様な気もするけど』『僕は悪くないからね』

「ふーん……で、お前なんで此処にいるわけ？」

「『いやー、前通つてた学校が廃校になっちゃって』『教室の真ん中でどうしようか考えてたら』『窓ガラスを突き破つて僕の頭に靴が飛んできたんだ』」

「靴？」

「『うん、これだよ』『どうやら女の子の物の様だったから』『持ち歩く事にしたんだ』」

そう言つて見せて来たその靴は、確かに女子生徒のサイズ。それも、片方だけじゃなく両足どちらも揃つていた。そして、その靴にはかなり見覚えがあつた。

あ、これ冥加ちゃんの靴だ。

黒神めだかに冥加ちゃんが襲撃掛けた時、俺は彼女の靴を脱がせて窓の外にぶん投げた。あの時の靴がまさか巡り巡つてこんな事態を招くとは……世界は本当に狭い物だね。やつぱり面白いな。

「これ、俺が投げた靴だよ。とりあえず返せ」

「『えー……僕の事が好きな女の子が』『僕の気を引く為に靴を投げて来たのかと思つて』『運命を感じていたのになあ』」

「とんだ運命だったな。ざまーみろ」

そう言うのと、球磨川君は靴を大人しく俺に返した。そういえば、こいつ何故か俺の言う事にはやけに素直に従うんだよね。なんでだろうね。

『まあいいや』それで、靴の飛んできた方向を辿って見たら箱庭学園があったから』『転校先はここでもいいやつて』

「へえ、なるほど」

『で、こつちも聞きたいんだけど』『彼女は？』『どうみても小学生か中学生にしか見えないんだけど……』

球磨川君がそう言う。多分、俺が鞆負ちゃんにあった当初の頃なら確実に球磨川君は小学生にしか見えないと言っただろう。

この一週間で修行の内容のおかげで随分と大人びて見える。とはいっても中学生に見える位の物だけ。その原因は、伸びた髪にある。

彼女の髪は、元々肩より短めのショートヘアだったのだが、今ではかなり伸びてしまい結ばないと地面に着く位になっている。とりあえず、簡単にツインテールにするが、それでもギリギリだ。

まあここまで髪が伸びた原因である一瞬間の修行については今度番外でやるとしよう。これが空白の一週間という奴か……。まあ黒神真黒君が一晩でめだかちゃんを全盛期に戻せるのなら、一週間で俺が鞆負ちゃんを人外レベルに育て上げる事も出来る訳だ。

「……………帯刀鞆負」

『へー、鞆負ちゃんかあ』『うん、可愛い名前だね』『ところで、君過負荷マイナスだよね?』

「……………そうとも言おう」

『なるほど、自覚はあるんだ?』『まあ』『いいけど』

そう言った球磨川君は螺子を取り出して鞆負ちゃんを攻撃した。とりあえず、心配する点は無いので放っておく。

「——あはっ♪」

小学一年生の女の子の様に純粹に笑った鞆負ちゃんは、全ての螺子を躲し、弾きとばしていた。俺の教えた近接格闘での手刀技術。今や彼女の両の刃は鉄でさえも砕く。流石に切り裂くなんて化け物染みた事は出来ないよ。人間の手はそこまで鋭くない。まあスキルを使えば俺は出来るけど。

『!』『へえ、今までそんな対処をする子はいなかったよ』

そう言つて、球磨川君は鞆負ちゃんの両手を見る。その両手は血だらけになつていて。無論、迫りくる螺子を手刀で叩き落すには、いくら手刀技術が優れているとしてもその両手は柔らかすぎた。女子特有の肌の柔らかさは、その螺子の前に簡単に傷ついた。

だが、これがいけなかった。球磨川禊マイナスが最弱である様に、帯刀鞆負もまた純粹マイナスなのだから。

「——面白そうな玩具、みつけ♪」

「『あれ?』『身体が動かない』」

「それじゃあ遊ぼう? お兄ちゃん♪」

「はい、ストップ。面倒だから此処で終了な」

瑛嗶が間に入つて止める。すると、少し不満気だが、鞆負はスキルを解いて元の無表情に戻った。球磨川君も、身体が動く様になり、少し首を傾げていたが、もうこれ以上何かするつもりはない様だ。

「『なんだったんだろう?』『今のスキル』」

「ま、いいだろう。こんな所でネタバレしたら週刊少年ジャンプ的に言っても面白くない」

「『それもそつか』『じゃあ瑛嗶さん。僕はこつちだから』『またね』」

「おー、またな」

そう言つて球磨川君は小走りに去つて行き、俺と鞆負ちゃんはいつも通り面白い事を探して校舎を徘徊するのだった。

しかし、それも今し方別れた球磨川禊の居るこの学園で、見つからない筈はなかった。

久しぶり。元気にしてた？

さて、それからしばらく面白い事を探して歩き続けていた俺。球磨川君が此処に来たのならずぐにでも問題を起こしそうな物だが、未だ何も問題らしい問題は起こっていないかった。

ちなみに、今近くに鞆負ちゃんはいない。元々彼女は13組に入る予定だったのだが、俺の過去を改竄するスキルは違和感の感じない程度に改竄する物であり、何でもかんでも改竄出来る様な物ではないのだ。元よりそんな風には創られていない。どうでもいいスキルならそこそこの欠点とか抜け道があった方が面白いという考えである。

まあ、そんな感じで3年生として抜うにはいささか容姿が幼かった彼女は、最大限の譲歩として、1年生の1組に入る事になった。まあ善吉君達と同じクラスである。一応球磨川君辺りが新しいクラスを創って過負荷^{マイナス}だけを集めそうだが、そうなったら鞆負ちゃんにも勧誘が来るだろう。

という訳で、現在鞆負ちゃんは1年1組で授業中。学校には小学校卒業以来来ていなかったらしいから、精々学校生活を楽しむと良いだろう。まあ、学力には些か問題がありそうだが、頭は良いし、必要最低限の知識は直接頭^{スキルでインストール}に叩き込んである。すぐにでも授

業に付いていくだろう。

「さて……それじゃあ現永久自習生の俺はどうしようかね」

鞆負ちゃんもおらず、ただなんとなく歩いている訳だが、視界にあるのはただ伸びている廊下のみ。あーあ、こんなことならフラスコ計画もつと関わつとくんだったなあ

「——ん？」

そんな事を考えていると、通りかかった一つの空き教室。授業にも使われない様な教室で、椅子も机もない何の特徴もない教室。強いて言うのなら床に畳が敷かれているくらいか。

だが、そんな教室の中にたった一人の人間の気配。授業にも行っていない生徒となれば、13組生か……特例で免除されている生徒位だろう。または先生かな。

というか、この学校先生の姿を一切見ないよね。生徒が濃すぎるんだよ。先生の面目丸つぶれだぜ。

「じゃあ、俺の作ったことわざを色々曲解して今に伝わった言葉に従つて……入りますか」

俺の作ったことわざ、『好奇心猫の如く従うべし』。これをスキルで昔の日本に伝えたのだが、それは間違っているとかい出したアホのせいで『好奇心猫を殺す』という物になってしまった。

元々は、好奇心には気まぐれでも従えという物だったのだが、今では好奇心は時に猫を殺してしまうという物になってしまった。

「おじやましやーす」

そう言って、中に入る。そこには、上半身裸のぼけぼけした雰囲気を纏った薄ピンク色の髪をツインテールにした少女がいた。どうやら、着替え中の様で、すぐに上半身にも寝間着を着た。

寝間着は、子供の着る様な綿100%の上下セット。その容姿の幼さから、無駄に似合っている。

「おやすみなさ〜い」

そう言って、着替えを済ませた少女は畳の上に置かれた等身大枕にぼすんと倒れ込み、すぐに寝てしまった。お前はどこぞの○太君か。

「ふむ……これは面白いな。珍獣だ」

見れば、見る程その少女の特異性が良く分かる。というか、異常アブノーマルという訳ではない物の、少女の変人性は**ずば抜けていた**。まさしく珍獣。面白い。

「さて、まずは何をしようか……：観察か解剖か……：スキル薬投与か……：むーん」

しばらく考えて、決める。

「よし、全部やろう。とりあえず、観察↓スキル薬投与、観察続行↓解剖の順だな。起き

ちやつたら止めよ」

そう言って、スキルを使いスケッチブックと鉛筆、解剖セットにスキルで作った不思議薬を取り出す。さて、始めようか。

◇ ◇ ◇

太刀洗斬子 side

私は眠気眼を擦りつつ、半分眠った様な状態の中、着替えを済ませて教室の中で眠っていた。ここは私が愛用するお昼寝教室であり、毎日の様に来る場所。

この教室は授業では使われないし、殆ど人も来る事はない。半ば倉庫の様に扱われているけど、選挙管理委員会の面々を使って運ばれてくる荷物は他に移動しているから、まさしく私専用の昼寝部屋。

そうして、いつもの様にしばらく寝ていたのだけど、身体がぼかぼかと温かくなってきた。これは、この教室の場所の特性にある。この教室はある時間帯になると、日光が長い間差し込んでくる場所にあるので、その間は温かい昼寝に最適な空間になるのだ。だからこそ、この空間は私だけのお昼寝空間なのだ。

だけど、しばらく寝ていたら、眠気半分のまどろみの中、誰かの声が聞こえて来た。

「——此処は——」と

でもこの教室には人は来ないし、今は授業中だからきつと夢だろう。うつすらと目を開けて常時着けているアイマスクの裏から目の前を見る。起き上がるのは面倒だし、夢だから体勢はこのまま。

すると、そこには着物を変な風に着流した男子生徒？ がいた。

「うーん、まあこんなもんか」

そんな風に呟く彼の手には、鉛筆とスケッチブック。どうやら私の事をスケッチしているようだった。でもまあ昼寝の邪魔という訳ではないし、その絵をどうこうする訳でもなさそうだし、気にしない事にした。

すると、また眠気が襲いかかって来て、私の意識はふわふわとしたまどろみの中に沈んで行った。

「——さて、次はスキル葉か」

意識の落ちていく寸前、そんな言葉が聞こえた。そして——

ぞわっ……

身体を駆け巡る電流の様な刺激。足が痺れている時にその足を触られた時の様な、強い刺激が、私の身体を支配した。

私の意識に関係なく痙攣する身体。この時点で、私の意識はまどろみの中から一気に現実へと引き戻されていた。既に眠気はなく、どんどん刺激と共に身体が熱くなつていく。

「あ、ふ……あつ……」

吐息と共に、声が漏れる。何故だか、意識しても声が出てしまう程の刺激。初めての感覚に戸惑ってしまう。

「なに……これ」

「あ、起きた？」

私の疑問に、目の前にいた彼が相槌を返してくる。どうやら彼がなにかしたという事は私でも分かった。

「今どんな感じ？ 苦しい？ 痛い？ 気持ちいい？ 気持ち悪い？ どれ？」

彼の言葉の中から選ぶのなら、苦しい訳でも痛いわけでもないし、気持ち悪い訳でもなかった。かといって、気持ちいいかと問われれば、それでも……あれ？ なんか、気持ちいい？

「気持ち……いい……」

刺激が無くなり、じわじわと身体が更に熱くなる。そして、その熱さが段々と私の身体に快感を運んできた。

「ふむ……つて事は今回は媚薬の効果があつた訳か」

「び、やく？」

「そう。俺がお前さんに投与した薬は効果がランダムでね。即効性なんだけど、発動する効果は4種類の中からバラバラに選択されるんだ。苦毒・苦痛・快感・吐気の中の一つがね。で、今回はその中の快感が発動した訳」

「どう……なるの……？」

そう、問題はそのままこの段々と強くなつていく快感はどうなつてしまうのか、この効果は最終的にどうなるのかという事だ。

「んー……前に試した時は、最終的に白眼剥いて痙攣しながら最終的に狂つてたっけ」

「！ や、やだよ……んっ……はあ……はあ……」

「まあ、起きた事だし。止めとくとしよう」

彼がそう言った瞬間、私の身体にあつた快感がパンツという感覚と共に消えた。息も絶え絶えという感じだけど、しばらくすれば落ち着くと思う。

「さて……お前、誰？」

「君こそ誰なのさ……」

「ん、俺は泉ヶ仙瑛嘎。面白い事が大好きな男だよ」

「へえ〜。私は太刀洗斬子、選挙管理委員長だよ〜」

少し快感の名残が残っているが、これ以上醜態をさらすわけにはいかないので、意地で普段通りに取り繕う。

「なるほど……うん、そういうキャラか……」

彼は顎に手を当ててうんうんと唸りながら何か結論を出したようだ。

「おっけー、もういいや。それじゃあもう行くよ。またね斬子ちゃん」

「……………何しに来たのさ〜」

そう言いつつ彼を見送って、彼が部屋を出て扉を閉めた瞬間糸が切れた様に枕に倒れ込む。

「あ、はあ……はあ……んんっ……ふー……ふー……」

快感の名残が未だに身体を駆け巡り、段々と落ち着いて行く。それでも、吐息が漏れて声が若干漏れてしまう。下腹部にじゅんとした熱い感覚を覚え、着替えたばかりの下着が汗やらで湿って気持ち悪い。

「あーあ……着替えなおさなくちゃ〜」

眠気が戻ってきた中、私はまた着替えを始めるのだった。



「珍獣じゃなかったなあ……」

まあ、見ればわかるだろうと思うけど。変人には片っ端から関わって行った方が得だろう。いつかは当たりに辿り着くかも知れないのだから。あれだよ。ドラクエという宝箱。

「さって……何処に行こうか」

そう言って、歩くのは外。校舎の中にはめぼしい物は無かったので、外にやって来たのだが、やはりというか……何も無かった。

だが、そこへ鴨がネタを持ってやってきた。

「あれ？ 瑛嘎君？」

「んん？ おー、久しぶりだねえ」

「瞳センパイ」

そう、そこに居たのはかつての上司……人吉善吉の母。人吉瞳であった。

「うん、久しぶり。元気にしてた？」

スキルの一つや二つ、持っていないわけがないだろう

さて、箱庭学園を徘徊していると、昔の上司である人吉瞳センパイに出会った。白衣にランドセルというあからさまな小学生スタイルを貫き通している彼女は、こちらをマジマジと見ながら上目使いで近寄って来た。

でも、此処で考えて欲しいのは彼女の実年齢が42歳という所。42歳の伯母さんが、その幼児体型を使って若さを示したいのかランドセルまで背負い、かつ大人びた所は欲しいのか白衣を着るあさましさ。

痛々しいにも程がある。

伯母さんよう、ちよいとばかり常識とモラルという物を考えていこうぜ。面倒な輩が寄ってくるんだからさあ……ロリコンとはペドフィリアとか変態とか変態とか変態とか……。

「うーん……瑛嗶君。貴方、全然変わってないわね……その若さを保ってられる秘密は何？」

「アンタが言うな、ロリ子」

「ロリッ……!!? 貴方ね、もう少し年上を敬っても良いんじゃない?」

「白衣を着てランドセルを背負った痛々しい奴を年上とはいえ敬うのはちよつとなあ」
「……………orz」

四つん這いで落ち込んでしまった人吉瞳42歳。自覚はあったんだろうなあ。

「さて、それでアンタは何しに来たわけ？ やっぱアレか、球磨川君の件ですか」

「うう……………そうよ。球磨川君が私の息子の近くにまた現れたからね。それに、あの子には昔嫌になる位辛酸を舐めさせられたからね。そのお返しも兼ねて」

「うっわー、自分より遥かに年下の子供に10年以上前の仕返しに来る大人とかー、マジありえないんですけどー」

「ぐっ……………」

「まあ、いいや。それはそれで面白いし、俺も一枚噛ませろよ」

俺はそう言つて、瞳センパイを脇に抱える。向かう先は生徒会室、フラスコ計画がどう終結したのかも含めて、過負荷勢^{マイナス}についての対処を聞きに行くとしよう。

球磨川君を上手い事どうにかすれば、なじみも物語にまた入つて来るだろうしね。彼もなじみの復活に危機感を感じてまた面白いメンバーを集めて来たようだしね。

また面白い展開が尻尾を見せたんだ、逃がさない手はないぜ。

そう考えて、ゆらりと笑いながらフラフラと生徒会室へと脚を進めた。



「で、球磨川先輩よー。理事長に言つてた異常プラスの奴らを皆殺しにするって奴、具体的にどうするんだ？」

瑛嗶達が生徒会室へと向かう中、球磨川達過負荷勢マイナスは空き教室を自分達の物としてミーティングを行なっていた。球磨川が先日、フラスコ計画を始末したためだか達に出くわし、なんやかんやで色々一悶着あつた後、理事長室に挨拶に行つてまたあーだこーだ言い争つて、最終的に幸せな奴ら全員をぶつ殺すと言いつつ放つた。

で、その具体的な案を考えているのだ。

「『うん』『まあアレだよ』『ゾーしよつかなー?』『』」

なんでもかんでもその場凌ぎで何か考えている様で何も考えていない頭おかしい男。それが球磨川禊だ。当然の様に、今回も何か策を持つている訳じゃない。ただ方法はどうあれ結果を述べただけだ。

「『まああれだよ』『敵はめだかちゃん達だけじゃないんだよね』『瑛嗶さんもいる事だし』『』」

「瑛嗶さん?」

「『うん』『多分この箱庭学園の教師及び生徒全員で掛かつて』『問答無用』『無傷で勝つ

ちやう様な人だよ』

「マジかよ」

『うん』『それにあの人は今みたいな面白い事がだーいすきだから』『まず間違ひなく絡んでくるよ』『全く、困ったもんだ』『まあどちらにせよ、彼を引き込んだ方が勝つんじゃないかなあ?』

そう、球磨川にとつての瑛叟の評価は安心院なじみと同じく人外で負け無しの男。勝つ事を決定づけられた様なそんなキャラだ。週刊少年ジャンプで言うなら、主人公というより最終ボスか伝説上の存在とかそんな感じ。

「それって、どんな奴だよ……」

そう呟いたのは、球磨川の連れて来た仲間の一人、志布志飛沫。派手な容姿に露出の多い服装で、一昔前のヤンキーのような雰囲気を感じさせる。そして、その隣に静かに座っているのは蝶ヶ崎蛾々丸。そしてその後ろで包丁の刃の部分を不気味に笑いながら撫で続ける少女、江迎怒江。これが今居る過負荷マイナスのメンバーだ。

『まあ、とりあえず』『どうしようかな?』

球磨川が笑いながらそう言うと、他のメンバーは考える素振りもなく笑いつつ何も言わなかった。

『あはは、やっぱ何も出ないか』『まあいいや』『それはさておき、何時までもこんな

空き部屋を使うのもなんだし』『まずは教室を確保しようぜ』

「教室?」

「『そう、理事長は好きに教室を確保してくれ』『つて言ってたし』『僕達——13組の教室を手に入れようよ』」

そう言うのと、球磨川は立ち上がって江迎に手を向けてこれまた不気味に笑って言った。

「『そう言う訳だから江迎ちゃん』『お願いして良いかな?』」

「……良いですよ。とはいえ、何処に行けばいいんですか?」

「『適当でいいんだよ』『例えば……』」

球磨川は窓の外、遠くに見える軍艦塔——黒神真黒の居るゴーストバベルを見る。すると、そのへらへらした笑みを浮かべた口元を、更に吊り上げらせて言葉を紡ぐ。

「『あそこがいいなあ』『江迎ちゃん、あそこをジャックして来てよ』」

「……はあい。それじゃあ行ってきますね」

そう言つて球磨川同様笑いながらそう言う江迎、そして両手に包丁を携えて、空き部屋を出て行つた。

「『よし』『それじゃあトランプでもしようぜ』」



「はい、という訳で。やってきました生徒会室」

「いい加減降ろしてよ！　こんなお荷物みたいに抱えないでくれない？」

「うるさいチビツ子だ。はいはいお邪魔しやゝす」

そう言つて、俺は生徒会室に入った。中に居たのは、黒神めだかに人吉善吉、喜界島もがなに阿久根高貴。まあとどのつまり今の生徒会メンバー全員がそこにいた。

俺はそのメンツを確認し、瞳センパイを下におろす。自分の足で立った瞳センパイを、放置して、とりあえずは善吉君達に話し掛けた。

「やあ、めだかちゃん御一行。泉ヶ仙瑛唄だよ、面白そうな匂いにつられて……やってきてやったぜ」

「お、瑛唄先輩」

「とはいえ、大体は理解してるんだけどさ。球磨川君、戻ってきたんだって？」

俺は、既に知っている事を言つて反応を窺う。すると見事に全員はつとした表情を浮かべてくれた。やはり、彼との接触はすでに終わっている様だ。まあ、それはおそらくフラスコ計画の終わった後にあつたんだろうけど、まあ結局その時は何の展開もなく終

わったんだろうな。

「で、また球磨川君と一発やりあうんだろう？ 俺も混ぜろよ」

「はあ……瑛嗶先輩。これはゲームとは違うのです。球磨川は躊躇なく人の命を奪う。面白半分で紹介されては困ります」

「馬鹿だなあめだかちゃん。俺にそんな事言うのは無駄だと学ばなかったのか？」

「……………はあ……………でも、先輩は一般生徒でしょう？ 過^{マイナス}負^{ナス}荷^スや異常《アブノーマル》と
いった何かしらのスキルを持つているならまだしも……………ただの一般生徒が彼らに向
かって行けば、ただじゃすまないですよ？」

あ、そういうええめだかちゃんの同じや何のスキルも使った事無かったっけ？ ってこ
とは俺はそこそこ尊敬出来たけど、結局は普通の人……………と思われてた訳か。心外だなあ
心外だなあ……………心外すぎて……………面白いわ。

「おいおい、めだかちゃん。何か忘れてるだろう？ 俺はお前が尊敬に値すると評した
男だぞ？」

—— スキルの一つや二つ、持っていないわけがないだろう。

俺はそう言って、ゆらりと笑って見せた。

だって、俺——生まれてこの方、傷を負ったことなんてないし

「瑛嗶先輩が……スキル保有者^{ホルダー}？　で、でも！　先輩は中学時代でも普通《ノーマル》の

域を出ていなかったし、異常性なんて欠片もなかったじゃないですか！」

「それはね、善吉君。俺がそういう面を見せなかったからだよ」

そう言うのと、めだかちゃんは少し険悪な表情を浮かべて少し考え始めた。そして、しばらく思考に耽った後に俺を見据えてこう言った。

「瑛嗶先輩。もしや、都城王土に心の傷を植え付けたのは……貴方ですか？」

「ん？」

都城王土。彼は確かフランスコ計画の件で俺と鞆負ちゃんが対峙した子だっけ？　鞆負ちゃんの過負荷^{マイナス}で完膚なきまでに心を押し折られた自称王様。

「ああ……あの子か。いや、俺じゃないな」

「では誰が？」

「鞆負ちゃん」

「……鞆負？　それって帯刀鞆負ですか？」

善吉がそう言った。ああ、確か善吉と同じクラスだったつけ……鞆負ちゃんもう彼と接触したのか。めちやくちや展開早いな。というか、なぜ善吉君は主要キャラと早々に接点を持つのだろう。これはある意味女誑しと言えるんじゃないか？

「そうだよ。君と同じクラスの女の子だ」

「た、確かにアイツはちよつと普通じゃないとは思ってたけど……まさか」

「まあ彼女は二重人格って奴だね。普段は普通なんだけど、もう一つの人格になると途端に異常アブノーマルになつちやうんだよ（嘘）」

まあ本当の事だけど、裏の人格は過負荷マイナスだからね。それに、表だって……いや、これはまだいいか。

「なるほど、人格の異常性か……ありえますね」

「まあそんな事はどうでもいい。今は球磨川君だろ、球磨川」

「ああ、そうでしたね」

めだかちゃんがそういうえばという感じに表情を変える。というか、俺に対して皆敬語だから誰が喋ってるのか文面じゃ分かりづらいよ。

「皆、俺に対して敬語は止める。色々と面倒だから」

「え？ あ、はい」

「それでは、瑛嗶さんと呼び名を改めて……球磨川をどうこうする前に気になる事があ

るのだが……」

「ん？」

「そちらの方は……もしかして」

めだかちゃんが指差したのは、さつきから空気と化していた人吉瞳42歳。空気化したことで生徒会室の隅っこに体育座りしている。かなり沈んでいるようだ。

「ああ、俺のちよつと前の仕事場の元上司。人吉瞳ちゃんだ。ランドセルを背負っている所が痛々しいけど、よろしくしてね」

「もう降ろすから！ ランドセル降ろすから放して！」

瞳センチパイの白衣の裾を掴んで目の前にぶら下げて紹介したら顔を真っ赤にして瞳センチパイは怒った。ランドセルを降ろそうと滅茶苦茶必死になつてゐる所がまた面白い。

「はいはい」

「全く……ぶつぶつ」

「人吉先生！ お久しぶりです」

「ああ、めだかちゃん。久しぶりね、善吉君も！」

そう言うと、善吉君は少し困った様な顔をした。まあ確かにこんな息子をグレさせる原因みたいな母親が学校に来たら誰でもそうなる。

「めだかさん、その方は？ 人吉、と言うからには人吉君の関係者で？」

「ああ、阿久根書記。この方は善吉のお母様だ」

「え!? お母さん?」

「お母さん」

「ええええええええ!!」

この若さには阿久根君も喜界島ちゃんも驚きの様だ。まあ、確かにおかしい生物だけどね。

◇ ◇ ◇

結局、あの後には人吉瞳42歳の話で占められ、球磨川君の話は出来なかった。仕方ないから生徒会の方は諦めて過負荷組マイナスの方へと向かう事にした。そうそう、靱負ちゃんの方はクラスにいなかったのと一緒にはいない。なんにしても、この騒動に介入するには両陣営のどちらかに話を付けないといけない。靱負ちゃんは多分……自分で介入してくるんじゃないかな。

「つてことで……ここかな?」

やって来たのは、空き教室。俺のスキルの内の一つ、某ハリー〇ッターの便利な地図を思い出して出来た、人物索敵スキル【人材把握】。自分を中心に半径3km範囲内の建

造物の構造と人間の行動と名前を把握できるスキル。まあ何をどうしているのかが分かるのではなく、そいつがその場所へ動いているのかが分かるという事。細かい動きは知った事ではない。

まあそれを使って、この空き教室に球磨川君と志布志飛沫、蝶ヶ崎蛾ヶ丸という二人の生徒がいるのを探知、やって来た訳だ。まあ知ってる子達だね。俺が箱庭病院を退職した後、その病院をブツ潰した二人。なじみに聞いた。

「じゃ、おじゃまします」

「『え?』」

「見つけたぞ、球磨川君。ちよつと話があるんだけ——どう?」

「!・へえ、良く躲したもんだね」

球磨川君に近づこうとしたら例の二人の内の一人、志布志飛沫が俺に金属バットを振りおろしてきた。ので、歩みを止めずに押し折ってやった。具体的には躲してないんだけど。

「まあとりあえず、邪魔」

「———(ぎ)ふっ?」

俺のスキルの内の一つ、相手に自分から一定距離を取らせるスキル【セアタインデイスダンス貴方と私の距離】を発動。志布志と俺の距離を強制的に広げた。ただ、このスキルは距離が近い場合相手

を問答無用で吹っ飛ばして距離を取らせるから壁があった場合叩きつけられるんだよね。

「ああ、ごめんごめん。女の子が随分と近くに居たもんだから恥ずかしくなっちゃって」
ゆらゆらと笑いながら俺はその子を放置、球磨川君の目の前に立った。

「『またまた、瑛嗶さん』『瑛嗶さんが女の子に恥ずかしがるなんて』『冗談きついよ』」

「いやいや、俺だって一端の男子高校生だけ？　ちよつとくらい性にも興味あるさ。あるだけだけどね」

「『それってあれだよ？』『つまりは照れてないって事の証明だよ』」

まあこれだけ歳取るともう半端ない位悟ってくるよね。最初の頃はまあなじみに少し心揺れたりもしたけど、長生きしているとまあ……何も思わなくなるわけよ。

「さてさて……それはまあ置いておいて。どうせ此処に来たからには何かしらイベント起こすんだろ？　俺も混ぜろ」

「『あ』『やつぱりそう来ちゃうんだ？』『でもまあいいか！』『瑛嗶さんだし』」
「で、どうすんの？　ここから」

「『うん』『一応、さっき僕の仲間があそこに立ってる場所を教室として空け渡してくれるよう』『交渉に行ってる所だけど』『そろそろ帰ってくるんじゃないかな？』」

そう言うのと、窓の外に見えた校舎がぐじゅりと崩れて行った。「人材把見」^{ハローワーク}を使って見

ると、そこにあるのは善吉君と瞳センパイと江迎怒江という女生徒の反応。どうやら接敵したりしている所を見ると、戦闘していたようだ。

まあ、今終わったようだが。

「アレか？」

『あれだよ』

「へえ、向江ちゃんも程々に過負荷街道まっしぐらな訳か……面白いなあ」

『あれ？』『瑛嗶さんって江迎ちゃんの事知ってるの？』

「まあ、昔ちよつとね」

そう、俺と江迎向江は以前にちよつとした接点がある。まあそれはまた今度話す機会もあるだろう。

『そつか』『まあ、いいけど。』『じゃあ僕ちよつと行ってくるね』

「おー行つてこいや。精々江迎に釘打つとけ」

『うん』

そう言うのと、球磨川君は窓から飛び出て行つた。迎ちゃんの所へ行くんだらうね。きつと。

「……」

「で、アンタが球磨川さんの言つてた瑛嗶さん、か？」

球磨川君が居なくなった事を皮切りに、先程吹っ飛んだ飛沫ちゃんが話し掛けてきた。球磨川君がどう話したのかは知らないが、玖噎さんはきつと俺だけだろう。彼がそう呼ぶのは俺しか心当たりがないしね。

「ああ、多分ね」

「全く……どうなつてんだアンタ。アタシの過負荷マイナスが効かない奴なんて、初めてなんだけど？」

「あー……確か飛沫ちゃんの過負荷マイナスつて古傷を開くスキルだっけ？ 効かないよそんなの」

「……この際なんでアンタがアタシの過負荷マイナスの事知つてんのか聞かないけど……なんで聞かない訳？」

その問いは簡単。かの安心院なじみでも、獅子目彦でも、石動式語でも、自然災害でさえも為し得なかった事。俺に一回でも傷を付けたという事実を生んだモノは居なかった。

神の転生は、死んで人生をもう一度始める事。それはつまり、ハンターハンターやリカルナのはで刻まれた経歴は全てリセットされるといふ事だ。

そして、この世界において俺は一度たりとも。

数十億年という過去一番長い年月を生きてきた俺は、過去一番全能な力を手にしてし

まった故に

「だって、俺——生まれてこの方、傷を負ったことなんてないし」

一度たりとも傷を負った事は無かったのだった。

とりあえず、僕から一点取る事。話はそれからだね

さて、マイナス過負荷組へと無事に入りこんだ俺は現在、自宅に居た。

「へえ、それでその飛沫ちゃんはその言われてどうした訳？」

「ああ、傷を負った事が無いって言ったら言葉を失ってたね。あの表情は中々面白かったよ」

「なるほど、それは僕も見てみたかったなあ」

相も変わらず自宅ではその髪を白髪から焦げ茶色に戻していて、今日は内職やつてる人みたいになじみの気分だ。この家はセキユリティーを俺が担当している半面、内装かと言うと、なじみの気分だ。この家はセキユリティーを俺が担当している半面、内装空間の方はなじみが担当しているので、室内気温なんかは全てなじみの思いのままなのだ。今日はなじみの気分的に冬気分だったようで、こんなことになっている。

全く、半纏を背後に立たせて半纏着てるってどう思ってたんだろうか？

「あ、瑛嗶そのみかん美味しそう。僕にも頂戴」

「これが最後だから諦めてくれ」

「えー……じゃあそのみかん一房でいいから譲ってよ」

「仕方ないなあ……ほら、あーん」

なじみが何時になくあまえたがりモードなので、とりあえず可愛がつてやる。このモードになると下手に動けば面倒な事になるから、無碍に出来ないのだ。

「あー……むっ！ うまーい♪」

「なじみ、お前キャラが最初の頃より大分ずれてるぜ」

「知らねーな、そんな事。僕は面白ければそれでいいんだよ」

「俺とキャラが被る。止めろ」

「瑛嘎とおそろいい〜」

本当に、彼女は どうしてしまったのだろうか？ 当初に会った頃はかなりクールで余裕のある出来る女オーラバリバリ出てたのに、どうして今はこうなったんだろう？

「……まあ、それも面白いからいいか」

俺はそう呟いて、疑問を宇宙の彼方へと放り投げた。

「はむっ……つくん……さて、韃負ちゃんもそろそろ帰って来るだろうし、夕飯でも作るかねえ」

「じゃあ、冬に合わせて味噌煮込みうどんが良いなあ」

「はいはい。それじゃあ味噌煮込みうどんな。ちよつと待ってる引きこもり」

後ろでぷりぷり文句を言うなじみを放って、俺はキッチンへと向かったのだった。



——翌日。

瑛嗶はなじみに見送られて家を出た。なじみは玄関で瑛嗶に笑顔で手を振って、扉が閉まるとその笑顔をふっと消してつまらなそうにリビングに戻った。

「……という訳で、今回は僕の日常回だぜ。最初に言っちゃうと、この話で僕があれこれやってる表で瑛嗶達は、日之影空洞を物語に組み入れて球磨川君がボコボコにされた後、不知火半袖を取りこんで作戦を立てた……という感じだ。だから次回からはその続きからになるからね？」

嘘である。ちゃんと本編は本編でやるのである。嘘を言うな、安心院なじみ。

「さて、瑛嗶もいなくなった事だし……僕は僕で平平凡凡な日常を謳歌するとしようかな」

安心院なじみはそう言って、こたつを消した。室内温度を冬から現在の季節に戻して半纏も仕舞った。そして取りだしたのは、瑛嗶が少し前に一度だけ似合うじやないかとゆらゆら笑いながら言った服。

所謂、巫女服。

「さて、それじゃあ瑛喰から前に暇潰しに使って貰ったスキルで文字通り暇を潰そうかな」

瑛喰特製、なじみ用暇潰しスキル。異世界へ一時的に跳ぶスキル【リブレリジョンオリジン原典「回帰」】を発動。

このスキルは、瑛喰がなじみの為にわざわざカスタマイズしたスキルで、かなり細かい設定がされている。

まず、跳ぶ事の出来る世界は、週刊少年ジャンプの漫画の世界のみ。跳んでられる時間は、こちらの時間で1時間。跳んだ後の世界で1日となる。それを過ぎると強制的に元の世界に戻ってくる事になる。

また、転移後の世界での自分の立ち位置も弄ることが出来るので、結構色々なことが出来る。

なじみはこれで最近暇を潰している。とりあえず封印が解けないと動けない訳だし、それに関しては瑛喰が球磨川に接触した事を知った時にそろそろ封印解けそうだなあと思っただので、最早瑛喰頼みである。

「さて、それじゃあ今日はどの世界に入ろうかな?」

なじみはそう言いながら、ジャンプを取り出して目次欄を見る。

「うん、それじゃあ今回は——『黒子のバスケ』かな」

そうやって、なじみは黒子のバスケの世界へとその姿を消したのだった。



「さて、と。今回は主人公、黒子君の高校……誠凛高校にやって来たぞつと」

なじみは転移後、誠凛高校のバスケット部マネージャーとして物語に介入するよう設定した。監督の相田リコとは対象的な徹底した実力による実力アップを図る、実践的マネージャーである。

とりあえず、今いる場所は部活中の体育館である。

「あ、安心院さん。ちよつといい？」

「んん？ おや、リコちゃんじゃないか。どうしたんだい？」

「今度の練習試合で海常高校と組んだんだけど、ハッキリ言ってまだ勝てる段階じゃないのよ……だから安心院さんには火神君と黒子君の連携と実力アップを任せたいの。悔しいけど、安心院さんのトレーニングメニューは大幅に実力アップするには打って付けだから」

「なるほど。いいよ、それじゃありコちゃんは他の皆を見ていてくれ。火神君なんかキセキの世代ぶつちぎる位強化してあげるよ」

「じゃ、じゃあ頼んだわね」

そう言つて、相田リコは日向率いる部員達の所へ行つて指示を出していく。すると、話を聞いた火神君と黒子君がなじみの下へとやつてきた。

「あ、あの安心院先輩。監督から俺らは先輩に教わる様に言われたんだ……ですけど」

「うん、そうだよ。じゃあ僕が次の海常高校戦まで君達のコーチをする安心院なじみだよ。巫女服はおしゃれだから気にしないでね」

「おう、じゃなくて……はい」

「それで、僕達はどうすればいいんですか？」

「ああ、そうだったね」

安心院なじみはかの泉ヶ仙瑛の様に、口元を吊り上げて笑つた。

「とりあえず、僕から一点取る事。話はそれからだね」



「つ……クソツ……！」

「ん……まだまだだね」

それからという物、火神と黒子は自分達の出来る限りの連携で安心院なじみを攻めたが、その実……点は一切入らなかつた。火神がドリブルで抜こうとすれば、カットされるし、黒子との連携で抜こうとすれば黒子のパスをスティールされボールを奪われるし、逆に安心院なじみがドリブルすれば火神は何が起こつたのか分からないまま抜かれたし、次々と点を入れられていた。

「はあつ……はあつ……！　なんでそんなに強いんだよつ……！」

「あはは、それは教えてあげない。女の子には秘密が多いのさ」

「それにしても……汗一つ掻いてませんね。安心院先輩」

「それはそうだよ。だって準備運動にすらなつてないじゃないか」

なじみのその言葉に火神達は驚愕の顔を浮かべて床に寝っ転がった。既に体力は無く、勝てない事が分かつたからだ。

「さて、まずは火神君だけ……随分とムラが目立つね。荒削りなプレイじゃキセキの世代には勝てないよ？」

「うす……」

「次に黒子君だけ……まあ君のスタイルはキセキの世代にも通じるだろうね。でも、多分すぐに破られる。君はこれから自身の能力で出来るプレイスタイルを確立させないといけないね」

「分かりました」

「それじゃ、今回はここでおしまい。お疲れ様」

安心院なじみはそう言っ、巫女服を翻し、体育館を出て行ったのだった。

雀が核爆弾を喰らった様な顔をしているよ？

さて、おそらくなじみが家で暇潰しスキルを活用させている表で俺は学校に来て球磨川君達と一緒に屯っていた。今いるメンツは、俺、球磨川君、飛沫ちゃん、蛾ヶ丸君。

半袖ちゃんは随分と俺に対して警戒心を持っているが、まあ不知火家とはなんやかんや有ったから別に気にしてない。俺が何かした訳じゃないし。

『じゃあ』『これから過負荷組合同ホームルームを始めます！』『議長はなし崩しのに僕、球磨川禊が務めさせてもらいます！』

そんなこんなで今は過負荷組合の1・2・3年合同のホームルームをしていた。まあ、今教室には俺と球磨川君位しかいないから他のメンバーは携帯を通信モードにして置いている。こんな授業あつたら全然面白くないだろうなあ。

『で』『なんか報告とかある？』

『あひゃひゃ☆とは言つても、今登校している13組生なんて黒神めだかと日之影空洞位ですからね。異常の奴らを潰すにはまずそいつらを登校させないといけませんよ？』

『そうなんだよね』『どうしよつか？』『とうか不知火ちゃん』『日之影空洞って誰？』

「黒神めだかの前の生徒会長だよ。元英雄と呼ばれ、知られざる英雄ミスターアンノウンと呼ばれなかった男だ」

その問いには、俺が答えた。というか、空洞君今頃何やってんだろなあ……まだ教室ですつと座ってるんだろか？ めちやくちやつまらないだろうなあソレ。今度遊びに行こうか？

「『へえ』『その人つてめだかちゃん組んだりする？』」

『あひやひや☆あの人黒神めだかと組むなんてありえませんか！ だって——』

あ、空洞君入って来た。眼が合ったけど放置しよう。今はまあやりたいようにやればいいじゃないか。たまにはこういうのも良いって。

『——その人、単独で軍隊を相手に出来るんですから』

空洞君はその大きな手で球磨川君を頭から地面に叩き潰した。流石は知られざる英雄ミスターアンノウン気配を気取られない事に関しては一級品だな。

「『えーと』『誰？』」

「元、英雄」



「おー空洞君。何？ めだかちゃんに唆されて来たの？ 元英雄は大変だねえ」

「琰瓊。お前、なんで此処に居るんだ？」

「おもしろそうだったから」

「変わんねえな」

俺は未だに球磨川君を押さえ付けける空洞君に話し掛ける。すると、空洞君は苦笑しながら俺にそう言った。まあ正直、俺は幸せ者に嫌悪を抱いている訳じゃないし、過負荷マイナスな訳でもないからしようがないんだけどね。

『で、そこでほのぼのと会話されても困るんだけど』『僕はどうすればいいのさ』

「ああ、安心しろ——お前はここで潰れていればいい」

すうーっと拳を作って力を込める空洞君。そして、球磨川君に向けてその拳を振り下ろした。

「拳破、拳破ア……拳々破ア!!!」

球磨川君に叩き込まれる拳の嵐。その威力は、球磨川君を砲撃の様に吹き飛ばして二つの教室を一つにした。球磨川君の身体は隣の教室へ続く壁を崩壊させ、黒板に罅を入れてめり込んだ。

「流石は空洞君。容赦ないな」

「容赦してたら悪人は正せねえよ」

「なるほど、御尤もだ。それでこそ空洞君だよ。面白い」

だが、球磨川禊はそんな事で改心するような奴じゃない。球磨川君を正したいなら、球磨川君の心に直接響く様な事をしないと駄目だ。まあそのへんは後継たるめだからちゃんがどうにかしてくれると思うけど。

『……………!』

「なっ……………!?!」

空洞君が球磨川君を見ると、そこには涙を流す球磨川君がいた。流石の空洞君もたじたじの様だ。まあ、殴られて泣く奴なんて高校生に居るとは思わなかったんだろうね。

『ああ、ゴメン』『これは嬉しいからなんだ』『僕は今まで本気で叱ってくれる人はいなかったからね』『命がけで正してくれる人は待ってたんだ!』

「へー」

『『これですつきりしたよ!』『改心出来た!』『だから』『この痛みの恨みはそこらへんの誰かに何かして晴らす事にするね』』

「っ……………!」

まあ、それは改心とは言わないよね。まあ俺はそんな恨みを抱いた事が無いから分か

らないけど。傷負った事無いからねえ？

「さて、球磨川君」

『え？』

「邪魔だからちよつと向こう行つてて」

『え——ええええええええええ!!!!?』

俺は球磨川君を窓の外へぶん投げた。理由？ 投げた方向に面白い事があるからだよ。それ以外に俺がそんなことする理由は無い。

それに、球磨川君にとつてもちよつとは良い影響があるんじゃないかな。

「……さて、空洞君ひさしぶり」

「い、いいのかアレ」

「いいんだよ。どうせまたひよっこり戻ってくるから」

「そ、そうか」

とりあえずここら辺で空洞君と球磨川君がアレコレしてんの見てもあまり興味ないし、面白くない。さつさと先に進めたいんだよね。

「とりあえず、今日はここらで退いてくんない？ ここで球磨川君潰されると後々の展開がちよつと面白くななくなっちゃうからさあ？」

「…………分かった。今日の所は退くとするよ。だが瑛嗶、次はお前が相手だろうと俺は容赦しない」

「いいね、そつちの方が面白い」

そう言つて、空洞君は部屋を出て行つた。

「おいおい、うちの大將どつか行つちまつたけどどーすんの?」

「飛沫ちゃん、球磨川君なら大丈夫だよ。ちよつと昔好きだった子に会いに行つただけだから」

「はあ?」

「まあ待つてなよ。きつと面白いから——」



「『痛た……』『全く瑛嗶さんは何時も突発的過ぎるよ……』」

球磨川禊は瑛嗶に投げとばされた後、どこかの民家の中へと転がりこんでいた。何かにつかつた様な感触はしなかつたのに、何故か部屋の中に居る事からおそらく瑛嗶が

転移で放り込んだらと推測を立てる。

「『ところでここはどこだ……』『え？』」

「おや、球磨川君。どうしたんだい？ 雀が核爆弾を喰らった様な顔をしているよ？」

球磨川禊が顔を上げて視界に入れた人物。それは――

「『安心院さん……？』」

安心院なじみ。球磨川禊が飛び込んだ家は、瑛嗶となじみの住む自宅であった。

あつちには、泉ヶ仙瑛嗶がいる

球磨川禊は、思いもよらぬ再会を果たしていた。相手はかつて彼自身が封印した人外の女生徒、安心院なじみ。

しかも、彼女は封印によって四肢の殆どを封じられていた筈だったのに、目の前でタックトップとショートパンツというラフな格好で変に暑い部屋の中、うちわを使って寛いでいる。最早何が何だか分からない

『安心院さん、なんで君が此処に?』『というか、なんで封印解けてるの?』

「まあ、そんなのどうでもいいじゃないか。ところで、君が此処に来たのは多分瑛嗶の差し金なんだろうけど、折角来たんだ。ゆっくりして行きなよ」

『『というか、此処は何処なのさ』』『訳が分からないんだけど』』

「()は僕と瑛嗶の家だよ。創立21億4392年位かな?」

球磨川はそれを聞いて開いた口がふさがらなくなったが、瑛嗶となじみという二大人外コンビが作りあげた自宅だ。その位のスケールがあつても不思議じゃない。

というか、そうなるとこの家は世界で最古の建造物という事になるのだが、流石の球磨川も口を慎んだのだった。

『まあ、それはそうとして』『僕は箱庭学園に戻るよ』

「ああ……なるほど。めだかちゃんか……勝てるのかい？ 君に」

『……』『勝つかどうかは別として』『ああいう幸せな奴らを見てると』『吐気がする程気持ち悪いんだよね』『だから僕がやつつけるんだよ』

その言葉になじみはふつと笑い、もう聞く事は無いとばかりに玄関を指差した。球磨川はその指先へと歩いて瑛喰の家を出ていった。

「……はあ、全く。くだらね——ことのでいつまでやつてるんだか」

安心院なじみはただ、つまらなそうにそう呟いた。

「さて、黒子のバスケットはもう行ったし……次は何処に行こうかな？」

球磨川禊は瑛喰の自宅を出て、箱庭学園へと脚を進めていた。その表情は何処か物憂いに耽つていて、とてもじゃないがいつもへらへら笑っている彼としては珍しい雰囲気だった。

『はあ……』『まさか安心院さんが復活してるなんてね』『多分瑛喰さんの仕事だろうけど、考えてみればあの人の身内が封印されて』『瑛喰さんが3年も放つて置く筈ないかあ……』

球磨川は頭に瑛喰のゆらりと笑う表情を思い浮かべ、ため息を吐く。あの人外の安心

院なじみを苦勞して封印したというのに、下手したらその翌日には解放されていたという事になるのだ。それはため息も吐きたくなるだろう。

『でもまあ……今は』『僕自身の事をどうにかしないと、ね』

誰にも聞かれない静かな住宅街で、球磨川禊は一人、そう呟いた。



「さて、それじゃあどうしようか？ 正直、俺は作戦とか正直練るの面倒なんだよね」

瑛叟はそう言つて、球磨川禊のいなくなつた後の教室で机を合わせて班にした状態を作り、過負荷組で作戦会議をしていた。この場に居るのは瑛叟と志布志、蝶ヶ崎、そして遅れてやつてきた不知火半袖だ。

「あひやひや☆そんなの簡単だよ、瑛叟先輩」

「へえ、じゃあ作戦は全部半袖ちゃんに任せてオツケー？」

「ええ、いいですよ。生徒会も十三組もまとめて潰せるウルトラC、きつと上手く行きますよー」

「じゃ、そーゆーことで。内容は球磨川君に伝えておいてね。それじゃあ……なにしようか？ とりあえず俺のスキル使って身体入れ替えとかやっちゃおう？」

瑛嗶の言葉に、過負荷組の二人はびくつと身体を震わせ、不知火半袖は少しだけ興味
が湧いた様な顔をした。

「良い反応だ。じゃあやっちゃおう、身体と精神を入れ替えるスキル——」
【異心転身】ココロコネット

瑛嗶はゆらゆら笑って、面白半分に目の前の3人の心と身体を入れ替えたのだった。



「さて、日之影先輩。どうでしょうか？」

黒神めだかは戻ってきた日之影空洞を連れて生徒会室へと戻っていた。そして、黒神めだかは日之影空洞の存在を全員に認識させ、日之影に改めて自身の仲間の品定めを頼んだ。

「うーん……合格、合格、不合格、不合格、不合格、ギリ合格……でも故障中ってトコか。駄目だこりや、勝負以前の問題だぞ、黒神」

「やはり、そうですか？」

日之影空洞は、瞳、真黒、古賀に合格を言い渡し、善吉、阿久根、喜界島に不合格を言い渡した。その理由は、球磨川への恐怖心があるから、だという理由。彼らと戦うなら、彼らを恐れてはいけないのだ。

そして、空洞は苦々しい顔をしてもう一度採点を始めた。

「……で、今のは球磨川って奴と戦うに当たつての採点なわけだが……別の視点で採点すると、全員不合格。こればかりは俺も黒神もこの場に居る全員が不合格だ」

「それは、どういうことですか？」

「あつちには、泉ヶ仙瑛嗶がいる」

その言葉に、古賀と真黒、瞳を除いた全員が驚愕に目を見開いた。一番驚いているのは、黒神めだか。何故なら、彼が過負荷側マイナスに属しているとは思えなかったからだ。

「でも、なんで彼が向こうに居るだけでそんな結果になるの？」

「そうだね。確かに気になる所だ」

「誰それ？」

瑛嗶の実力を一切知らない真黒と瞳と古賀はそれぞれそう言った。それに対し、空洞

は何かを思い出す様に話します。

「瑛嗶はな、とにかく強い。本来なら過負荷組マイナスに属している様な性質でもないが、はたまに異常アブノーマルな常マつて訳でもないんだ。それでいて、スキルを持つてる奴だ。何処にも属さず、誰にも負けない無敵のチートキャラ、それが瑛嗶つて奴だ。自然災害が人の形を取った様な出鱈目さだぞ、アイツは」

「どういう事？」

「俺がアイツの実力を見たのは一回だけだ。黒神が生徒会長に就任した日、俺とアイツは初めて会つて、まあ友達になつたんだけどな……雲仙冥利、風紀委員長のアイツが瑛嗶の服装に因縁つけて来たんだよ」

その言葉に、黒神めだかは若干の覚えがあつた。演説が終わつた後、少しざわめきがあつたのを覚えている。それは、後方席の方で起こつており、何かしら問題があつたと思つていたが、すぐに收拾が付いたので特に手出しはしなかつた。

「それで……どうなつたのですか？」

「アイツの武器、跳躍球スパーボールを使わせるどころか、逆に奪い取つて5秒も経たない内に瞬殺したよ」

「なっ……!!？」

この言葉には、善吉も驚愕していた。黒神めだかもバージョンアップ前とはいえボロ

ボロになった上に乱神モードまで使ってやっと勝利した相手だ。それを瞬殺だ、驚きもするだろう。

「しかも、後に聞いた話じゃ瑛唄は雲仙相手に手加減に手加減を重ねて、そこに手心で塗り固めた拳句砂糖樽一杯分の甘さを持ってやったらしい」

「雲仙冥利つてのは強いのかしら？」

「強いです。私とほぼ互角に戦った相手です」

「……そんな相手を手加減しまくって……？」

新たな事実に関員の気持ち沈む中、喜界島もがながはたと気づいた様に言った。

「……あれ？　そういえばさつき瑛唄さん来なかったっけ？」

「あ……」

「何？　瑛唄来てたのか？　何の用で？」

空洞の問いに、黒神めだかは目を逸らした。他のメンバーに目を向けても目を逸らさばかり。どうやら、空洞に叱られそうな内容だったらしい。

「なんだったんだ？」

「えーと……その、球磨川と一戦やりあうなら俺も混ぜろ……と」

「それで？」

「……人吉先生と久しぶりに会ったので話が進んで、放置してしまい……」

「ほう」

「いつのまにかいなくなっていました」

その言葉に、空洞は頭を抱えた。何故なら、瑛嗶はまず生徒会陣営に入ろうとやって来ていたのだ。そして、瑛嗶が生徒会陣営に入れば空洞の出番などなくすぐにでも球磨川を潰せたはずなのだ。

なのに、黒神めだかはその機会を見逃した。結果、瑛嗶という両陣営にとってジョーカーたる存在は過負荷陣営に持っていかれてしまった。

これは痛い。

「馬鹿かお前ら……瑛嗶を何で引き止めねえんだよ……！」

「申し訳ないです……」

「仕方ない……此処まで来たら主犯が球磨川である事に感謝しよう。お前ら、凶化合宿……やってみるか？」

空洞はいた仕方ないという感じに、そう言った。

詳しい事は追々知らせに來なさい

結局、あの後球磨川が戻つて來なかつたので、なし崩し的にその日はお開きになった。球磨川と瑛嗶がまた顔を合わせたのは、翌日の朝。少しだけ嫌みつたらしく色々言つて來たが、瑛嗶がスルーしたら大人しくなつた。

不知火半袖の思い付いた作戦は先程瑛嗶を含む過負荷組に伝えられ、代表として瑛嗶と球磨川と志布志と蝶ヶ崎と不知火と江迎の六人が実行に移すことになつた。

作戦内容は、本日行なわれる生徒会主催の生徒総会で行なわれる。生徒総会には、唯一13組生が登校しなければならぬ行事。故に、全校生徒が揃う絶好の機会なのだ。

不知火半袖はその事実を目をつけた。ここが球磨川が動くべき最大の機会なのだから。

「えー、では生徒総会を——」

壇上では黒神めだかが上がり、高らかに開会宣言を行なおうとしたその時、球磨川禊は動きだした。

「開始する」
ふあひひふる

黒神めだかの両頬を引っ張つて開会宣言を邪魔する球磨川禊。その事に驚く黒神め

だかは反射的に距離を取って球磨川をにらんだ。

「『やつほー皆』『僕、めだかちゃん元カレの』『球磨川禊でーす!』」

「何を言っている! 球磨川!」

「『あはは』『今の信じた奴どれくらいいる?』」

球磨川禊はそう言つてへらへら笑う。その言葉や雰囲気からは、流石の過負荷（マイナス）性が滲み出ていた。黒神めだかはそんな球磨川を親の敵とばかりに睨みつけ、言う

「今こゝは生徒会メンバー以外は上がってくる事は駄目なんだぞ。壇上から降りろ、球磨川」

「『ああうん、そうだね』『でも、それは僕の台詞だよ』『めだかちゃん』」

球磨川は不敵な笑みを浮かべてめだかに言い放つ。その言葉は、嘘じゃないぞという説得力があった。そんな様子に黒神めだかは首を捻る。その背後からは善吉達が近寄つて来ていた。

「『生徒会長黒神めだか』『僕は君に』『箱庭学園学校則第45条第三項に基づき』『解任請求^リを宣言する!』」

球磨川禊は、黒神めだかを指差して声高々にそう言い放った。最早この場合は球磨川禊の独壇場、誰もが口出し出来ずにいた。

「え……ッ?!リコール?!どうしてっ?!」

球磨川の発した言葉に対して、喜界島もがなが声を上げた。その声を皮切りに、善吉達も状況の把握に頭を使う。

「……阿久根先輩、校則第45条第三項ってなんですか……?!」

「……第45条は生徒会執行部の罷免に関する条目だ、第三項はその詳細、『生徒会執行部に明白な不備がある場合——全校生徒の過半数の署名をもって役員は即日罷免される』」

「不備?!そんな馬鹿な!俺達に何の不備があるってんですか!」

善吉のその台詞は尤もだった。何故なら、今まで黒神めだかが達成できなかった案件は一つもない。事実、生徒会室には埋め尽くすほどの花が植えられているし、フラスコ計画や風紀委員会との抗争も苦戦しつつ解決してきた。

だが、球磨川が言いたいのはそこでは無い。案件が解決できていないとか、そういう事じゃないのだ。もつと根本的に、彼らに欠けている物。それこそが解任請求の理由。

「『おいおいとぼけるなよ善吉ちゃん』『ぼら見てごらん』『誰の目にも火を見るよりも明らかじゃなか』『副会長の不在』『これは明白に生徒会則第二条に違反している』」

凶星。球磨川の言葉は正論だった。故に、善吉達は言葉に詰まった。しかし、なんとか言い返そうと善吉が反論を用いた。だが、その程度なら球磨川禊は簡単に捻り潰す。

「だ……だが！ そんな揚げ足取りみたいな理由で過半数の署名が集まるわけがない!! それをこつちによこせ! こんなもの捏造に決まって——!?!」

「署名している生徒が全員、——十三組だと……!」

『『そう』『一年——十三組、二年——十三組、三年——十三組』『三ク

ラス総員の署名だよ』』

そう、球磨川禊の集めた解任請求条件である『生徒の過半数の署名』。これは全て——十三組の生徒だった。確実に自身の策を通す為に集めたこの署名は、暗に球磨川禊の人望を証明していた。

「……名ばかりの署名を集めて過半数か、随分と大した『みんな』だな、球磨川」

黒神めだかはその署名を見てそう言う。だが、それこそ球磨川禊の思い通り。球磨川禊と黒神めだか、相反する二人だからこそ、お互いの事を知っている。

球磨川禊は黒神めだかの反論出来ない部分を的確に突いた。

『『おいおい、何を言ってるんだい?』『めだかちゃん』『例え——十三組だろうと』『この学園の誇るべき生徒だろう?』『差別するなよ』』

「ぐっ……」

言葉に詰まる黒神めだか。そして球磨川は言った。

「さあめだかちゃん』『その似合わない腕章を』『自分で外して』『僕に渡すんだ』」

「……っ」

「ああ、そうそう』『会長が解任する時は』『その時の生徒会メンバーも連帯責任だからね』『3人ともお疲れ様』『馬鹿な会長の下で良く頑張ったね』」

その言葉に、善吉が異論を立てる。

「お前が解任を要求するのは分かったが、なんで腕章をお前に渡さなきゃいけないんだよー」

「善吉、この解任要求の校則には続きがある。第十三項『解任責任』、『行事運営に支障をきたさぬよう、解任請求者は次期選挙までの間、臨時で生徒会長を務めなければならぬ』」

「そ、それってつまり……」

「『そう』『この方法なら』『転校したばかりの僕でも、生徒会長になれるんだ』」

これこそ、球磨川禊の……ひいては不知火半袖のウルトラC。生徒会執行部の乗っ取り。そこから一気に学校を壊していくという算段。黒神めだかさえ潰せば後はゆつくりと行動できるのだから。

「球磨川……貴様は何処まで卑怯マイナスなのだ……ッ！」

『そんなの知らないよ』『さあ、全員腕章を差し出すんだ』『駄目な元会長とは違って』『僕
はもう生徒会役員を選出し終えているからね!』

そう言つて、球磨川の後ろに出て来たのは志布志飛沫、蝶ヶ崎蛾ヶ丸、江迎怒江、不
知火半袖、そして……泉ヶ仙瑛嘎。

「やはり……瑛嘎さんはそちらへ行つてしまつていたのか」

「うん、だつて放置されてたし。話にならなかつたからね」

「くっ……」

瑛嘎の言葉に心底悔しそうな声を上げる黒神めだか。瑛嘎はただゆらりと笑つて見
せた。

「『さて』『それじゃとりあえず』『僕たちの掲げる目標でも発表しとこうかな』」

球磨川禊の挙げたマニフェストは、以下の通り。

- ・ 授業及び部活動の廃止
- ・ 直立二足歩行の禁止
- ・ 生徒間における会話の防止
- ・ 衣服着用への厳罰化
- ・ 手及び食器等を用いる飲食の取締り
- ・ 不純異性交遊の努力義務化

・奉仕活動の無理強い

・永久留年制度の試験的導入

おおよそ人権という人権に唾を吐きかけるこのマニフェストは、球磨川が生徒会長になれば確実に推奨されるだろう。

そうなれば、生徒全員まともな学校生活は送れない。

「待て」

「『どうしたの?』『めだかちゃん』」

「黒箱塾塾則第159項『塾頭解任請求ニ関スル項目』」

「『……』『黒箱塾?』」

「この箱庭学園の前身——黒箱塾におけるリコールのルールだよ、塾頭——つまり今で言う生徒会長に解職を請求する場合、塾頭側と請求者側の決闘を持って次期塾頭を選出するという内容だ」

黒神めだかはそう言つて、球磨川禊に反論出来る唯一の方法を叩き付けた。その反論に球磨川は反論しようとして——出来なかった。

「『ゴゲツ?!』」

「ちよつと長いよ。いい加減締めろやメンドクサイ」

「瑛嗶さん……」

「で、どうすんの？ その校則は何をどうする物な訳？」

泉ヶ仙瑛唄は長々しいやりとりでうんざりした様にはなしをぶった切った。球磨川の頭を床に叩き付け、黒神めだかにそう言う。

「あ、はい。えーと、これはつまり……球磨川達生徒会チームと、現生徒会チームが戦って、勝った方が生徒会になるという物で……」

「じゃあ、それでいいよ。詳しい事は追々知らせに来なさい。それじゃ」

瑛唄はそう言つて、球磨川を引き摺りながら舞台袖へと歸つて行つた。その後ろを過負荷勢はそのそと付いていき、その姿を消した。

後には、何とも言えない粉々になつたシリアス感が残っており、誰一人としてどうすればいいんだコレ、という思いにかられていたのだった。

俺はお前と会いたくなくなかった……だが、俺はお前に会いたかったぜ！ 球磨川ア!!

さて、俺ら過負荷メンバーと生徒会チームが行なう事になったのは、生徒会選挙ならぬ生徒会戦挙。庶務、会計、書記、副会長、会長の全役職に就いている生徒がそれぞれルールに則って戦い、勝ち数の多いチームの勝ち。また、挑戦者である球磨川君チームは引き分けでも勝利となる。

で、さっそくだけど本日はその試合の内の第一戦。役職〔庶務〕の試合だ。

出場者は生徒会チームの庶務職である、人吉善吉。対して球磨川チームの出場者は、生徒会長に立候補した筈のリーダー、球磨川禊。

なんともまあ奇抜な組み合わせであるが、勝てる所で勝っておこう、という目論見で球磨川君が立候補したのだ。まあ生まれながらの敗北者とか言う過負荷マイナスが勝つなら、一番勝ちやすいであろう普通ノーマルの人間に一番効果的な人物を当てるのが最適ではあるけどね。

『それにしても、だよ』『瑛嗶さん』『他の過負荷マイナスメンバーが誰一人応援に来ないってどう思う?』

「嫌われてんじゃね？」

『『そう言う瑛嗶さんはどうなの？』』

「嫌いではないぜ」

俺と球磨川君は、庶務戦会場である場所で生徒会チームがまだいない中雑談を交わしていた。何分、かなり早くに此処に到着したもんだから、随分と待っている。

ちなみに、会話の通り現在ここには俺と球磨川君以外存在していない。志布志ちゃんや江迎ちゃん達はこの夏を謳歌する為に遊んでいるのだ。

「あ、来た」

『『やっとか』』

そう言つて振り向くと、そこにはやっとかやってきた生徒会チームが見えた。こちらと違つて随分とまあそろそろ観客も多い。黒神めだかや人吉善吉、黒神くじらに人吉瞳、そして古賀いたみが凛々しい雰囲気醸し出しながら歩いて来ていた。

「やあめだかちゃん。待ちくたびれたぜ」

「……一体どれくらい待つてたのだ？」

「ざつと12時間くらい？」

『『いやあ』瑛嗶さんが寝ていた僕を叩き起こして』』ここに連れてきたから』正直眠くて堪らないよ』』

まあ嘘である。実際は20分位しか待っていない。

「そ、それはまた……待たせたな」

『まあ嘘だけどね』

「球磨川ア！」

これは漫才かと思わせるめだかちゃんと球磨川君のやり取りを傍目に、俺はちようど登場した人物に眼を向けた。

「——それでは定刻になりましたので始めさせていただきます、まずは皆様、本日はご多忙の中こうしてお集まりいただき有難うございます」

現れたのは、アイマスクを着けた怪しげな男。制服のデザインからして、選挙管理委員会の人間だろう。スキルで視た所、名前は長者原融通。異常なまでの公平さを持った男、か。

「わたくしめは僭越ながら今回の生徒会戦挙を管理させていただく選挙管理委員会副委員長二年十三組長者原融通と申す者でございます、ほんの一夏の間ではございますが、どちら様もよろしくお願いいたします」

「……久しいな長者原二年生、四月の総選挙以来か」

どうやらめだかちゃんとは彼と知り合いの様だ。多分生徒会長になった時にでも会ったんだろう。

「これはこれは黒神様……私の様な者をご記憶頂けていたとは恐悦至極にございます。しかし生徒会執行部や風紀委員会と違い、選挙管理委員会はご存知のとおり日陰の身、選挙が終わればどうか我々の事はお忘れいただきたく思います……」

……そういえば彼らは目を隠して居るけれど、目は見えているのかな？ マジックミラーみたい透けて見えているのかな。

「そもそも——」

めんどくさいよ、もう聞いてないよ？ 俺。

それで、しばらくそんな事務的な会話が続けていたのだが、球磨川君がちゃんと審判するに値するのかな？ とか良いでした。

「球磨川様も勿論、わたくしめに不満がございますれば善処いたしますので忌憚なきご意見を頂戴願いたく存じます」

『んー』『不満ねえ』『いきなりそんなことをいわれても——ね！』

球磨川君の不意打ち攻撃。螺子を長者原君の頭へと螺子込もうとしたのだが、長者原君はそれを指二本で止めて見せた。

「へえ、球磨川君の攻撃を止めるか、中々やるじゃないか。委員長あんなのなのに」

『まあこれならいいかな』『ごめんね、試す様な真似して』

「いえ、御理解いただけのなら結構です」

そう言つて、長者原君は全員に向き直つた。

「こほん！では、まずは勝負を行うフィールドを決めたいと思います。この13枚のカードの内から選んでいただきます。選ぶのは挑戦者側である球磨川様です。どうぞ」
俺の目の前にはカードが置かれ、十二支の文字がそれぞれ書かれている。余りの1枚は人と書かれている。何あれ、面白そう。

「んー…んじや巳で！」

球磨川君はそう言つた。んー、俺の勝負の時に人選ぼうかな。…ん、止めとこう。球磨川君あたりが最後に選んでくれるだろう。

「さすがは球磨川様。初戦でこのカードを選ぶとは…この巳のカードは最も残酷なステージになっています。では、庶務戦のステージは巳のカード。その名も【毒蛇の巣窟】となります！対戦カードは球磨川禊様対人吉善吉様となります！」

そして、やってきたのは毒蛇の巣窟なる場所。正方形の形に空いた地面の穴。底には毒蛇がうじゃうじゃといる。そして蓋をするように金網が置かれた。

しかし、金具で留められてはいない。つまりはこの上で動けば少しずつ毒蛇に近づくわけだ。まあおもしろい。

「では、開始してください」

そんな言葉とともに、球磨川君と善吉君は金網の上に立つた。

「『やあ善吉ちゃん』『久しぶりだね』」

「ああ、そうだな球磨川。俺はお前と会いたくは無かったぜ」

「『酷いなあ』『まあいいけどさ』」

球磨川君と善吉君は随分と仲良さげに話をしていた。そして、言葉を交わした後は早々に構えた。球磨川君は何時もの通り螺子を両手に、善吉君は武器は持たずに何時でも動きだせる体勢を作った。

「『行くよっ』」

球磨川禊が人吉善吉に跳びかかった。その表情は随分と余裕そうだ。

だが

「『がふっ!?!』」

「俺はお前と会いたくなかった……だが、俺はお前に会いたかったぜ！ 球磨川ア!!」

普通、人吉善吉は最弱最凶の過負荷マイナス——球磨川禊を蹴り飛ばしてそう吠えた。

『うん』『まいった!』『強くなつたね、善吉ちゃん』

「どうだ! そろそろ負けを認めたらどうだ! 球磨川!」

善吉君はもう何度目かになる蹴りで球磨川君を蹴り飛ばし、そう言う。善吉君の球磨川禊対策として取った戦法は眼を瞑つて気配や声を頼りに攻撃すること。この一戦までの短い期間、名瀬天歌もとい黒神くじらの下でその訓練ばかりして来たらしく、今では眼を瞑つてでも普段通りに戦うことが可能な様だ。

だが、球磨川君は君の常識で測れるほど長く過負荷をやつてない。寧ろ、彼は善吉君の知る頃よりももつと退化しんかしているのだから。そんな言葉を吐けば、当然こう言うに決まつてる。

「『うん』『まいった!』『強くなつたね、善吉ちゃん』」

球磨川君はあっさり負けを認めた。驚愕に眼を見開く善吉君や他の観客達。球磨川禊は誰かがそう簡単に理解出来る様な男じゃないし、彼の気持ちを考えても無駄だ。

彼は人間として本当に終わっているのだから。

「なっ…!?!?」

『『本当に強くなったよ』『これはもう、話すしかないようだね…』『僕がこの学園に来た本当の理を!!』』

そんな深刻な理由は無いくせに。随分と思わせぶりな嘘を吐く球磨川君。彼の言葉の末端から末端までが嘘、そして末端から末端まで何の感情も籠っていない唯の言葉。あたかも台本に書かれている台詞をそのまま喋っているかのような言葉遣い。

「本当の……理由…!?!?」

善吉君はそう呟いて手を止めた——いや、止めてしまった。それが球磨川君に対してやってはいけない行動だと分かっている筈だったのに、だ。

「善吉イ!! 球磨川は縫りつきたくなくなるような嘘を言ってから本番だろうがあ!!」

黒神めだかが叫んだ。はっとなる人吉善吉。球磨川君はそんな二人を見て、歪に口元を吊り上げた。善吉君がめだかちゃんから球磨川君へ視線を移すほんの数瞬の間に、球磨川君が立ち上がり、素早く螺子を取り出した。

そして、次の瞬間。善吉君が球磨川君を視界に収めたその瞬間に、数本の螺子が善吉君の身体に叩き込まれた。

「ガッ……アアアア!」

「『これはゲームじゃないんだよ?』『勝敗が決まったからと言って』『油断しないで頂戴』」

叫び声を上げて膝を着く善吉君に対して、悠然と立ち上がって笑う球磨川君。何度も善吉君に蹴られまくってポロポロになったその身体は、次の瞬間には元通りの綺麗な状態になっていた。

その様子はとてつもなく不気味で、その表情は堪らなく気持ち悪かった。

「全く、球磨川君も中々に面白く育ったじゃないか」

「『期待に添えられて何よりだよ』『瑛嬢さん』」

「まあ、気持ち悪さからいえばもつとウザイ奴がずっと昔にいたけどね。全身打撲塗れにして殺したけど」

無論、石動式語（いしなり ふたご）の事だ。4000年前に存在した、なじみの言う『千年に一人くらいいる勝利を約束された存在』だ。

まあ何故かは知らないけれど、なじみからしたら俺もそのカテゴリに入るらしい。まあこの世界に来てから負けた事は無いけれど、俺だって負ける時は負けるんじゃないかね? 「『へえ、それは是非会って見たいね』『まあその話は後で聞かせてもらおうとして……』『善吉ちゃん』」

球磨川君の呼び掛けに、膝を着いている善吉君はビクリと肩を震わせた。

「球磨川ッ……貴様!」

「『どうしたのめだかちゃん』『あれ?』 此処に來た理由?』『ソレはアレだよ』『親が高校くらい出ておけてうるさいからさ』」

そう言つて、めだかちゃんの怒りの形相にへらへら笑つて返した。どうやら勝敗が着いていても介入は出来ないようだ。

それには色々と事情があるが、一番の原因はかなり下まで降りた金網にある。最下層には毒蛇が大量に蠢いている上に、俺達がそこへ飛び降りたらその衝撃で確実に金網は毒蛇へ達する。

まあ俺はスキル云々で色々と出来るけどね。

「『君はどうやら僕の事を見たくもないようだし』『本当に見なくても良くしてあげる』」
すると、球磨川君はその指を善吉君の瞳に向けて突き出し。そのまま善吉君の視界から、光を奪つた。

「あ………ああ………!」

「『君の視力を』『無かつたことにした』」

「無かつたことにした、だと……? どういう事だ! 球磨川!」

「『そう大声出さないでよめだかちゃん』『僕の過負荷マインナスの名前は』『大嘘憑オールフィクションき!』『現実すべてを

虚構なかつたことにするスキルだ」

その言葉の意味は、とてつもなく大きな災厄。全てを無かつたことに出来るそのスキルは、まさしく反則そのものであり、規格外。

「というか、そんなスキルを持つてて尚負け続ける事が出来るとは……ある意味才能だろう。」

「そのスキル俺も持つてるけど使い勝手良すぎるよね。なんでそれで負けるわけ？」

「持つてるんだ……流石は瑛嘎さん」『抜け目ないぜ』『なんでかなんて分かんないよ』
「ま、いいか。じゃ俺帰るから、勝敗決まったし。終わったらどうなったかだけ教えてくれ」

「『えー帰るの?』『帰りに一緒にマクドナルドでも行こうと思つてたのに』」

「乗った。それじゃ待つてるから早く終わらせて迎えに來い。13組の教室で待つてるから」

そう言うと、球磨川君は一つ頷いた。俺はそれを確認した後、ゆらゆらとその場を後にしたのだった。

僕だって一回くらい勝ちたい。どんなに格好悪くたって、どんなに弱くたって、胸を張って主役を張れるって証明したい!

瑛嗶は庶務戦の勝敗が着いて、なんだか飽きてきたのでその場を後にしていた。

そして現在は、13組の教室で日之影空洞と対面している。教卓に腰掛ける瑛嗶と、自分の席である教室のど真ん中に腰掛けている空洞。二人しかいない空間の中で、敵対している二人の間に行き詰った様な空気はまるでなく、寧ろ友人同士の気軽で心地良い空気が生まれていた。

「それで、どうなんだよ。そっちは」

「あー、まあアイツらには凶化合宿を受けて貰ってる。今はちよつとした休憩中だ。俺も少ししたら戻る」

「凶化合宿ねえ……まあそれくらいやんないとアイツらは勝負にならないか」

軽い口調で自身らの作戦を漏らす空洞だが、それは別に何も考えていない訳ではない。お互いに相手がどんな人物か知っている故に話しているのだ。空洞は瑛嗶が作戦

を漏らした所で邪魔してくる様な奴ではないと思ってるし、瑛嗶も別に邪魔しようとは思ってなかった。

「それにしても、ありや何だ？ あんな奴がいるなんて思わなかったぜ。球磨川禊」

「まあアレはアレで个性的な子なんだよ。4000年前位にはもつと酷い奴もいたんだぜ？」

「瑛嗶、お前いくつだ」

「ざつと40億歳位かな？」

瑛嗶の言葉に、口を開けて啞然とする空洞。それもそうだ、てつきり同い年くらいかと思っていた相手が自分より遥かに昔から生きている人外だったのだから、

「すげえ長生きだな……」

「何、俺より年上だっているんだし、そう気にすることないだろ」

「お前より上いるのかよ。全く、世も末だな」

空洞はそう言つて苦笑する。正直言つて常識の範囲外の存在だ。此処まで来ると、瑛嗶がどんな非常識を持つていても最早驚きには値しないだろう。

「それにしても、球磨川君も良くやるよね。幸せ者の抹殺とかさあ」

「それにお前も加担してんだけどな」

「俺は別にそんな考え持つてないよ。ただ面白そうだなあと」

「お前が関わると碌な展開にならないんだから自重してくれ」

「善処してやるよ」

その口調からは全く反省の色を見せない瑛噺。空洞はその様子にため息をついて立ち上がった。休憩時間の終わり。そろそろ戻ろうと言う訳だ。

「それじゃ俺は戻るぜ」

「ああ、またね」

「『瑛噺さん』『終わったよー』」

そこに、球磨川禊がやってくる。空洞は若干身構えた者の、自前のスキル【知られざる英雄】ミスターアンノウンを駆使して球磨川禊の横を通り抜け、そのまま去って行った。

「おう、遅かったじゃん。それじゃ、行きますか」

「『うん』『あ、奢ってくれない?』」

「やなことだ」

そう言いあい、二人は教室を出て約束のマクドナルドへと向かっていった。



「それにしても、お前って奴はめんどくさいな。なに? 勝ちたいだのなんだの言って

その努力はしてる訳？」

「『……………』『何言ってるの?』」

「努力して無い奴に、勝利が訪れる訳ないだろう」

「『努力か、実にプラスな行為だよ』」

「なんなら、俺がお前の過負荷性^{マイナス}を取り払ってやつても良いんだぜ?」

マクドナルドで一服しながら雑談していたのだが、瑛嗶は唐突にそう切り出した。その言葉をどうにか躲そうとする球磨川に対して、瑛嗶の言った言葉は反則（マイナス）だった。球磨川にとってはその言葉が強く心に響いた。

幼い頃からの球磨川禊を知る瑛嗶からすれば、心の中をいくらでも覗ける瑛嗶からすれば、その気になれば人一人を真反対の人間に変えることなどたやすい瑛嗶からすれば、球磨川禊の考えている事や達成したい目的なんかは余裕で知ることが出来る。

故に人外。人間の身でありながら、人外の領域に届いた男。

「『僕は……………』」

「括弧つけてんじゃねえよ。お前の言葉を、お前の心で俺に行ってみろ」

瑛嗶の鋭い視線に眼を見開いて戸惑う球磨川。そして、その表情から瑛嗶には一切の嘘八百、括弧付けた言葉も通用しない事が分かった。

「——勝ちたいよ。僕だって一回くらい勝ちたい。どんなに格好悪くたって、どんなに弱くたって、胸を張って主役を張れるって証明したい!」

だから、球磨川禊は初めて自分の言葉を打ち明けた。マクドナルドの中で。

「うん、それでいい。俺がお前をめだかちゃんに勝たせてやるよ」

瑛叡は球磨川禊の瞳を見据えてそう言った。そして、指をぱちんと鳴らしてスキルを発動させる。発動させるスキルは、スキルの効果を破壊するスキル【カタストロスエフェクト情けは人の為ならず】。これにより、瑛叡の自宅で寛いでいた安心院なじみの封印をこっぴあみじんに破壊した。

「来い、なじみ」

「何か用かな?」

そして瑛叡はなじみを呼び、なじみはその言葉と同時に二人の目の前に現れた。

「安心院さん……」

「おや、球磨川君。その言葉遣いを見た所……なるほど、瑛叡に手厳しく言い寄られたみたいだね」

「なじみ、球磨川君をめだかちゃんに勝たせる。ちよいと手伝いな」

「いいよ。そういう事ならこの安心院さんが全力で力を貸そう。安心したまえ球磨川

君、安心院さんだけにね」

安心院なじみはそう言つて球磨川禊を抱き締めた。そして、泉ヶ仙瑛噺は立ち上がりその手に持ったハンバーガーの最後の一切れを口に放り込んだ。

「俺となじみが全面的に支えてやる。球磨川禊、さっきの言葉……実現してもらおうぞ」

球磨川禊はその言葉にとんでもない安心感と罪悪感が芽生えた。

この二人が自分を押ししてくれる安心感と、この二人が後ろに付いた事による圧倒的なチートさ加減に対する罪悪感。

『やつべ』『とんでもない人達味方に付けちやつたよ……』

球磨川禊は括弧付けた元の喋り方に戻して、そう呟いた。

人外の少女と人外以上の男が最弱の男に味方した。この事実はおおよそ、黒神めだけが勝つことが出来ないという現実を作りあげた。

安心院なじみの言う『勝利を決められた存在』である黒神めだかも、同じ存在である瑛噺に対して勝つ事は出来ない。それは安心院なじみも泉ヶ仙瑛噺も、そして黒神めだかも球磨川禊も理解していた。

故に、球磨川禊はこの時勝利の為の道を開く。最弱の過負荷マイナスは、初めて勝利へと前を向いた。

球磨川禊は私がこの手で改心させる!!

思わぬところで勝利に必要なだけの材料を揃えてしまった球磨川禊は、庶務戦には敗北したが瑛叟達によつて会長戦に出ようという算段になった。

また、次の書記戦の出場者は生徒会側が名瀬天歌、過負荷側が志布志飛沫というカード。対戦場所は氷点下にも等しい程の気温の冷凍室。ステージのカードは志布志の選んだ、巳。その名も「冬眠と脱皮」、お互いの身ぐるみを全て剥いだほうの勝ち、という物である。

そして、この勝負に志布志飛沫以外の過負荷^{マイナス}は蝶ヶ崎蛾ヶ丸以外は登場しない。あの球磨川禊でさえも、そして泉ヶ仙瑛叟の姿もそこには無かった。蛾ヶ丸が黙っている以上完全アウエーの中、志布志飛沫は戦いを挑んだのだった。



場面は変わつて球磨川禊と泉ヶ仙瑛叟、安心院なじみの三名は瑛叟の作りあげた空間の中に立っていた。こうしている中で、志布志達は書記戦を行なおうとしているのだ

が、球磨川禊はただ一言『負けても良いから』『頑張つてね』とだけ声援を送った。それによつて随分と上機嫌に書記戦に向かつた志布志だったが、球磨川はそれに対して何も言わずにただ笑つた。

「さーて、良い子のみんなく！ お勉強の時間だよ！ これで安心、安心院さんのつ！
ラクラク黒神めだかちゃん対策う！」

瑛夏の作りあげた空間は、某ドラゴンボールにある精神と時の部屋同様の効果を持つ空間である。違ふのは真つ白い空間でも重力や気圧や気温は現実世界と同じだし、変化もしない。中での一年が現実での一日という時間差がある故に、特訓にはかなり便利な場所だ。

また、瑛夏式であるが故に、原作の様に入れる時間が決まっている訳じゃない。無制限に何度でも入ることが出来る。だが、瑛夏の許可があるのでそう簡単に入れるわけではないが。

『それはいいんだけど』『どうすればいいのさ』

球磨川禊は何時の間にか置かれていた椅子と机に座らされ、ホワイトボードの前に立つ瑛夏となじみに対してそう言つた。

「ああ、まあ落ち着いて聞くんだ。君には二つの選択肢がある」

『『選択肢？』』

「まず一つは」

なじみが指を一本立てて言う。

「僕と瑛唄による超激しい血反吐を何度も吐く様な修行をして努力の結果、めだかちゃんに勝つ方法」

「そして二つ目は」

瑛唄が続く様に二本指を立てて言う。

「俺となじみの持つ無数のスキルを駆使して無敵キャラに手っ取り早く成っちゃって、めだかちゃんに勝つ方法」

『……………』

そう言うと、瑛唄となじみは同じ様に口元を吊りあげて球磨川禊を見据えた。

「さあ、どっちが良いか選べ。球磨川禊」

球磨川禊は、この選択に汗を流す。生温い努力を信条の一つにしている過負荷のリーダーとしては血反吐を吐く様な努力をするのは避けたいし、かといって黒神めだかにそんな楽しんで勝っても心から勝ったとは思えないだろう。

『『そこそこの努力をしつつ』『黒神めだかに勝つ方法は無いの?』』

「ないよ」

「諦めろ」

「『……じゃあ』『努力する方で』」

球磨川禊はとりあえず、努力することにした。

「よし、それじゃ始めよう。何、時間はいくらでもあるんだ、まずはめだかちゃんに勝つ為に必要な要素を君の腐った脳みそも分かりやすく解説してあげよう」

そう言った球磨川禊に対して、安心院なじみはにこりと笑ってそう言った。

「まず、球磨川君が生まれながらの敗北者に対してめだかちゃんは生まれながらの勝者なんだ。それこそ、千年に一人くらいいる勝利を決定づけられた人間だ。そこは事前に理解しておいてほしい」

「『じゃあ安心院さんがやったらどうなるの？』」

「僕がやっても勝てないね。黒神めだかは箱庭学園を舞台に漫画を描いたとすればその主人公にあたる存在なんだからさ。僕は精々何章かめのラスボスだよ」

「『瑛嗶さんは？』」

「瑛嗶は例外だよ、誰も勝てない存在さ。ファンタジー物で言う所の伝説上の勇者とかそういう立ち位置だよ。または世界最強の存在とか謳われている様な奴さ」

なじみは暇そうに胡坐を掻いている瑛嗶を一瞥してそう言った。

「『ふーん』」

「さて、次に。君が彼女の勝つにはどうすればいいのか、まずは前提条件を揃えなきゃい

けない。君の中の生まれながらの敗北者という意識を捨てて貰うよ」

「『え?』」

「意識の問題だよ。君が自分を敗北者と思つてたら当然負けるよ、だつて向こうは負ける事は考えてないんだから」

なじみと球磨川はそんな会話をしつつ、作戦を練つていく。前提条件の改変と、それに対する球磨川禊の強化。

「さて、それじゃあまずデメリットの方を言つておくよ。一応言つておかないと後々後悔するだろうし」

「『デメリット?』」

「そう。いいかい球磨川君——」

安心院なじみは球磨川禊に対して酷く深刻な言葉を告げたのだった。



「——違うね、氷には炎だ」

一方その頃、書記戦は終わりを告げていた。他人の古傷を開く過負荷マイナス【致死武器スカードデッド】を使用して名瀬天歌に大きく優勢を取っていた志布志飛沫だったのだが、心の古傷を開いて追い詰めた名瀬天歌は週刊少年ジャンプさながらに新たな力に覚醒、過負荷マイナススキル【凍る火柱アイスファイア】を会得。その効果は、温度の上げ下げを自由に行なえるという物。

その結果、開いた古傷は片っ端から凍らせて塞ぎ、心の傷は心を冷たくする事で躲して見せた。

そして、最終的に逆転で追い詰められた志布志が取ったのは建物に対するスキルの使用。その名も【憎武器バスターカード】を発動。建物を風化させて生き埋め作戦に出た。

だが、それすらも名瀬の手によって凍らされ、風化さえも塞がれてしまった。

結果、負けを認めて服を脱ぐから後ろを向いていくれと懇願する志布志。名瀬はそれに対して了承し、後ろを向いたのだが、志布志はその背後にその辺に出来た氷柱を持つて攻撃。氷には氷だろう、と言って襲い掛かったのだが、名瀬は冷やすだけではなく熱くすることも出来たので、炎を生み出してこれを迎撃。志布志はその攻撃によって服を焼失。結果、名瀬の勝利となった。

「この勝負、名瀬天歌様の勝利となります」

「やったー！」

「ふうー……疲れた」

喜ぶ善吉と冷凍室から志布志を抱えて出てくる名瀬。

「これで生徒会チームは二勝となります。後一勝で生徒会チームの勝利と成ります」
「……………」

その宣言に対して反応する人物は、過負荷側にはいない。

「次回の対戦は会計戦です。それでは」

そう言うのと、長者原融通はふっと去って行った。

「おーおー、やっぱり負けてる」

そこへやって来たのは、泉ヶ仙瑛嗶。球磨川禊を勝たせると言った男。何故此処にいるかといえ、球磨川をなじみに任せて出て来たのだ。今の所瑛嗶が手を出す余地はないので、暇だったのだ。

「瑛嗶さん」

「蛾ヶ丸君か。さて、志布志ちゃんをどうにかしないとね」

蝶ヶ崎蛾ヶ丸は現れた瑛嗶に対して志布志を抱えて近寄った。瑛嗶はその志布志の様子を見て、時間を巻き戻すスキル【跡^{バックトラック}戻り】を発動。志布志の傷は服も含めて戦闘前の状態に戻り、完治した。

「さて、これで二敗か……………まあ会計戦はどうにかしないといけないねえ。会長戦もやりたいし」

「どうするんですか？」

「会計つて怒江ちゃんでしょ？　ならまあ大丈夫かな。俺に任せろ」

そう言うのと、蛾ヶ丸はこくりと頷いて気絶している志布志を背負ってその場を去って行った。

「……無口な子だねえ」

「瑛嗶さん」

その背中を見つつ呟く瑛嗶に対して話し掛けたのは、黒神めだか。

「んあ？　ああ、めだかちゃんか」

「これで私達の二勝です。このまま三勝して早々に球磨川達を箱庭学園から——」

「追いだす？」

「!？」

めだかは瑛嗶の言葉に眼を見開く。何故なら、泉ヶ仙瑛嗶の表情が稀に見る真面目な表情だったからだ、

「おいおい、黒神めだか。そうじゃねえだろ、そんなんじや球磨川禊には勝てないよ。追い出すだけなら、それこそそこにいる古賀ちゃんや善吉君だって出来るぞ」

「……っ」

「お前は中学時代と同じ処置を取るのか？　その結果が今の戦いを生み出しているのに

? なるほど、中々腐った根性してるなお前。俺の知ってるこれまでのお前は現れる相手とは真正面から向き合っただけで心からぶつかって行った筈なんだけどなあ。がっかりだぜ」

瑛叟は言うだけ言うと、蛾ヶ丸に続く様にその場を去った。振りかえり様に一瞬見えた瑛叟のめだかを見る瞳には、黒神めだかという存在が酷くつまらない物の様に映っていた。

それを見ためだかは拳を握り、瑛叟が見えなくなった後、自分の顔を殴った。

「めだかちゃん!」

「……善吉……私は愚かだった。球磨川をこの学園から退ければ、どうにかなると思っていた」

「……………」

「だが、違うのだ! ここで球磨川を追い出せば、同じ様に奴はこれからも人の心を押し折り、次々と被害者を出す。追い出すのでは駄目なのだ、決めたぞ善吉!」

「?」

めだかは拳を顔から離し、鼻血を垂らしながらも凜とした態度で言い放った。

「球磨川禊は私がこの手で改心させる!!」

勝負は一瞬で終わるからだよ

球磨川禊の修行が安心院なじみによって進む中、瑛嗶は球磨川の代わりに過負荷組をまとめていた。球磨川の修行は既に瑛嗶式スキルの空間を抜け出して、なじみの作る教室空間に場所を移していた。正直、瑛嗶が球磨川の修行に手を出す余地は無いのだ。何故なら、瑛嗶は球磨川禊がスキルで手軽に実力アップする方を選択した場合の講師だったからだ。

「怒江ちゃん、次は君の番だけど」

「あ、瑛嗶さん。お久しぶりです」

「おう、久しぶりだね」

瑛嗶と怒江は会計戦である会場にやって来ていた。迎えの選んだカードは、卯。そのカードのフィールドは植物園、競技名は『火付け卯』、対戦カードは江迎怒江と人吉瞳だ。「怒江ちゃん、今回の戦いは負ける事は許されない。何故なら、この勝負に負けたら球磨川禊が黒神めだかと戦えなくなるからね」

「そうなんですか？　なら、負けない様にしないと」

「まあ、俺がいれば負けは無いけどね」

瑛喰はそう言って、腕輪をはめた。今回の対戦はパートナー方式であり、対戦者である江迎怒江と人吉瞳にはお互いの陣営からパートナーを一人選ぶことが出来る。今回の場合は瑛喰と善吉だ。

そして、対戦方法はパートナーが爆弾である腕輪を着け、制限時間内にお互いのパートナーの腕輪を外すこと。腕輪の鍵は、対戦者である江迎と瞳が相手に見えるように持ち、それを奪い合うのだ。

つまり

1. 制限時間内に
 2. 鍵を守りながら
 3. 鍵を奪い
 4. パートナーを助ける
- というルールだ。

「さて、それじゃあ始めようか。大丈夫、怒江ちゃんはただ俺の傍で立っていればいい」「それってどういう……?」

「勝負は一瞬で終わるからだよ」

その言葉と同時に、長者原による開始の合図が鳴り響いた。

瞬間

植物園の植物が全て吹き飛んだ——そして

「俺らの勝ちだ」

瑛夏の勝利宣言と同時に、瑛夏の腕から腕輪が落ち……瑛夏達の勝利が決まった。



「な、何が起きたんだ!？」

「植物園が一瞬で……!」

「これは……?」

誰も今起こったことが分からなかった。気が付いたら植物園が吹き飛び、気が付いたら瑛嗶の手には瞳の持っていた鍵があり、腕輪が外されていたのだ。しかも、瑛嗶は江迎怒江の隣を離れていない。

「しょ、勝者……新生徒会チーム、江迎怒江様でございます」

だが、結果として勝ったのは瑛嗶達だ。それは紛れもない事実、長者原はそれ故に勝利宣言を行なう他なかった。

「瑛嗶さん！ 今のを説明していただきたい！」

勝利宣言を聞いても、気にせず黒神めだかは瑛嗶に問いかけた。すると、瑛嗶はその言葉にゆらりと笑って答えた。

「俺に不可能はない」

瑛嗶はその言葉と同時に、全員の頭に先程起こった事実を映像にして流した。そこに映っていたのは、瑛嗶のトップスピードによる衝撃波で植物園が吹き飛び、瞳の鍵を一瞬で奪い取った瑛嗶の姿。驚くべきは、人吉瞳と善吉の二人が全く気が付いていない事だ。鍵を奪われた後、衝撃波で顔を覆い、収まった後気が付けば瑛嗶の腕輪が取れていたという認識。まさしく速技だった。

「……………こんなの勝ち様ねえじゃん」

「……………ま、まあ瑛嗶さんですから」

名瀬天歌の台詞に、めだかが引き気味に答えた。だが、その言葉は全員を納得させるには十分だった。

「それじゃ、怒江ちゃん。行こうか」

「はあい」

瑛嗶は伝えるだけ伝えようと、江迎の手を引いて歩き出す。腐りもしないその手は、瑛嗶のスキルによる物。そして、瑛嗶は何かを思い出したかのように振り返り、言った。

「そうそう、副会長戦——出るのは俺だ。よろしく」

その言葉の後、瑛嗶は去っていく。背後で呆然としていた生徒会チーム全員が、副会長戦の敗北を覚悟したのだった。



「そういえば、怒江ちゃんって善吉君の事が好きなんだっけ？」

「何故それをつ?!」

「まあ見てれば分かるよね」

瑛唄は江迎と共に過負荷教室で座っていた。会話の内容は、江迎の恋の話。

「はい、そうです」

「そう、頑張つてね。幸せになると良い」

「……私、幸せになつても良いんですか？」

「なれば？」

瑛唄は唯そう言った。別にどうでもいいものの様に、特に興味無いかの様にそう言った。

「そう……ですか」

だが、そう言われた江迎の表情は憑き物が落ちたかのようにすすきりしていた。瑛唄と江迎には、昔ちよつとした縁がある。そのせいで、江迎は瑛唄に対してかなり信頼を置いている。故に、瑛唄が幸せになつても良いんじゃないかね？ といった事で、とても晴れやかな気持ちになつたのだ。

「あ、そうそう。そう言う事ならその過負荷マイナスどうにかしないといけないな」

すると、瑛唄はスキルのオン／オフを付与するスキルオルトレイション「切替嗜」を発動させ、江迎怒江のスキル「荒廃フラフラした腐花」にオンオフを付与した。これによつて、発動は江迎の意思で行なうことが出来る。

「これでオツケー。それじゃ、高校生らしい恋愛をすると良いよ。最悪押し倒せ」

瑛嘎はそれだけ言うと、手を振って教室を出て行った。

なにはともあれ、生徒会戦拳過負荷陣営は1勝2敗の戦績を上げたのだった。

楽しめよ。この喧嘩、俺の勝ち揺るがない

会計戦も終わり、生徒会戦も中盤を超えた。残る対戦は副会長と会長戦の二つのみ。過負荷側がその二試合に出ず出場者は御存じ泉ヶ仙瑛嘎と球磨川禊。おおよそ真反対と言える二人だ。最強と最弱、最笑と最凶、まあ最笑なんて造語だが、人を不幸にしたい球磨川禊と自分に面白みを求める泉ヶ仙瑛嘎は黒神めだか同様球磨川禊の反対とも言える人物だ。

だが、究極的に言えば泉ヶ仙瑛嘎の反対の存在は安心院なじみだろう。確たる証拠になる要素を挙げられるわけではないが、きっとそうなのだ。

「副会長戦、俺が出て良い？」

「別に良いですけど」

瑛嘎はそう言つて、蝶ヶ崎蛾ヶ丸から副会長戦の出場権を奪い取つた。実を言えば、瑛嘎は生徒会メンバーに副会長戦に出ると言つた時、まだ蛾ヶ丸の承認を得ていなかった。まあ、今取つた訳だが。

「ありがとう、蛾ヶ丸君」

「別に……」

瑛嗶はそう言つて蛾ケ丸の頭をぼすつと撫でた。その手は蛾ケ丸の頭をわしやわしやと掻きまわし、傍から見ればその光景は親しい兄弟や先輩後輩といった仲にも見え
た。

「さて、それじゃあ承認も得た事だし……ちよつと勝つてくるよ。球磨川君を勝たせるつて約束したしね」

瑛嗶はそう言つて、目の前で待つ生徒会チームの面々の下へと歩み寄つていく。副会長戦に出る生徒会メンバーはそこに立っていた。人より大きな身体を持ち、その拳で誰にも認識されないまま多くの生徒を護つて来た知られざる英雄、日之影空洞。瑛嗶の箱庭学園で初めての友人であり、クラスメイトだ。

「おーす。空洞君、この前ぶりだね。で、ソレ何？ イメチエン？」

瑛嗶がそう言つた理由は、空洞の変貌ぶりにある。金髪だったその髪は真つ黒に染まり、強靱な肉体には何やら黒い刺青の様な模様が走っている。しかも、驚くべきはその存在感だ。見れば空洞の異常アブノーマルスキルである「知られざる英雄」ミスターアンノウンが無くなつていた。

「イメチエンつて程じゃねえよ。お前んトコの新髪グラマー女が凶化合宿中に襲つて来たんで阿久根も喜界島もズタボロにされたんだよ。俺もだけど……それで、ちよつと不知火にな」

瑛嗶はその言葉を聞いて、空洞に不知火半袖が手を貸したのだろうと理解した。凶化

合宿中に志布志飛沫がちよっかい出したのは知っていたが、放置していた。まあそのおかげでこんな面白い展開が姿を見せたのだから、良いとしよう。

「まあそれならいいか。中々面白い格好に成った様だし」

「そいつはどうも」

瑛嗶はゆらりと笑い、空洞は乾いた笑みを浮かべた。そのやり取りはどう見てもこれから敵対して戦う二人では無く、友人と友人の他愛の無い会話に見えた。

「それでは、副会長戦を開始したいと思います。挑戦者側、泉ヶ仙瑛嗶様。フィールドカードをお選び下さい」

「じゃ、未で」

瑛嗶が選んだのは未のカード。そのカードを選んだ事による対戦フィールドは、特に無く。学校の校庭になった。ただし、このカードでの対戦ルールはともじやないがとても厳しい物になる。

「未のカードのフィールド指定はなく、校庭での対戦となります。そしてルールですが、まず対戦者はお互い戦闘を行ない気絶か降参するまで戦って貰います。ここで、戦うに当たってとある条件が付きます」

「条件？」

「そうです。それは、お互いの対戦者陣営のチームメイトから敵対戦者へ戦闘における

禁止行為を設定出来るのです」

つまり、瑛嘎と空洞は校庭で気絶するか降参するまで戦闘を行なう。それに対し、瑛嘎達の各チームメイトのメンバー、ここでは空洞側の黒神めだか達と瑛嘎側の蛾ケ丸となる。ちなみに、瑛嘎陣営には蛾ケ丸しかやって来ていない。

そのチームメイトは、相手対戦者に戦闘中の禁止行為を設定出来るのだ。つまり、戦闘中にそれを行なえば負けとなる条件を否応なく相手に課すことが出来る。

「なるほど」

「名付けて【羊毛奪取】！ 己の武器を相手に奪われる対戦です」

瑛嘎はそのルールに対してゆらりと笑い、空洞は無表情で応えた。

「ではまず挑戦者側の蝶ケ崎蛾ケ丸様。日之影空洞様への禁止行為を設定してください」

長者原はそう言って、蛾ケ丸に問いかける。すると、蛾ケ丸は少し思案した後空洞を見た。見た所、彼は武器を持っている訳ではないし、見た目的にインファイトの近接格闘タイプだ。

だから、蛾ケ丸は言った。

「では、近接格闘を禁止します」
と

「なっ……!?!」

「そんなのありかよ!?!」

蛾ヶ丸の言葉に、生徒会陣営はざわめき立つ。だが、それを空洞が手前に出すことで治めた。

「そういうルールだ。大体、過負荷^{マイナス}つてのはそういう奴らだろ?」

「……承認しました。それでは、生徒会側の黒神めだか様方。泉ヶ仙瑛嗶様への禁止行為を設定してください」

長者原はそう言つて、黒神めだか達に瑛嗶への禁止行為の設定を促した。それに対し、めだか達は思案する。近接格闘を禁じられた空洞に対し、瑛嗶は近づくだけで勝利することが出来る。故に、めだか達の采配で勝敗が大きく変化する。

「……どうするんだ、めだかちゃん」

「禁止行為というのは、本来簡条書きに出来る様に出来ている。故に、簡条書きに出来るのならそれは適用されるという事だ」

「何を言つてんだ……?」

「つまり、言い方を変えればこんな風に条件づける事が出来る。おい、長者原二年生。決まったぞ」

「なんででしょう?」

黒神めだかは長者原と瑛喰を交互に見た後、凜と胸を張って言った。

「私が瑛喰さんに課す条件は『スキルの使用及び近接戦闘の禁止』だ」

これによって、瑛喰は実質二つの条件を設定された事になる。まずはスキルが使えなくなつた。次に空洞同様近接格闘が出来なくなつた。経理屈にも程がある言い方だが、この言い方なら確かに適用される。

「……承認しました。それでは、確認いたします」

副会長戦、泉ヶ仙瑛喰対日之影空洞。対戦カードは未、フィールドは校庭。ルールとして、気絶か降参するまで戦うこと。それに対して戦闘中の禁止行為の設定がされる。

日之影空洞の禁止行為は『近接戦闘』

泉ヶ仙瑛喰の禁止行為は『スキルの使用及び近接戦闘』

「それでは、副会長戦を始めます！」

その言葉と同時に、瑛喰と日之影空洞は同時に動いた。スキルの使用が禁止されている瑛喰は、元の身体能力で戦わなければならない。とはいえ、その速度やパワーは人外の域に達している。黒神めだかが黒神ファントムで光速移動したとしても余裕で反応するだろう。

「さつて、喧嘩は初めてか？」

「そうだな。学校入って二年ちよい……お前とは喧嘩した事無かつたな」

「じゃ、始めようぜ。喧嘩」

瑛暎と空洞はまず初めに近接戦闘の禁止という所からお互いに後方へ飛ぶことで距離を取った。

そして、瑛暎はその右足をぶらぶらと揺らしながら調子を確認する様にトントンと地面へつま先をぶつけた。空洞はその拳を揺らした後、腕を伸ばしながら構えた。

「遠距離戦闘つてのが喧嘩っぽくないけどな」

「それもまた、面白い」

瑛暎と空洞は、同時にその脚と拳を動かした。瑛暎の空を蹴る右足から生み出された衝撃は、空気を切り裂き空洞へと飛んで行く。そして空洞の拳もまた拳圧を飛ばして攻撃した。

「週刊少年ジャンプ大人気漫画、ONE PIECEの六式技、『嵐脚』」

瑛暎は楽しげに言う。

「楽しめよ。この喧嘩、俺の勝ち揺るがない」

いつものように、ゆらゆらと笑みを浮かべながら。

やあ、初めましてめだかちゃん。僕だよ

瑛嗶と空洞の戦いは、熾烈を極めていた。とは言っても、それは互角に戦っている訳では無かった。瑛嗶と空洞の戦いは、瑛嗶による一方的な攻撃だった。

瑛嗶の拳と蹴りは、遠距離からの攻撃にも使用出来、拳圧や蹴りによる衝撃は空洞の身体に容易に届き、傷付ける。空洞は不知火によって新たなスキル「光化静翔^{テイマソング}」を手に入れ、それにより光速移動を可能にしていたが、瑛嗶の攻撃はその速度を普通に上回った。

瑛嗶もスキルを使って身体を保護すれば光速で移動することが出来るだけの脚力を持っている故に、その速度は眼で追えるし、瑛嗶の戦闘によって培われた先読みは空洞の動きを一手も二手も読み切っていた。

その結果、空洞は動きを先読みされて攻撃を次々と当てられていた。

また、空洞の攻撃は出ない訳では無い。空洞もまた、光速で動く事によって拳圧を飛ばす事が出来るし、それを使って瑛嗶に何度か攻撃していた。

だが、瑛嗶にそれは全く効かなかった。まず打ち出される攻撃の数と質が違いすぎた。拳圧を飛ばして瑛嗶を攻撃すれば、同じ拳圧でソレは打ち消され、尚且つ瑛嗶の攻

撃は消えずに空洞へ迫るのだ。そして、瑛嘎の戦闘経験と能力は空洞のソレとは比べ物にならない程に高い。故に瑛嘎は空洞の攻撃に対し、後出しで対処することが出来る。それも空洞を劣勢に追い込む要素の一つだった。

これにより、空洞の身体にはいくつもの傷が出来ており、瑛嘎は無傷だった。過去、瑛嘎に戦闘を挑んだ猛者は少なくない。むしろ、瑛嘎の強さに惹かれて何度も何度も戦いを挑んだ者達は過去に数百数千という。戦闘の数だけで言えば数万数億と多いだろう。それでもなお、瑛嘎に傷を付けた者は一人もいない。そう、唯一人もいないのだ。

「そらっ」

「ぐう……!!」

瑛嘎の攻撃は空洞の身体を満遍無く叩く。攻撃は物理ではなく衝撃そのものを飛ばす方法だ。当たればその衝撃は身体全体に響き渡る。

また、瑛嘎の攻撃は空洞のやっているただ拳圧を飛ばす物では無い。培われた技なのだ。それが例え、漫画やアニメで様々なキャラが使った技だとしても。

『指銃・撥』

「ガッ……!!? くそっ!」

主にワンピースで使われる六式技を使う瑛嘎だが、それによって瑛嘎の攻撃は様々な武器による傷跡を再現していた。その証拠に銃で撃たれた傷や刃で斬られた傷が空洞

の身体にはいくつもあつた。

しかし、それでも空洞がまだ立って動いていられる理由は応援者ギヤラリーと不知火によつて得たスキルにあつた。

『日之影先輩!! 頑張れえええええ!!』

日之影空洞が【知られざる英雄ミスターアンノウン】を失つた事によつて、生徒達の記憶に空洞の存在が思い出された事で、空洞への感謝と敬意を思い出し、全校生徒が応援に駆け付けたのだ。日之影空洞はその事実が嬉しかった。それだけで立ち上がることが出来た。瑛嗶と
いう親友を前に、まだ空洞は駆けまわることが出来た。

「愛されてるなあ空洞君」

「ああ、幸せ者だよ。俺は」

瑛嗶は笑い、空洞も笑つた。瑛嗶は別に応援もいないし、味方といえば蝶ヶ崎蛾ヶ丸くらいしかない。だが、この展開を面白いと思つていた。

空洞の為に全校生徒が集まって応援している。それによつて空洞はけして軽くない傷を負っているにも関わらず自分に向かつて来ている。とても面白いと感じた。何故なら、そんな奴らがこぞつて目の前にいるからだ。仲間の為に駆けつける。そんな漫画

みたいな展開を作りあげた奴らが目の前にいるのだ。

面白くない訳が無い。実際、漫画の様な展開なのだから。

「それでも、俺の勝ち揺るがない」

瑛嗶はスキルを使えない。故に、ある展開を作りあげた。空洞への勝利条件はおおよそ三つ。一つは気絶させること、一つは降参させること、そして最後は空洞に近接戦闘を行なわせること。

つまり、瑛嗶は空洞自身から瑛嗶に近づいてくるといふ展開を作る事にしたのだ。

「!？」

「おいおい、お前は近接戦闘は禁止されてる筈だろ？」

光速故に、多くの人から空洞の動きは目視することが出来ない。だが逆に瑛嗶の動きは目視することが出来るのだ。

瑛嗶はその事を利用した。自身の先読みによって、空洞の迫ってくる場所へと移動し空洞がその場所を避ける、この繰り返しをしながら空洞を追いこんで行き、最後に蹴りで地面を攻撃した。それによって巻き上げられた砂煙は二人の姿を隠し、空洞は瑛嗶の姿を見失った。

ここで、空洞が気配で相手の位置を察せる程に戦闘能力が高ければ、まだやりようはあった。だが、空洞の実力は一人で軍隊を相手に出来るとは言ってもそれは力押しでし

かない。つまり、空洞の戦闘能力はそう高くない。ただ純粹に強いだけなのだ。

つまり、空洞は瑛叟の姿を見失った時点で瑛叟に近づいているのに気付く事が出来なかった。

「ほら」

「!？」

「——俺の勝ちだ」

空洞は瑛叟の言葉に過去の経験から咄嗟に拳を突き出してしまった。だが、瑛叟はそれを自身の掌でパシンと乾いた音を立てて受け止めた。

そして、砂煙が晴れた時……その場にいた全員の眼に入ってきたのは、瑛叟の掌に拳を当てている空洞の姿。どう見ても、空洞が瑛叟の懐に入って拳を振るった後の様にか見えなかった。

「……………っ！ ……はあ、やっぱ勝てないか」

「当たり前だろ。最初に言ったぜ？ 俺の勝ち揺るがないって」

「それにしたって……一回も攻撃を……当てられないとは思わなかった、ぜ」

そう言った瞬間、空洞は音を立てて崩れ落ちた。瑛叟は気を失った空洞の身体を支えてその場に寝かせる。その光景を見た瞬間、観客からは空洞を讃える声上がり、長者原による瑛叟の勝利宣告が上がった。

「さて、このままじゃ死んじゃうし……健闘を讃えて回復位はするでしょう」

瑛噎はそう呟いて、時間を巻き戻すスキル【跡戻り】バックトラックを発動させた。空洞の身体は巻き戻し再生の様に傷を次々と消していき、失った血液を取り戻す。スキルの発動を終わらせた時には、空洞の身体は元通りになっていた。

「おめでとう空洞君。お前の英雄譚は皆が覚えてたぜ」

そして、治療を終えた瑛噎はそう言つて立ち上がる。ゆらりと笑つてめだか達を見る瑛噎だが、その視線はめだか達を見ていなかった。

「これで、生徒会選挙は共に2勝2敗。そして、残る対戦は会長戦」

「それが何か……?」

「お前ら気になつて無いのか? この時になるまで、球磨川禊が対戦に来なかつた事が」
「!?!」

瑛噎の言葉に、めだかを含む生徒会チーム全員が驚愕の表情を浮かべる。確かに、全員疑問には思つていたので。球磨川禊というこの戦いの原因が、今までの対戦で庶務戦以外顔を出さなかつた事。

「過負荷マイナスは負け組の集団だ。そして球磨川はその負け組の筆頭。つまり、球磨川禊はあらゆる戦いで勝つ事は出来ないという事になる。だが、球磨川禊がたつたの一度も勝てないと誰が決めたんだ?」

「……」

「球磨川禊は、黒神めだかに勝つぞ。それが、俺が決めた球磨川禊の結末だ」

そう言った瞬間、観客の波がモーゼの如く二つに割れた。その先にいるのは瑛叟に對峙する様に立つ、学ラン姿の男。名前は球磨川禊。その表情からは、黒神めだかに對する敵意と勝利に對する執念が滲み出していた。

身体の至る所はポロポロになり、傷だらけの学ランから見える四肢には包帯が巻かれていた。顔にはガーゼや絆創膏を貼っている。その佇まいからは、凄まじい修行の跡が見えた。

「やあ、初めましてめだかちゃん。僕だよ」

「球磨川……やつとお前と心から話せた気がするよ」

めだかはそんな球磨川を見て、笑みを漏らした。球磨川はそんなめだかを見て、笑った。

「今日こそ、今日こそ、今日こそは君に勝つ。負けない、何があつても全て捻じ伏せて泥臭く勝利をもぎ取ってみせる」

「ああ、それでいい。私は全力でお前に応えよう！」

そうして、球磨川禊と黒神めだかは對峙する。瑛叟は球磨川の肩をポンと叩いて下がる。それだけで球磨川は瑛叟の応援を受け取った。自身の本音を無理矢理表に出させ

た瑛嘎と、勝つ為に全力を尽くして球磨川を修行してくれた安心院なじみに感謝を込めて、心の中で頭を下げた。

「それじゃ始めようか。僕と君の本気の勝負を！」

球磨川禊の言葉は、副会長戦に続いて会長戦を行う引き金となった。

「『うん』『精々頑張るとするよ』」

……

「『デメリット?』」

「そう。コレ言つとかないと後で後悔するだろうし」

庶務戦が終わつて会長戦が始まるまで、球磨川禊の修行が行なわれた。この会話はその一番最初の物。安心院なじみは球磨川禊に修行をするに当たつての副作用の様なデメリットがある事を最初に告げた。

「『それつて一体なんなのさ』」

「ああ。良いかい球磨川君。君達過負荷マイナスは敗北の星の下に生まれていると言つても過言ではない位に敗北という物に愛されちゃつてる。だから、君が勝つ事は一匹の蟻が全人類と戦つて勝利を得る位に難しい。」

『……』

安心院なじみの言葉に球磨川禊は黙つて次の言葉を待った。安心院なじみはそんな様子を見て、更に続ける。

「じゃあどうやって勝つのか。その為の方法が瑛叟の考えた瑛叟式修行法だよ。でも、

この方法は諸刃の剣だね。考案者である瑛叟が実行しないとある副作用というか、代償が生じるんだ。

それは……【今後の人生による勝利】

『……!』『それはつまり……』

「そう。今回に限り、黒神めだかという絶対的な勝者に絶対的敗者である球磨川禊が勝利するための代償は……球磨川禊のこれからの人生における全ての勝利だ。君は黒神めだかに勝ったら、それ以降の勝負は全て負ける事になる。どんなに有利に状況でも、どんなに不利な状況でも、例えば僕という人外が味方をしたとしても、君の勝負は全て君の敗北で終結する」

その言葉を聞いて、球磨川禊は顔を俯かせ、黙った。安心院なじみからは表情は見えない。だが、何かを考えているようだった。

「……それでも、君はこの戦いで黒神めだかに勝ちたいかい？ 今後あるかもしれない勝利を全て投げ打って、おそらく君の人生の中で一番勝算が高いであろうこの勝負に勝ちたいかい？」

安心院なじみは、そう言って球磨川禊の決意を聞く。別に、今回勝たなくても挑み続けられればいつかは勝てるかもしれない。修行自体は行なわなくても別にいいし、安心院なじみ自体は球磨川禊が今のまま挑んでも良いと思っっている。

「——はあ……」

「？」

「決めたよ、安心院さん。僕は……勝ちたい。今後一切、勝てなくてもいいから！　僕を
めだかちゃんに勝たせて欲しい！」

「——良い答えだ」

これが、球磨川禊の選んだ答え。この勝負は確実に勝てるという物じゃない。瑛噺と
なじみという怪物が味方した事によつて元々0だった勝算が大幅に上がった勝負なだ
けだ。数値にすれば、4：6で勝率はめだかの方がまだ高い。

相手は敗北知らずの絶対勝者、黒神めだか。勝利知らずの人類最弱、球磨川禊がそん
な数字だけの結論だけで勝つには難しい以上に不可能と言つても良い相手なのだ。

それでも、球磨川はこの勝負に掛けた。おそらく、この勝負に勝てないようならこの
先いくら頑張つても勝つ事は無いだろう。何故なら、この勝負が過去未来現在において
尤も勝算が高く、黒神めだかに勝つことが出来るであろう勝負だからだ。

「それじゃ始めよう。瑛噺式対黒神めだか戦対策を」

その言葉に対し、球磨川禊は括弧付けずにこう返した。

「望むところだ」

……

◇
◇
◇

そして現在。対峙する球磨川禊と黒神めだかは共に瞳にはきらきらとした闘志が浮かび、表情は笑顔を浮かべていた。

既に対戦カードとルール説明は済んでいる。球磨川禊の選んだカードは『人』。このカードは対戦フィールドとルールを現生徒会長である黒神めだが決めて良いという唯一のワイルドカードだった。そのカードの効果に球磨川は不満を持たなかったし、黒神めだかも自分に有利なルールを決めなかった。

対戦ルールは『人間比べ』。箱庭学園を対戦場に武器あり卑怯あり何でもありのルール無用。一対一で、ただ相手に負けを認めさせれば勝利。という物。

「……なんだいそのルールは。上から見下してるのか、めだかちゃん」
球磨川禊はそう言って黒神めだかに螺子を数本投げ付けた。

「……見下してなどいない。私は嬉しいのだ。貴様とこうして本気の勝負が出来る事が。球磨川、私はこの日を体感時間で3億年は待ったぞ！」

だが、黒神めだかはその螺子を全て受け止めた。そして、口で受け止めた螺子を噛み砕いて笑顔でそう言った。

「……それなら良いけど。これなら心おきなく使えそうだね……僕の禁断はじまりの過負荷マイナス——

——【却本作り】を！」

球磨川禊はその笑顔に対し、マイナス螺子を取り出してそう言った。

「——それでは、生徒会戦挙。会長戦をはじめ——ぐっ!？」

長者原がそう言おうとした瞬間、球磨川禊が螺子で長者原を捻じ伏せた。その行為に、黒神めだかを含む全員が驚愕した。唯一人、瑛噎だけは何時もの様にゆらゆらと楽しげに笑っていた。

「そんな勝負はもうどうでもいいんだよ。生徒会なんて、めだかちゃん達がやればいい。僕は君に勝つためだけに、この学校に、君達の前にやって来たんだから」

挑戦者として、生徒会なんてのはどうでもいい。球磨川禊は生徒会戦挙での勝利を黒神めだかに譲った。本質的な所はそこには無いからだ。

球磨川禊の求める勝負は、黒神めだかとの本気の勝負だ。

「さあめだかちゃん。これは試合じゃない。君と僕だけの何にも縛られない本気の勝負だ。この勝負で僕は君に勝つ」

「良いだろう球磨川。元より試合形式での勝負など、貴様や私の望むところでは無い。

今ここで、私が貴様を改心させてやろう！」

その言葉と同時に、黒神めだかと球磨川禊は動きだす。黒神めだかは球磨川へと駆けだし、球磨川禊はその場を動かなかった。

そして始まる。瑛噺式修行術の成果が――



球磨川 side

―― 良いかい球磨川君。まず、めだかちゃんとの戦いの初手が大事だ。瑛噺からの情報を基に、まず初手から主導権を握るんだ。

安心院さんが言っていた。めだかちゃんとの勝負の対策その1。それは――

―― 一番最初から【却本作り】を叩きこめ！

「はあっ!!」

「っ!？」

一番最初から【却本作り】^{ブックメーカー}を叩き込む事。でも、めだかちゃんはそれだけじゃ倒れない。

【却本作り】^{ブックメーカー}はマイナス螺子を差した相手を何もかもが僕と同じにするスキル。最

弱の僕と同じにすることで、圧倒的な敗北感を与える最悪のスキルだ。

でも、安心院さんは僕の事を最弱と言っても弱くは無いと言った。それはつまり、僕と同じになったとしても、黒神めだかは倒れないという事に他ならない。

「……これは……!」

【却本作り】。相手^{ブックメーカー}を僕と同じにするスキルだよ」

髪の毛が真っ白になったためだかちゃんはやはり心が折れなかった。内心では大きな敗北感が襲って来た筈だけど、それでも彼女の心は強かった。

「なるほど……確かに、強力なスキルだ。でも、球磨川。これで私が負けを認めると思っているのか?」

「思っていないよ」

僕はそう言っ^{ブックメーカー}て次の攻撃へと手を移す。安心院さんの黒神めだか対策その2、【却本作り】を決めた後の第二手。

——そして、スキルを上手く発動させた後だ。めだかちゃんの主な武器はその肉体で行なう近接格闘。そこを衝く。

「次だ」

——君の武器は螺子だろう? どうせ、螺子は拳で全部砕かれるんだ。ならどうするか、その答えは簡単だ。君も拳を使って戦えば良い。

「っ!？」

「はあああああ!!」

安心院さんの言った通り、螺子は使わない。使っても無駄だから。それに、今は僕とめだかちやんの身体能力は同じ。殴りあいでも劣る事は無い。

「このツ！」

「ぐっ……」

負けじと殴り返してくるめだかちやんだけど、その威力は中学時代の彼女の拳の何十分の一にも劣る。大したダメージにはならない。

でも、殴り続けるしか出来ない。何故なら、僕が安心院さんに教わった対策はこの二つだけだから。安心院さんはこの殴りあいでも勝てるように身体能力の強化ではなく、戦い方を教えてくれた。後は瑛嗶さんがどうにかしてくれると言って。

「ふっ……はあ!!」

「ガッ……」

段々僕の拳がヒットし、めだかちやんの攻撃が当たらなくなってきた。教えてくれた戦い方はちゃんと成果を出しているようだ。それに、今はめだかちやんの異常性も効果を出さない。安心院さんの言っていた見た技術をそのまま極めて会得する【完成^{ジエンド}】も使えない。

「ぐっ!?!」

でも、めだかちゃんの攻撃はこれまで修めてきた武道の技術が詰まっている。めだかちゃんの家柄や性格から、剣道や柔道なんかの武術や護身術を満遍無く修めてきたのだ。付焼き刃で会得した僕の戦い方で対抗できる程甘くはない。

その証拠に、僕の拳はヒットしつつも受け流され始めた。彼女の拳はなんとか躲している物の、このままじゃジリ貧だ。

「はあ……はあ……」

「はっ……はっ……」

一旦距離を取ってみた物の、正直勝算は薄い。彼女の武術に対抗すべく体感時間で2年ほどずっと安心院さんから戦い方を学んだけど、それでも彼女の方がまだ上手のようだ。

どうするかな……。

「……………」

そこではたと気付いた。瑛嗶さんがどうにかしてくれるとは言ってたけど、この勝負に直接手を加えてくる事は無い筈。だとしたら、瑛嗶さんの取る行動は……持ち前のスキルを使った何か。それもきつとめだかちゃんへの攻撃や僕の援護ではない。

となると瑛嗶さんの発動するスキルの効果は……『過負荷の敗北性の除去』か『異常

の勝利性の除去』、またはそのどちらか、かな？

異常ほど勝てる訳じゃ無く、過負荷ほど負ける訳じゃない。所謂普通の普通ノーマルと同じ様に、勝ったり負けたりする五分五分の勝負。

「なら、僕が負ける可能性は5割」

「球磨川ア！」

それが分かれば、なおさら負けるわけにはいかない。ここまでお膳立てしてくれた二人が僕の勝利を信じてくれてるんだ。なら僕は、自分の為にもあの二人の為にも……絶対に勝つ！

「おおおおお!!!」

「がふっ!？」

僕の蹴りがめだかちゃんのおなかに当たり、めだかちゃんが吹き飛ぶ。

「はああああ!!!」

此処で畳みかける。吹き飛ぶめだかちゃんを追って、体勢が崩れている内に拳を更につつける。ぶつけてぶつけてぶつけた。

「ぐっ! がっ!」

「はあ!!!」

転がるめだかちゃんを蹴って更に吹き飛ばした。

「はあ……はあ……」

「ぐ……！」

めだかちゃんは膝を着いて、見上げるようにこちらを見ていた。このままいけば、勝てる。

「僕は、君に勝つ。負けるわけには……行かないんだ。たとえ僕が人類最弱だとしても」
「お前は弱くは無い……！ 過負荷の誇りを持ち、仲間を大事にする……そんなお前が弱い筈が無い！」

僕はその言葉を聞いて、その通りだと思った。事実、僕は過負荷として彼女の挑んでいるが実際はもうめだかちゃんの言う改心はしていると思う。昔とは考え方も変わったし、めだかちゃんの事は大好きだ。

多分、瑛嗶さんのせいだろうけどね。

そう考えていると、僕とめだかちゃん以外の人がぞろぞろとめだかちゃんの後方にある校舎屋上に集まっているのが見えた。

『負けんな黒神いいい!! お前を倒すのはこの俺だああああ!!』

その応援は、めだかちゃんの敵の発現。その言葉からは、彼らがめだかちゃんの敵で

あることが分かった。きつと、僕の様には彼女に挑んだ結果改心させられたんだろう。

「あれは、君の敵かい？ めだかちゃん」

「……ああ、全く……これでは負けるわけにはいかないな」

「……いいね、あんな敵が応援してくれるなんて。羨ましいよ」

僕には応援してくれる味方はいても、敵はいない。まして、今は僕の応援をしてくれる人なんて――

「何を諦めてんだ。球磨川禊」

その言葉が聞こえて、僕はバツと振り向いた。僕の後ろにいたのは、たった一人。めだかちゃんの後ろには大勢の敵と、善吉ちゃん達生徒会の仲間がいる。でも、僕の後ろにいたのはその全員に匹敵する程の人。

「瑛嗶……さん」

「お前の応援なら俺がしてやる。お前の味方なら俺がしてやる。めだかちゃんの応援をしている馬鹿達の応援に対して、お前の応援をしているのは俺だ……まだ足りないか？」

「……いや、十分だね。瑛嗶さん一人に応援されるなら、この世の全ての間人がめだかちゃんを応援しても釣り合わない位だ」

そうだった。僕には応援してくれる人がいる。それも、この世界できつと勝てる人はいないだろう無敵の人間が。僕の勝利を一番最初に現実にすると言いつつ放つた男が、最後の最後に僕の戦いを見守ってくれているんだ。これほど幸せな事は無い。

「決着をつけようか。めだかちゃん」

「ああ……そうだな。球磨川」

実をいえば、身体能力は強化してないから拳はボロボロだし、もう身体も動かないほど体力も残って無い。腕を上げるのも一苦労だ。対して、めだかちゃんも僕の与えたダメージで身体は動かないだろう。きつと、これが最後の一撃。

「愛してるぜ、めだかちゃん」

「私もだ、球磨川」

「それは人を、だろ?」

そう言って、僕とめだかちゃんは動きだす。心の勝負で言えば、僕はきつとめだかちゃんに負けたんだろう。だって、僕はめだかちゃんの事が好きだし、こんなにも幸せな気持ちなんだから。

でも、僕はこの勝負で負けるわけにはいかない。だって、僕の背中に勝利を信じてくれている人がいる。僕の勝ちたいと思う気持ちを汲んで、支えてくれた人がいるのだから。

「はあああああ!!!」

「おおおおお!!!」

お互いに咆哮を上げて、拳を振りかぶる。そして、全力で振り抜いた。

「ぐっ……………」

「がっ……………」

お互いの拳は、お互いの顔を捉えた。めだかちゃんの拳に、目の前がチカチカと点滅する。足に力が入らない。気が付けば、膝を着いて僕はめだかちゃんの足元に倒れていた。

「……………ぐっ……………」

立ち上がろうと腕に力を込める。でも、少し浮かぶだけで立ち上がれない。

「負けるか……………まだ、負けてない……………」

「……………球磨川。お前は強い。私はお前ほど勝利に執念を持った男を知らない」

めだかちゃんが何か言っている。でも、聞いている暇は無い……………立たなきや……………!

「私の負けだ。球磨川」

「!？」

めだかちゃん負けを認めた。その事実にも、僕だけじゃなく生徒会チームや観客の全員が驚いている。

「何……言ってるんだ……同情のつもりなら、僕は君を許さない……」

「同情では無い。私は素直に貴様に感服しているのだ。私を応援してくれた奴らには悪いが、私は貴様を改心させる事は出来ても、負けを認めさせる事は出来ないだろう」

……なるほど。なんだ、僕が改心している事はバレてたのか。

「……そっか」

「ああ。もう一度言うぞ、私の負けだ球磨川」

「なら、僕の勝ちだよ……めだかちゃん。そして、君の勝ちだ、めだかちゃん」

「……何故だ？」

「僕は改心しちやつたからね。この勝負は僕の勝ちでもあり、君の勝ちでもあるんだ」

そう。僕は彼女を敗北させることが出来て、彼女は僕を改心させることが出来た。お互いの目的をお互いが果たしてしまった結果だ。故に、僕の勝ちでありめだかちゃんの勝ち。また僕の負けであり、めだかちゃんの負けだ。

「そうか……貴様がそれで良いなら、それでいい」

「ねえめだかちゃん……僕は勝ったけど……あそこにいる人達みたいに、君のピンチに駆けつけても良いかな？」

「ああ。貴様が私の窮地に助けてくれるのなら、心強いな」

そう言うのと、めだかちゃんは副会長の腕章を僕に差し出してきた。

「ところで球磨川。貴様、私の生徒会の副会長をやらないか？」

「……僕は箱庭学園を去らなきゃいけないんじゃないの？」

「貴様は勝つたのだろうか？　なら、出ていく理由は無い」

「……ははは、じゃあその役職引き受けるよ。でも、安心しないでねめだかちゃん。僕はあくまで過負荷マイナスだから、油断してたら君の寝首をかくぜ」

「うむ。それが貴様の仕事だ」

そう言うのと、めだかちゃんは扇子を広げて笑った。

「—— やったね。球磨川君」

「瑛嗶さん」

「やれば出来るじゃないか」

「あはは、瑛嗶さんのおかげだよ」

「言つただろ？　俺はお前を勝たせるって」

その代償に今後の勝利は無くなっちゃったけどね。それでも、僕は満足だ。

「まあぶっちゃけると俺がお前の修行付けてたら一瞬で勝っちゃってただけどね」
「え」

「でもそれじゃ満足出来ないだろ？　だからなじみに投げたんだよ。勝ったからいいよね」

「瑛嗶さん……いつも通り、むちやくちやだなあ」

思わず苦笑する。笑うと身体が傷むけど、その痛みは今は心地良い。初めて勝ったけど、勝利って凄く嬉しい物だなあ。

「ソレが俺だぜ。今回の戦いは中々に、面白かったよ。それじゃ、副会長さん。頑張れよ」

「『うん』『精々頑張るとするよ』」

僕は括弧付けて、そう返した。

ふふふ、なんだか今日は良い日になりそうだなあ

生徒会戦争が終わり、球磨川禊と付いてきた過負荷勢の生徒を無事箱庭学園に引き入れる手続きも終わり、箱庭学園には平穩が訪れていた。

また、生徒会には球磨川禊という副会長が就任し、絶対揃わないと言われていた生徒会が揃っていた。そして、そんな球磨川禊は勝負の後志布志や蝶ヶ崎といった過負荷マイナスのメンバーに勝った報告と改心したという事実を告げた。志布志達から何かしらの非難があると思っていたが、彼女達は球磨川に対して笑ってそうかと言い、自分達も改心出来ると真面目に学園に通い始めた。

そして、現在はほぼ全生徒が登校し終えて授業を受けている最中である。そんな中、球磨川禊は副会長の腕章を着けてジャンプを読みながら登校していた。

『うーん』『BLEACHは零番隊とか意味不明な奴ら出て来たし』『展開が読めないなあ』『つ……まだ傷が痛むなあ』

彼はジャンプを閉じて感想を口にする。そして未だ治っていないダメージに顔を歪めた。安心院なじみは黒神めだか戦の為に「却本作り」ブックメーカーを球磨川に返したのだが、代わりに「大嘘憑き」オールドフィクションを失っていた。故に、傷を無かったことにする事が出来ない。

「あ、球磨川君。おはよー」

「『あれ?』『瑛唄さん』『なんでこんな時間に登校してるのさ』」

「それはお前にも言えるだろ。俺は13組だから行っても永久自習なんだよ」

「『どうせ寝坊したとかでしょ?』」

「お前じゃねえんだからそんなわけあるか。寝坊したらそのまま寝るわ」

球磨川の前に歩いて来たのは泉ヶ仙瑛唄。最近では瑛唄も箱庭学園の制服を着物風に改造した物を着る様になっている。見た目的には普段の着物と大差ない。デザインや色が少し変化したくらいだ。

「あ、そうだ。球磨川君」

「『何かな?』」

「一回死んでくれ」

瑛唄はそう言つて、球磨川禊の顔をぐしゃりと潰した。溢れ出る血液が彼の学ランを赤黒く染めて行き、頭を失つた肉体はどちゃつと倒れた。

「……さて、と。なじみの封印も解けたし、そろそろなじみが動きだすだろうなあ……完全な人間作り、か。出来ない事にも程があるな」

そう呟くと、球磨川禊がゆつくりと起き上がった。顔は元に戻っており、溢れていた血液も無くなっていた。まるで、無かったことになったかの様に。

「『これは……』『大嘘憑き』?』」
オールフィクション

「そうだ。お前が持ってたのはなじみのスキルの改造だっただろ?」
ハンドレットガントレット
「手のひら躰し」だけ?」

「『うん』」

「今渡したのはそれじゃなくて、俺が作った現実を虚構にするスキル『大嘘憑き』だよ。
真正正銘、出来た時から『大嘘憑き』だ」
オールフィクション

「瑛夏のスキルを創るスキル『嗜考品』は元々、思考したスキルを創るスキルだ。更に
言えば、そのスキルの全てが完成した至高品。さすがに瑛夏の嗜好は入っているが。」
プレフエレンス

「瑛夏の嗜好おもしろいを含んだ思考おもいつきから生まれる至高品スキル。その原初のスキルが『嗜考品』だ。
『大嘘憑き』位容易に創りあげる事が出来る。」

「『でもなんでまた?』」

「一応持ってた方が良いと思って。なじみがそろそろ面白い事をし始めるだろうし」
「『あ』『やつぱり安心院さん来るんだ?』」

「当たり前だろ。なじみだぜ?」

「瑛夏はそう言って歩き出す。球磨川もそれに並ぶ様に歩き出した。生徒会副会長で
ある球磨川禊と無敵である泉ヶ仙瑛夏が学ランと改造制服で歩く様は、きつと普通の登
校時であれば確実に風紀委員に止められたであろう。」

「そうだ、今日の帰りマクドナルドでも行かぬ？　なんだか今日はマクドナルドが食べたい気分なんだよね」

『うん』『いいよ』『一応生徒会副会長だから』『生徒会に寄ってからだけどね』

瑛嗶と球磨川はそう言って校舎の中に入って行った。



安心院なじみはその衣装を瑛嗶との生活でもおなじみの巫女服へと変えて、箱庭学園へ向かう準備をしていた。球磨川禊の封印も解け、自身が少し前から始めていた最後の『出来ない』を達成する為に。

「さて……行こうかな」

安心院なじみの脳内に浮かぶのは瑛嗶の姿。今回の『出来ない』を含めてこれまでの『出来ない』を手伝ってくれた男だ。今回も何かしら手を出してくるかもしれない。まあなじみにとってはそれでもいいのだが。

「……瑛嗶」

なんとなく、ぽつりと口にする瑛嗶の名前。それだけでなじみの表情は緩み、胸に温かい何かで埋まった。鏡を見れば分かっただろうが、この時安心院なじみの頬には確か

に赤みがさしていた。

現代の一般女子が彼女の様子を見ていたら、恋をしていると思っただろう。胸に溢れた温かい何か、とは恋愛感情、好きという想いだと思っただろう。

安心院なじみはこの感情をどう表現して良いのか知らない。恋や恋愛といった物の存在は知っているし、どういう物かも分かっているつもりではあるが、そういう概念がまだ無い頃からこの感情を抱き続けてきたのだ。感覚がボケてどういう物か分かっていないのだ。

「ふふふ、なんだか今日は良い日になりそうだなあ」

実は毎日の様に言っているのだが、そんな事にも気付かない安心院なじみはやはり恋する乙女なのだった。

俺は古賀じやねえ、雲仙冥利だ！

番外編

球磨川禊の生徒会戦拳が行なわれていた最中の事。瑛嗶が志布志と蝶ヶ崎、不知火の三名の中身をスキルで入れ替えた事があった。その時の一部始終を今回はお伝えしよう。

瑛嗶は心を入れ替えるスキルで不知火と志布志と蝶ヶ崎を入れ替えていた。具体的には、不知火半袖の身体には志布志の精神が、志布志飛沫の身体には蝶ヶ崎の精神が、そして蝶ヶ崎蛾ヶ丸の身体には不知火半袖の精神が入っていた。

「なんだこりゃ」

「……」

「あひゃひゃ☆」

不知火は素つ頓狂な表情で自身の身体を見渡して驚愕し、志布志はいきなり無表情で黙り、蝶ヶ崎はおかしそうにケラケラ笑った。間違ひ無く精神が入れ替わっている。

「これで俺が精神を戻せないって言ったら……どうする?」

「マジですか?」

「嘘だよ半袖ちゃん」

蝶ヶ崎が瑛叟にそう言うが、瑛叟はそう返した。あくまで例えばの話だと。

「てか戻してくれよ。アタシ達が入れ替わっても対して面白くないだろ」

「ああ、確かにそうだよね。全然面白くない」

球磨川禊がこの場にはない限り、彼女達が入れ替わっていようと驚かせられる人間がない訳だ。それに、このメンツだとあまり知り合いに驚く人間もない。何せ過負荷が三人集まっているのだから。

「じゃ戻すわ」

そう言うのと、瑛叟のスキルが解除され、全員の精神が元に戻った。だが、この時瑛叟の口元がゆらりと吊りあがっていた。それに気付いた者はこの場には一人たりともいなかった。

だが、その笑みの本当の意味はこの学園の中ですぐに知れる事になる。心を入れ替えるスキルは、この3人だけに効果を及ぼした訳では無かったのだ。

「それじゃ俺はちよつと出かけてくる。またね」

瑛嗶はそう言つて、教室を出る。その行先は、自身の齎したスキルの影響である心の入れ替え現象を見に行く為の場所。まあ、箱庭学園を歩くだけだが。

瑛嗶のスキルの影響は箱庭学園全域に行き渡っている。心が入れ替わっている物もいれば、いない者もいるだろう。さらにこのスキルの面白い所は、入れ替わった相手にスキルが備わっていた場合、それを使うことが出来ると言う事だ。例えるなら、人吉善吉が高千穂仕種の身体に入った場合、人吉善吉は高千穂仕種の反射神経を使うことが出来るのだ。

そんな事が起きたら、面白いと瑛嗶は考えたのだ。

「さて、どうなるかな」

そう呟きつつ、瑛嗶はゆらりと笑つた。



まず、今回瑛嗶のスキルの被害に遭つたのは、雲仙冥利、太刀洗斬子、そして古賀いたみの三名。肉体と精神の場所としては、雲仙冥利の身体に太刀洗斬子の精神が入り、太刀洗斬子の身体に古賀いたみの精神が入り、古賀いたみの身体に雲仙冥利の精神が入

る事になる。

その結果、怠け者の雲仙冥利、めちやくちや元氣ハツラツな太刀洗斬子、そしてクソ生意気な古賀いたみが出来上がった。

それじゃあまずは怠け者の雲仙冥利から見えていこう。

「zzz……」

「あの一、雲仙委員長なんで寝てるんですか?」

「分からないわ。なんでかさつきからこうなのよ」

太刀洗斬子が雲仙冥利の身体に入ってからという物、雲仙冥利はグースカ寝てばかりいた。周囲の風紀委員はそんな彼の姿に困惑していた。鬼瀬針音もその一人であった。

「委員長、起きてくださいよー」

何とか起こそうとするが、雲仙冥利は起きない。むしろより一層眠りを深くしていた。

「むう……」

「zzz……zzz……」

雲仙冥利はそれ以降、風紀委員達が起こすのを諦める3時間後まで、ついで起きる事は無かった。



この時、別の場所では。

「な、なんだこりゃああ!!?」

古賀いたみがわなわなした様子で驚愕していた。更に言えば、現在雲仙冥利の入った古賀いたみの身体は故障中、雲仙冥利はその故障による痛みが走った。

「何が起こつてやがる……? これは一体何だ?」

焦りから、状況判断が出来ない雲仙冥利。とりあえず自身の身体を触ったり見たりしてみると、どうやら自身の身体が古賀いたみになっていることが分かった。何故こうなっているのかも分からないが、とにかく自分の身体を取り戻すべく雲仙冥利は歩き出した、が

「な、なんだこれ……うまく動けねえ……!」

元々の身体とは大きさも筋力も違う身体だ。動かしにくいに決まっている。しかも、今古賀いたみの身体は故障中。より一層動かすににくいだろう。

「こんの……!」

「く〜♪……!?! オイオイ、古賀ちゃん。無理して動かなくなって言ってるんだろー? 何処行こうってんだ」

そこに現れたのは、名瀬天歌。黒神くじらというめだかの姉でもある人物だが、何を隠そう彼女は古賀いたみの大親友である。また、古賀いたみの異常である改造人間という物を与えた人物。簡単にいえば古賀いたみの身体を弄った人物だ。

そして、故障中の古賀いたみの身体を直している人物でもある。

「名瀬……! オイ、なんだこれ! お前の仕事か?」

「あん? 何言ってるんだよ古賀ちゃん。寝ぼけてんのか?」

「俺は古賀じゃねえ、雲仙冥利だ!」

「……その様子じゃ嘘じゃねえみてーだな。本当に雲仙冥利なのか?」

「ああ」

人一倍頭の良い名瀬天歌は古賀の様子がおかしい事に気付き、雲仙冥利である事を信じた。

「どうなってんだこりゃ……精神が入れ替わった、ってことなのか?」

「そいつはわからねーが、とりあえず古賀ちゃんの精神がアンタの身体に入ってるかどうかを確かめた方が良いだろ。アンタの身体に古賀ちゃんの精神が入ってるにしろ

入ってないにしろ、古賀ちゃんの居所を突き止めねえと」

「あ、ああ……そうだな」

そう言っつて、名瀬天歌と古賀いたみ、もとい雲仙冥利は古賀いたみの身体に入っつていた元の精神の持ち主、古賀いたみを探すべく、まずは雲仙冥利の身体の下へと向かったのだった。

番外2へ続く。

俺はお前じゃないし、お前は俺じゃない

——番外2

異変解決に動きだした雲仙冥利と名瀬天歌。雲仙冥利は古賀いたみの身体に段々と慣れてきたが、現在は以前の回復力が無くなっている故に、移動には名瀬の助力を必要としていた。

「くっそ……なんで俺がこんな」

「知るかよ。古賀ちゃんの身体だから仕方なく協力してっけど、正直原因は思い付かねえし。今来てる過負荷マイナスの連中の仕業か、瑛嗶先輩位しか……」

「……瑛嗶ってあの着物野郎か？」

「ああ」

名瀬は、瑛嗶の事を分析対象として見ている面もあった。その結果、瑛嗶が複数のスキルを持っている事を半ば確信していた。結局、どんなスキルをどれくらいの量持っているのかは分からなかったが、身体強化のスキル位は持っているのではないかと思っている。

「まあこいつは可能性低いだろ。あるとすればやつぱ過^{マイナス}負荷のほうじゃねえかな。まだ得体の知れねえ奴らだしよ」

「なるほど」

古賀いたみは納得の表情で頷いた。眉間にしわが寄っている所が普段の古賀とは少し印象を変えた物だったが、雲仙冥利が入っていることから仕方ないだろう。

「それにしても、こんなことが起きるとはなあ」

「そうだな……つと、ここが風紀委員室だ」

「じやまするぜー」

名瀬と古賀はそう言つて風紀委員室へ入る。すると、全員から視線があつまる。だが、二人の視線が向かうのはグースカと寝ている雲仙冥利。

「どうなつてんだこりゃ」

「古賀ちゃんが入つてたら寝てる、つてことはねえだろ」

「つてことは、俺の身体にはまた別の人間が入つてる?」

「心当たりはねえのか? いつも寝てる様な奴によ」

「……太刀洗しかいねえな」

古賀はそう言つて汗を流した。複雑な心境だろう。自身の身体の中に万年ニートの太刀洗斬子が入っているのだから。

そう考えていると、風紀委員室の扉が大きな音を立てて開いた。そして扉が開いた先にいたのは、息切れを起こしている太刀洗斬子。

「あー！ いたいた、名瀬ちゃん！ どうしよどうしよっ私こんな体になっちゃって!」

「あー……つまりこういう事か。風紀委員長が古賀ちゃんの身体に入って、古賀ちゃんが太刀洗つっー奴の中に入って、その太刀洗が風紀委員長の中に入ったと」

「みたいだな」

状況が把握出来た名瀬は、とりあえず入れ替わりの起きた三人の身体と精神がこの場に揃った事に安堵して嘆息した。だが、精神の入れ替えなんて、都城王土のスキルを使う位しか方法が思い付かない。どうした物かと考える。

「とりあえず様子を見てみようぜ。時間が経てば戻るかもしれないねえし、戻らなかつたら戻らなかつたで黒神めだかを尋ねれば良いだろ。幸いなことにアイツは都城先輩のスキルを【完成】^{ジエンド}で会得してるしよ」

「あ、ああ……そうだな」

その後、とりあえず名瀬と雲仙入り古賀は風紀委員達に状況の説明をして、しばらくそこにいる事にしたのだった。



「くくく……やっぱり、ランダムとはいえ面白いスキルだよねえ」

三人がこの状況に慌ただしくしている中で、瑛嗶は時計塔のてっぺんに座りつつ笑っていた。別の場所の映像を見ることが出来るスキル【進光景^{プレイバック}】を使って風紀委員室の光景を見ていた。このスキルは過去や未来関係無くあらゆる時系列の中のみたい場所の光景を見ることが出来るスキルだが、瑛嗶は基本現在進行形の映像しか見ないので、あまり使われない。

「さーて、じゃあ何時戻してあげようかなあ」

瑛嗶はそう言つて楽しげにゆらゆら笑う。

「全く、君は何時まで経つても変わらないんだから」

「なじみ。球磨川君はどうした？」

「今は休憩中だよ。球磨川君地面に倒れて動かなくなっちゃったから」

「そうかい」

なじみはそう言つて瑛嗶の隣に座つて瑛嗶の肩に頭を乗せた。傍から見ればちよつと羨ましい光景である。

「どうしたなじみ。いつになく沈んでるじゃないか」

「……ねえ瑛嗶。なんで君はそんなに楽しそうなんだい？ 僕と同じ、いやそれ以上に

人外で何でもできる君は、どうして僕とそんなに違うんだい？」

なじみの病に関わる疑問、未だなじみは『出来ない』を探している。だが、それ以上になじみは瑛叟が自分と同じ様に生きていない事が不思議でならなかったのだ。

「違うのは当たり前だろ。俺はお前じゃないし、お前は俺じゃない」

「……君は出来ない事が無いことが辛くないの？」

「辛い訳が無い。俺はこの現実を楽しんでるからね。漫画の中の世界だろうと現実だろうと、結局楽しめるかどうかは俺の匙加減次第だ。それに、なじみ……お前に出来ない事位俺の中じゃ幾らでもあるぞ」

「え？」

その言葉に、なじみは瑛叟の顔を覗き見る。瑛叟はなじみの方を見ずにあくまで楽しそうに笑っていた。

「俺が邪魔したらお前なんて何も出来ないさ。俺が全力出したらお前なんて呼吸すら出来ない唯の人形なるぜ」

「……そっか」

なじみはそう呟いて瑛叟の肩にまた身を寄せた。瑛叟はそんななじみの頭を抵抗せずに乗せていた。そして、その状態のまま目の前の光景を眺める事10分ほど。何も話さない二人だが、そんな沈黙がどこか心地良かった。

「さて……それじゃあ元に戻すとしよう」

瑛瓊はそう言って、三人の精神を元に戻したのだった。



その後の雲仙冥利

「身体が戻ったのは良いんだけど……めちやくちや眼が冴えてて寝れねえ……」

雲仙冥利は太刀洗が眠り続けた結果、しばらく寝る事が出来なかった。

その後の古賀いたみ

「うえ〜ん……修理がまた長引いちやったよ〜」

「仕方ねえだろ古賀ちゃん。今回は結構無理させたからな身体に」

古賀いたみは雲仙が無理して動いた結果、修理が長引く事になった。

その後の太刀洗斬子

「zzzz……ん!? あたつ、いたたたたつ痛いよ〜〜!」

普段動かない太刀洗の身体を古賀が名瀬を探すのに動かしまわった結果、しばらく筋肉痛で動けなかった。そして不知火が筋肉痛を治す代わりに会長戦に関するルール変更を吞ませる事になるのだが、それはまた別の話。

この学園が滅ぶくらいの覚悟はしておいてね？

さて、現在瑛嗶は球磨川禊の生徒会業務が終わるまでの間暇していた。とは言っても安心院なじみが箱庭学園に今日やってくるのは知っているし、これから色々面白くなりそうだなあとは思っているが。

また、ソレとは別に瑛嗶には一つ思い付いた事があった。球磨川禊を黒神めだかに勝たせるために手を出した結果を思い出して思い付いた事。それは、黒神めだかが完膚なきまでに敗北する姿が見たい、という物だった。なじみ曰く、瑛嗶と黒神めだかは1000年に一人存在する勝利を約束された主人公体質を持った人間。瑛嗶もソレは知っているし、自覚もしている。自分は主人公に向けてはいないと思っているが、そうなんだろうと思っている。

同族嫌悪の様な物なのかもしれないが、瑛嗶には黒神めだかを敗北させたいと思ったのだ。とはいっても、その実瑛嗶に同族嫌悪なんて高尚な物は無いのだが。結局はいつもどおり、『面白そうだから』という理由からの思い付きだ。

「サーて……どうしようかなあ……なじみを利用してこの機会にちよつと動いてみようかな」

瑛嗶はそう言つてすくつと立ち上がる。今瑛嗶がいる場所は3年13組の教室。

「どうした瑛嗶？」

「いや、ちよつと面白い事考えついたんだよ。ふひひつこの学園が減ぶくらの覚悟はしておいてね？」

「待てやコラ」

「冗談だよ空洞君。でも死人は出るかもね」

瑛嗶は相変わらず教室の中央に鎮座する空洞にゆらりと笑つてそう言い、教室を出る。その足取りは軽い。改造された和風制服の裾をひらひらとたなびかせながら、歩く瑛嗶の表情を見た生徒は後にこう語る。

——まるで災厄が歩いている様な寒気がした

と。

◇
◇
◇

瑛嗶はしばらくして、生徒会室の様子を別の場所の光景を見るスキル【進光景】プレイバックを使つ

て見た。結果、なじみが既に箱庭学園にやって来ているのが分かったし、黒神めだかに遠回しな喧嘩を吹っ掛けている事も分かった。

現在はなじみが瑛叡を探して学園をさまよっているのも知っているし、黒神めだかが安心院なじみ対策に後継者を育てようと動き出した事も分かった。

故に瑛叡は笑う。名づけるなら安心院なじみのフラスコ計画編とか悪平等編とかそういう感じだろうが、瑛叡はその件を潰して自分勝手に動かす事を決めた。今更なじみがどう動こうが、黒神めだかが後継者を立てようが関係無かった。

「まずは外堀から埋めるとしようかな？」

「なにが？」

そうして瑛叡が状況を把握した結果、会いに来たのは球磨川禊。

「球磨川君。なじみの奴がお前らんとこ来ただろ？」

「『え？』『まあ来たけど』」

「俺ちよつと思いついた事があるからさ。ちよつとなじみのやつてる事全部潰して俺のやりたい放題やろうと思っただ」

「『え』」

球磨川禊は、瑛叡のその言葉に動きを止めた。何故なら、瑛叡が動くと言ったからだ。選挙管理委員長である太刀洗斬子は普段怠けている故に、自分から動きだす事は奇跡に

等しい。それと同様、瑛嗶が事を起こすのは同じ位に奇跡と言って良い。いや、寧ろ災厄と言って良い。

その理由は、瑛嗶の性質にある。『面白い』事が好きな瑛嗶は、基本的に起きるイベントには不干渉だ。流れる様を眺める様に、起きる展開を見守りつつ笑っている。

あたかもバラエティ番組を見ているかの様に、いつもいつも起きる展開を見守るスタンスを持っている。

今までは最低でも球磨川に助力した位しか手を出さなかったし、その助力も最低限だった。修行法を提案してただやらせ、後は勝負に平等性を齎した位だ。

だが瑛嗶は動きだした、動きだしてしまった。これまでの様に誰かが何かを起こして瑛嗶が笑って見るのではない。誰かが何かを起こしているのに少し手を加えるのではない。瑛嗶が自分から、事を起こすのだ。

「何か問題でも?」

「いやいや、待つてよ瑛嗶さん。落ちつこう、一旦落ち着こう?」

その事実の重大さは、球磨川禊が思わず括弧付けるのを止めてしまう位大きかった。

「いや、落ち付いてないのはお前だよ」

「こほんつ……『えー…それで』『なんでまた?』」

「ちよつと球磨川君が色々ややってるのを見て、ちよつと動いてみるのも面白いか

なつて」

その言葉を聞いて、球磨川は頭を抱えた。

「(『僕のせいかなぁあああ!!!!』)」

括弧をふんだんに使つて心の中で嘆く球磨川禊。瑛嗶はそんな球磨川禊の様子をやはり笑つて見ていた。

「それで、ちよつと球磨川君に手伝つて貰いたいんだよ。というかこちら側に付いてもらいたいんだよね」

「『オツケー何でも言つて!』」

球磨川禊は0・5秒で黒神めだかから泉ヶ仙瑛嗶に寝返つた。球磨川禊はその0・5秒の間に頭の中で瑛嗶が動いた結果起きるのであろう災厄から逃れる方法を考え、最終的に瑛嗶側に付いていければ問題ないんじゃないやね? という考えに思い当たり、寝がえりを即決したのだ。

「『で』『具体的に何をするの?』」

「うん、目的は球磨川君と同じだよ。黒神めだか、潰す、皆幸せ」

「『……』『それって僕じゃないんじゃないや……』」

「いやいや。今までいろんな奴らの心を押し折つて来た嫌われ者の力は必要だぜ」

「『言つてくれるなあ』」

瑛噎はそう言つて、球磨川禊に笑い掛け、球磨川はそんな瑛噎に苦笑した。

「さて、それじゃあまずなじみはどうにかするでしょう。何、簡単だよ。なじみ程度なら口先三寸で丸めこめるさ」

瑛噎は舌舐めずりしていつもとは違って、にやりと笑みを浮かべた。

さて、なじみ。話を付けようか

瑛嗶が動いたという事実を知るのは、今の所球磨川禊と更にもう一人。帯刀鞆負の二人だ。人吉善吉のクラスメイトとして普通に普通の過負荷として授業を受け続けている彼女が、瑛嗶が動き出した事によって連動する様に動き出したのだ。元より、彼女は瑛嗶が遙か北の地から攫つて来た親のいない不幸で無邪気な過負荷マイナスの少女だ。それこそ、球磨川禊と張り合える程のマイナス性を持っている。

人外の域を全力疾走で駆け抜ける人間、泉ヶ仙瑛嗶の行動に使われる人材は、勝利を知っている異常ではなく、普通を謳歌する普通でも無く、敗北しか知らなかった過負荷。球磨川と鞆負の二人だ。

「さて、まずはスタートを切るとしよう」

『『どうするの?』』

「……」

瑛嗶は時計塔の屋上で風に吹かれながらその二人と会議をしていた。まず、何を起こすのかを決める話しあいだ。瑛嗶の目的はあくまで黒神めだかを完膚なきまでに敗北させること。

まず、黒神めだかは相手の得意な戦い方に合わせて戦い、勝利することで相手に対抗する性質を持った人間だ。今までもそれで勝利してきたし、その結果大勢の人間を魅了してきた。驚異的な事実である。

だが、瑛嗶は敢えてそこを利用する。彼女を完膚なきまでに敗北させる方法は、心理的にも肉体的にも負けを認めさせる事だ。そこで使うのが球磨川禊と帯刀鞆負の二人。心理的には心を折る事に関して右に出る者はいない球磨川禊が心理面を、そして肉体を玩具にする事に関して右に出る者はいない帯刀鞆負が肉体面を破壊する。

そして、瑛嗶が最後の最後に止めを刺す。具体的な方法としては、安心院なじみのフラスコ計画を利用した物。なじみのフラスコ計画の概要は、人吉善吉を黒神めだかに勝たせることで見出す完全な人間作り。この時点ではどのようなようにして善吉をめだかに勝たせるのかは未明だが、瑛嗶には大体の予想が付いていた。

「まずは、黒神めだかにバレない様に安心院なじみをこちらに引き入れる」

「……それは、お兄ちゃんがいれば簡単」

「ああ、そうだな。俺が口先三寸で丸め込めば良い」

「『それで、その後は?』」

球磨川禊の問いに対し、瑛嗶の答えは随分とスケールの大きい提案だった。

「決まってるさ。箱庭学園の全生徒殺して黒神めだかの出方を見る」

そして、その言葉は何処かのバックアップ宇宙人の様な台詞だった。



「『どうしたものかなあ』『瑛唄さんのやり口は最初からクライマックスすぎるぜ』」

「……」

瑛唄と別れて球磨川と鞆負は校舎の廊下を歩いていた。学ラン姿に副会長の腕章を着けた球磨川の表情は笑みを浮かべつつ頬には汗が伝っていた。瑛唄の行動は、これまで黒神めだかの相手をして来た奴らの様に遠回しなやり口では無かったからだ。

例を上げるとすれば、フラスコ計画で13組の13人が地下研究室で色々やっていた時、その13人が全員黒神めだかに対する何かを持った者で、不知火袴の差し金の下、黒神めだかに戦わなければならぬ状況に追い込んだし、球磨川禊も生徒会戦拳といった形で黒神めだかが動かねばならない状況を作り、勝負を挑んだ。

どいつもこいつも直接ではなく、ある程度の戦略を敷いて黒神めだかと戦って来た。だが、瑛嗶は違う。一番最初から黒神めだかに喧嘩を売る行動だ。戦略も何も無い、ただ黒神めだかが嫌悪し憤怒する行動をひたすらにやっていくという方法を取っているだけだ。

そして、黒神めだかがそれを阻止しようとするまさにその時を狙っているのだ。

瑛嗶の考えは、黒神めだかが瑛嗶の行動を阻止しようとして逆に返り討ちに合い、最終的に阻止出来ずに何もかもを失う、という物。

非常に単純で分かりやすい戦法だ。

『まあ』『安心院さんは瑛嗶さんが動けばどうにかなるだろうし』『僕達は僕達でやることをやろうか』

「くひっ♪」

球磨川禊のそんな言葉に、帯刀鞆負は口元を吊り上げらせ、歯をギチリと鳴らせて笑った。

◇ ◇ ◇

「さて、なじみ。話を付けようか」

「……瑛嘎」

そんな時、瑛嘎となじみは対峙していた。場所はなじみの作りあげた教室空間。教卓に腰掛けるなじみと、教室後ろのロッカーに腰掛ける瑛嘎。教室の端と端で互いに向かい合う二人の怪物が、3兆年に及ぶ人外の問題に終止符を打つ――

俺がお前の現実だよ

瑛嗶となじみは向かい合う。笑う瑛嗶と真剣ななじみだけの教室空間。地球上に無く、空想上にあるスキルで作られたなじみと瑛嗶だけの空間だ。教室の外は、なじみの心境を表現しているかのように大雨を見せていた。

「なじみ」

「なにかな？」

「もうそろそろ、いいだろ」

瑛嗶の言葉に、なじみは黙った。瑛嗶の言葉の意味は分かるし、その言葉がなじみにとつてとても重要な事である事も分かっていた。

シミュレータードリァリテイ。なじみの抱える精神的な病。人外故の全能性から、上手くいきすぎる世界に現実感を持ってない病だ。つまり、安心院なじみはこの世界を現実として認識出来ない。漫画の中の空想世界で、自分はその中の登場人物の一人でしかないのではないかと思えないのだ。

「お前の「出来ない」は、探すだけ無駄なんだよ。お前は現実を認識出来ないんじゃない、認識しようとしてないんだ」

「どういふ……意味かな」

「とつくに気付いてるだろ、ずっと昔から。言彦と戦った時、いや俺と出会ったあの日から」

安心院なじみが瑛叟に出会ったあの日。まだ時間の定義や1年周期の日付すらなかったあの遙か遠い荒野の中で、なじみと瑛叟が出会ったあの時から、安心院なじみの中の変化に瑛叟は気付いていた。全能故の非現実的な実感に変化があつた事を。

瑛叟という自分自身以上の人外が目の前に現れたあの時から、安心院なじみの両の瞳には灰色だった平等な視界にほんの少し色が付いた。平等だったあらゆる物の中に、たった一つ抜き出た不平等な存在が現れた。

「俺がお前の現実だよ」

「……」

瑛叟はそう言つて、やはり笑つた。そんな瑛叟に対してなじみの表情は暗い。

「……瑛叟は、なんなのさ」

「？」

「僕と君はただの他人じゃないか。何も関係ないだろう。僕の問題は僕の物だ、君が手を出して良い問題じゃないんだよ」

なじみはそう言つて、俯いた。語尾が段々と小さくなつたその言葉は、なんの力もな

かった。瑛叟はそんななじみに対し、笑みを浮かべ何も言わない。

「僕の事を何一つ知らない癖に……僕が何を思つて、どんな思いで生きてきたか知らない癖に」

なじみはぽつりぽつりと言葉を紡いでいく。俯いたなじみからはその表情を窺う事は出来ない。だが、瑛叟はそんななじみの言葉にも動じず、ただ笑っている。

「僕よりも年下の癖に」

なじみは肩を震わせた

「他人の想いを顧みた事もない癖にっ」

なじみは声を震わせた

「本気で人と向き合つた事もない癖にっ……!」

なじみは声を荒げた

「僕の事を大事に思ったことなんてない癖につ!!」

なじみは顔を上げた。

「……」

顔を上げた安心院なじみの顔は、ぐしゃぐしゃだった。おそらく、誰の前でも涙を流した事が無いだろう安心院なじみが、他人の前で初めて……瑛叟の前で初めて涙を流した。

「……言い返してよ」

「……」

瑛叟は笑っていた。口元はつり上がり、笑みを形作っている。なじみはそんな瑛叟の対極であるかのように涙を流し続ける。

「何か言つてよ……」

「……」

それでも瑛叟は笑う。なじみの言った何もかもを否定もせず肯定もせずただだ笑みを浮かべていた。なじみはそんな瑛叟の胸ぐらに掴みかかった。茶髪が揺れて、声を

荒げさせた。

「何とか言えよつ、瑛嗶あ!!」

なじみは瑛嗶の身体を揺らし、叫ぶ様にそう言った。実際には安心院なじみにとって瑛嗶は大事な存在だし、自身の問題に関わってくれるのは嬉しいし、これまでの長い間自身の『出来ない』探しをずっと手伝ってくれた。関係無いわけが無いのだ。

それでも、なじみは叫ばずには居られなかった。これまでの努力が、瑛嗶との努力が、瑛嗶自身に否定された様で。自分の瑛嗶に対して抱いている気持ちなんなのか分からず、心地良かった筈の感情は突如胸の中で黒く渦巻いた。吐きだしたくて、吐きだしたくて、目の前の瑛嗶にその思いをぶつけずには居られなかった。

瑛嗶と話したくなかった。瑛嗶と向き合いたくなかった。今だけは、今だけは瑛嗶の前から消えていなくなりました。ぐしゃぐしゃの顔を見られたくなかった。でもそれでも、瑛嗶の瞳を睨みつけるように見据え続けた。

「——俺は」

「っー」

瑛嗶の言葉が怖かった。何故だかは分からないが、なじみは瑛嗶の次の言葉を恐れ

た。この状況を、一回でも恋をした事のある少女が見れば、容易になじみの心境が分かつただろう。

安心院なじみは瑛嗶に嫌われたくないのだ。自身の問題がきつかけとなつて、瑛嗶が終止符を打ちに来た。自分の気持ち吐きだして、ぶつけた。取り返しはつかない。そんな状況で、瑛嗶が身勝手な自分を嫌わないかと不安になつたのだ。

「確かに俺は、お前より年下だ」

瑛嗶は笑つた

「確かに俺は、他人の想いを顧みた事は無い」

瑛嗶は笑つた

「確かに俺は、人と本気で向き合つた事は無い」

瑛嗶は笑つた

「でも」

瑛嗶は一つ、そう言ってなじみをの瞳を見た。そして、初めて瑛嗶はその口端をふつと下げて笑みを止めた。

「俺はお前を大事に思っていない訳じゃない」

瑛嗶はなじみにそう言った。笑みを浮かべず、軽快でふざけた口調でもなく、なじみも初めて見る真剣で真面目で真っ直ぐな瑛嗶の表情が、その言葉を嘘とは思わせなかつた。

「良いかなじみ。お前の問題に、俺が関係無い訳ないだろう。お前がどんな思いで生きてきたかは俺が一番よく知ってる。お前と俺が——他人な筈が無いだろう！」

「……瑛嗶」

「お前の問題は俺の問題だ。お前が苦しんでるなら、俺にも少しは背負わせろ。泣く程辛いなら、俺はお前と幾らでも向き合ってやるよ」

なじみは瑛嗶のその言葉に、また止まらない涙を更に溢れさせた。止めようと思つて

も止まらない。1京のスキルを持つ、全知全能の安心院なじみは何度も涙をその手で拭う。止まらない。

「あれ……止まらない。止まらないよ、涙なみ。なんでだ？ おかしいなあ、涙を止めるスキルなんて、持ってないよ……」

瑛嗶はそんななじみを抱き締めた。なじみの顔を自身の胸に埋めさせて、初めて会った時には派手に踏みつけたなじみの頭を抱き締めて、瑛嗶はまた笑った。

「生憎、俺も涙を止めるスキルなんて持ってない。だからまあ、とりあえず……俺がお前の涙を止めてやるよ」

「……瑛嗶」

「こういうのもまた、面白いだろ？」

「……馬鹿」

なじみは一度顔を離しそう言って笑みを浮かべた。そして、また瑛嗶の身体を抱き締めた。

瑛嗶は一度離れたなじみの顔を見た。笑みを浮かべたその表情からは、既に涙が消えていた。

『えー』『モブキャラの皆さん』『こんにちは!』

安心院なじみはしばらく瑛嗶と抱き合った後、気持ちを落ち着かせてまた教卓の上に腰かけた。瑛嗶の顔をまともに見れず、顔を紅潮させて眼を逸らす。先程まで大泣きした挙句、瑛嗶を抱きしめていたという事実がとても恥ずかしく思えて来たのだ。

対する瑛嗶はいつも通り余裕そうにゆらゆらと笑っていた。また、なじみのそんな普通の女の子の様な反応に少し嗜虐心を抱きつつ、面白そうになじみを眺めていた。

「うう……」

「……」にやにや

会話もなく、ただ安心院なじみの唸るような苦悶の音が度々聞こえてくる。瑛嗶もそんななじみの様子を堪能して満足したのか、早々に話を進めようとした。

「なあなじみ」

「な、なにっ!？」

「ちよつと話があるんだけど」

瑛嗶はそう言っただけになじみに球磨川と鞆負の二人を巻き込んで色々事起こそうとしている事を話した。なじみにも協力してほしい事も含めて、瑛嗶の計画とも言えない

様なやり方とその方法を全部だ。

「……待って待って、瑛唄。君が動く？ 駄目だつてそんなの。どれくらいヤバいかつて言うのと、さつきまでの羞恥心が大気圏外まで吹き飛ぶくらいヤバいよ」

なじみはその事実には驚愕し、羞恥心をどこかへ飛ばしてしまった。

「いや、ちよつと面白そうだったから。とりあえずお前のフラスコ計画をどうにかしようとのめだかちゃん達動いてるじゃん？ それを利用してちよつとね」

「……はあ、球磨川君も僕も靱負ちゃんも運が良かったね。瑛唄の敵に回ったら命がいくらあつても足りないよ」

「……俺つてそこまでヤバいの？」

「うん。地球上で瑛唄程事を起こしちゃいけない存在は無いだね」

瑛唄は面白そうに笑った。そこまでヤバい奴認定されてると、逆に面白くなったのだ。なじみはそんな瑛唄の表情を見て、くすりと笑った。

「で、具体的にはこれから何するの？」

「ああ、球磨川君は生徒会のスパイ。靱負ちゃんはなじみの端末のスパイに回つて貰つてるんだけど、俺達はとりあえず……全校生徒皆殺しにしてやろつかなあつて」

瑛唄は笑顔でそう言った。そしてその言葉を聞いたなじみは笑みをびしりと固めてしまった。そして、つうつと冷や汗を流しつつ、瑛唄に向かってひきつった笑みを向け

ながら言った。

「琰嗶……頭おかしいんじゃないの……?」



「さて、安心院なじみが動き出したのだ。私達は後継者を早急に立てなければならぬ」
 「『でも、どうするのか?』」

「安心しろ球磨川。それについては既に手を打ってある。今から体験入学生徒募集でやってくる受験生達を後継者にするのだ」

琰嗶の息の掛かった球磨川禊は、その役を全うするために生徒会のスパイとして忠実に行動していた。めだかの出してきた後継者選びの方法は、琰嗶から教えられていた通りで少しびびりしているのだが、それならそれで都合が良いなあと考えていた。

「『それじゃあ』『僕に少し提案があるんだ』」

「提案ですか?」

球磨川の言葉に反応したのは、人吉善吉。球磨川は善吉の聞き返しに答えた。

「『うん』『後継者候補生って言っても』『応募者は軽く600人位来るでしょ?』『まどろっこしいから数人選出して』『一人、教育係として付けるってのはどう?』『生徒会だつ

て基本5人なんだしき』

「……なるほど。一理あるな。まあ球磨川の珍しくまともな提案だし、採用するとしてよし」

めだかはそう言って、球磨川の家を採用した。

「だが球磨川。その選出方法というのはどうするのだ？ 正直言って、コレから候補生達へ挨拶に行くのだから、あまり手の込んだ事は出来ないぞ？」

『そこは任せてよ』『めだかちゃん』『生徒会からの挨拶』『僕にやらせてくれない？』『む、本当に珍しく真面目だな球磨川。まあそう言うなら貴様に任せるとしよう』

めだかはそう言って球磨川禊に生徒会挨拶の役目を任せた。

そして、生徒会メンバーは全員うじゃうじゃ集まっている候補生の前に出て、その面々の顔を見渡した。そして球磨川禊がマイクを持ち、壇上上がる。すると、候補生全員の視線が球磨川禊へと向いた。

そして――

『えー』『モブキャラの皆さん』『こんにちは！』

――球磨川禊は核爆弾並の挨拶を容赦なく撃ち放った。

ぐしゃりと心の折れる音が聞こえてきた。見れば、600人近くいた候補生のほぼ全員が地面へと膝を着き、心を折られて落ち込んでいた。

『どうしたんですか皆さん』『この後はもう出番は無いんだから』『もつと頑張ってくださいよ』

更に追い打ちを掛ける球磨川禊

『モブキャラ以上の役割なんかないんだから』『せめて進行が上手くいく様に役立つてくださいよ!』

三撃目。この言葉で、最早立ち上がってくる候補生は殆どいなくなっていた。むしろとぼとぼと帰っていく者もいる位だ。

「球磨川ア!! なんだお前は、まだ私と喧嘩したいののか!」

『いやいや』『違うって、ほら』『あそこ』

球磨川禊がどうどうと黒神めだかを抑えつつ指差した先にいたのは、5人の少女達。球磨川の言葉で心を折られなかった唯一の候補生たちだ。

そして、後に黒神めだかは知る事になる。彼女達5人全員が安心院なじみの端末である悪平等なのだ。

そして、それを知った黒神めだかは思い知る事になる。少女達にはもう何の意味もなく、裏で動き始めた瑛嗶の災厄の手がもう目の前まで迫っていた事を。



「ふふふ、後継者作りか。まさかあの5人全員が僕の端末だなんて思わないだろうね。あはは」

「まあそれでいいさ。正直言つて、今は黒神めだかの後継者作りは俺から意識を逸らす為に利用する手段でしかないし」

なじみと瑛嗶はそう言つて、黒神めだかの様子を時計塔の屋上から瑛嗶式スキルの一つ、別場所の光景を見ることが出来るスキル【プレイバック進光景】で眺めていた。球磨川禊の動向も予定通りに動いているようだし、瑛嗶の計画は順調に進んでいた。

「この後球磨川君が靱負ちゃんを候補生5人の教育係として推薦して、あの5人を靱負ちゃんに任せる。んで……後継者候補生という大切な存在を、こちらの手中に入れておく」

「君の考えは本当に最初からクライマックスだね。それつて所謂人質つて奴だぜ？」
「ちよつと違うな。アレは人質じゃないよ。アレは生贄つて奴だ」

「なおい」

瑛唄はそう言つてゆらりと笑い、なじみはそんな瑛唄に突つ込みを入れた。

「さて……次の手を打つとしよう。とはいつても、学園の生徒を段階を踏んで殺していくだけだけどさ」

瑛唄はスキルの一つ。銃を精製するスキル【ピーストドック門前の銃頭】を発動。遠距離用のアサルトライフルを精製、地上を歩いている生徒を数十人ほど、撃ち殺す為に。

「さて、黒神めだか。後継者育成も良いけど……お前はまだ生徒会長なんだぜ？ポーツとしてたら、生徒が皆死んじやうよ？」

瑛唄はそう呟いて、ライフルの引き金を引く。連射し、狙い通りに数十人の生徒をヘッドショットで撃ち殺した。そして、瑛唄は黒神めだかと安心院なじみの最早意味を為さなくなった勝負の裏で、開戦の狼煙を上げた。

いらっしやい生徒会長失格の馬鹿野郎

さて、後継者候補性5人がやって来てから、瑛叟が開戦の狼煙として数十人の生徒を撃ち殺してから、おおよそ1週間が経った。その間に球磨川禊が後継者候補達に襲撃されて返り討ちしたり、帯刀韃負が後継者候補の研修を監督したりしていたのだが、その裏では瑛叟による生徒の大量虐殺が行なわれていた。

スキルによる殺人故に、誰がどうやったかも分からない犯行。既にその殺人数は560人に及んでいた。無論、その事は黒神めだか率いる生徒会メンバーも全校生徒も聞き及んでいた。

寧ろ、問題なのはその560人の中に登校すらしていない13組の生徒も混ざっている事だった。精確な生徒の住所情報を掴んでいる者は生徒会含めても理事長の不知火袴位の物だ。だが、不知火袴がそのような犯行をする必要性とメリットが無いことから容疑者は全く分からなくなっていた。

黒神めだかは生徒会長としてこの事件を解決すべく手を尽くすのだが、それでも生徒は次々と殺されて行った。一応遺体は蘇生の可能性がある為、保存しているのだが球磨川オールフイクションの「大嘘憑き」は瑛叟の指示でバレない様に言われている為、使えない。

解決手段もない中、黒神めだかは同時進行で後継者の育成にも務めていた。誰がどうして事件を起こしているのかは分からないが、安心院なじみという脅威が存在しているのも事実。手を抜くわけにはいかないのだ。

「さて、それでは今回の体験入学生による研修プログラムを開始する。まず、貴様達には私の後継者になるに当たって言っておくことがある」

「？」

「私の様にはなるな！ これだけだ」

黒神めだかはそう言つて、プログラム内容を説明する。内容は宝探し、学園中の何処かに隠された宝を見つけた物が勝ち、という物だった。そしてめだかは最初のヒントとして一枚のプリントを全員に回した。書いてある内容は面倒なので書かないが、変な文章だった。

「『えーと何々……』『第一関門、次の文を読んで解き明かし示される場所へ向かえ。』
『ライオンは、死を縫合する』

溪谷で新たなる思想に出会

うだろう。もしも視界の外

で縫針が親子を支え始めた

ら帰れ。試み施す指を止め

て糸通しを示す姿が私の死だ。雌の支柱獅を司る銃は青く、紫の指の熾烈さに過ぎず、天使も私の着物ではない。人は仕える相手を間違えたい。抜糸するのは着

替えたあとになりそうだ。』『か』

と言いつつ書きちゃったよ。とても面倒な作業ではあったが、とりあえずこの様な文章だった。球磨川達はその文章を見て首を傾げるが、そんな中候補生の一人、喜々津が言った。

「あのー、宝探しはいいとして。勝ったら何か景品はないのかにやー？」

「景品、か……なるほど。それでは勝ったら何か欲しい物をやろう」
めだかはそう言つてふんぞり返る。

その様子に各々欲しい物を言った。結構偏った形になったのだが、善吉や候補生の面々は別の腕章を要求。他は考えておくと云つて、球磨川は女子の裸エプロンを要求した。ちなみに此処には監督である帯刀鞆負もいる。彼女は別に欲しい物は無かったのだが、とりあえず男子勢がこれからの学校生活を女装して過ごしてという過酷すぎる要

求を出した。

これにより、球磨川、善吉、阿久根の三人は負けられねえと燃え始めた。

「まあいいだろう。それではその問題を解いて宝を探すが良い。5分掛けても解けない場合は帰ってよいぞ」

黒神めだかはそう言って、下がるのだった。

◇ ◇ ◇

「ふう……さて、始まったか育成プログラム」

「そうだね」

「それじゃそろそろ俺も本腰入れて動くでしょう。次で全校生徒を殺すぞ」

瑛嗶はそう言ってゆらりと笑った。

「はいはい」

「といつても？ 生徒会メンバーと候補生以外はもう——死んじやつてるんだけどね？」

瑛嗶はそう言って時計塔の上から下を見下ろした。そこから見える光景はまさしく地獄絵図。真っ赤に染まった学園がそこにはあった。剣道場もプールも柔道場も校庭

も中庭も全ての教室もテニスコートもバスケットも草も木々も全てが赤く染まり、その赤の中には先程まで元気に動いていた生徒の死体がごろごろと転がっていた。

この犯行は全て瑛噎がめだかの説明中に行なった事。

瑛噎式殺人系スキルの一つ、指定範囲内の生物を全て殺害するスキル【身塵斬り】ブラストインフェクション

このスキルは自身の指定した範囲内にいる生物を有無を言わず殺害するスキルだ。無論、殺害しない生物の指定も出来るので、自身となじみ、黒神めだか達は指定外に設定してある。また、これから彼女達が関わるであろう時計塔内の委員長達も指定外だ。

「真っ赤真っ赤、真っ赤っかだ」

「うん。やり過ぎだよ瑛噎」

「くひひ、まああれだ。此処までやればいい加減俺の犯行だつて気付くでしょ。さて、この時の為に球磨川君達を残しといたんだ。いっちょ派手に死んでもらうとしよう」

「あれ？ 球磨川君達は味方じゃないの？ ほら、地の文でも言ってたじゃないか。『黒神めだかの心を球磨川が、肉体を帯刀鞆負が破壊する』とかなんとか」

安心院なじみはそう言った。週刊少年ジャンプの展開を読んでいるかのようなメタ発言をするが、瑛噎はそれに対していつものようにゆらりと笑った。

「知ってるか？ てんかい 敵を騙すならまず味方から、だ」

「君は何様だよ」

「俺は俺だ。なじみ曰く、『最強無敵の馬鹿』とか検体名『逸孤軍隊』パISONALソサエティって奴だよ」

瑛嗶の言葉に、なじみはくすりと笑った。そんな前に言った検体名の事を今出してくるとは思わなかったからだ。

「それじゃ、なじみはやるつもりだった行動を取ってくれ。俺はとりあえず……生徒会を殺して黒神めだかに敗北を思い知らせてやる」

その言葉と同時に、安心院なじみはその場から消え、瑛嗶は時計塔の屋上にやってきた黒神めだかに向かい合った。

「いらっしやい生徒会長失格の馬鹿野郎」

「瑛嗶さん……!? なるほど、この事件の犯人は貴方ですか」

笑う瑛嗶に構えるめだか。瑛嗶と黒神めだかは誰も知らない、見ていない中、衝突した。

面白くない

黒神めだかは善吉達にて課題を出した後、自身は【アリバイプロック腑罪証明】でやってきた安心院なじみと対談。その後時計塔の上へとやって来ていた。

それにしても時間が無さ過ぎると思うかもしれないが、安心院なじみの【アリバイプロック腑罪証明】は、『好きな時に』『好きな場所』に行く事が出来るスキルだ。無論、それならば好きな場所の過去の時点に移動することもできるだろう。うん、多分出来るよきつと。※作者の個人的捉え方です。原作はどうか知りません。

まあそれはそうとして、そのスキルを使ってなじみはちよつと前の時間に戻り、黒神めだかの隣へと移動した。ご丁寧に鍋島猫美の変装までしてだ。変装自体はすぐに見破られたが、なじみはめだかに少し頼まれごとをされて、そのままその場を離れた。そして黒神めだかはその足で時計塔の最上部、つまり瑛嗶が立っている場所へとやってきたのだ。

「……瑛嗶さん。貴様がこの事件の犯人だな？」

「あーそうだよ。ちなみに、それに辿り着くには少し遅すぎたね。生徒会長失格だぜ」
「なにを……!? これを!？」

黒神めだかは時計塔の上から学園を見渡した。そしてそこにある光景は、瑛叟が作りあげた赤い学園と肉塊とかけた愛すべき生徒達の姿があった。

「な……………な……………」

見れば見る程、その光景は残酷な事実をめだかに突き付けた。雲仙冥加や日之影空洞、剣道部の面々や鍋島猫美、黒神真黒やくじら、古賀いたみや不知火半袖に至るまで、ありとあらゆる全ての生徒が血の海の中で物言わぬ唯の死体と化していた。

「う、あ……………あああああああ!!!」

その光景に、めだかは叫び声を上げる。生徒会長として、人間が大好きな黒神めだかとして、なによりこの光景は大きく心にダメージを貰った。事件自体は起こっていたし、その犯人も捜すべく手を尽くすつもりだった。でも、遅かった。本当なら安心院なじみを相手に後継者を育てる前に、それを放置してでも瑛叟の起こした事件の解決に全力を注ぐべきだった。なにより、生徒会長として……………生徒が死んでいる事件を後回しにしてしまった事がめだかに最大の衝撃を与えていた。

生徒会長として、生徒の事を一番に考えられなかった。黒神めだかとして、こんな事態になるまで何一つ手を打つことが出来なかった。蘇生できる可能性があるからと言つて生徒の死に軽い気持ちを持ってしまった。

「お前は生徒会長だろう。なのに、お前の下にいる生徒達の事を軽んじた……………それは確

実にお前の生徒会長としての存在を汚すぞ。つまり、お前は生徒会長失格だ、この大馬鹿野郎」

瑛叟の言葉が、黒神めだかに突き刺さる。めだかは瑛叟の言葉に膝を着いた。だが、まだ蘇生の可能性があるのは事実。今はそれだけがめだかの心を支えていた。まだ間に合う、まだ手はあると。

だが、そんな支えを瑛叟が許す筈が無いし、分かっている訳もない。故に——
「ちなみに言つとくぞ。俺の殺した生物は、何をしても生き返らない」

—— 瑛叟はそんな支えを根本から砕き、破壊する。

勿論のこと嘘である。しかし、現在球磨川の「大嘘憑オールワイクションき」でも、生徒の死は無かった事には出来ない。それが瑛叟のスキルの絶対性。獅子目言彦の『破壊』の性質を、瑛叟はスキルで再現する。

「取り返しがつくと思うなよ。お前は失敗したんだ。空洞君は言った、人生にリセットボタンはあるって……でもな、俺は言うぞ。人生にリセットボタンが有ってたまるか」
黒神めだかは瑛叟の言葉に、ふらふらと立ち上がった。その支えを失った瞳からはぼろぼろと涙がこぼれ、その表情からは一切の感情が無かった。ふらふらと瑛叟に近づ

き、力ない拳をのろのろと振り下ろす。だが、瑛嗶はそれを少し半身になる事で躲した。めだかは躲されたことでバランスを失い、どしゃつと倒れる。そしてそのまま立ち上がろうとしなかった。

「やつぱこの程度か。俺が動くと災害並みつてのも……あながち間違いないのかもなあ。まったく、こんなんじや球磨川君や靱負ちゃんを動かした意味が無いじゃないか」

瑛嗶はそう言つて笑みを浮かべ、少しだけ嘆息した。

もともと、瑛嗶の考えでは黒神めだかが瑛嗶の言葉に屈さず、球磨川と戦つた時同様に立ち上がり、瑛嗶と勝負する筈だった。勝負が終わつた頃、関門をクリアしてきた球磨川と靱負がめだかを裏切り、生徒会の面々と候補生達を殺し、黒神めだかの心と体止めを刺す。これで瑛嗶の考えではめだかが敗北する予定だったのだ。

だが、瑛嗶の考えとは違つて黒神めだかは立ち上がらなかつた。この時点で勝敗が決まつてしまつた。瑛嗶の思っている程、黒神めだかの心は強くなかつたのだ。

「戦闘は無しか。つまらないな。黒神めだかもこんなもんか……あーあ、本当に——」

「——面白くない」

瑛嗶はただそう呟いた後、片手を上に掲げる。最早この事態をどうにか出来るのは、この事態を生み出した瑛嗶のみ。

「現実を夢に変えるスキル【センスオブラリアティ現実味のある夢でした】」

この時、此処一週間の事。瑛嗶が動くと言ったあの日からの事、その全てが瑛嗶の手によって

——夢となった。



「……はあ」

瑛嗶はため息を吐いた。瑛嗶のいる場所は、先程までいた時計塔の上では無い。空洞が中央に座っている3年13組の教室だ。

「どうした瑛嗶。珍しいな、ため息なんて」

「いや、ちよつと面白くない事があつてね」

話しているのは、瑛嗶と空洞。死んだ筈だった、瑛嗶によつて殺された筈だった空洞が、生き返っている。この事実が、先程までの事を夢だという証拠になつていた。

瑛嗶が黒神めだかを敗北させたあの時から、一週間前の瑛嗶が動く宣言をしたこの教室の中までの時間は全て瑛嗶の夢として処理され、また始まった。ソレ自体は良いし、瑛嗶も動いた結果が碌な事にならないと知つた。全ては夢だったのだ。

だが、そんな中夢にならなかつた現実がある。瑛嗶が故意に残したたつた一つの大事な記憶が。

「瑛嗶」

「ん？」

瑛嗶を呼ぶ声に、視線を移すと教室のドアの前に安心院なじみが微笑みながら佇んで

いた。いつもの巫女服では無く、何処かのセーラー服を着ていた。見ればその佇まいはこの学園の一生徒、人外の彼女からはあまり見られない普通の女の子の様な雰囲気だった。

「なじみか。……よいしょつと」

瑛嗶はそんななじみの姿を見て座っていた教卓から降りて立つ。なじみは瑛嗶に近づき、腕を取った。空洞はそんな二人を少し驚いた様な顔を見た後、ふと笑った。

「帰ろう?」

「ああ。それじゃ空洞君、また明日」

「ああ、また明日」

瑛嗶となじみはお互いの顔を見てくすりと笑った。そして瑛嗶はなじみに腕を組まれた状態のまま教室を出た。スキルを使えば、容易に家に帰ることが出来るであろう二人は、わざわざ歩いて出て行った。

「スキルは使わないのか?」

なじみ
人外」

「今日は歩きたい気分なんだよ。」

おうか
人外」

瑛嗶が夢にしなかった現実は……まあそういうことだ。

じゃあ世界の半分をお前にやろう

瑛嗶が夢にした結果巻き戻ってきた日の一週間後。瑛嗶はその一週間何もせず、ただただやってきた候補生達の成り行きを見守っていた。

一応、黒神めだかが安心院なじみに危機感を抱いた時間は夢にはなっていないので、なじみが現実を認識しているとしても、後継者は育てられる事になっていたので、また、安心院なじみは以前以上に瑛嗶に懐くようになり、今は自身の内にある理解不能な感情の理解を目的としていた。『できない』探しより熱心な所を見ると、よほど真剣なのだろう。

そして、候補生がやって来てから一週間が経っているという事は、またやってくるのだ。黒神めだかの育成プログラムが。夢同様に黒神めだかは問題用紙を出し、宝探しをさせた。そして5分以内に解けないのなら帰っても良いと言って、その場を放置した。最初に問題を解いたのは、候補生である喜々津。彼女は問題を解いた事で出てきた宝の場所へと向かい、それに他の候補生及び球磨川と喜界島の二人が付いていった。

「つまんねーつまんねー……暇だ」

「そんなに暇なら瑛嗶さんもやってみたらどうだ？」

瑛喰はそんな皆の様子を見て、めだかの横で暇を持て余していた。すると、めだかは瑛喰と同じ様にプリントを手渡して、そう提案する。とりあえず受け取った瑛喰だが、問題を見た瞬間に答えは出た。候補生達が向かって行った方向からして正解だろう。

「……そういえば、副賞として欲しい物を貰えるんだっけ」

「む、ああ。そういえばそんな話も出たな」

瑛喰はその答えを聞いて、ゆらりと笑った。そしてゆらゆらと立ち上がり、プリントを手の平の中でシユボツと短い音を鳴らして燃やした。これは瑛喰式スキルの一つ、炎を司るスキル【アフタースキル放火後学習】だ。

「よし、それなら俺も参加しよう。俺が優勝したら世界の半分を貰おうか」

「ソレは無理だ」

「じゃあ世界の半分をお前にやろう」

「いらぬぞ」

「じゃあ世界の全てを支配してやろう」

「止めてください」

「土下座までするか」

「出来そうなので」

「冗談だよ。それじゃ副賞は後々考えとくさ。それじゃね」

瑛嗶はそう言って、めだかとのちよつとしたやり取りを終えて時計塔へと向かう。瑛嗶は欲しい物をめだかに与えられるほど何かに飢えている訳ではないし、特に意味もなく参加しているのだが、やはりその理由はたった一つだろう。

「夢よりは面白そうだ」



さて、そうしてやってきた時計塔のふもと。正直言えば頂上まで行くならスキルですぐにでも移動できるのだが、それはやはり面白くない。瑛嗶はそう考え、球磨川達も通ったであろう時計塔の扉を潜った。

「あら？ もう一人来たのね」

「おー、十二町矢文。俺も参加するからさつきと課題だせや」

「！ 泉ヶ仙瑛嗶ね………またとんでもないのが来ちゃったわ。仕方ない、う私を出す関門問題は、う私にこの図書館の中の好きな本を選び、それに関する問題を出して、私

が答えられなかった場合クリア。という物よ」

通称逆ピラミッドゲーム。ちなみに、時計塔の中はかなり色々な施設が有る。その内の第一層は図書館という訳だ。

「なるほど……それじゃ、適当に……これで」

瑛嗶はその辺に転がっていた本を拾い上げた。手に取った本は、タイトル『何故地球温暖化は無くならないのか?』だった。そんな物、瑛嗶が邪魔しているからに他ならぬ。まあ当然の様に嘘である。

実際、地球温暖化なんて瑛嗶が動けば一瞬で解決してしまう。まあ一時的にだが。人間は一度どうにかしてもそれを繰り返すから意味は無いのだ。

「んじゃ……問題。この本、『地球温暖化はなぜなくなるならないのか?』の一節にある、「――地球温暖化を解決する方法は無い物だろうか?」というのを聞いて、確実な解決策を具体的に挙げよ」

「んなっ……!」

瑛嗶は解決策が有れば他の誰もがやっている、と思う様な問題を出してきた。そして、その問題には図書委員長、十二町矢文も驚愕だった。寧ろ、このキャラクターの心情を答えよ……という問題位なら軽く答えていたのだが、これは幾らなんでも無理だった。全世界の人間が考えて出ない答えを、ここで具体的にかつ確実な答えを出せと言っ

て来たのだ。答えるのは、無理だった。

「く……分らないわ」

「そうかい。じゃ通るぜ」

「待ちなさい。う私は答えられなかったけど、ちゃんと答えはあるんでしょね？ 貴方が答えられなかった場合は、それは問題として成立していかないわ。ちゃんとした答えを教えなさい」

十二町矢文はそう言つて瑛唄を引き止める。彼女は瑛唄のスキルを知らない。故に、この問いに瑛唄は答えられないと思つたのだ。黒神めだかや雲仙冥利から聞く限りによると、要注意人物とすることだが、そこまで危険な人物には見えなかった。

「簡単だ。俺が、スキルを使えば、全部まるつと解決だよ」

瑛唄はそう言つて、次の階へ続く階段を上つて行つた。

「ソレって……ありなのかしら……」

十二町矢文はそう呟いて、長い髪を揺らしながら机に突つ伏した。

だから、景品を寄越せ。黒神めだか

瑛嗶は第一関門を突破してから、さくさくと進み、次なる関門へと続く道を歩いていた。そして、進んだ先にあったのは第二関門へと続く分かれ道。片や「C」と書かれた道、片や「S」と書かれた道。この文字にはある意味が有るのだろう。たとえば、雲仙冥利の「Child」とか太刀洗斬子の「Sleep」とか飯塚食人や米良孤呑の「Cook」とか上無津呂杖の「Cat」とか廻栖野うずめの「Sweeping」とかだ。まあ当てはめれば様々な委員長勢が出てくるわけだが、瑛嗶としては既に会ったことがある雲仙や太刀洗出なければ良いなあと考えていた。

そして、限りなく雲仙冥利が出てきそうな「C」の方を止めて「S」の方へと進んだ。すると、その先にいたのは球磨川禊達だった。どうやら二手に分かれたようで、そこにいたのは球磨川禊、阿久根高貴、財部真衣、鰐塚処理の4人。

ちなみに、瑛嗶が出発した時点で阿久根は既に出発していた。

「あいっら、まだこんな所でうろろしてんのか。カタツムリかアイツら」

瑛嗶はそう呟いて、欠伸をしながら前へと進む。服の裾をひらりと揺らしながら、何処か不規則な足取りで、球磨川禊達に近づいた。

「はいはい、ごめんよー」

そして、蹴散らして扉を開けて球磨川禊達の前から消えて行った。

『『え?』『あれ?』『瑛嗶さん?』』

そして球磨川の素つ頓狂な言葉は、瑛嗶に届く事は無かった。

◇ ◇ ◇

そして球磨川達を後ろから不意打ちして進んできた瑛嗶の前に現れたのは、瑛嗶の期待もよそに太刀洗斬子だった。選挙管理委員会委員長、太刀洗斬子。学園一働かない、動かない委員長として有名な委員長だ。現に、生徒会戦挙でも働いていたのは彼女では無く、長者原融通だった。

「また面白くない子だ」

「あ、君は〜」

瑛嗶が呟くと、寝がえりを打ってその顔を瑛嗶に向けた太刀洗斬子が声を上げた。瑛嗶を指差して何かを発見した様な、前にも会ったことある人にあつた様な、そんな声を上げた。

「ん?」

「君、前私が寝てる隙に色々と悪戯して来た人でしょ〜?」
「……ああ、そういえば」

瑛噺は太刀洗斬子が寝てる間に以前悪戯した事を思い出した。対して面白い反応でもなかったのを忘れていたのだが。

「私はあの時の恨みを忘れてないんだからね〜」

「あ、そう」

「というわけで〜君はこの先へは通しませ〜ん」

「あ、そう。もっかいやる?」

瑛噺がそう言うと、太刀洗斬子はビクツと反応した。

「と、言うのは嘘で〜、良いよ通つても〜」

簡単に手のひらを返した太刀洗斬子。瑛噺はそんな彼女の事を笑みを浮かべて見下ろして、そのままその部屋を後にした。

そして、瑛噺が去った直後、球磨川達が入って来たのだが、球磨川はこんなにすぐに此処を突破した瑛噺に少し驚くのがあった。



「面倒だなあ……ホントに面倒だ」

瑛嗶は次なる関門へと歩く中、特に面白みもないこの企画に飽き飽きしていた。なので、次の関門が面白くなかった場合、瑛嗶は反則（スキル）を使う事を考えていた。それだけ、この企画が面白くなかったのだ。

「刺激が足りない。面白みがない。面倒臭い」

そう言いながら次なる関門の扉を開ける。そしてそこにいたのは――



「で、めだかちゃん。僕が冗談で考えた冗談の強化合宿って、最後までやったの?」

瑛嗶達が関門をクリアしている時、めだかと安心院なじみは共に温泉施設で寛いでいた。

「まあな。ところで安心院なじみ、瑛嗶さんが私の考えた企画に参加しているが、いいのか?」

「いいのか? は僕の台詞だね。瑛嗶がめだかちゃんごときが考えた程度の企画にちや

んとした形で参加すると思っているのかい？」

「……どういふことだ？」

「そうだね……今頃、瑛唄は飽きて来てるんじゃないかな。委員長勢を使ったみたいだけど、面白くなかったら瑛唄暴れるんじゃないかなあ……面倒臭い事にはとことん無頓着だし、巻き込まれたらその面倒をぶつ壊す奴だし」

安心院なじみの言葉には、前々から瑛唄と付き合つて来た長年の関係から説得力が有った。めだかはそんな言葉に気圧され、少しだけ不安になった。

だが

「めんどくさい。なあめだかちゃん、景品頂戴」

瑛唄はそう言つて二人が温泉に入っている中、現れた。

「!？」

「おや瑛唄。やつぱり飽きたのかい？」

「あー、面倒だ。面倒だから、待つてた委員長長勢みーんな叩き潰してきちやつたよ」

瑛唄はそう言つて、めだかに手を伸ばした。そして、もう一度言う。ゆらりと笑いながら、強大な威圧感を放つてめだかに言った。

「だから、景品を寄越せ。黒神めだか」

まあ黒神めだかの考えた企画だし、こんなもんか：

瑛嗶が太刀洗斬子の関門を悠々と突破した後の事。次なる関門へと続く扉を開けた先にいたのは、保険委員会委員長、赤 青黄。瑛嗶はその容姿と雰囲気から、彼女がなじみの端末である事を知っていた。そしてそれと同時に、瑛嗶はつまらなそうだった表情を、失望と落胆の表情へと変えた。

何故なら、瑛嗶にとつてなじみの端末である事が既にネタバレされたマジックの様な物だったからだ。瑛嗶となじみの長い長い付き合いから、瑛嗶はなじみが端末を作り始めた時からその端末のそれぞれを把握している。10を超えたあたりから少し飽き始め、1万を超えたあたりから既に飽きていて、現在の7億人に達した時には既に興味も持たないモノになっていた。

確かに、端末のそれぞれに自我や記憶や個性、意志、事情、感情、過去、生活、自分という物が有るのは分かるし、7億人全てが別々の人格を持つているのも分かる。だが、瑛嗶はその全てを把握しているし、増える度にその端末を観察したし、スキルを保有している端末には一抹の興味を抱いたし、此処の個性が強い端末には面白みも有った。

だが、それでも瑛唄の興味はもう尽きた。端末の全てを知っているし、把握しているし、解っているし、だからこそ知ってしまったミステリー小説の犯人やオチ、内装を把握したお化け屋敷の様に、つまらないモノに成り下がってしまったているのだ。

故に、瑛唄の取った行動は、関門をクリアするといった物ではなかった。

「面白くない」

赤青黄がその口を開く前に喉を潰し、即座に意識を奪う。目視も出来ない光速以上の速度。スキルという保護が無ければその身体は一気に傷だらけになるだろうその速度は、その部屋の至る所に亀裂を走らせ、赤青黄の身体を吹き飛ばした。

「あーあ、メントクサイ。面白そうだと思っただけどなあ……夢でも現実でも一緒か。まあ黒神めだかの考えた企画だし、こんなもんか……やっぱ、球磨川君並みにド派手にやらかしてくれないと物足りないか」

瑛唄はそう言つて、その手が貫いた赤青黄の喉からずるりと手を引き抜いた。ちよつと殺す必要無かつたな、と考えて一応時間を巻き戻すスキル【跡戻り】バックトラックで蘇生させた。

瑛唄も少しつまらなすぎてナイーブになっていたのだ。少しのストレスと面白い出来事が起こらない最近に不満を持った結果だ。

「さて……進むとしよう」

瑛嗶はそう言ってその脚に力を込め、地面を蹴った。その脚力は、次の通路へ続く扉を吹き飛ばし、瑛嗶の身体を前へと進ませた。衝撃波を周囲に撒き散らし、時計塔を中から壊してしまうかの様な勢いで、真つ直ぐに前進する。

「なっ!？」

「のわっ!？」

「邪魔だ」

そうしていると、すぐに次の関門へとぶつかる。扉を吹き飛ばし、中にいた食育委員
会ダブル委員長、飯塚食人、米良孤吞の二人の間を通り抜け、擦れ違い様に彼らの後頭
部を後ろ手で叩いた。

人間の弱点でもある後頭部への攻撃は、瞬時にその衝撃を脳へと通し、揺らす。結果、
瑛嗶の攻撃で二人の委員長はその意識を一瞬で刈り取られる。

そして、二人が倒れる前に瑛嗶はその部屋を去る。その歩みは一瞬たりとも止められ
る事は無く、その速度は少したりとも揺らぐ事は無かった。

「面白くない」

また一つ、そう呟いて通路を走る。速度は更に上がっている様にも思えた。次々と壁や床に亀裂を入れながら、走る、奔る。

瞬時に次の扉へと辿り着き、扉を蹴破る。中にいたのはかぼちやの被りものをした魔女のコスプレをした女。美化委員会委員長、廻栖野うずめ。

「——がつ!?!」

「お前も邪魔」

瑛嗶は部屋に入った瞬間、一瞬で間合いを詰め、廻栖野うずめの顔をその手でわしづかみにする。そしてそのまま頭を力任せに押し、地面へと叩きつけた。

「面白くない」

瑛嗶はそう呟き、脚を止めた。ガリガリと音を立てて瑛嗶の身体は停止し、ようやくおさまった衝撃波に時計塔がぐらりと揺れた。

「はあ、どいつもこいつもまともな関門用意して無い」

瑛嗶はただ目の前にいた委員長を倒したのではない。その実、思考を読み取るスキル【乙女心は分らない】を発動し、どんな関門をするのかを読み取っていた。その上でつまらないと判断し、倒したのだ。正直に言えば、瑛嗶は少しでも面白みが有れば止まる

つもりだったのだ。

だが、結局用意されていたのは、『カードゲーム』『料理』『妄想勝負』の3つ。瑛嗶にとってはどれもこれもつまらないゲームだったのだ。

「さて……よっ……っ」と

瑛嗶はその場から時計塔の頂上へスキルで移動する。そしてそのままめだかの居場所を探って、その場所へと移動した。



「——だから、景品を寄越せ。黒神めだか」

これが瑛嗶の企画攻略法。そして、これは瑛嗶という人外の人格だった。

君程度が瑛叟の何を知ってるって言うのさ

「……まさか瑛叟さんがここまで飽きっぽいとは思わなかったぞ」

「君程度が瑛叟の何を知ってるって言うのさ。たった2、3年の付き合いで知った風な口をきくなよ」

黒神めだかは手を差し伸べる瑛叟に対し、そう言って少しだけひきつった笑みを浮かべた。そして安心院なじみは少しだけ不服そうにしながら黒神めだかの言葉に喧嘩腰の言葉を返した。

瑛叟はそんな二人のやり取りに心底どーでもいいという態度を取りながら欠伸を一つ。ちなみに言っておくが、ここは風呂場であり、瑛叟の目の前ではめだかとなじみが裸で風呂に使っている状態だ。傍から見れば唯の覗き魔だ。

「で、景品は？」

「あ、ああ。実は此度の企画の景品は仲間と協力して得た友情や絆、という物だったのだ」

黒神めだかが言い終わるまえに、その言葉を止められた。瑛叟が黒神めだかの口にその手刀を突っ込んだのだ。

「オイオイオイオイ、そりやあねーんじゃねーの？　じゃあなにか？　此処までの苦勞は水の泡か？」

「むぐむが……」

「それは割に合わねーよ」

瑛嗶はそう言つて手刀を顎の方へと力を込めることでめだかの頭を風呂の中へと沈めた。ゴボゴボと抵抗する黒神めだかだが、肺活量で言えばかなりの物を持つめだかだ。一日やそこらなら普通に耐えられる。

「まあ、いいんだけど」

瑛嗶はそう言つて黒神めだかを開放する。

「ぶはっ……げほっごほっ！」

「で、副賞は有るんだろ？」

「あ、ああ」

「じゃあ貰おうかな。不知火半袖を」

「「え？」」

瑛嗶の言葉に、めだかもなじみも目を点にして呆然とするのだった。



「で、なんであたしが貴方の物にならなきゃいけないんですか？」

「いやいや、俺の物になれというわけじゃない。ちよいと今日一日付き合えて事だよ」
瑛叟はその後、黒神めだかによって連れて来られた不知火半袖と共に学食に来ていた。不知火は瑛叟の提案に少し不満そうにしながら学食のメニューを喰い漁っている。瑛叟はそんな不知火半袖の体面に座っていつものようにゆらゆらと笑っていた。

「で、何の用ですか？」

「んー……最近、なじみが色々と起こしているんだけど……それもネタバレしてて詰まらなくなつたし、一個先の展開に期待しようかなあつて思つたりして」

「一個先？ なんですか、未来でも見えるって言うんですか？」

「未来位なら簡単に知れるだろ」

瑛叟はそう言った。未来が見えるなら瑛叟にどうやって勝てというのだと思うのだが、瑛叟の見える未来はかなり漠然としている。故にあまり期待出来るものではない。

「で、その未来に何が有つたって言うんです？」

「そうだなあ……ハッキリとした未来じゃないし、何がどう動くのかも分からないけど

……一つだけ、分かつてる事が有るんだよ」

「それがあたしに関係してると?」

「そう。それが、獅子目言彦」

「!?」

瑛嗶の言葉に、不知火は驚愕の顔を浮かべて食べるのを止めた。何故なら、その名前は瑛嗶にとつても馴染み深い物であり、不知火半袖に対してもとても馴染みのある人物だったから。

「なんで言彦の事を知ってる?」

「そりゃあ知ってるよ。俺はなじみ同様、随分と昔から生きてる男だぜ?」

初めて会った時、瑛嗶と言彦は戦った。二度目以降は友人関係として色々な苦楽を共にした。たまに喧嘩して瑛嗶が言彦をフルボッコにした時もあった。瑛嗶の未来知識を利用した料理を振る舞って笑いあったこともあった。

だが、それは結局5000年前の話。瑛嗶やなじみの様な人外でない限り生きている筈が無い。それなのに、獅子目言彦が生きている。それは何故なのか、瑛嗶もまだ把握していない。スキルを使って知っても良いのだが、答えを知るスキルは以前封印したし、ネタバレ続きな最近だったから知るのも気が引けたのだ。

「なるほど」

「で、お前がその件の引き金つぼいからさあ……ちよつと興味が湧いたんだよ」

「ふうん」

「ま、何も話さなくていいし、聞きたくもないから……別に何かしようという訳じゃないんだけど」

そう、瑛夏は何か用があつた不知火半袖をめだかに希望した訳じゃない。ただ単に、少し興味が湧いただけなのだ。

「さて……そろそろなじみもちよいちよい活動を始めるだろうし、お前も善吉推しのキャラだろ？ 精々善吉君のサポートをしてやると良い」

瑛夏はそう言つて立ち上がり、学食を去つた。そしてその後ろ姿を眺める不知火半袖は、手に取つた骨付き肉の骨をバキツと噛み砕く。

そして、それと同時に。半袖の前に安心院なじみが現れた。

「やあ不知火ちゃん。話が有るんだけど」

全ては瑛夏の知る所による。不知火半袖は何もかもが泉ヶ仙瑛夏の掌の上で転がっている様な気がして、少しだけ不気味になるのだった。

多分、安心院さんは……その、瑛嗶さんに恋してるんだと
思うよ？

安心院なじみは、泉ヶ仙瑛嗶の事が好きである。

これは、以前から読者間ではつきりしている事なのだが、瑛嗶はなじみをどう思っているのかは定かではない。別に瑛嗶がなじみを大事に思っていないという訳ではない事は確かなのだが、それも恋愛ではなく親愛というものだろう。

まあ瑛嗶のことは置いておいて、今回は安心院なじみの心情とその行動について少し語って見るとしよう。



「……それで私に何が聞きたいの？」

そう言ったのは、帯刀鞆負。おおよそ感情が希薄な無口少女だ。そんな少女の目の前にいるのは、安心院なじみ。彼女は少し眉を顰めながら鞆負に向かって言った。

「うん。まあなんというか……瑛嗶についてなんだけど」

「……お兄ちゃん？」

「ああ、うんそう。最近瑛嗶と一緒にいるとどうも赤面しがちで……どう思う？」

そう言われて、鞆負は首を傾げた。長い黒髪がさらりと揺れる。安心院なじみの後ろに立つ不知火半纏の様に、よく瑛嗶の後ろで体育座りをしている帯刀鞆負は今、安心院なじみの後ろに半纏がない代わりになじみの前で体育座りをしているようだった。

ちなみに、半纏はなじみが何処かへ追い払った。

「で、俺のトコきたの？」

「……」

「災難だな、半纏。まあそれも面白そうだし、いいけど」

「……分からない」

「そう……まあ僕も分からないし、他の人にも聞いてみようかな」

「……ただ」

「ん？」

分からないと言った鞆負に対し、なじみはその場を去ろうとしたのだが、鞆負の言葉で立ち止まる。

「……私は、お兄ちゃんといると胸があつたかい」

「……そっか」

そう言った後、なじみは踵を返してその場から【アリバイプロック腑罪証明】で去って行った。

◇ ◇ ◇

「さて、どうしたものかな」

なじみはそう言つて廊下を歩く。現在は授業中故に、廊下に生徒はいない。鞆負は唯のサボりだ。

「瑛嗶……っ！」

なじみはふと思ひ浮かんだ瑛嗶のゆらゆら笑っている表情を思ひ浮かべ、ぼふつと赤面した。パタパタと顔に手で風を送り、熱を冷まさせる。

なんとか落ちついた所で、なじみはまた歩き出した。

「うー……これは不味い。早々に何とかしないと」

病気ならスキルでどうとでも出来るのだが、どうやら病気ではない様で、スキルでもどうにも出来なかった。

「ん？」

そこで安心院なじみが見つけたのは、行橋未造。都城王土の親友であり、受信の異常（アブノーマル）を持った心の読める少年だ。

また、今のなじみにとって相手の心情が分かる彼なら、自分の瑛嗶に対する気持ちがかかるのではないかと思い、近づいた。

「ん？」

「やあ」

安心院なじみが近づいた事に気付いた行橋はその仮面を着けた顔をなじみに向けた。

「君は……ああ、安心院なじみさんだね。最近黒神めだかと一悶着起こしてるって言う」「親しみを込めて安心院さんあんしんいんと呼びなさい。そういう君は都城王土君の親友君だろ？」

「うん。まあ王土が一度こっちに帰るっていうからさ、僕は一足先にこっちに来たのさ。」

おかげで周囲からうるさいのなんの」

それを聞いた安心院なじみは、その悩みを利用して自身の悩みを解決しようと画策し

た。

「じゃあその異常アブノーマルをどうにかしてあげるよ。だから少し僕の話に耳を貸してくれないかな？」

「え？ 別に良いけど……」

そう言うと、なじみは行橋の異常性にオンオフを付けた。それによって、周囲の音が聞こえなくなる。行橋はその事実喜んで。

「で、話って？」

「うん。まあ……なんというか、瑛喰の事は知ってる？」

「泉ヶ仙瑛喰の事だよ？ 知ってるよ。王土の心を一回押し折った奴だ」

実際は韃負がやったのだが、唆したのは瑛喰なので、あまり良い思いは持っていない。

「その瑛喰の事なんだけど、どうも瑛喰の前だとよく赤面しがちで……それに、瑛喰といると胸が高鳴るんだ。これってなんだか分かるかな？ 僕にはどうもよく分からない

感情なんだよ」

その言葉に、行橋は絶句した。むしろそこまで分かかって何故それが恋だと分からないのかと。また、聞いていた限りでは目の前の人外は1京のスキルを保有し、何兆年程生きている怪物だ。あの球磨川禊が二つのスキルの限りを尽くして封印したにもかかわらず、3年余りでその封印を破り、またやってきたのだ。

しかも、自分達が手伝っていたフランスコ計画をまた始めようとしているらしい。

その人外の怪物である人物、安心院なじみがまさか普通の少女の如く、恋愛の事で悩んでいるなんて思いもなかったからだ。

「へ、へえ」

「分かるかな？」

「うん」

「まあ分からないよね。さつき聞いてきた鞆負ちゃんでもう9人目だ。えーと、鍋島猫美、雲仙冥加、黒神くじら、古賀いたみ、不知火半纏、志布志飛沫、日之影空洞、宗像形と帯刀鞆負、うん9人だ」

「（くじらつてのは名瀬さんだよね……なんで皆教えてあげないのさ!）」

実際の所、ガチで分からなかったのは鞆負と冥加と志布志位の物だ。あえて教えてあげなかったのは、その3人以外の全員。鍋島とくじらは面白そうという理由で、古賀はくじらに止められた。半纏は何も言わなかったし、空洞と宗像はなにやら言い辛そうにして他に聞いてくれとその場を流した。そんな感じで結局回って来たのが行橋未造。記念すべき10人目だ。

ちなみに、なじみが自身の気持ちの正体を探すべく動き始めてから、今日まで2週間と少し。めだ関門からは1週間経っている。その間で球磨川と宗像が殺し合いをした

り、その結果【大嘘憑オールワイクシヨンき】の存在がバレたり、鶴喰ツクリがやってきたり、善吉がめだかと敵対したり色々有ったのだが、最終的には原作通りに進んでいる。経緯は描写しない。

「ん？ 今君、うんって言った？」

「うん」

「分かるのかい？ 君には。じゃあ教えてくれよ」

そんな彼女に、行橋は仮面の上から顔をポリポリと搔きながら言つて良いのかなあと思いつつ、教えた。

「多分、安心院さんは……その、瑛エミさんさんに恋してるんだと思うよ？」

その言葉に、安心院なじみは笑みを浮かべたまま時が止まった様に固まった。

「……」

「あの。安心院さん？」

「……！」

行橋はそんななじみに話し掛けるが、なじみは何も言わずふつとスキルで去つて行った。

「……不味いことしちゃったかな……？」

残された行橋は、ただそう呟くばかりであった。

全く。ようやく落ち着いてきたのに、またドキドキしてきちゃったぜ

さて、安心院なじみは自身の気持ちちが恋心だと知らされた後、その事実に対し困惑し、スキルで自宅のベットにダイブしていた。枕を抱き締め、脚をバタつかせてもふもふと顔を枕にうずめながら、胸の中でむずむずする気持ちに身を振らせていた。

「~~~~~!!」

言葉にならない声を上げながら、ただひたすらにベットの上で身体をごろごろと転がす。

「つつつ! ……はぁ……」

しばらく転がり続け、段々と気持ちちが落ち着いてきた安心院なじみは枕から顔を離し、ため息をつく。そして不意に壁に掛かった鏡を見た。

そこには、枕を抱き抱えた自分が顔を真っ赤にしてベットの上に座っていた。

「うう……こんな顔じゃ瑛噺に会わせる顔が無いよ」

そう呟くなじみだが、こういう時に空気を読まない男が泉ヶ仙瑛噺という人物である。

「ただいまー」

「うわひやあつ!？」

瑛嗶の帰宅にびつくりして、なじみは思わず毛布にくるまって隠れてしまった。瑛嗶はそんななじみを見つけ、首を捻る。

「……なにしてんの?」

瑛嗶がベットに近づくと、それと一緒に半纏と鞆負も家に入ってきた。半纏は何時もの様になじみの後ろ、この場合はベットの端に立ちつくし、鞆負は部屋の隅にちよこんと体育座りをする。

「な、なんでもない! なんでもないから僕の事は放っておいてくれつ」

「……あ、ああ……そう」

珍しく瑛嗶はそのなじみの勢いに押されてベットを離れる。半纏と鞆負は何も言わない。そうしてしばらく瑛嗶と半纏と鞆負はベットに近づかず無言だった。ただ、ベットにくるまつたなじみだけがたまにギシギシとベットを揺らす。

「………」

「………」

「………」

「……っ」ギシ

なんだこの空気は、と瑛嗶は他の二人を交互に見て視線で助けを求めた。幾らスキルを持つていても、幾ら無敵でも、たった一人の少女の乙女心を理解することは出来なかった。

靱負は視線を向けてくる瑛嗶に対し、どうにかしろという視線を送り、半纏は視線を向けてくる瑛嗶に対して視線を合わせることもしなかった。

結局、瑛嗶は現状を打破出来る方法を思い付かず、どうすればいいのか頭を悩ませる。

「……………はあ」

結局、問題の打破も何も、その問題自体が分からないので、瑛嗶にはどうしようもなかった。ある意味、この世界において唯一瑛嗶を悩ませる問題なのかもしれない。

「ま、いいや。ご飯食べよう」

「……………うん」

「……………」

「……………うう〜」

瑛嗶は一旦考える事を止めた。そしてとりあえずご飯を食べればなんとかこの空気も和らぐだろうと考えたのだ。

「さて、今日のメニューはどうしようか」

瑛嗶はそう言って、ゆらりと笑った。



「で、どうしたんだよなじみ」

「うん、まあちよつと……ね」

「ご飯を食べ終わった後の事。瑛嗶は食器を洗つてからなじみにそう問いかけ、なじみはそう返した。結局、なじみは瑛嗶に恋しているという事実を受け入れたようだ。」

だが、受け入れるのと打ち明けるのは別物だ。安心院なじみが泉ヶ仙瑛嗶にその気持ちを打ち明けるのはきつと、普通の少女が異性に告白するのと同じ様に勇氣と時間が必要になるのだろう。

「そ、まあいいけどさ。さて……それで？ 最近の経過はどうなの？」

「うん。一応、善吉君をめだかちゃんに敵対させる事は出来たし、今は善吉君専用のスキルを半纏に創らせてる所だよ。善吉君がめだかちゃんに恋して……ごほんつ、えーめだかちゃんに恋してる事を自覚させたし、最終的な勝負は次の生徒会長選挙で着けるって事になったよ。その為に今は善吉君強化の修行中だね」

「スキル？ 言つてくれれば俺が創つたのに」

「瑛嗶。瑛嗶式スキルは容量が大きすぎて君にしか使えないよ。球磨川君に渡した」瑛

「オールフイクション 噺式：大嘘憑き」は元々球磨川君が使つてたスキルだから使える訳だし、そんな場合でもない限り君の瑛噺式を君以外が使うのは無理だよ」

瑛噺の言葉に、なじみはそう返す。元々瑛噺式スキルは人外の域を全力疾走してる瑛噺が創りだすスキル故に、そのスキルの重みというか、ハードディスクで言う容量が大きすぎるのだ。結果、無限大の空き容量を持つ瑛噺でない限り、瑛噺式スキルを使いこなす事は出来ない。

条件によつては使うこともできる。それも球磨川禊に与えた「オールフイクション 大嘘憑き」の様に、球磨川禊というハード専門のディスク、という感じに相性と性質が合つていれば使えない事は無いし、黒神めだかの様に自身の容量に見合う形、この場合は2，3割程度の完成度に変えて使うこともできる。

だが、それ以外は恐らく不可能だろう。それこそ、安心院なじみでない限りは不可能だ。

「でも俺が善吉君専用のスキルに細かい調整をすれば使えるんじゃないやね？ 球磨川君見たいに」

「……まあそれなら使えるだろうけど、そうするとちよつと善吉君が有利過ぎるからね。やっぱりノーマルなスキルを創つた方が良いと思うんだ」

「ふーん……まあなじみがそういう考えなら良いけどさ」

瑛嗶はそう言って立ち上がり、なじみの頭に手をポンと軽く撫でた後、そのままソファに寝つ転がった。

「まあ、楽しくやりなよ」

瑛嗶はそう言うだけでそのまま眠ってしまった。なじみは瑛嗶の手が触れた自分の頭に自身の手を乗せる。そしてくしやりと髪を軽く掴んだ。

「……全く。ようやく落ち着いてきたのに、またドキドキしてきちゃったぜ……困ったもんだ」

なじみはそう呟き、瑛嗶の寝顔を見てくすりと笑った。

隙もなければ弱点も無しかよ……!

番外編

「マヤ文明?」

「『そうなんだよ』『2012年12月21日』『世界が滅ぶんだって!』」

「へえ」

瑛嗶は球磨川禊とそんな話をしていた。だが、対して興味を持たなかった。

「『反応薄いね?』」

「だって世界滅亡位、俺やなじみ、お前の【大嘘憑オールドワイクシヨンき】でだって起こせるだろ?」

「『……うん』」

終わり。

そんな番外編は置いておいて、アレからという物、安心院なじみは何処か吹っ切れた様な表情で日々を過ごしていた。瑛唄から見ても、一般生徒から見てもその表情はとも清々しい物で、黒神めだかすらもその様子に眉を顰めて困惑し、球磨川禊も目を見開いて驚愕する程だった。

だが、瑛唄としては最近ずっと難しい顔をしていたなじみが吹っ切れた表情になった事が良い事だと思っているし、悩みが無くなったのならそれでいいかとまた笑うのだった。

「で、善吉君の修行はどうなの？」

「まあ順調だよ。半纏のスキルで善吉君のスキルも出来たし。【デビルスタイル愚行権】って言うんだけどね」

「ふーん。まあ善吉君の提案なんだろう、そのスキル。なら……まあ効果は予想付くかな」
瑛唄はなじみの言葉にそう返し、また笑った。なじみはそんな瑛唄の様子にくすりと笑い、瑛唄の腕を取る。

「ん？」

「どうせまた面白い事を探してフラフラ歩くんだろ？ 暇なら僕に付き合っつてよ」

瑛噺はなじみの言葉に少し考えた後、口端をまた吊りあげる。

「いいよ。付き合つてやる」

瑛噺はそう言つて、なじみと歩き出すのだった。



「で、なんで今日は瑛噺さんが？」

「ちよつと暇そうにしてたからさ」

「そういう事だよ、善吉君」

「はあ……？」

なじみとやって来たのは、人吉善吉の所。ここ2カ月の間、善吉はかなり成長していた。選挙までの残り2カ月、善吉は更に自身の研磨に身を費やすだろう。

現時点で善吉は、デビルスタイル【愚行権】並びに、身体能力の強化、一種のカリスマ性の会得、一定の技術の会得等々色々々と出来る事を増やしている。

また、不知火半袖のスキルリフアルイター【正喰者】を使った強化もいざれ行なわれるだろう。

「で、今日は何をやるんですか？」

「今日は戦闘スキルを上げて貰うよ」

「じゃあいつも通り安心院さんと模擬戦ですか？」

「違うね」

なじみはそう言つてちらりと瑛叟を見た。瑛叟はその視線の意図をすぐに察してまた笑う。そして一步前に出て善吉の前に立った。

善吉は自分より少し背の高い瑛叟の顔を見上げ、その笑みを見た瞬間に状況を察した。そして次の瞬間顔を青ざめた。

「いやいやいやいやいや！ 無理に決まつてんじやないですか!」

「そんなの知らないよ。さあやろうぜ、全校生徒を殺した事のある俺としては——殺してやるくらいしかしてやれないぜ？」

そう言つて瑛叟はゆらりと笑つてバキツと素手を鳴らした。それと同時に、無意識に構える善吉。だが、構えを取るまでの時間が、決定的な隙になる。一瞬というには随分と短い一瞬だったが、瑛叟はその一瞬を衝くことが可能。人吉善吉の構えが構え終わるその寸前、善吉の両拳が善吉の胸の前に置かれるその寸前、瑛叟の手刀は善吉の両拳の間を通り抜け、善吉の喉へと突き刺さる。

「ガッ……ふ……!?!」

「ほらほら、動きが鈍い」

瑛叟は善吉の喉を手刀で貫いた後、時間を巻き戻すスキル【跡戻り】バックトラックを使って善吉の

怪我を巻き戻す。そして一度即死した事で失った意識を、意識を回復させるスキルモルティブレードパンステイビリティ【二度寝出来ない忙しさ】を発動して強制的に回復させる。

「はっ……!?!」

「さて、続けようぜ」

「くっ……このっ!」

善吉はとりあえず距離を取ろうと蹴りを繰り返すが、瑛嗶はその蹴りを自身の手刀で善吉の脚が通る箇所に置くだけで対処する。瑛嗶の手刀が善吉の蹴りに当たる。する

と――

「がアああ!」

善吉の脚には瑛嗶の手刀が深々と突き刺さっていた。

「俺に肉弾戦を挑むのは得策所か……悪手だぜ」

善吉はそんな瑛嗶の言葉に歯を食いしばりながら脚を引っ込め、バックステップで距離を取った。

「くっそ……隙もなければ弱点も無しかよ……!」

「さてね。俺にも弱点くらいはあるかもしれないぜ? それじゃあ続けようか。今から1時間が俺の授業時間だ。必死で喰らいついて見せる?」

瑛嗶はそう言ってゆらりと笑った。それに対し、善吉は歯噛みし、どうすりゃいいん

だと内心で泣いた。

そして瑛暁の授業が終わるその頃には、善吉は身も心をボロボロになって床に這い蹲っているのだった。

世界は平凡か？ 未来は退屈か？ 現実 is 適当か？ 安心しろ、それでも生きること is 劇的だ！

さて、それからまた2カ月。いよいよ選挙の日がやってきた。ここまで色々な事があつたが、それはやつぱり描写されない。何故なら、安心院なじみがフラスコ計画におけるやる気 of 一切を4カ月前から失っているからだ。瑛嗶が認識させた現実が、安心院なじみを満足させた上に完全な恋に落としてしまつているのだから、それもいた仕方ないだろう。

また、それでも黒神めだかが後継者を育成し始めたので、結果的にはフラスコ計画の件は最後の方までやつちやおうという感じに収まり、現在に至る訳だが、正直瑛嗶にとつてもなじみにとつて最早「完全な人間作り」なんて物は興味の対象外。まあ出来たら出来たで良いかな、という感じにしかとらえていないのだ。

そして、そんなやる気しか持たないなじみがトントン拍子に計画を進め、おおよそ原作通りの展開が進んで行つた。体育祭では黒神めだか対全校生徒という綱引き大会が開かれ、結果的には瑛嗶が介入して一人勝ち。文化祭では善吉のスキル、デビルスタイル「愚行権」の影響も有つてピーストアイドル、須木奈佐木咲、自傷声優、八人ヶ岳十字花、神より神な

音楽家、不老山ぞめきの三人のトリオで生まれたバンド、『キヲテラエ』という方向性も異常性も何も無い普通のバンドと生徒会の善吉、阿久根、喜界島の三人で組まれたバンド『めだかボックス』がバンド勝負で戦ったり、球磨川禊がめだかと善吉が対立したことで結成した裸エプロン同盟が委員会連合とトランプ勝負を仕掛けて負けたりと、色々な事があった。

が、それも過去の話。結局の所普通の青春が普通に過ぎ去っただけの事。そして、4カ月前の対立の決着が今日の選挙で着く。そして、それで安心院なじみの企みだった物も、フラスコ計画も終わり。結果的に得られるのは、なじみの病の克服や新たな感情の誕生。それに、黒神めだかの後継者とか新たな生徒会長とかそんな物だ。

やけに長い4カ月だったが、これで終わる。瑛嗶としては、さっさと終わらせて次の章へと移行して欲しい所だ。

「それじゃあ第百回、生徒会長選挙を開始ま〜す!」

長い前置きはさておき、そんな間延びした声から始まった生徒会長選挙。司会を務めるのは、選挙管理委員長の太刀洗斬子。普段から必ずと言って良いほど働かない彼女が、その二本の脚で立って働く姿は全校生徒が身に来る程の奇跡であった。ある意味この件は瑛嗶が動くという奇跡と太刀洗斬子が動くという奇跡という二つの奇跡が起こっていた。

「で、今回の選挙に出馬した生徒はくく3名でくくす。まずは1人5分間でスピーチをしてもらってくくその後この場にいる生徒から投票を集めまくくす。集計後発表という形になりますねくくく」

そう言つて斬子は何処かから持つてきたホワイトボードに出馬者を表記する。

「今回の出馬者はくく黒神めだかさんとく人吉善吉さんとく体験入学生の5名1組でくくす。それではまず、体験入学生の5人から順にスピーチをしてもらいましよくく、どうぞくく」

そうして引つ込む太刀洗斬子。そして替わる様に5人の体験入学生達が出てきた。マイクを持つのは財部真衣。

「えくく……私達はこの学園に体験入学して思ったことがあります。この学園は……最低です♪」

財部は良い笑顔でそう言う。そして続けてその理由を述べていく。

「武装した生徒達による取り締まり活動、特待生と一般生徒の圧倒的格差、ことあるごとにバトルを促す競争社会、崩壊される校舎、トラブル不介入を貫く教師陣」

「より最低なのはそんな現状をよしとしているあなたたちの意識の低さだ」

『これらを踏まえて立てたマニフェストは「生徒会制度の廃止」です』

「多数決は話し合うことの放棄で自分たちは話し合つて少数意見を貴重に扱いどんなことでも結論が出るまで全員で話し合ふんです。現実的にはどうしても代表者は必要ですが、それはクラスの日直のように全校生徒の持ち回りとする事で解決できると思います！」

交互に話す体験入学生達。最低です、が財部で、それ以降は上から喜々津、鰐塚、希望ヶ丘、与次郎だ。正式に名前が出たのは多分此処が初めてだろう。

このスピーチに拍手は無かったが、安心院なじみは観客席からナイス詭弁だと述べた。

そして次に出て来たのは人吉善吉。スピーチの内容は、まず体験入学生のスピーチを肯定し、次に自分の意見を述べた。そして最後に皆でめだかちゃんに勝とうよ、と言つて終わった。

次に出てきた黒神めだかは、まどろっこしい事は言わずにこう言つた。
「私は黒神めだかだ。見知らぬ他人の役に立つ為に生まれてきた」

そして続く投票も、さくつと終わり、直ぐに開票になる。

「さて、それでは発表しま〜す！ 第百代生徒会長は〜得票率62%で〜人吉善吉

さんに決まりました！頑張ってね！」

その言葉に、驚愕の顔を上げたのは人吉善吉。何故なら、黒神めだかが勝つと誰もが思っていたからだ。

「は、はは。これは随分と差をつけられてしまった物だな……」

かくゆう黒神めだかも自身の勝利を確信していた。故に、その表情は余裕を見せようとしながらも、驚愕に震え、汗が出ていた。

「はい、おしまい」

そして、どこからか琰嗶の声が聞こえたと同時。黒神めだかは土下座で負けを認めた。いた。

琰嗶式スキルの一つ、時間を巻き戻すスキル【跡戻り（バックトラック）】の反対、時間を早送りにするスキル【先贈り^{スキップビュー}】が発動し、黒神めだかの震えた台詞から5分後に時間が飛んだのだ。

つまり、瑛噺と読者以外の登場キャラクターは全員、人吉善吉による黒神めだかを改心させる説得を見たのだ。結果、黒神めだかはその心を動かされ、負けを認めた。

瑛噺と読者はその結果に跳んでしまったのだ。

「さて、それじゃあさくつと終わらせよう。安心院なじみが現実を認識していない体^{てい}で此処まで来たんだから」

その言葉が終わった後、安心院なじみが動きだした。ちなみに、瑛噺はなじみの隣に座っている。

「無駄に長生きしちまったぜ（棒）」

なじみの棒読みな台詞と同時、なじみは自身の指を頭に向けて自殺を図る。

だが、その自殺は黒神めだかによって止められた。黒神ファントム通常版だ。故にその身体はボロボロになっている。

「安心院なじみ、貴様やはりそうなのか！ やはり！」

「そーだよー、僕は現実を現実と思えない病に罹ってるんだー、僕には目的なんてないしーこの世界は本気で漫画の世界だと思ってるしー、フラスコ計画も現実を認識する為の手段に過ぎなかったんだー。でももう見えちゃったー、善吉君がめだかちゃんに勝つ

ちやつたが故に見えちやつたー、完全な人間作りの完成が見えちやつたー、だからもう生きてたつてしようがないよね」

「つー」

棒読みでそんな事を言う安心院なじみに、眼を逸らしながら薄ら笑いを浮かべてそんな事を言う安心院なじみに、黒神めだかはげんこつを落とした。

「……痛い」

「何が三兆年生きただ！ 何が無駄に長生きしちまつたぜだ！ お前は私達と同じ唯のガキだ！ そして、そんな阿呆な妄言に私の善吉を巻き込むな！！ 負けて欲しくて善吉を鍛えていたお前を、善吉が許しても私が許さない！」

なじみは片手で頭をさすりながらめだかの言葉を聞き流す。めだかはそう言った後、扇子に何やら文字を書き、なじみに叩き付けた

「私も今回の事で色々反省した！ さしあたつて貴様は私と一緒に一年生からやり直せ！ クラスメイトとして私が貴様に現実を教えてやる！ 貴様の次の「出来ない」は自殺だ！ 徹底的に邪魔してやるから覚悟しろ！」

「あー痛い……たんこぶ出来てる……？」

なじみは自身の頭に来たたんこぶをさすり、めだかの言葉を聞き流す。

「世界は平凡か？ 未来は退屈か？ 現実 is 適当か？ 安心しろ、それでも生きること
は劇的だ！」

黒神めだかはそう言つて安心院なじみを見下ろした。だが

「あ、終わった？」

安心院なじみは薄ら笑いを浮かべながら、そう返した。

「正直さー、僕も理不尽に殴られてちよつとイラツと来たんだけど、瑛嗶がそれ以上にイ
ラつているから我慢するよ。早く終わらせろつて視線が痛い痛い。それで、なんだつ
け？ 生きる事は劇的だ？ ああ、うんそうだね。だからな n……………全く、ま
まならねーな現実 is、まるで週刊少年漫画だぜ」

安心院なじみは瑛嗶が創つたキャラを作り替えるスキルキャラクタープレイク「大根厄者」を発動して嘘泣
きの涙を流してそう言った。だが、その直前の台詞でもう台無しだ。

「…………アレ？」

「…………安心院なじみ。貴様、シユミレーテッドリアリティは…………？」

「あ…………うん。それももう治つてるぜ」

こうして安心院なじみのプラスコ計画編もとい、台無しの生徒会長選挙編は幕を閉じたのだった。

そろそろ面白そうな事件が起きてもよさそうだけど、どうなるかな

さて、その後の事。なじみの病治つちやつてるぜ宣言を聞いた後、黒神めだかは安心院なじみのフラスコ計画が瑛叟によつて既に頓挫している事を知る。そして、今まで後継者云々で動いて来て、最終的には今期中に安心院なじみを叩き潰すとまで気合を込めて宣言した自分はなんだったのかとその場でo r zのポーズをとつて落ち込み、作業的な感じで生徒会長との座が黒神めだかから人吉善吉に受け渡された。

人吉善吉もそのめだかの様子にとても同情し、生徒会長としての座に着いた。

その後、人吉善吉はすぐに他の生徒会員を勧誘。結果的に第100代生徒会のメンバーは、善吉、黒神くじら、江迎怒江、鰐塚処理、そして虎居碎というフラスコ計画の第一検体生徒になった。

そして、委員会連合に合併した球磨川禊達裸エプロン同盟は目的も果たしたので解散、委員会連合からも分離した。今では球磨川達も生徒会役員では無くなったのでとても自由に生活している。

最後に、瑛叟となじみはどうなったかというと――



「で、なんでなじみはそんなイマドキな格好してんの？」

「似合ってるのかな？」

「いやまあ似合ってるけどさ」

瑛唄はいつも通り面白い事を探してフラフラと歩きまわり、なじみは自分の恋の為にいろいろと手を尽くし始めた。

具体的に言えば、現在のなじみの格好は制服というよりは私服といった方が正しいのだ。膝上位の黒いワンピースに黒いニーソックスワンピースの上からは明るい色のジャケットを着ていた。そして髪型は何時もの様に瑛唄のあげたりボンを使って縛っている。ただちよつと違うのは前髪やや右を髪留めで留めている事。いつもと違って少しだけ印象が違う。

「そう？ ふふふ、なら良いんだ」

「？」

瑛唄はそんななじみの様子に頭上！？を浮かべて首を傾げる。やはりというか、瑛唄にも乙女心は理解出来ないものだった。

なじみはそんな瑛嗶の様子に満面の笑みを浮かべて足取り軽く瑛嗶の先を歩いてい
る。瑛嗶はその後ろをふらふらと気だるそうに着いていつている。

「ん？」

「どうかしたのかい？」

瑛嗶が声を上げて窓の外を見る。なじみは瑛嗶の声に立ち止まり、同じ様に窓の外を
見た。

「ああ……めだかちゃんか」

「なんでちよつと不機嫌そうなんだよ」

「君がめだかちゃんを見てるからだよ」

「ふーん……」

瑛嗶はそう言いつつ、やっぱり意味分からないという顔を浮かべながらめだかを見
る。黒神めだかはその視線の先で様々な運動部を相手に無双していた。

「最近じゃめだかちゃん変わったねえ」

「そーだねー、髪型も短くなつたし。瑛嗶はあーゆー髪型の方が好き？」

「いや、別に。どっちかというとなじみくらい長い方が良い」

「そ、そう！ それは良かった！」

なじみは突然の瑛嗶の何気ない言葉に頬を少し紅潮させて喜ぶ。だが、瑛嗶はテン

シヨン高いなじみ、と思う位でその理由までは理解していなかった。

いや元々瑛嗶は人の気持ちには敏感だし、恋愛に疎いわけでもないし、鈍感なギャルゲの主人公みたいでもない。だが、かなり昔から一緒にいる瑛嗶的の安心院なじみに対する印象は恋愛するキャラではない、というものなのだ。

よつて、恋する乙女みただなあと思い付いたとしても、マジで恋する乙女になつているとは思えないのだ。

結果、瑛嗶は安心院なじみに対してのみ、鈍感ギャルゲ主人公と化してしまふのだ。

「さて……そろそろ面白そうな事件が起きてもよきそうだけど、どうなるかな」

瑛嗶はそう呟き、めだかへの視線を切る。そしていつものように、ゆらりと笑つてまた歩き出す。

「ねえ瑛嗶、僕といるのは面白くないのかな？」

「お前といるのは何と言うか……日常の一片みたいな感じになつてるからなあ」

「……そう、まあいいかな」

なじみはその瑛嗶の答えに少し不満気に、そして少し嬉しげな表情を浮かべる。そうしてまた歩く瑛嗶の隣で一緒に歩くのだった。

——だが、こんななじみと瑛叟のこの関係は長くは続かない。瑛叟がなじみの気持ちを知るその時、既に二人は手遅れの所までやって来ているのだから。

そして次なる事件は起こる。黒神めだかに絡みつく、漆黒の花嫁がすぐそこまで迫って来ていたのだから。

さて——こんな展開もまた、面白い

しばらくして、瑛噺となじみもほのぼのとした空気を纏いつつ穏やかな日々を過ごしていた。生徒会長選挙も終わって、人吉善吉と黒神めだかのくだらない対立も瑛噺やなじみ、球磨川達裸エプロン同盟のおかげも有り、どうにか終わりを迎えた。

そのせいかどうかは分からないが、人吉善吉は黒神めだかに恋していた事に気付いたし、安心院なじみは泉ヶ仙瑛噺に恋していた事に気付いた。余談かもしれないが、球磨川禊は妙なカリスマ性を見せつけて後継者候補生の一人、財部真衣に懐かれた様だ。

それからという物、特にこれといった事件や騒ぎは起こらなかった物の、黒神めだかが自分の生まれてきた意味を探すべくはっちゃけまくっているので、箱庭学園の部活動や委員会の方では何かと小さな喧騒が生まれている。瑛噺やなじみはそんな小さな喧騒はどうでもいいとばかりに1年13組の教室で机を合わせていた。

何故1年13組の教室なのかと問われれば、結局あの選挙の時、めだかが言った事は人吉善吉によって実現されたからだ。安心院なじみは1年13組の生徒として箱庭学園に編入する事になり、瑛噺もまたなじみのお目付け役として留年ならぬ、降年する事になった。

とはいえ、瑛噺は面白い事が異常なほど好きな、言彦曰く娯楽主義者だ。今の様な刺激の無い日々は少し不満気だった。

まあ、なじみからしてみればそんな瑛噺の表情もいいなあと溜め息を吐く所なのだが、やはり瑛噺が物憂げな表情を浮かべていると少しだけ胸が痛んでいるようだ。

とそこで、なじみは瑛噺との過去を想い浮かべて話題を探してある事を思い出した。

「そう言えば瑛噺。君さ、僕が昔『出来ない』事探しに夢中になつてた頃一時期妙な事してなかつたっけ？」

「妙な事? —— ああ、そういえば」

なじみの言葉に、瑛噺はゆらりと笑った。なじみはそんな瑛噺の表情に眉を顰めて首を傾げたが、ゆらゆらと笑う瑛噺の表情を見ると、少しだけ胸が温かくなる。

「……やつぱり、恋しちゃつたんだなあ……」

ぼつりと呟いた言葉は、瑛噺には聞こえない。

「ん? 何か言つたか?」

「いや、なんでもないよ。で、何をしていたんだ?」

なじみは呟きを悟られないように話を誤魔化する。瑛噺はそんななじみに疑問を持たずに過去の事を話そうとした。

「あ……あの時はなじみも別の事に夢中で暇だったからね。ちよつと俺も新しい物を

作ってみようと思ったんだよ。流石に創る物がスキルだけじゃつまらないからさ」

「なるほど」

「それで——？」

瑛嗶は続きを話そうとして視線をなじみから教室のドアに向けた。なじみはどうしたのかと同じ様に視線をドアに向ける。すると、視線の先にあつたドアは第三者によつて開かれた。

そのドアを開けた先に居る人物に瑛嗶はまたゆらりと笑う。

「すまない、安心院さんに瑛嗶さん。少し頼みたい事があるのだが」

視線の先に佇んでいるのは、黒神めだか。最近部活動や委員会を騒がせている張本人であつた。



「漆黒宴？」

なじみはめだかから頼まれた事にそう言った。

漆黒宴、それは黒神めだかの婚約者を決める為に、月水会と呼ばれる組織が執り行なう婚約イベントだ。過去に一度既に行なわれており、その際の優勝者は鶴喰梟。安心院なじみの見つけてきたダークヒーロー、鶴喰鳴の父親である。

また、その鶴喰梟及び第一回漆黒宴の婚約者達は全員殺されており、結局黒神めだかの婚約は無かったことになった。そして今、第二回漆黒宴が開催されようとしているのだ。

「そう、さきほど月水会の人間が弟君に招待状を渡しに来たのでな。私が代理で参加しようと思うのだ。それで当たって参加者を他に4名集めなくてはならなくなったのだ」

「なるほど……瑛喰?」

「ん? なんだよ」

「いや余り反応が薄いから珍しいなあって」

なじみは余り反応の無い瑛喰に疑問を抱きつつ、そう言った。瑛喰は明後日の方向を見ながら少し考えるようにして、数秒黙る。そしてふとなじみに視線を戻してまたゆくりと笑った。

とても面白そうに、楽しそうに、笑って、こう言った。

「いや、何でもないよ。それで、俺達に助けを求めてきた訳か」

「ああ」

「他の二人は？」

「二応球磨川と不知火当たりに話を持っていこうと思つている」

瑛唄はソレを聞いて、まあ妥当な線かと頭の中で結論付けた。なじみも断るつもりは無いようで、瑛唄も参加することにしたようだ。

「それじゃあ此処で待つていてくれ。弟君には不知火と球磨川を此処に連れてくる様に言つてあるからな」

黒神めだかはそう言つて、適当なイスに座つたのだつた。



「——漆黒宴、ね。それも月氷会と来たもんだ」

瑛唄はなじみとめだかが横で会話している中、窓の外を眺めつつそんな事を考えていた。先程、黒神めだかが来るまでの会話。その続きを語るとするのなら、瑛唄の創つた一つの過去を記す事になる。

漆黒宴、このイベント自体に瑛暎は何の関わりも持たない。だが、月水会とその婚約者……この2つの要素には少しばかり関わりがあった。

今から20年以上前の事、瑛暎は黒神めだかすら生まれていない時代にはんの少しの気まぐれを起こした。その結果、出来上がったのが月下氷人会。略して月水会である。

当時の若き黒神舵樹と7つの分家の当主、そして月水会の会長の座に一時的に就いた瑛暎の三つ巴の対談で本格的に月水会が出来上がり、その後瑛暎はその座を退き、後は放置。

だが7つの分家でそれぞれ後継者である子供が生まれた時、暇すぎた故に見に行つた事もある。その子供に名前を付けた事も有つた。

が、それ以降は何も干渉していない。元々、月水会は何を目的に創つた訳ではないし、漆黒宴など考えてもいなかった。

だが、瑛暎の後を継いだ月水会メンバーは時が経つに連れて一つの指針を創つたのだろう。それが、非常に関わりの深い黒神家と7つの分家を繋ぐ婚約イベントを取り仕切る事。そうして開催されたのが漆黒宴。

瑛暎はそんな時の歴史を思い、素直に面白いと思つた。ゆらりと口端を吊り上げ、巡り巡つてまた自身に繋がつたこの因果を何の運命かと笑つたのだ。

「さて——こんな展開もまた、面白い」

ゆらりと笑った瑛嗶の呟きは、球磨川禊達が教室のドアを開けた音にかき消されたのだった。

イカサマという言葉を知れ

結局、黒神めだかによって集められたメンバーは以下の4人。

泉ヶ仙 瑛 暇 報酬：観光

安心院 なじみ 報酬：暇潰し

球磨川 禊 報酬：めだかの裸エプロン

不知火 半袖 報酬：満漢全席

瑛 暇の報酬は最初、世界の半分という事だったが、些か用意し難い報酬なので、最終的に漆黒宴そのものへの観光を報酬とする事で納得することになった。

漆黒宴の会場は何処だか知らないが、この4人と黒神めだか、鶴喰鳴の6人が今回の漆黒宴における黒神めだか陣営の出場者である。

そして、その4人を前にして当事者である鶴喰鳴が抱いた感想は、

「(オールジョーカー!?) おっとなげねー!」

これに尽きる。それもその筈、1京ものスキルを保有する人外、安心院なじみ。人類最弱にして最凶の過負荷、球磨川禊、人吉善吉の親友にして脅威のスキルを持つ女、不知火半袖。そして最後に、前の三人が霞んで見える程の最強のカード、世界最強の娯楽

主義者、泉ヶ仙瑛嗶がいるのだ。寧ろやり過ぎと言っても過言では無い。

そして現在、この6人は漆黒宴の会場である空母ブラック、通称黒船と呼ばれる船の上に来ていた。月水会のメンバー、兎洞武器子のコレクションの中でも最大の一品らしい。コレクションと名付けられているのなら他にも色々品々があるのだろうが、瑛嗶としては特に興味もなかった。

「(……気配が7つ。でもこれは違うな……『あの子達』じゃない)」

瑛嗶はそう思い、船の上から動かない。そうしているとめだか達は船の中に入って行き、瑛嗶は置いていかれた。安心院なじみすら気付かなかった瑛嗶を置き去りにした事実。

それほどまでに、瑛嗶は気配を消していたのだ。海の上だから冷たい風が吹き荒ぶ中、瑛嗶は着物を揺らしてゆらりと笑った。そして少しだけ空を見上げた後、めだか達を追って船の中へと入って行った。



『それにしても』『めだかちゃん本当に御令嬢だったんだね』『七人の婚約者とか』『妬ましいなあ』

船内の通路を全員で通る中、雑談というか状況確認というか、そんな会話が繰り広げられていた。球磨川禊のそんな台詞はとても軽快な口調だったが、それでもめだかのテンションはあくまで真剣だ。

「貴様となら明日にだって結婚してやるよ球磨川。だが今日はどうしても気が進まん理由があるのだ」

「理由？ まだ家に帰りたくないからじゃないのかい？」

めだかの言葉に反応したのは安心院なじみ。現在はどこか別の制服を着ているが、いつも通り何処か余裕のある表情を浮かべながら歩く様はやはり別次元の雰囲気を感じさせた。

そしてその言葉に対してめだかは、

「いやまあそれもあるのだが、私は漆黒宴自体気に入らないのだ。本家や分家だのを引つ掻きまわすだけの醜い宴など、二度と開催出来ぬ様にしてやる」

と言った。漆黒宴に対して多少の知識しか持たないこの場にはない瑣叟を除いた5人は何気に意気込んでいた。やはりというか、黒神めだかに魅せられたという面では似通っているのだろう。安心院なじみは別だが、めだかの事はある程度認めているよう

だ。

「三年前の出席者は私の父を含めて全員亡くなったんだっけ……」

「そう。だがまあなにせよ、まずは勝たねばならない。黒神めだかの新たな婚約者達に勝たねばな」

黒神めだかはそう言つて、眉をキリツと吊り上げた。あくまでも自分の将来の為、そしてこの先の黒神の未来の為に戦いに来たのだ。あまり気楽な気持ちで挑める戦いでは無いのだろう。

そして、黒神めだかは辿り着いた部屋の中に入る。すると、その中には合計『7人』の人間がいた。が、それだけならばまだいい、だがその中に居た7人を見て全員が驚愕した。

何故なら——

「はいそれダウト」

「くっ……何故分かるのですか……」

「3」

「ゆずりは枉、それもダウト」

「……………」

「オイオイオイ！ お前なんでさつきからまるで見えてるみたいに！」

「ハハハッ！ 決まってる、イカサマという言葉を知れ」

『オイ』

置いていかれた泉ヶ仙瑛嗶と婚約者候補であろう7人が、地面に座って仲良くトランプをしていたからだ。しかも、瑛嗶はイカサマまでしている。

めだか達の驚く所は、瑛嗶が自分達より先に此処に居る事ではない、スキルという武器がある以上それくらい可能な事は認知済みだ。問題は何故瑛嗶が婚約者候補とあたかも知り合いであるかの様に遊んでいるのか、全く分からなかったのだ。

「なあ、そういうえばそろそろめだかちゃん達来るんじゃないかね？」

「おっと、それでは私は入り口付近で寝そべって待機するとします」

「とうか潜水、お前の踏まれフェチはどうにも理解出来ないんだけど」

「まあ人の性癖はそれぞれですし……って、あ」

『え？』

瑛嗶を含めた7人はめだか達を見つけて固まる。どうみても登場シーン台無しだ。漆黒宴だなんて随分と禍々しい名前のイベントに意気込んでやってきたというのに、このテンションでは随分と肩の力が抜けてしまう。

とてもじゃないが、随分お気楽な雰囲気になってしまった。

「やあやあ、随分と遅かったねえめだかちゃん達。遅すぎてダウト20回戦目に突入する所だったぜ」

だが、そんな雰囲気の中瑛嗶はゆらりと笑って、そう言ったのだった。

うん。僕は君のそういう所が好きだよ

瑛嗶と6人の婚約者候補は以前からの知り合いであった。

月氷会を創設した関係も有り、瑛嗶は黒神家の分家全てにある種の交流を持っている。とはいってもほんの少し程だが。

だが、それでも瑛嗶と7つの分家の関係は随分と深い繋がりになっていた。更に言えば、瑛嗶は幾つかの分家の後継者である子供に名前を付けた事もあるのだ。所謂名付け親。

という事は、瑛嗶は知っているのだ。この場に居る彼ら6人が黒神めだかの婚約者候補『では無い』事を。

影武者、代替品、代理人。言い様によつては色々と言えるが、瑛嗶達とめだか達が会見た時点では、所謂本物が来るまでの代理人が当てはまる。

そして、現在でいうならその役目は影武者に変化する。何故なら、

「最後にスキルを数えるスキル〔指折カウントアップり確認〕。刀剣系スキル×100、格闘系スキル×100、魔法系スキル×100、精神系スキル×100、生物系スキル×100、ボス系スキル×100。結構使ったね、どっちが勝つてもおかしくない名勝負ばかりだった

ぜ」

安心院なじみによってその7人全員が地に沈む形になってしまったからだ。本人の代わりに倒される役目、とくれば影武者が何よりもピッタリ当て嵌まるだろう。

ちなみに、瑛嗶は元々めだかの側だ。つまり、影武者7名がやられていく様を特になんの干渉もなく、特になんの感傷もなく、特に興味もない様子で観賞していた。

そしてかの言彦には対して効かなかったスキル弾幕は、しつかり影武者全員を圧倒的に叩きのめしたのだった。

「で、そこの変態スク水幼女ちゃん。あの子達はまだ来て無い訳？」

「兎洞武器子ですよ、泉ヶ仙瑛嗶様。ええ、実は全員寝坊で遅刻です」

瑛嗶の言葉に武器子は些か謙遜した様な、敬服している様な態度でそう返した。どうやら創設後に放置したとはいえ、月水会創設者に対しては中々に尊敬心を持っているのだ。

と言っても、瑛嗶がそれで月水会に味方するという訳ではない。武器子もそれは分かっているし、瑛嗶の性格と実力も同じ様に月水会の中では伝わっているのだ。寧ろ、敵対しない様にするのが一番ベストな方針であると考えている。

「なるほど……えーと、俺が名前を付けたのは……生煮、もぐら、かけがえの三人だったか……三人とも同じ様な由来なんだよね……」

生煮、もぐら、かけがえ、この三人は未だに登場していないが、瑛嗶が名前を付けた今回の婚約者候補の内の三人だ。そしてその三人の名前を由来を記すなら、こうだ。

見に行つた時、まだ生のまま煮えていないコンビニのおでんを食べていたから、生煮。

生まれた日に瑛嗶がモグラを見たから、もぐら。

会つた時着なれていない洋服のボタンを掛け違えていたから、かけがえ。

本当にどうでもいい由来の下名付けられているのだ。こんな由来で名前を付けられた三人の婚約者達にはとてもじゃないが同情を隠せない。とはいえ、それでも瑛嗶は名付け親、三人の幼子達はそんな瑛嗶に良く懐いた。遊んでとせがみ、構つてとぐずり、瑛嗶が帰ろうとすれば泣いて引き止める。そんな子だった。

瑛嗶の前では、黒神という闇に関わる分家の子としては異常に、随分と平凡かつ普通な子供だった。

「……あとは喪々と常套、遂だったか。面白い子であればいいんだけど」

「まあ……そこそこ楽しめるメンツではあると思いますよ？」

「えーと、話を遮るようで悪いんだけど、少し状況を説明してくれないかな？ 瑛唄？」

そこへ割りこんできたのは先程まで影武者6人を叩きのめしていた安心院なじみ。武器子と瑛唄があたかも知り合いであるかのように会話し、幾らか瑛唄が武器子の上司であるかのような雰囲気^{スッ}が少し疑問だったのだ。

更に言えば、そんな雰囲気でも瑛唄が他の女性^{スッ}を話しているのを見て少し邪魔したくなつたのも割り込んだ理由に入っている。

存外、安心院なじみという人間は恋に一途でありながらも少しばかり独占欲が強い様だ。また、初恋は実らないというジंकスの話を鍋島猫美から聞いた帯刀鞆負からなじみは聞いていたので、そのせいも有ってかその独占欲は表に出るようになっていく。

「なじみか。ああ……ん？ とりあえず甲板に本物来たみたいだし全員そっち送つてから話そうか」

瑛唄はそう言うと、スキルでなじみ以外の全員を甲板に送った。部屋に静まり返る沈黙が、二人を包みこんだ。

「さて、話そうか。実は月水会って俺が創った組織だったんだよね」

「え？」

「ほら、めだかちゃん^{スッ}が来るまでの話で俺がちよつと前に何かしてたでしょって話^{スッ}が上^{スッ}が^{スッ}つ^{スッ}た^{スッ}じ^{スッ}ゃ^{スッ}な^{スッ}い^{スッ}か？ その^{スッ}答^{スッ}え^{スッ}が^{スッ}コ^{スッ}レ^{スッ}だ^{スッ}よ。俺はお前が目的に夢中になつてた時期に

月水会を創つてたんだよ」

瑛嘎の台詞に、なじみは眉間を抑える様にして短く息を吐いた。そして少し呆れた後、ふと笑つて瑛嘎に笑い掛けてこう言った。

「相変わらず馬鹿だねえ瑛嘎は」

「40億年位昔から分かつてただろう？ 生粋の娯楽主義者の瑛嘎さんだぜ？ 馬鹿で

結構、その方が面白い」

「うん。僕は君のそういう所が好きだよ」

なじみはそう言つて、瑛嘎にくるりと背を向けた。そして、そのまま先に行くと言つて【アリバイプロック腑罪証明】を使用し、めだか達を追う様に甲板へと転移していった。

その際なじみの長い髪の間から垣間見えた耳が、真つ赤に染まっているのが瑛嘎には見えた。読者視点で言うのなら、別に恋愛的な意味では無いが瑛嘎に向けて好きと言つた事が恥ずかしかつたのだろう。

だが、なじみという人物に対して、瑛嘎は何処までも鈍感だ。故に、

「耳真つ赤だつたな……風邪……船酔い……うーん、スキルで解決しそうだなあ……まあアイツの耳なんて普段髪で隠れてんだし、元々かもしれない。気にするまでもないか」

瑛唄はただ、そう呟くばかり。

そしてそのまま部屋の中で一分程ボーっとした後、なじみ同様に甲板へとスキルで転移するのだった。

◇ ◇ ◇

瑛唄が転移した時、甲板に居たのは黒神めだかと本物の婚約者達と武器子だけ。首を傾げる瑛唄であるが、その視線は本物の婚約者の内の一人、桃園喪々に向けられていた。まるで園児の様な容姿をしているがその雰囲気はその場にいる婚約者候補全員よりも大人びている。というか、その場にいる婚約者候補は全員——

——女だった。

いやまあそんな事はどうでもいいのだが、瑛唄の視線はその桃園喪々の手元にあった。転移していったなじみ含む球磨川、ダブル不知火、鶴喰鳴のカードがその手に握られていたのだ。ちなみに、不知火半纏に関しては参加者ではないがなじみの後ろに常に居ることから付いて来ていたのだ。

「……ああなるほど、久々に見たから忘れてたぜ。そういうことか、納得納得、面白い

ねえ。^{スタイル}言葉遣いか。便利だよねアレ」

「む、貴様も黒神めだか側の人間か？」

「ああそうだよ。随分と捻くれた方向に成長したみたいじゃないか、喪々ちゃん」

「その名で吾輩を呼ぶ、という事は貴様が泉ヶ仙瑗叟であるか。なるほど、確かに面妖な人材である」

桃園はそう言つて舌を出す。血色の良い赤い舌には『名』という文字が刻まれていた。瑗叟はソレを見てまたゆらりと笑う。そして同じ様に舌をべろつと出した。その舌の上には別に文字が刻まれている訳ではない。

「その『名札』に全員封印した訳だ？ いやはや、恐ろしい力だね」
「その割にあまり驚いてはいないようだな」

瑗叟はその言葉に、ふと笑つて視線を動かした。その先は、婚約者候補一人一人に向けられている。黒神家の鶴喰を除いた6つの分家それぞれの代表。

贄波、叶野、潜木、寿、桃園、杠。この六家の代表である彼女達をそれぞれ見ていた。「贄波生煮、叶野遂、潜木もぐら、寿常套、桃園喪々、杠かけがえ……鶴喰も合わせて感想を持つなら……全体的に皆面白い人間に育つたんだねえ。うん、とても捻くれた性格だぜ」

「いや、瑗叟さん。今まで黙つて聞いてたけど私が全然話に付いていけてないぞ？」

「めだかちゃんは黙ってればいいんだよ。どうせなんも出来ずに全員人質に取られたんだろ？ 俺の来る1分足らずで」

「ぐ……」

「まあ別に俺は何もしないよ。これはめだかちゃんの戦いだし、ぶつちやけお前がこの中の誰と結婚しても良いし。んじや、頑張つてね」

瑗嗶はそう言つて、欠伸を一つ漏らした。先程までのゆらゆらとして雰囲気は何処へ行つたのか、興味が失せたかのように踵を返し、ぷつと消えた。そして桃園喪々の手の中に名札として収まつた。

だが、桃園はそれに吃驚したような表情を浮かべたが、すぐに先程と同じ表情に戻り、呆然とする黒神めだかと話を続けたのだった。



——封印組の様子

「おや、瑛嘎も来たのかい？」

「まあ、封印つてのがどんなものか気になってね」

「『あれー？』『瑛嘎さんと安心院さんがいる』」

「面倒だから球磨川君と半纏、半袖ちゃんも此処に呼んだぜ」

「……………」

「あひゃひゃ☆封印されててもやりたい放題ですね」

「私としては瑛嘎さんに会うのは始めてなんだけどね」

「まあいいだろ。さて、物語上この中の誰かが一人くらい外に出て追ってくるであろう善吉君の手助けをしないとイケないだろ？ という訳で、ダウトで負けた奴が外に出る。おk?。」

『OK』

瑛嘎達封印組は、案外余裕だった。そしてこの時、桃園喪々のポケットに入った名札は一枚になっており、その柄はこの場の全員が円になってカードゲームをしている様子になっているのだった。

『それじゃ、また明日とか!』

それからしばらく、黒神めだかとその婚約者達は場所を移動して、南極にやって来た。また、その場所に贄波生煮はいない。初戦で敗退したからだ。

よつて、彼女は月氷会情報で人吉善吉がやってきているという情報に基づき、足止め係として黒船に残ったのだ。現在、人吉善吉ら生徒会と戦闘中。

そして、生煮以外の婚約者は南極にて言葉を交わしていた。

「で……杠の、潜木の、貴様らと贄波の共々奴とはどういう関係だ?」

「どういう関係とはどういう意味でしょうか?」

「にやははー良く分かんないのだ!」

杠かけがえと潜木もぐらが桃園喪々の問いに微笑でそう返した。叶野遂や寿常套もその話題に興味があったのか、耳を傾けている。

桃園喪々が言っている奴というのは、彼女自身が名札として保有している人物の内の一、泉ヶ仙瑗の事である。

無論、生煮、かけがえ、もぐらの三名の名付け親であるだけの関係で、幼少期に少しだけ付き合ひのあった人物なだけだが、やはりというか幼少期の早い時期に物心が付い

ていたメンバーであるが故に、瑛叟との思い出は記憶にちゃんと残っている。

故に、この三人の中で瑛叟への印象はかなり好意的であった。

「決まっておろう、貴様らと泉ヶ仙瑛叟との間には何らかの縁があることくらいお見通しよ」

「成程、それはそれは……ですが、答える義理はありませんね」

「本人にでも聞けば？」

桃園の問いに、二人は冷たくそう返す。桃園はその返答に対して別段苛立ちを覚える事も無く、興味が失せた様に視線を二人から切った。

それに対し、叶野遂が苦笑しながらもぼそりと呟いて、立ち上がった。

「なんや随分と険悪やなあ……」

「どうした叶野の」

桃園喪々が立ち上がった叶野遂に対してそう問いかける。すると、今度は冷たくあしらわれる事も無く、叶野はにこりと笑って答えた。

「ちよつと近くまで飛行機を墜としに」

叶野遂はそのまま南極に設置された黒神基地の一部屋から出て行った。



叶野遂が出て行つてから十数分、桃園達の中で会話は無かつた。婚約者候補として幾らか共通点があつたりする物の、彼女達は別々の分家からやつてきたのだ。顔を合せてそんなに親睦が有るわけでもなく、相手について何も知らない、いわば赤の他人といつても過言ではない。

そんな彼女達が会話するのはやはり、疑問に思う事を聞いたり、何か用があつた時位の物だ。学校で言うなら、業務的な会話しかしない関係と言つて良い。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

桃園喪々、寿常套、杠かけがえ、潜木もぐらの四人はそんな沈黙の空間の中、特有の気まずさを感じる事も無く個々で自由に時間を潰していた。

だが、そんな中この空間にある種の変化が訪れる。

「『あーあ、また勝てなかつた』」

「むっ？」

桃園喪々の名札封印から球磨川禊が出て来たのだ。ガシガシと頭を搔いて、ため息を

つきながらそう言う球磨川禊は目の前に居る四人の婚約者候補を見てへらへら笑う。

『あれ?』『何この空間。』『ぼっちが集まった様な沈黙感とか』『笑える』『あはは!』
登場早々に毒を吐く球磨川禊。だがそこはやはりというか、動じない四人。

「この際、封印を破って出て来た事は驚きに値しないとして……貴様、何しに出て来たのだ?」

「興味無いですけどね」

桃園の問いに杠が作った様な笑顔でそう言った。

そして球磨川禊はいつもどおりへらへらと気味の悪い笑みを浮かべながら両手を広げる。

『いやいや』『ちよつとゲームに負けちゃったからさ』『面倒だけど人助けにね』

「ふむ……まあ良い。どうせまた封印しても出てくるのであろうし、さっさと行くがよい」

「へえ、まあ素直に行かせてくれるのなら有りがたいけど!』『それじゃ、また明日とか!』」

球磨川禊は、にこつと笑って部屋を出て行った。

そして再度訪れる静寂。この数分後、月氷会の武器子が場所の移動で飛び込んでくるのだが、それまで四人の間に会話は無かった。



カードの中

泉ヶ仙瑛嗶達封印組は、球磨川襖をカードの外へ追いやった後雑談に盛りあがっていた。カードの中は幸い常温で寒いとか暑いとか思う様な空間では無く、むしろ快適な空間だった。

また、そこへさらになじみと瑛嗶の改造スキルが展開されたので、快適というより贅沢な空間となっている。それによって、不知火半袖は願えば用意される料理に喰らいつき、不知火半纏は用意されたドリンクバーに何度も飲み物を注ぎに行き、鶴喰鴉は外の様子がみたいのかそわそわしつつ寝転がってテレビを見ていた。

瑛嗶はそんな三人を眺めつつソファに座って寛いでおり、なじみは瑛嗶の肩に頭を乗せて寄り添うように眠っていた。

「やる事無くなつたなあ」

「仕方ないと私は思うよ。外には球磨川君を送つたし、私達が外へ出ても特に意味は無
いと思うし」

瑛嗶の呟きに反応したのは鶴喰鴟。テレビから視線を瑛嗶へと移してそう言った。今の所、会話が出来るそうなのは鶴喰鴟位なので、瑛嗶はそんな鶴喰に会話を続けた。

「じゃ外の様子でも見る？ 正直、めだかちゃんはどうでもいいし善吉君達の状況でも
さ」

「出来るの？」

「出来るさ」

瑛嗶は指をふいと振って中型テレビ大のモニターを出した。瑛嗶式スキルの一つ、別場所の状況を見るスキル【ブレイバック進光景】。

どうやらスキルとは別の力、スタイルの封印下でもスキルは使えるようだ。

「それじゃ、善吉君達で暇を潰そうか」

「それじゃあ隣に失礼するよ」

鶴喰鴟はそう言う瑛嗶の隣で寝ているなじみと反対側に座り、モニターを眺めるのだった。

善吉、私と結婚してくれ!

人吉善吉は、黒神めだかの幼馴染である。そしてまた、黒神めだかの初恋の相手でもあった。

幼い頃……そう、黒神めだかが箱庭病院で生まれて来た意味も分からずただ漠然と診察を受けていた、二歳の頃の事。彼女は人吉善吉に出会った。その出会いは特になんのドラマもなく、ただ偶然出会ったという風な普通の出会いだった。

診察に飽きた黒神めだかが逃走し、逃げこんだ場所に人吉善吉が居たのだ。そして、そこで人吉善吉に生まれてきた意味を与えられた。

今でこそ、その人吉善吉によって与えられた純粋かつ残酷な言葉で植え付けられた黒神めだかの生まれてきた意味は、同じく人吉善吉によって打ち壊された訳だが、その話には続きが有るのだ。

幼いめだかが幼い善吉に生まれてきた意味を与えられた事で感動し、人吉善吉に恋をするのはそう難しくは無かった。また、当時のめだかは二歳、感情表現は多少大人びていようが幼子同様ストレートだった。

「善吉、私と結婚してくれ!」

二歳でプロポーズ。それは驚くべきことだが、そこは流石の黒神めだか。通常では考えられない行動を幼い頃よりして来たのだ。今更驚く事でも無い。

だが、そんな異常な行動に普通の平凡な二歳児である人吉善吉が同様に答えられる筈もない。故に、善吉の返事はこうだ。

「えー、無理だよお」

こうして黒神めだかの、傍から見たら唯の子供の戯言の様な、されど本人にとっては確かに初恋だった物が、失恋した。



そして現在。人吉善吉は黒神めだかに勝利し生徒会長の器に収まった。それはかの人外、安心院なじみによつて気付かされた黒神めだかへの恋心や黒神めだかの間違いといった要素が有った故の勝負だったが、黒神めだかに人吉善吉は圧倒的な差を付けて勝利し、結果的に幸せな展開として収拾を付けた。

さて、ここで残つたのは人吉善吉の黒神めだかに対する恋心という要素だ。黒神めだかは確かに人吉善吉が好きだ。それは今でも変わらない。だが、先の通り黒神めだかは善吉に対する恋を終えてしまっているの、結果的に両思いなのに片やへタレ根性で、

片や勘違いで、告白出来ないでいるのだ。何と滑稽な事だろうか。

そしてそんな二人に訪れた事件、漆黒宴騒ぎ。黒神めだかが婚約者達をどうにかする為に出張していったのを知った人吉善吉は当然動き出す。生徒会のメンバーを引き連れ、黒神めだか達が最初に居た船へとやってきたのだ。

そこに居たのは、初戦で敗退した婚約者候補の一人、贄波生煮。瑛喰に名前を付けられた少女だ。

少女は人吉善吉との一騎打ちの末、またも敗北。結果的に二次会の場所である南極黒神基地の場所を吐くのだった。



と、ここまでをスキル映像で見た瑛喰と鶴喰は一旦CMとばかりに息を吐き、ソファに背を預けた。今まで映像を見ていた間に、不知火半袖も食事を終え、安心院なじみの眼を覚まし、観賞に参加していた。

「なんといかまあ……恋する男は一直線だね。善吉君だったらなおさらだ」

「あひやひや☆まあアイツは馬鹿ですからねえ！」

不知火半袖と安心院なじみの二人がそう言うと、他のメンバーも頷いて無言のまま肯定した。

「でもさ、正直女の子の首筋に噛み付くってセクハラじゃね？」

「琰嗶、その辺気にしちや駄目だよ。球磨川君なんて女子中学生を壁に磔にしてパンツを眺めでドヤ顔曝したんだぜ？」

「それもそうか。俺も昔なじみが風呂呂に入ってる中突撃したことあるし」

「あの時は流石の僕も羞恥心を覚えたね」

「その後なんやかんやで一緒に入ったけどね」

良い思い出とばかりに昔話を語る琰嗶となじみ。やはりお互い長い付き合いという事も有ってその分作って来た思い出の量も多い様だ。

そして、その話を聞いていた不知火半袖や鶴喰鳴も思い出話が気になった様で、興味津津といった様子で聞きにいる。

「そういえば安心院さんと琰嗶さんの馴れ初めってどんな感じなの？」

鶴喰鳴がふとそう聞いた。すると、なじみは少し照れくさそうに、琰嗶は少し面白そうに笑って、自分達の出会いの話を始めた。

「あれは歴史をたどれば氷河期位の頃かな。僕が生まれてから随分経った後の話だけ

ど、その頃に瑛叟と出会ったんだ。まだ水で地表が覆われていた中、自我を持った人間もまだいなかったから自由気ままに旅してただけど……」

「俺が空から落ちてきて、なじみの頭を踏みつぶしたんだよ。着地しようとしただけなんだけどね」

ゆらゆらと笑ってそう言う瑛叟に若干笑えない鶴喰鳴。それもそうだ、人外であるなじみの実力は影武者を倒した時や様々な所で垣間見ているので知っているが、それは凄まじいものだ。反面、瑛叟も人外と聞いている物の、その実力を見た事は無いのでいまいち凄さが分からない。そんな人物が、人外であるなじみの頭を着地ついでに踏みつぶしたと来た。あまり、笑えない。

「まあ最初の出会いからして普通じゃなかったわけだ。で、当時はまともに会話できるのが俺となじみしかい無かったから必然的に一緒にいるようになって……俺もやる事無かったから暇潰しついでになじみの「出来ない」事探しを手伝ってやった訳だ。ま、その過程で言彦と戦ったり、昔の英雄と戦って見たりとかしたけどね」

「！」

「昔の英雄か……例えば？」

「んー、三国志に出てくる武将とか、西洋の騎士王とかそんなん」

「へえ……」

瑛嗶の言葉に不知火が驚いた様な反応をし、鷗が感心したような声を上げた。

「ま、色々と面白おかしく過ごさせてもらったよ」

「その分僕が苦労したことも多かつたけどね！」

「特に傑作だったのはなじみにちよつとドツキリ仕掛けた時の話なんだけど——」

「わー！ わあああ!!!」

瑛嗶が何かをしおうとすると、なじみが大声を上げてその言葉をかき消した。瑛嗶はそんななじみを面白そうに見てくつくつと含む様に笑った。

「ま、色々有ったんだよ」

「うう……瑛嗶、あの時の事は絶対内緒だからね！」

「はいはい」

なじみの必死な様子は、不知火達にとって少し新鮮であったという

美味しい

瑛嗶となじみは、御存じの通り数十億年という長い年月を共に生きて来た二人である。時には喧嘩し、時には勝負し、時には怠け、時には笑い、時には悩み、時には落ち込み、時にはじゃれあい、時には別れ、時には再会し、時には怒り、時には殺し合った時、時には慰めたり——挙げれば切りが無い程の思い出が二人の中にはたくさん詰まっていた。

そしてその関係は初対面から知人となり、知人から友人となり、友人から親友になり、親友から家族同然となり、今では片方が片方に片思いをするまでにその関係は深く、強い物になっていた。

なじみが死ねば、瑛嗶は悲しむだろうし、瑛嗶が死ねば、なじみは間違い無く大泣きして後を追うなど暴挙に出るだろう。

とどのつまり、そう言う関係なのだ。家族以上に親密だが家族では無い。親友以上に絆が深い、友人の域は超えている。恋人と言えはしつくりくるのに、恋人ではない。今から五千年前程、瑛嗶となじみはその絆を家族以上にまで発展させた時期から、その関係に変化は無いのだ。これ以上深い絆にならず、関係の変化が訪れる機会もない。

あるとすれば、安心院なじみと泉ヶ仙瓊瓊が恋人という関係に進展した場合だ。

この先、片思いをしているなじみがどう動くかでその関係性は変動するだろう。

これもある種、一つの恋愛の問題。

現在人吉善吉が黒神めだかを追う理由と同じ物だ。違うのは相思相愛で有るかそうでないかの違い。今回はその二人の膨大な思い出の中の一つを語ってみよう。

◇ ◇ ◇

現在、球磨川禊が南極にて人吉善吉達を助けていた。その中で、先の二組同様また一つの恋が絡んでくる。江迎怒江の人吉善吉への片想いだ。この南極で、彼女の恋は終わりを告げた。

人吉善吉への告白と失恋。分かりきっていた事だった。彼女は善吉がめだかが好きだと気付いた時に背中を押した張本人だ。自分の恋が善吉に届かない事くらい重々承知の上だった。

そして、人吉善吉は命を掛けて彼女の告白を振った。結果、彼女は失恋しつつも後悔しない恋愛を終える事が出来たのだった。

その後は単純。球磨川禊はその恋愛の終わりを見届けた後、善吉達をボコボコに叩き

のめした婚約者候補その1、潜木もぐらのスタイル「誤変換」を初めから間違えている
マイナスブックメーカー過負荷「却本作り」にて封殺したのだった。

とはいえ、人吉善吉の度量にまた勝てなかつたと漏らし、少しだけ悔しそうにするの
 だった。

「ふう……球磨川君はどうやらちゃんと善吉君達を助けてくれたようだね」

「まああれだけ負けといて約束を反故にする様な球磨川君じゃあないだろ」

瑛叟がその一部始終を見終わつた後、またソファに背を預ける。その隣でなじみがニ
 コリと笑いながらそう言った。

名札の中とはいえ、その快適さは折り紙付き。贅沢な時間を過ごしつつ、瑛叟達は外
 の様子もしつかり観賞していたのだ。

「さて、ここから善吉君達は俺達のいる月への移動場所にやって来るだろうし、それまで
 は暇かな」

「あひやひや☆それじゃあ何か思い出話でもしてくださいよ！ 瑛叟さん」

瑛叟の呟きに反応したのは不知火半袖。どうやら彼女は瑛叟の過去に興味が有るよ
 うで、思い出話を聞いたそうににこにここと笑った。

瑛叟はそんな半袖の表情を見て、少しだけ考えた後まあいいかと結論を出し、昔話を
 話す事にした。それはなじみとの思い出の一つ。今から一億年程前の話だった。

「あれは多分、今から一億年くらい前の話——」



約一億年前、人がまだ居なかった時代の話。地上には恐竜が存在しており、地上はジャングルに覆われていた。日々苛烈になっていく生存闘争と殺し合いは、唯一の人間であった獰嗚となじみにとつてとても興味深かった。

恐竜に興味の尽きない獰嗚達は、その人外のスキルを多用し、恐竜の生態を調べる事にしたのだ。

まず始めにやったのは、恐竜の肉が美味しいのかどうか。漫画やアニメでは恐竜の肉を焼いて食べているシーンもある。その際、とても美味しそうに肉を頬張る登場人物たちがいるのだが、果たしてそれは本当に美味な物なのか獰嗚は試す事にしたのだ。

まずは手頃にその辺を歩いていた肉食恐竜を身体能力だけで殴り殺し、尻尾や腹の肉を削ぎ落して焼いてみた。すると、その部位からは溢れんばかりの肉汁と香ばしい匂いが立ちこめ、獰嗚となじみの空腹を誘った。

「食べようか」

「うん」

一口。二人はほぼ同時にその肉を口に放り込んだ。箸が無い時代故に、手掴みだがあまり気にしていないので、二人は口を動かしてもぐもぐと咀嚼する。

そして呑み込み、息をほうつと吐いた。

「美味しい」

二人の感想はただその一言。肉汁は嘸めば溢れてきて、香辛料も無しにただ素材そのものがスパイシーな味を持っていた。肉厚なのに柔らかで、嘸む歯が簡単に肉を嘸みちぎる。呑み込んだ後ですら喉の奥、胃の中からその香ばしい匂いを感じさせるその素晴らしさと言ったら、瑛唄となじみが一心不乱に焼き肉パーティーを開催する程の物だった。

食欲が満たされるどころかもつと食べたいというかのように身体は肉を求め、気が付けば殺した一頭の恐竜は全身が骨になるまで身体についていた肉を食いつくされたのだった。

「ふー……あー美味かった!」

「びっくりだね。恐竜の肉がこんなに美味しい物だとは知らなかったよ」

瑛唄となじみは地べたに座って一息吐く。傍らには恐竜の骨が無造作に放置されているが、二人には関係なかった。お腹をさすって満腹満腹と満足家に呟く瑛唄と、口元を服の袖で拭うなじみ。

正直言つて、彼女達はスキルで体重や体脂肪をどうこう出来る側の人間なので食事制限は無い。そのくせそのスタイルは自由に維持されるから羨ましい物だ。

「そういえば、瑛噺はなんで恐竜を食べようと思つたんだい？」

「だつて草や木の実だけじゃ腹一杯にならないし」

「僕は食事を取る必要はないじゃないか」

「これも娯楽の一環さ。元々人間は食事や睡眠を必要とするんだ。人外だろうとそういった物を取り入れるのは悪い事じゃない」

二人で会話する。満足気に話す瑛噺と楽しげに話すなじみは会話に集中していて、周りに気を配っていない。これが不味かつた。

会話の途中で恐竜が近づいていたのだ。空から。

その恐竜は鳥竜種と呼ばれる恐竜で、空を飛べるのが特徴だ。奴らはその制空権を活かして上空からなじみに近づき、その裾を加えて飛んで行った。

「へ？ うわあ!？」

「あーらら、連れて行かれちゃつたよ」

「た、助けて瑛噺!」

名称、プテラノドンに連れられたなじみは腕をバタつかせて瑛噺に助けを求めた。その姿は人外というには余りに面白かつた。

瑛嗶はゆらりと笑って楽しんで飛び上がり、空を蹴る事でプテラノドンに追いつく。そしてそのまま踵落としを決めてなじみを助けたのだった。

「あーびつくりした！」

「くつくつく……中々面白い絵だったぜ、なじみ」

「も、もう！ 本当にびつくりしたんだから！」

「はいはい、分かってるよ」

分かかって無いだろうと瑛嗶の胸をポカポカと小突くなじみ。そのやり取りは夕飯時、また恐竜を取りに行こうという提案が瑛嗶からされるまで行なわれた。

それから数百、数千年、恐竜は滅びた。どういう理由で滅びたのかは知らないが、しかし、とある人物はこう言った。

『恐竜は種類の強力な生物によって食い散らかされ、滅びたのだ』

と。ただし、その真相を知る者は、現代では泉ヶ仙瑛嗶と安心院なじみの二人のみ。



「つと、こんなことが有ったよ」

「いやあ、まさかプテラノドンがあんなに器用だとは思わなかったね」

瑛嗶となじみは懐かしそうにそう語る。だが、他のメンバーにとって気になる点は恐竜の滅びた理由はこいつらが食い散らかしたからじゃないかという所。疑いの眼差しが強くなるが、その視線を意図も介さず瑛嗶となじみはただ微笑むばかりであった。

全く持って面白くないぞ、お前ら

現在、黒神めだかの漆黒宴騒ぎは大きく状況を変化させていた。それというのも、人吉善吉が黒神めだかに追い付いてからというのが問題だった。

潜木もぐらは球磨川禊によって封殺されたが、その後「却本作り^{ブックメーカー}」を解除することを条件に分解された飛行機を修理させ、その足で亜音速の速度でもって黒神宇宙開発センターに突撃。兎洞武器子のコレクションであるロケットを破壊した。

そしてそこからはトントン拍子、簡単に言うのなら善吉がめだかにプロポーズ、成功。喜ぶのも束の間兎洞武器子によって善吉は殺害された。その後、蘇生を試みようとする一歩手前で善吉の死体は名札使い、桃園喪々に封印されてしまった。

結果、桃園喪々と黒神めだかが対立し、対決に勃発。最終的に、漆黒宴を終了とし、決勝戦をその場で執り行なう事になったのだ。桃園喪々、杠かけがえ、寿常套、黒神めだかの四名によるしりとりバトルが行なわれる事になった。

だが、その際に桃園喪々の提案で名札になったメンバーの内の三名を開放するという事になった。桃園の取っている人質は善吉を含めて現在六名。対して、黒神めだか側に交渉材料として連れられてる贄波、叶野、潜木の三名。その差分の人質を解放しようと

言うのだ。

願ったりかなったりな状況だが、何か企みが有る様な気もしてならない。というのが現在の状況。大きく変動した状況に、めだか側のメンバーは困惑するが、誰を開放するかを話し合う。取られられている中で解放出来るメンバーは、瑛嗶、なじみ、鳴、半袖、半纏の五名。その中で出て来させるとすれば、自力で出て来れそうななじみと瑛嗶、半纏を除いて鳴と半袖の二人だろう。後は無難に半纏を選ぶ、といった感じだろう。

「瑛嗶さんと安心院さん、後は…半纏さんだ。その三人を解放しろ！」

「なっ!? めだかちゃん!？」

めだかの判断はそういう物だった。無難ではなく、仲間の意表を衝いた判断。

「……ふむ、良かろう。それではその三名を開放する」

桃園喪々にはやりと笑って名札を取り出し、その三名を開放した。内から出て来たなじみと半纏、そして瑛嗶。

この判断は何処までも意表を衝いていて、誰もが間違いだと思った。桃園喪々の思惑通りだと思った。だがその考えこそ間違っていた。桃園喪々の企みこそ破綻していたのだ。

何故なら、彼を開放してしまったから。泉ヶ仙瑛嗶を、安心院なじみ以上に化け物の、抑えないと居るだけで周囲に影響を与えてしまう程の人外を、解放してしまった。

元々、瑛嗶は名札に封印されたのではない。封印されてやったのだ。スタイルというのは確かに脅威だ。スキルとは違った別次元の言葉の力。だが、スキルに上回るという訳ではない。相性こそ有るだろうが、スキルと対立して確実に勝利を収められるわけではない。

現に、叶野遂はくじらの「凍る火柱」アイスファイアと知能に負けたし、贄波生煮は人吉善吉の改神モード全吉モデルに敗北したし、潜木もぐらは球磨川禊の「却本作り」フックメーカーの前に封殺された。

それと同じ様に、瑛嗶は名札による封印を、桃園喪々に『使わせた』のだ。他でも無い、自分自身に。瑛嗶式スキルの一つ、先手を取らせるスキル「先手必症」ウイニングイニシアチブ。

瑛嗶が封印出来た事は桃園にとつても他の婚約者候補にとつても幸運だった。何故なら瑛嗶が動けばあつという間にこの漆黒宴は終わっていったからだ。

だがもう遅い。よりもよつて、彼女は自分自身で解放したのだ。漆黒宴どころか自分達の勝負そのものの終わりを。

「面白くない面白くない面白くない面白くない。全く持って面白くないぞ、お前ら」

解放された三名の内、瑛嗶だけがそう言った。なじみと半纏は目を伏せてただ沈黙を

貫くばかり。余裕な雰囲気や常張っていた安心院なじみですら、その表情から読み取れる感情が無かった。もはや展開を見守るばかりだ。

「なっ……何故だ!?!」

桃園喪々が驚愕の声を上げた。その理由というのも、瑛唄の手元にあったのだ。改造制服型着物の裾から伸びた腕の先、その両の手に掴まれていたのは……人吉善吉の死体。そしてその次の瞬間、桃園の手にあった名札が震え、その名札が消えた。そしてその代わりに不知火半袖と鶴喰鳴が解放される。

「なんだ、何が起こっている!?! 貴様、一体何をした!?!」

桃園はうろたえ、人質が居なくなつたこの状況に焦る。そして問われた瑛唄はゆらりと笑つて桃園を指差しこう言つた。

「瑛唄式スキルの原点回帰。思考からスキルを創るスキル プレフエレンス【嗜考品】」

「な、に……?」

「瑛唄式新スキルの一つ、スタイルを発動させるスキル レスボンズリビリティワード【言葉責め】」

瑛唄がたつた今創つたスキル。スタイルに対するスキル。これを発動させ、桃園にスタイルを使わせたのだ。主に解除の方向で。故に、これで桃園に人質はいなくなつた。

それはつまり、漆黒宴が終わつた今、黒神めだかに戦う理由が無くなつた事になる。

「そんな馬鹿なスキルが……!」

「有るんだよ。俺に対する情報をもう少し勉強しておくんだったなチビ。とはいえ、かけがえちゃんはその辺分かってても良いんじゃないの？」

「私が玖唄様の邪魔をする筈が有りません！ それと、私の事を覚えててくれたのですね。ああ、何と嬉しい事でしょう！ 小さい頃よりお慕い申しておりました……！」

玖唄の言葉に杠かけがえは頬を紅潮させてそう言った。安心院なじみがぴくりと眉を顰めたが、気にせず玖唄は話を進める。

「でだ。俺達にはもう戦う理由が無い。というか、人質を解放すること自体はずつと前から出来たんだよ。名札の封印程度で縛れると思うなチビ」

「く……！」

「さてめだかちゃん。善吉君も蘇生した事だし、まだ続けるのか？」

「えっ」

めだかは急に話を振られてビクツと驚く。展開が速過ぎて付いていけなかったのだ。玖唄の言葉を聞いて、その手元を見ると、善吉の傷が治り、正常に息をしているのが分かった。生きている。

その事に少し安堵し、その後この戦いを続けるのかどうかを考えた。漆黒宴は終わり、善吉も帰って来た。戦う理由としては心許無いが、鶴喰梟の事が少し気になる所。

「梟博士の死因を……」

「！　そうだ、吾輩は梟博士の事を知っている。さあ決勝戦を続けようではないか」
「そんなもん後で俺が教えてやるよ。面倒臭いな」

桃園に光明が差したかと思いきや、またも瑛嗶によって潰される。最早瑛嗶無双、戦っていないのに。戦う以前にその手段が全て潰される。これは最早勝負になつていない。

「さて、帰ろうか。面倒なあれこれは後で俺が処理しておいてあげる。とりあえず婚約者候補全員家に帰れ。はい撤収ー。全く、つまらない事に付き合わせやがつて。ここ数話分見てみる。ただ思い出話しながらダイジェストで漆黒宴進めただけじゃねえか」
瑛嗶はそう言つてこの場を締めたのだった。

こうして漆黒宴は終わった。何もかも拍子抜けに終わったこのイベント。だが、このイベントは後の事件に少なからず関わりを持つ。そう、過去で一番悲惨な事件が、すぐそこまで迫っていた――

五千年前の英雄、瑛嗶となじみと、そして獅子目言彦に関わる、最大の出来事が開幕する……

ああ……本当に、嫌な感じだ……

漆黒宴が終わりを告げてから、人吉善吉と黒神めだかの間には一種の距離感が出来ていた。プロポーズを成功させた結果、黒神めだかは結婚までの間で所謂いちゃいちゃするという行為を自制していたのだ。

だがその分、他の場所では結婚の喜びを思う存分見せて、はっちゃけるだけはっちゃけていた。多くの部活でその完全さを披露し、他者を次々と圧倒していた。

それは現在も同じで、黒神めだかは人吉善吉に自分の10m範囲内に入らない様に言い付け、自分は柔道場で鍋島猫美と阿久根高貴相手に勝負をしていた。るるると笑いながら二人を同時に相手取り、それでもなお互角に戦う黒神めだかは人吉善吉に負けてから本当に自由になって、伸び伸びとしている。

周囲の人間からもそれは明らかで、殆どの者が今の黒神めだかも好きだと思ってる。

「いやー、やはり貴様達相手では私も引き分けるのがやつとだったぞー！」
「ははは、先輩の面目潰されるかと思てひやひやしたぞー」

黒神めだかはタオルで汗を拭きながらるるんと笑う。鍋島猫美も負けなかっただ

け健闘したなと自分を褒めた。

対し、阿久根高貴もまた汗を拭いながら黒神めだかに笑いかける。話題に出すのは勿論、最近知った事だ。

「そういえば、人吉君と結婚するんですってね。俺としては複雑な思いですが、おめでとうございます」

「おお、まあ善吉が18歳になるまでは辛抱しなければならぬが、結婚したら精々いちやいちやするさ」

「そうですね……ははは」

阿久根高貴はめだかの言葉に善吉への同情を覚えた。折角結婚の約束まで取り付けたというのに結婚までいちゃつく事が出来ないもどかしさ。どうもおかしな状況になつていた。

「ところで善吉との結婚をどこで聞いたのだ？ ああ、わかつたぞ。不知火辺りからでも聞いたのだろうか？」

「……え？ 不知火って誰ですか？」

阿久根高貴のこの発言から、この事件は開幕する。



「知らない」

「不知火？ 誰だそれ」

「理事長の名前か？」

「知らない」

「知らない」

——知らない、知らない、知らない、知らない、知らない、知らない……

不知火半袖なんて、知らない。

学園中を探しまわって、学園中を聞きまわって、学園中を駆けまわった。が、不知火半袖の姿は無く、不知火半袖の事を覚えている者は誰一人いなかった。

だが、黒神めだかは不知火半袖を探していく延長で、別の人物を探す様になった。その人物なら、不知火半袖を覚えている筈だ、その人物ならこの事態を知っている筈だ。そう考えて。

そして見つけた。彼女を。

「知っているよ。不知火半袖ちゃん！ 彼女にはちよつとした借りが有るからね」

安心院なじみ。人外の少女で、現在は同じ人外に恋する少女だ。彼女は覚えていた。不知火半袖を覚えていた。その事に、少しの安堵が黒神めだかに生まれた。

「貴様の中に不知火がおつてよかつた……だが、この事態はなんだ？ どうして急に不知火が良無かつたかのような……」

「いやいや、君も体験した事が有るだろう？ 中学時代、僕が居なくなった時の事だよ」

安心院なじみが中学時代居なくなつて、球磨川のスキルでその思い出を無かつたことにされた事がある。その時と今の状況は良く似ていた。

「まさか球磨川の【大嘘憑き】オールフィクションか！ アイツ、何故今更こんなことを……！ 事と事情によつては殴つても理由を聞き出してやる！」

「はい、それでは殴つても理由を聞きだされた球磨川君です」

「ええ!？」

めだかの言葉に、安心院なじみはボロボロの球磨川襖を引っ張り出してそう言った。どさつと地面に倒れた球磨川は同スキルで傷を無かつた事にし、立ち上がる。

「球磨川、何故こんなことを……!」

「『いやいや』『僕はただ頼まれただけだぜ』『半袖ちゃんから』『お嬢様が人の心を理解出

来た今』『あたしの仕事はもうお終い』『もうあたしは必要ない☆』『ってね』

人の心を理解出来た描写が無いのに、人の心が理解出来たと皆が言う。これはどうもおかしいが、黒神めだかは確かに、人の心が理解出来ている。何故なら漆黒宴では肉體バトルというより心理面での攻防が激しかったからだ。ダイジエストで終わったとはいえ、めだかはちゃんと心と心のぶつかり合いで勝っていた。それは人の心を理解出来ていると言つて良いだろう。

「実を言うとな、不知火ちゃんはめだかちゃん。君の影武者だったんだよ」

「!？」

安心院なじみは言った。黒神家の影から支える一族として、不知火半纏から派生した一族。影の黒神家、不知火一族というのは元々そう言う物だった。黒神と白縫、光ある所に影が差す様に、黒神の影には必ず不知火があったのだ。

不知火半袖はその一人。黒神めだかが出来ない事をやって、彼女を支えていたのだという。

が、その不知火半袖は解雇された。ほかならぬ、黒神めだかの父、黒神舵樹から。人の心を理解した黒神めだかに、もう影武者はいらないのだからという考えだ。

「そんな……私が人の心を理解したせいで……私が好きになりかけたせいでもう不知火に会えないなんてあんまりじゃないか!! やつと、友達になれると思つたのに……!」

黒神めだかはそう言つて、頭を抱えた。不知火と対等に友達になりたかつたためだか。それがこんな事態になるとは、なんとも滑稽だろう。親しくなろうとすれば、離れる破目になる。これが滑稽で無くてなんだというのだ。

めだかは当事者故に、不知火半袖の事を忘れていない。安心院なじみもスキルで防御して忘れていない。犯人である球磨川禊も忘れていない。では、人吉善吉は？ 半袖の大親友である人吉善吉はどうなのだろうか？

「うーむ、後探してないのはここくらいなんだが……何処行つたんだ不知火の奴……？」

そこにやって来たのは、人吉善吉。不知火を探してやってきた、という事は人吉善吉は不知火半袖を知っているという事、覚えているという事。その事実は黒神めだかに安堵を生んだ。

「善吉……」

「げげ、めだかちゃん！ コレは違うんだ！ 俺はお前に近づこうとしてたわけじゃない、ただ不知火に愚痴を聞いてもらおうと……うおっ!? ど、どうしたんだめだかちゃん……?」

「良かった……貴様の中に不知火が居て、本当に良かった！」

そこから安心院なじみの提案で、その場にいる人間が不知火半袖に会いに動き出す。黒神めだかは不知火ともう一度はじめから友達になる為に、もう一度出会う為に。そして安心院なじみは不知火半袖に借りを返しに行く為に、平等にする為に。

それがこの物語において、最悪の結末を呼ぶとは知らずに。



「……………嫌な予感がする」

瑛嗶が不意に、そう呟いた。そう、彼は一度体験した事のある嫌な予感を感じていた。前世、このめだかボックスの世界に来る前の世界、リリカルなのはの世界で体験した胸に渦巻く黒々とした嫌な感覚。

義理の娘、ヴィヴィオがマッドサイエンティスト、ジェイル・スカリエツィに捉えられた際に感じたこの嫌な予感。誰か、瑛嗶にとって都合の悪い者が危険な目に遭うのか、瑛嗶が都合の悪い展開に巻き込まれるのか、それは分からないが、瑛嗶は少しだけ不安になった。

「面白くない」

最近では面白い事が無く、ただただつまらない日常を過ごしていた瑛嗶。だが、今回に限れば、面白い展開など期待できそうになかった。

何か不穏な事件が起こる。それが瑛嗶には分かった。

戦闘なら負けはしない。立ちほだかる敵は、全て倒そう。それでも、瑛嗶の中に渦巻く不安は消えない。いらだちが募る中、瑛嗶はゆらりと笑う。

「笑え笑え、笑う門には福来る。いつものように、笑えば全て丸く収まるさ」

誰もいない時計塔の一番上。風に吹かれるその場所で、瑛嗶の呟きは響かず消えた。

「ああ……本当に、嫌な感じだ……」

瑛嗶は呟く。

この事件はその嫌な予感を的中させる。ここから起きる事は、瑛嗶の琴線に触れる、最悪な事態にまで発展する――

獅子目言彦……………いつか、絶対に……………殺してやる……………!

辺境の地、不知火の里。

不知火半袖の故郷にして、不知火一族の原点。不知火半纏から派生した不知火一族の住まう、ある種世界から独立した世界がそこにあつた。

そして現在、この不知火の里に安心院なじみ率いる黒神めだか、人吉善吉、球磨川禊の四名がジープで旅行気分になって来ていた。スキルでばつと移動するのもいいが、安心院なじみは道程を楽しむ性分。故に移動はスキルでは無く車を使用したアクティブな物だった。

あの生徒会長選挙以来、安心院なじみのスキル弾幕はめだか達にも印象に残っており、彼女のスキルは何処までも強力だった故に、彼女が居れば大抵の事は何とかなる。位にまで安心院なじみは信頼されていた。主にその実力と全能性を。

彼女に勝てるとすれば、それこそ泉ヶ丘仙瑛噎位しか思い浮かばない。安心院なじみ以上のスキル数とその質は、めだか達も重々承知しているのだから。

と、そこで快適かつ快走していたジープを運転していた安心院なじみが、急ブレーキをかけた。木々生い茂る山道で、やや走り辛そうだった道をタイヤが音を立てて停止す

る。

理由は簡単。そこらへんの道路とかでも有りそうな理由。人が目の前に倒れてたから。

「おや残念。私の様な低級シャドーには高級車に乗る高級者に踏んでいただくのがなによりの幸せだというのに」

寝転がっていたのは、漆黒宴で安心院なじみに瞬殺された影武者の一人、潜木傀儡かいらい。ニコニコと笑いながら黒神めだか達にそう問いかけた。

『安心院さんに瞬殺された君が』『どうしてこんな所で僕達に寝はだかるのかな？』『ちよつと良く分からないんだけど』

「いやはや、あの時は私も瞬殺されましたが、あの時私が使っていたのは剣。ですが私の専門は銃しゅうでして」

拳銃を取り出す傀儡。だが、戦闘シーンはカット。なじみのスキル弾幕によつてまでも瞬殺されたからだ。戦闘というべき戦闘は発生しなかったのだった。

そこからはジープを降り、歩きで山道を進む事になった。流石の山道、車で進むには少し難が有ったのだ。その際、邪魔はいくつも有った。余程不知火の里はめだか達を近づけたくないと見える。

嘘が二つある看板と分かれ道、自分達と同じドツペルゲンガー達と、邪魔はとんでも

なく邪魔だった。

そして、彼女達はそのドッペルゲンガーズを倒した時、不知火の里は仕方なく遣いを寄越したのだった。

「いやいや、分かっても中々出来ないもんなんだよ。戦う相手をスイッチするなんて事はさ」

不知火の里の住人、帯。本名不知火半幅。

「さて、次のゲームは鬼ごっこだ。俺が10秒数える間に逃げな。その後10秒生きていられたら合格だ——10、きゅっ!」

「鬼ごっこの必勝法は鬼退治、というのが私の答えだが、どうだ?」

「お見事、正解だ。鬼が相手だろうと逃げなきやいけない理由は無いよね」

たった三行。この間に鬼ごっこは終わった。帯が10秒数えている内にめだかが拳を叩き込み、鬼退治。ゲームの意味が無いだろうと思うかもしれないが、黒神めだかの答えは正解だった。

「付いて来な。取り敢えず、里の中には入れてやるよ」



その頃、瑛嗶は箱庭学園でただぼーっとしていた。改造制服を脱いで、元の青黒い着物と緑色の腰布、黒袴を着用して、3年13組の教室で教卓の上に座る。少し前に感じた嫌な予感は、時間が経つに連れて少しずつ高まっていく。今ではそのゆらりと歪んだ笑みも姿を消し、ただ無表情に空に視線を向けていた。

いつもならこの教室に鎮座している日之影空洞も、今この瞬間にはいない。正真正銘、瑛嗶は教室で一人だった。

この時点で、瑛嗶はこの嫌な予感を払拭する手を持っていた。スキルで答えを知ればいいし、なんなら封印した原作知識を開封してもいい。だが、瑛嗶はそれをしなかった。答えを知るスキルを使う事を瑛嗶は拒否していたし、原作知識は開封するつもりが無いからだ。

「嫌な天気だ」

空は青々とした快晴。だが、瑛嗶にはその青空が何処か不気味に見えた。

「お兄ちゃん」

「ん、鞆負ちゃんか」

そこへやって来たのは、帯刀鞆負。瑛嗶が連れて来た過負荷の少女だ。

「安心院さんは、どこ？」

「なじみ? なんでもまた」

いつもと違って流暢に話す鞆負に疑問を抱きつつも、瑛嗶はゆらりと笑って問い返す。今の鞆負は少しだけ、焦っている様にも見えた。

「いいから、教えて」

「さあ……でもなじみに用が有るならなじみの所に連れて行ってやるよ」

「お願い。出来るだけ、早く」

瑛嗶は疑問を抱きつつも、転移スキルで帯刀鞆負を安心院なじみの所へと移動させた。そして移動させた後、嫌な感覚が増大する。自分で何か問題を大きくしたような、そんな感覚。

「……なじみ、なのか? この感覚の原因は……」

首を捻る。だが、瑛嗶は動かない。安心院なじみに至って、最悪の事態にはならないだろうと考えているからだ。全知全能、それが彼女の特性でもあり、特技なのだから。

「めんどくさい……」

瑛嗶は顔を天井に向けて、目を瞑る。嫌な予感はずれないが、少しすれば晴れるだろう。それまで、待てばいい。

「面白くないなあ……」

◇

走る。走る。走る。帯刀鞆負は走る。黒神めだか達が通つて来た道、不知火の里の中をひたすら駆けていた。胸中には焦りが募り、その感覚は瑛嗶の感じている物と同じ物だった。

それもその筈、帯刀鞆負の故郷。あの古惚けた街が台風が通り過ぎたかのごとく壊されていたのには理由がある。勿論、台風や竜巻、地震などの自然災害じゃない。それはたった一人の男によって起こされた破壊行動だったのだ。

「不味い……本当にあの人だけは、駄目……」

走る。彼女は何百年も昔に見た破壊の権化。

「——獅子目言彦……！」

◇

——現在からおおよそ千年前。それがまだ普通ノーマルであつた帯刀鞆負が生きていた青春時代だった。

その日は、帯刀鞆負の誕生日だった。15歳の誕生日、両親と三人で楽しく過ごす日。

彼女が楽しみにしていた日。その日に、事は起こった。

獅子目言彦が現れたのだ。

破壊の権化、安心院なじみを退ける力を持った男。かつての英雄。その男が、帯刀鞆の街で破壊活動を行った。否、破壊活動では無い。周囲を破壊する程の戦いが起こったのだ。

獅子目言彦と対峙していたのは、二刀流の男。その戦いは、唐突に、突然に、いきなり街を巻き込んだ。一瞬で建物が次々と崩壊し、次々と人が死んでいった。

—— 鞆負、お前は隠れていなさい！ 絶対に、出てきてはいけない。

それが父から鞆負への最後の言葉だった。

—— 鞆負……お母さんもお父さんも、貴方を愛してたわ……誕生日、おめでとう

……!!

それが母から鞆負への最後の愛だった。

父は言彦達の戦いの余波を防ぐために男衆で女、子供を護って死んだ。母は鞆負を抱

さない。

そして少女はその日、15歳になった。

それと同時に、彼女は余りの憎しみに、過負荷マイナスの人格を形成した。

「獅子目言彦……いつか、絶対に……殺してやる……!」

母の身体に抱きしめられながら、少女は意識を失った。

◇

目を覚ました鞆負の眼には壊れた街と死んだ街の人々の死体が飛び込んできた。

そしてそこから鞆負が取った行動は、全ての死体の墓を作る事。15歳の少女は爪が割れようと、血だらけになろうと懸命に地面を掘り続け、全ての遺体を弔った。自分の母と父の遺体は同じ場所に埋めて、毎日欠かさず手を合わせた。

変化に気付いたのは、そこから5年が経った頃。自分の肉体が成長していない事に気付いた。何故なのかは分からない、だがその疑問は未来、瑛叟に会ってから明らかにする。

彼女の過負荷マイナスの人格が無意識にスキルを発動させていたのだ。自分を傷つけた相手

の肉体を操るスキル【^{ラブドール}娯烙少女】。それは少女自身の身体を操る事も出来た。

墓を作る際、少女は地面を掘った。結果、その両手は血だらけになり、筋肉痛にもなり、肉離れも起こした。それはスキルを発動させる一定以上のダメージとなり、少女は少女自身の身体の主導権を握った。

細胞一つ一つに至るまでを操作出来るスキルは、少女の成長を停止させた。そして肉体の若さを永遠の物とした。つまり、不老の肉体となったのだ。

故に、瑛叟と出会う千年後まで少女のまま生きていた訳だが、それを知るのはもつと後だ。

疑問はさておき、少女は言彦に対する憎しみを忘れていなかった。だが、死ぬ事は出ず、言彦が何処にいるのかも分からない。少女はどうしていいのかわからなかった。

考えに考えた結果、少女は言彦を待つ事にした。彼は一度とはいえこの街で戦いを起こしたのだ。もう一度来たとしてもありえない事じゃない。

靱負は幼い思考からそう考え、ただひたすらに待つ事にしたのだ。幸い、自分は老いない。何時までも待つ事が出来るだろうと。

それから千年、少女は娯楽主義の男と出会うその時まで、終ぞ言彦と対面することは無かった。



そして今、少女は見つけた。言彦を。親の仇を。昔の自分ならいざ知らず、瑛嗶によつて鍛えられた自分なら勝てはしなくても一矢報いる事が出来るかもしれないと、駆けた。

元々は嫌な予感から始まる。安心院なじみが学園からめだか達を連れて出て行く所を見て、嫌な予感がした。そしてその嫌な予感は時間が経つ毎に大きくなり、鞞負は嫌な予感の中でふと、言彦の存在を感じ取った。耳に付く笑い声と、破壊の音が幻聴で聞こえた。

そこから鞞負の行動は迅速だった。瑛嗶を探し、安心院なじみの居場所を聞く。きつとなじみのいる場所に言彦が居る。そう直感した。そして今に至る。

「はあつ……はあつ……! あそこ!」

鞆負は不知火半袖の屋敷のドアを潜り抜け、気配を辿って屋敷内を進む。そして、ようやく安心院なじみの気配のある部屋の襖を開けた時、千年前に聞いた破壊の音が鞆負の耳に入ってきて、瞳には待ち焦がれた男の姿があった。

「——あはっ☆」

吹き飛ばされた不知火半袖の事は目にもくれず、少女はその口元を吊り上げた。

そいつは聞けない相談だな

獅子目言彦と、帯刀鞆負が、一つの部屋に入ってからほんの30秒。この30秒の間で起こったやり取りは、その場にいた全員 of 眼に焼き付いている。黒神めだかにも、球磨川禊にも、人吉善吉にも、安心院なじみにも、潜木傀儡にも、不知火半幅にも、不知火半袖にも、そしてなにより獅子目言彦と帯刀鞆負本人達にも、強く眼に焼き付いていた。

ほぼ同時に一つの部屋へ飛び込んできた獅子目言彦と帯刀鞆負。この二人はまず2秒ほど立ち止まり、お互いを見た。その2秒で感じた事は、片や興味無し、片や殺意。そして次の瞬間、帯刀鞆負が猛スピードで突撃。意表を衝いた攻撃は、獅子目言彦の鳩尾にその小さな手刀を届かせた。

だが

その攻撃は言彦の防御力の前に打ち砕かれ、その手刀は血飛沫と共に破壊された。だがそれでも、帯刀鞆負は止まらない。砕けた手刀を引き、返す刀でもう一方の拳を跳びあがって言彦の顔にぶつけた。が、同じ様に跳ね返され、破壊される。

着地して蹴りを加える。が、破壊される

蹴りの勢いで回転しもう一度蹴る。が破壊される。

肉体をスキルで動かし、跳びあがって肩からぶつかる。が、破壊される。

更に無理をして飛びあがり、頭突きをする。が破壊される。

四肢と頭蓋を破壊されたが、地面に落ちる前にその首筋に噛み付く。が、そこまで。

うっとおしいハエがいるかのように獅子目言彦は帯刀鞆負の胴体にその大きな手をぶつけて薙ぎ払った。胴体もまた、破壊される。

無事なのは生きていくのに最低限の内臓。だが致命的なまでに頭蓋骨が破壊され、脳にまでそのダメージが入っていた。致命傷、それも獅子目言彦による。言彦による破壊のダメージは、治らない。それが例え、スキルでも。

帯刀鞆負の身体は、瀕死の状態。それでもなお、彼女の瞳は獅子目言彦を睨みつける。

脳にダメージがたって、もはや意識は朦朧とし、様々な情報処理が出来ていない中でも、彼女は言彦に殺気を送り続けていた。

それがこの千年溜まりに溜まった殺意。獅子目言彦に対する復讐と憎悪は、それだけの物だったのだ。

だが、殺意だけでは獅子目言彦を殺せない。身体は動かず、神経の一本一本に至るまでズタズタだ。もはや戦闘どころか日常生活すら出来ない。

と、そこに絶望の一声が掛かる。

「む？　なにやら蠅が飛んでいた様だな。全く、この言彦に纏わり付くとは気持ち悪いな」

あれだけの攻撃、あれだけの執念が、蠅と同じ。千年分の殺意と憎しみが、たったそれだけの事で一蹴された。

圧倒的、それだけしかない。

「あ……………う……………!!」

「靱負ちゃん!」

倒れた靱負を見て、駆けよったのは安心院なじみ。瑛嗶が連れてきて共に暮らす少女

だ、妹分的な思いもあったのだろう。抱え上げるが、その身体は既に満身創痕以上に死体同然。全知全能の安心院なじみでも、その治療は不可能だった。

「……めだかちゃん」

「な、なんだ」

「僕が15秒間だけ、時間を稼いでやる。だからその隙に逃げろ」

鞆負のおかげで、原作の様に善吉と球磨川が飛び掛かる様な事にはならなかったが、それでも状況は致命的。あの安心院なじみでも、時間稼ぎ位しか出来ない。

「おい安心院さん！ アイツは誰だ！ もったいぶらずに教えろ！」

逃げろというのに、黒神めだかは状況の確認を行なう。だが、安心院なじみは何も言わず、鞆負をめだかの近くへ置いて、嫌な汗を流しながら立ち上がり、言彦の一挙手一投足を見ていた。

「げっげっげっげっげっげっ!! あ、新しいいいいい!! この再会！ 実に新しいな平等主義者よ！ えーと、今風に発音するなら安心院なじみか！」

会話の流れをぶった切ってそう行ったのは獅子目言彦。高笑いしながら安心院なじみを指差した。

「僕の事は親しみを込めて安心院さんと……呼ばれたくねーな、お前には」

「安心院さん！」

「ははは、そう聞いてやるなよ。なんせ、この獅子目言彦は……人外が初めて勝てなかつた相手なんだから」

「!?」

会話をするなじみと言彦の間に入って問いただすめだか。だが、その問いには言彦によつて入室の際にボロボロにされた半幅が答えた。

そしてその事實は、安心院なじみに大きな信頼を寄せていためだか達に大きな衝撃を与えた。なんせ、あの安心院なじみが、勝てなかつた相手なのだから。

「おいおい、間違えるなよ。僕が初めて勝てなかつた相手は言彦じゃねーよ。ま、それでも五千年前、当時の僕ときたらこいつに少なくとも一億回は敗北した。当てもスキルはー京はあつただけどね」

「……………!!」

「ほら分かつたら早く逃げろよ。僕の好意に甘えて」

「……………甘える!」

安心院なじみの言葉に、黒神めだかは改神モードを発動。黒神ファントム（ちゃんとした版）を使用し、倒れた不知火と帯刀靱負、善吉と球磨川に潜木傀儡、そして言彦に武器扱いされていた半幅奪い取つて、全員抱えて部屋から飛び出して行つた。

その背中を見て、安心院なじみは笑う。そして言彦に対峙した。

「げっげっげ、あの女はお前のお気に入るか？ 安心院」

「どうでもいいだろそんな事」

「まあいい。それにしても人間の無刀取りとは新しい。まあ、貴様相手を相手にするには相応の武器を用意せねばならないと思っていた所だ」

すると、言彦は何処からともなくその武器を取り出した。

「丁度輪ゴムを持っていて良かった。貴様と戦うには丁度いい武器だ。げっげっげ」

「お前のそういう所は、大嫌いだよ」

「げげげ、だがまあ貴様とは5000年前にもう戦い飽きておる。どうだ安心院。先程逃げて行った奴らを儂の前に連れてくれば見逃してやつても良いぞ？」

言彦は戦う前にそう言う。だが、安心院なじみの考えは変わらない。故に

「そいつは聞けない相談だな」

石動武語の時同様自分の生きられる道を自ら切り捨てる。

そして、二人はなんの合図もなく行動を開始した。いつもの様なスキル弾幕を発動させるなじみに対し、輪ゴムをただ飛ばした言彦。

結果は、スキルを全て刎ね飛ばされ、輪ゴムによって上半身と下半身を分断されたな

じみが物語っていた。

「だがまあ貴様とは5000年前にもう戦い飽きておる。どうだ安心院。先程逃げ行った奴らを儂の前に連れてくれば見逃してやっても良いぞ?」

言彦は戦う前にそう言う。だが、安心院なじみの考えは変わらない。故に「そいつも聞けない相談だな」

石動式語の時同様自分の生きられる道を自ら切り捨てる。

「新しい」

おん……と不気味な雰囲気を感じながら、言彦は笑ってそう言った。



「っ!」

その頃、瑛叟は唐突に、立ち上がる。ガタツと音を立てて、椅子が倒れた。着物の裾が揺れる。

「……………なじみ？」

眼を見開き、何も無い空間にそう呟いた瑛嗶の言葉は、誰にも届かず空気に混じって、消えた。

「——瑛嗶」

そんな言葉に振り向く瑛嗶。3年13組の教室の入り口。そこに立っていたのは、安心院なじみと同じ、ノットイコール悪平等。不知火の里を生み出した男。

「半纏……………」

不知火半纏だった。

僕はね、瑛嘎。世界で何よりも、誰よりも君の事が——
——大好きなんだ。

瑛嘎となじみと一緒にいる中で、瑛嘎となじみが交わしてきた会話の中で、こんなやり取りが有った。誰もいない教室の中で、寄り添うように一緒にいた二人の会話。これはその一節。

——なあなじみ。

……………なんだい瑛嘎。

——なんでお前は俺と一緒にいるんだ？ 現実を知ったなら俺といなくても良いんじゃないの？

……………瑛嘎は僕が居なくなったらどうする？

——え？

……………僕が殺されたらどうする？

—— さあな……でもまあ、悲しむんじゃないか？

……… 僕もだよ。君が居なくなったら悲しいし、大泣きしちゃう。

—— 答えになってないぞ。

……… いなくなったら悲しいから、だから一緒にいるのさ。

—— ふーん………そうかい。

……… ふふふっ

きつと、何時か言える日が来る。何時か言わないと我慢できない日が来る。何時か、思い描いた時間を過ごせる日が来る。

だからそれまでは、その時まで、一緒にいたい。だからその時になったら、きつと
言える。

僕はね、瑛嗶。世界で何よりも、誰よりも君の事が——



———なじみが死んだ。いや、殺された。

これが半纏から瑛嗶に伝えられた事。元々、安心院なじみと不知火半纏は同じ悪平等ノットイコール。安心院なじみが死ねば、不知火半纏が代わりになるというシステムだった。つまり、反転したのだ。なじみと半纏が。故に、反転院さんとなった不知火半纏は、動きだし、瑛嗶にその事を伝えた。

「……そうか」

嫌な予感。それを感じてて尚動かなかった瑛嗶。前世でのヴィヴィオと同じ展開になった。いや、寧ろそれより酷い展開だ。助けられる展開と、もう手遅れな展開。この差は激しい。

瑛嗶は消えてしまった嫌な感覚と胸に穴が開いた様な虚脱感に呆然としながら、半纏に短く返した。そして、伝える事は伝えたとばかりに、半纏はその場を去り、瑛嗶はまた一人になった。

なじみが死んだというのにやけに冷静に思考が回る。なじみが死んだ、とすれば鞆負のあの行動はなじみを助けに行つたと見るべきだ。

そして、助けに行つたのになじみが死んだとなれば、鞆負の方も死んだか、生きてても瀕死といった状態だろう。一体誰がなじみを殺したのか、なじみが行つた先は何処な

のか、そんなのはすぐに分かった。学園の中の気配を探れば。不知火半袖の気配が無く、黒神めだかや生徒会長の善吉、そして球磨川の気配もない事が分かる。大方、不知火の里に行つたのだらう。

そして、その不知火の里の中で、なじみを殺し得る人物がいるとすれば、一人しか思ひ当たらない。

「言彦……か」

瑛噺は嘆息し、天井を見上げる。そして眼を瞑り、体の内から湧きあがる感情に気がついた。ヴィヴィオの時にも湧きあがった感情と、それとは別の感情。

一つは言うまでもなく、なじみを殺された怒りと動かなかつた自分への怒り。そしてもう一つは――

「あーあ、なじみの奴……死んじやつたよ」

呟く。そうすることでそれが現実だと認識する。夢ではない、紛れもない現実で、なじみは死んだ。殺された。瑛噺はどきつと床に倒れこみ、そのまま意識を深い深い底の方へと沈めて行つた。



そこは、安心院なじみの作りあげた空間で、死者や意識の無い者が訪れる教室。瑛嗶はそこにやって来ていた。此処に来るのは二度目、安心院なじみに現実を思い知らせた時以来だ。

此処に来た理由はただ一つ。安心院なじみの気配をその空間に感じたからだ。安心院なじみが死ぬ直前の15秒間で、自身の意識を飛ばしたのだろう。瑛嗶はその意識と対面する為に、その空間へ飛んだのだ。

「やあ瑛嗶」

「おう、なじみ」

「ごめんね、死んじゃった」

なじみは瑛嗶に抱き着き、そう言った。瑛嗶は何をするでもなく、それを受け止めた。そして数秒、そうした後なじみは瑛嗶から離れて少し寂しそうに笑った。

「今の僕は精神の欠片みたいなものでね。本物の僕はもう死んじゃってる。でも、瑛嗶。君にだけは絶対に伝えたい事が有るんだ」

「……………」

瑛嗶は何も言わない。だが、なじみは気にせず語る。窓の外には何時の間にか、大雨が降り注いでいた。

「僕はね、いつもの君が好きなんだ。いつも面白い事を探して、ゆらゆら笑って、時に人を驚かせる。そんな君が好きなんだ。だから、言彦が僕を殺したからって復讐とか考えないでね。僕は復讐に囚われた君なんて、見たくは無いよ。だから、いつもの君でいてよ」

「……………」

「…………… 瑛、君は前に言ったよね。なんで俺の傍にいるんだ、現実を知ったなら俺の傍にいらなくても良いんじゃないかって。僕は言ったよね、いなくなったら悲しいから一緒にいるんだって」

瑛は何も言わない。ただただ、なじみの言葉を聞いている。徐々になじみの身体が透けて来ていた。精神の欠片が崩れ始めたのだ。

「あの時は言えなかったけど、今なら言えるよ」

「……………」

少しづつ、体が消えていく。だが気にせずなじみは瑛にその両腕を伸ばし、首に回して抱き着いた。

「僕は一人の女として、君が大好きだ。世界の誰より愛してる」

瑛嘎は何も言わない。なじみはそんな瑛嘎にクスリと笑い、その顔を瑛嘎の顔に近づける。そしてその距離が0になった時、なじみはその瞳から涙を流した。

「正直に言えば、死にたくないよ……ようやく言えたんだ……ようやくこの気持ち芽生えたんだ……初めて恋をしたんだ……長い長い時間の中で、君だけが僕の世界に色をくれたんだ……だからもつと、もつと一緒に居たいよっ……！ 瑛嘎あ……っ!!」

涙は止まらず、なじみは崩れる身体を少しでも長く持たせられる様に支える。瑛嘎の胸に顔を埋め、その着物を濡らした。

「……………なじみ」

「……………」

瑛嘎はそんななじみの耳元に顔を近づけ、簡単に、短く、言葉を放った。

「あ……………」

瑛嘎の言葉に、なじみは眼を見開き、頬を紅潮させて満足そうに笑った。そしてもう一度瑛嘎の顔にその唇を近づけ、繋がる。眼を瞑り、ただただもつと近くにと身体を寄せた。瑛嘎はそんななじみを力強く抱きしめた。

すると次の瞬間、なじみの身体は完全に消え失せ、教室の空間がガラガラと音を立て崩れて行った。

残ったのは、瓦礫と化した教室と、大雨の中立ち尽くす瑛嗶。青黒い髪は雨に濡れ、その着物もびしょ濡れになる。その手に残ったなじみの重さが消え失せ、ただ雨に打たれる。俯いたその表情は誰にも分からない。

だが、その手に残った物を眺める瑛嗶の肩は、何処か震えている様に見えた。

「く……………！」

瑛嗶のそんな嗚咽と頬を伝わる物は、大雨の音と降り注ぐ水の多さに掻き消された。

瑛嗶の手の中にあるのは、瑛嗶がなじみに昔プレゼントした——黄色いリボンだった。



「はあ……………」

元の教室に戻ってきた瑛嗶は、倒れた身体を起こして立ち上がる。

「……………全く、なじみの奴も勝手だなあ……………復讐するなどの、いつもの君でいてくれたの

……本当に——」

瑛嗶は髪をくしゃりと掻き上げて、その顔を上げる。

「——面白〜」

瑛嗶はいつもの様に、そう言った。そして青かった瞳はかの安心院なじみと同じ、少し赤い色に染まっている。

「復讐はしない。俺もいつもの俺でいる。でも……でもだよ、なじみ。久しぶりに昔の友達に会いたくなつたから、ちよつと遊びに行くのは、いいだろう？」

瑛嗶は安心院なじみの形見であるリボンを、腰布に括りつけ、ゆらりと笑つた。

……僕はね、瑛嗶。世界で何よりも、誰よりも君の事が——大好きなんだ。

——俺もお前を愛してる。世界の誰より、大好きだ。

見事、儂はこの戦いを生涯忘れない

——5000年前の事、なじみが言彦と最後に戦った日。瑛嗶は言彦と衝突した。

発端は勿論、なじみと言彦が戦っていた事。瑛嗶はたつた一度だけ、言彦と対面していたのだ。それは、なじみが言彦と戦つて敗北した後の話。なじみが言彦に負けて気を失っている時、瑛嗶はなじみを回収するべく言彦の前に姿を現した。

無論、言彦は現れた瑛嗶に対し興味を持ち、お互いに自己紹介をする。結果、お互いはお互いに興味を持ち、暇潰し感覚で戦闘に入る。

その際、なじみは言彦に瑛嗶がプレゼントしたりボンを奪われた。

「げっげっげ、それではまあ……始めるとしようか」

「おう、精々やられない様に気を付けな」

瑛嗶はなじみの身体をスキルで遠くに移動させて、ゆらりと笑った。言彦はそんな瑛嗶に飛びかかる事はせず、正々堂々準備が終わるのを待った。

そしてお互いの戦闘準備が終わった時、お互いが動きだす。その足に力を込め、地面を全力で蹴った。

地割れを起こす地面。消える二人。そして、一瞬の静寂の後——

「あああああああ!!!」

「おおおおおおお!!!」

轟音が鳴り響き、両者の咆哮と共に拳と拳がぶつかった。周囲に撒き散らされる衝撃波、地割れが更に広がり、地形が変わる。そこからの戦闘はお互いにしか認識出来なかつた。きつと、安心院なじみが起きていても目視することは出来なかつただろう。

瑛夏の拳が言彦の右頬を穿った

言彦がりボンを音速以上で振るが瑛夏によつて奪い取られた

瑛夏の手刀が言彦の鳩尾にめり込んだ

言彦の拳が瑛夏の残像を掻き消した

瑛夏の踵が言彦の頭頂部に叩き落された

言彦は頭突きをするが、それを受け流して瑛嗶は距離を取った

言彦は両手を空に振り下ろし、空気の壁を飛ばした

瑛嗶はその壁を正面から突破して言彦の懐に入った

言彦は両手をハンマーの形にして振り下ろす

瑛嗶は大きな言彦の腕の間を通って顎を打ち上げる

言彦が吹き飛ばされ、地面を跳ねた

此処までの行動がすべて数秒の間に起こった。結果を見れば、瑛嗶は頭突きを利用して後ろに下がった時以外で、言彦の攻撃を全て躲していた。ダメージもなく、その身体に傷は無い。

言彦にスキルは効かない。が、自身の防御に関してはスキルの発動は出来る。とは

言っても言彦の攻撃に対してその防御スキルは紙同然、だが飛んでくる石や衝撃波に關しては十分にその効果を發揮する。

故に瑛叟の身体には怪我ひとつ無かった。

「げっげっげっげっげっ……この言彦、ここまで手も足も出ない相手は初めてだぞ！
新しい!!」

「いやいや、俺に此処までやられて倒れない相手も初めてだぜ。それこそ、面白い」

おんつと笑う言彦と、ゆらりと笑う瑛叟。お互いがお互いを強者と認め、その戦いを楽しんでいた。だが、力の差は歴然、何十億年と生きて来た瑛叟と人間としての寿命の中でしか生きてきていけない言彦。身体能力の差はそう無いと言っても、圧倒的に経験の壁が二人の間にあった。

戦闘の全てにおいて勝っているのは瑛叟。耐久力や防御力といった部分で言えば言彦は瑛叟に勝っているかもしれないが、それも瑛叟の攻撃力の前では少し心許無かった。威力は軽減出来ている筈だが、それでも言彦の身体にダメージは確実に入っていた。

先のやり取りだけでも四発。その内人体の構造上の弱点である顎と頭頂部と鳩尾の三カ所に一撃ずつ喰らっていた。その一撃一撃が、重い。まるで自身の身体が豆腐になって、1t以上の鉄球が勢い良くぶつかって来た様な感覚。気を抜けば意識を持つて

いかれそうな程だった。

「さて、続けようか。少なくとも一撃位は貴様に入れて見せよう」

「いいね。お前はどれくらい耐えられるかな？ 一撃入れる前に倒れるなよ？」

言彦と瑛嗶は軽口を言い合い、動きだす。時刻は夕刻、日もそろそろ沈んで来る頃合い、この戦いは地形を変え続け、空が暗くなつた頃に決着を付ける。

「はあっ……はあっ……はあっ……はあっ……！」

息切れの音、これは言彦の物だ。その大きな身体には青痣や流血が有り、言彦はもう満身創痍だった。

「さて、一撃はまだ入れられていない訳だけど……良くここまで耐えたね」

これは瑛嗶の言葉。その表情は戦闘が始まる前と同じ物で、一切の疲労が見えない。そして勿論、その身体に傷など一切なかった。

「げっげっげ……はあっ……はあ……強い、強いな娯楽主義者。実に新しい、此度は新しい事尽くしで涙が出るわ。貴様の様な強者に会えて、この言彦感無量だぞ！」

「そいつは良かった。とはいえ、お前の敗因は経験不足。まだまだ未熟なだけだ……これから長い間経験を積めば、多分俺も無傷じゃすまないだろうな。精進すると良い」

瑛叟の言葉に言彦は満足気な笑みを浮かべ、瞳を閉じた。

「見事、儂はこの戦いを生涯忘れない」

「俺もだよ」

瑛叟は無防備になった言彦の顔を殴り抜け、言彦は意識を失った。

こうして言彦は瑛叟に敗北し、こうして瑛叟は言彦に勝利した。



そして時は現在に戻る。アレから5000年、言彦の脅威は再度襲い掛かる。今度は、安心院なじみを殺した事を発端として。

反転した不知火半纏、通称反転院さんと駆けつけた十三組サーティーンパーティフロンツックスの十三人、表の六人によつ

て黒神めだか達は言彦の脅威から一時的に救出されていた。球磨川禊と人吉善吉はその際言彦に飛び掛かり、結果的に意識を失う破目になったのだが、命を落としてはいない。現在は赤青黄や人吉瞳による治療を受けている。

そして黒神めだかは半纏による説明を受けていた。

「——だから、俺はなじみの意志を継ぎ、意地でも諦めて貰うぞ。不知火半袖との友情をな！」

半纏による説明は簡単に言うと、不知火の里と獅子目言彦の関係。そして自分自身の事だった。

曰く、不知火の里は半纏と同じで希少種を保存したい本能を持っていた。

曰く、その本能に基づき獅子目言彦は保存され、現代まで伝承されてきていた。

曰く、不知火半袖は四年後、次の言彦となる。

曰く、半纏は安心院なじみの影武者だった。

曰く——

「とにかく嫌だ！ 私は諦めない、諦めないもんね！ ばーか！」

それでも、黒神めだかは諦めない。意地でも獅子目言彦を打倒するつもりだった。不知火半纏はそんな黒神めだかを見て呆れかえる。

「それで、どうするつもりだ」

「私が言彦より希少種めずらしいものになればいいのだろう！ ならば話は簡単だ、言彦は私が今日中に叩き潰す！」

半纏はそれを聞いて、めだかを軽く小突いた。そしてため息を吐く。

「まあ、お前ならそう言うと思った。でも、お前に言彦を倒す事は出来ない。お前には絶対にな」

「……………！ 『お前には？』」

半纏の言葉に、めだかは気付く。自分には絶対に出来ない。ならば、言彦を打倒出来る人材がいるというのだろうか？ ならばそれは誰だ？ あの安心院なじみすらも殺す相手。破壊の権化、デストロイヤー言彦。そんな相手を打倒出来る奴。

「そう、黒神めだか。お前がどんなに完璧超人でも出来ない物は出来ない。あの怪物、言彦を倒す事は出来ないんだよ」

「だが……………」

「最後まで聞け。お前には出来ない。でも、言彦は過去に一度だけ。唯一敗北した相手が居るんだよ」

「！」

「不思議に思わないのか？ あの安心院なじみが殺されたんだぞ？ そして、あの安心院なじみがその生涯の中で最も長い間共にいた相手は誰だ？」

半纏の言葉にめだかははつとなる。安心院なじみが、その生涯の中で最も一緒にいた相手。そして、その生涯の中で言彦を打倒しえた人物。そんなの一人しか思い当たらない。

「泉ヶ仙……瑛叟……」

「そう、瑛叟だ。安心院なじみが一億回戦ったんだぞ？　そしてその時瑛叟はなじみと共に居た。言彦と会った事が無い訳が無い。そして対峙したなら、戦闘になるのは必至だろう？」

「……」

「瑛叟は勝ったんだよ、言彦に。あの破壊屋に」

半纏の言葉に、めだかは眼を見開いた。あの獅子目言彦と対峙して、その恐ろしさは知っている。だが考えてみれば瑛叟の全力という物をめだかは知らない。

半纏の言っている事が本当なら、何とかなるかもしれない。不知火半袖を助ける事も、出来るかもしれない。

「そして、安心院なじみが生涯愛した男が。安心院なじみの死を知って、動かない筈が無
ら」

「その通り」

「!!」

半纏の言葉の後、瑛叟は現れた。青黒い着物を揺らして、その腰に安心院なじみのり

「ボンを括りつけて、安心院なじみと同じ色の瞳に闘志を燃やして、現れた。『さて、まどろっこしい事はどうでもいい。とりあえず、段階を踏んで言彦を追い詰めようか』」

瑛嗶はそう言って、何時もの様に、ゆらりと笑った。

さて、それじゃあ行こうか。鶴喰梟の居場所にして不知火半袖の次の仕事場、そして俺が前働いてた場所、箱庭病院に、さ

結果と共に、過程も重視する。

安心院なじみも泉ヶ仙瑛喰も同じくこの理念を持っている。故に、復讐とは違って自身を楽しむ

おもしろいだけを追求して言彦に会おうとしている瑛喰はその過程も重視する。

だけを追求して言彦に会おうとしている瑛喰はその過程も重視する。

故に、彼は黒神めだかが言彦を打倒しようとしているのならそれを少しだけ手助けしようと考えた。

黒神めだかに勝ちたかった球磨川禊の時と同じ様に。黒神めだかに胸を張れるようになりたかった人吉善吉の時と同じ様に。言彦を打倒し不知火半袖と友達になりたい黒神めだかに、ほんの少しだけ手を貸す事にしたのだ。

そこで瑛喰が連れてきた人材は二人。贄波生煮と鶴喰鴟の二人だ。この二人には共

通して持っている力が有る。そう、スタイルだ。スキルとは違う別次元の力。言葉というありふれたコミュニケーション能力を武器にしたある種スキル以上に厄介に力だ。

今回、瑛喰はそのスタイルを黒神めだかに習得させようと考えたのだ。言彦に対し、スキルは通用しない。だが、言葉が通じる以上、コミュニケーションが取れる以上、言彦にスタイルが通用しない筈が無い。

「スタイルは言葉におけるコミュニケーションを軸にした武器であり、力だ。今回、めだかちゃんにはそれを習得してもらおう」

現在、瑛喰とめだか、生煮、鷗と人吉瞳の治療で眼を覚ました善吉と球磨川が電車に乗って鶴喰梟の居場所へと向かっていた。

ちなみに、鶴喰梟の居場所についてはめだかがちよつと走って父親である黒神舵樹から家長の権限と共にぶんどって来た。一応瑛喰も知っているのだが、そっちの方が面白いという理由で教える事はしなかったようだ。

「と、いう訳なんだけども。全然状況が分かって無い様だからさめだかちゃん。球磨川君と善吉君に意識を失ってからの事を教えてあげなよ」

「む、まあそうだな」

球磨川と善吉は空気だったポジションからやつと解放されると身を乗り出してめだかの話を聞く体勢になる。そしてめだかはそんな二人を見て、獅子目言彦に付いて話し

始めた。

「まず、貴様達が言彦にやられてからの事だ。私は貴様達がやられ、逃げられないと踏んで奴と戦う事にしたのだ。結果から言おう。奴には私の主立った技が全て効かなかった。改神モードによる黒神フアントムもそれ以上の速度で動かれては何の意味もない」

「ま、マジかよ。で、でもよ！ それならスキルはどうなんだ？ 箱庭学園の二大反則スキルの【不慮の事故】と【致死武器】とか……」

めだかの言葉に善吉が反論を申し立てる。だが、そんなのは予想済みとばかりにめだかは一つ息を吐いて諦め半分に応えた。

「使ったんだよ。【不慮の事故】も【致死武器】も【大嘘憑き】も観察できた限りの一京分の一のスキルも、劣化とはいえ瑛唄さんの瑛唄式スキルも、【完成】で会得したスキルは全て使った。だが、効かなかった……いや、奴は私がスキルを使ったことすら気付かなかったようだった」

「アイツにはスキルそのものが通用しないって事か……」

「まああれは昔からだからね。なじみも終盤ではあしらわれる感じだったし」

瑛唄は会話に口を挟んでそう言った。そしてめだかはそんな瑛唄の言葉を聞いて、続けた。

「それで、安心院さんが死んで反転した反転院さんによれば、瑛唄さんは以前言彦に勝利

したとの事だが……詳しく聞かせてくれないか？」

「まあいいぜ」

めだかの言葉に瑛唄は頷き、昔の事を懐かしむ様に切り出した。今から5000年前の言彦との戦いを、簡単にかいつまんで話出した。

「アレはたしか5000年前の事、なじみと一緒に暮らしてたんだけど……アイツが言彦の下に何回も何回も通うようになってな……最初は放っておいたんだけど、1億回を超えると流石に変だなあって思って付いてったんだよ。そしたら、言彦に負けたなじみがいた」

「……………」

「でだ。その時はまあ戦うつもりもなくなじみをただ回収しようと姿を現したんだけど……まあ言彦に眼を付けられてね。面白そうだったから喧嘩することにしたんだよ。まあスキルが効かない事とか回復不可とかはなじみの戦いである程度理解してたし、そのつもりで挑んだんだけどさ」

「『え?』『それじゃあ安心院さんがやられるのをただ見てた訳?』」

「そうだよ。その頃は特に親密な仲間でも無かったしね。続けるよ。それで、結構長い時間掛かったけど、戦い続けて俺圧勝。無傷のまま疲労もなく言彦を地に沈めてやった」

瑛唄はそう言って、少し勝ち誇った顔をしながら話を終えた。

「という訳で、言彦にはスキルは効きません。回復も出来ません。かといってフィジカルでの殴り合いはめだかちゃんでも全力以上振り絞ってなんとかって所です。基本打撃も効きません。まあ俺ならちよちよいと一捻りだけどね！」

瑛嗶の言葉に反応したのはまたも球磨川禊。やはり過負荷の彼としては言彦をちよちよいで一捻りに出来る瑛嗶の言葉を目聡く受け取った様だ。

『じゃあ瑛嗶さんが倒せばいいじゃん』『獅子目言彦をさあ』

「まあそれも有りだよな。でも、俺としてはそんなの面白くないだよな。ほら、俺って娯楽主義者な割にめんどくさがりじゃん？ めだかちゃんが倒した所でなじみの恨みを晴らそうかなって。まあ無理そうだったら俺が殺すけど」

瑛嗶の言ってる事は簡単。もしもの時は俺がどうにかするから取り敢えず試してみ？ という事。あの獅子目言彦相手に随分と軽く出た物だ。正直なところ、これまでの戦いでここまでプレッシャーを感じない戦いが有っただろうかと瑛嗶を除く全員が思った。

例えるなら命綱を付けてそれなりに高い段差から飛び降りる様な感じだ。しかもその挑戦の前にスタイル習得という事前授業までやってくれるというのだ。安心感が半端無かった。

「さて、それじゃあ行こうか。鶴喰梟の居場所にして不知火半袖の次の仕事場、そして俺

468 さて、それじゃあ行こうか。鶴喰梟の居場所にして不知火半袖の次の仕事場、そして前働いていた場所、箱庭病院に、さ

が前働いていた場所、箱庭病院に、さ」
瑛喰は停車する電車から降りて、ゆらりと笑った。

コレは寿常套のスタイル、『童幼使い』だよ

箱庭病院

ここはこの物語の原作を見れば、様々な物が出会い始まった場所である。例えば黒神めだかと人吉善吉の出会いの場所。例えば球磨川禊と黒神めだかが出会った場所。例えば志布志飛沫と蝶ヶ崎蛾ヶ丸が潰した場所。例えば泉ヶ仙瑛嗶と人吉瞳が働いていた場所。例えば——鶴喰梟が院長を務めていた場所である。

そして、潰れた後も取り壊されずに残っている不気味な廃病院。それが今の箱庭病院だ。瑛嗶達はそのへやって来ていた。志布志飛沫の【憎武器】ハズイカテッドによって罅割れボロボロの院内を歩く瑛嗶達。

瑛嗶は以前働いていた事も有って内部構造は把握済み。迷い無く進んでいた。

だが、変化が起きたのはとある角を曲がった時。

「あれ？　なんか今変な感じしなかった？」

最初に違和感に気付いたのは鶴喰梟。瑛嗶はゆらゆら笑っている。その『和服型改造

制服』を揺らしながら。だが、気のせいだろうと更に前に進む。

流石に瑛唄は気付いていた。この変化に。気付いてて尚教えない。そしてさり気なく最後尾を歩く様に並び順を変動させ、前へ前へと進ませる。

「それにしても良く覚えてるもんだな。ずっと前の事なのによ」

「何を言うか善吉。ここは私や貴様にとつても思い出深い場所だろう」

「『そうだね』『かくゆう僕も』『瞳先生とファーストキッスを交わした場所でもあるよ』」

「お前人の母親とどんな思い出作ってんの!?!」

変化に気付かない。瑛唄は笑う

「それにしても、スタイルの創始者つてのはどんなもんなだろうね?」

「それは分からないよ。私のスタイルも我流だからね。めだ姉に私がスタイルを教えられないのもそこにある」

「『あはは』『それじゃあバーミー君は』『元々スタイルを使えたわけじゃなかったんだね』」

変化に気付かない。瑛唄は笑う

「……………」

「……………」

「……………」

「「!?」」

変化に、気付いた。瑛嗶は笑う

「えええええ!? 俺達の身体が、幼くなってる!?!」

そう、幼くなっているのだ。瑛嗶を除いて、全員の身体が幼くなっている。おおよそ2歳児程の身体に、若返っているのだ。そしてなにより、言彦によつて与えられた傷の全てが、無くなっていた。

「ははは、随分と可愛くなつたね皆。小さいなあ」

「瑛嗶さん、は無事なのか……だがコレは一体……?」

「コレは寿常套のスタイル、『童幼使い』だよ」

そう、この場にはいないがこの現象は漆黒宴で登場した婚約者候補の一人。寿常套のスタイルがこの場で発動していた。童謡を歌う事で、それを聞いた対象を若返らせるスタイルだ。

ただ、童幼というスタイルは普通とは違って、別に歌を聞きとれていなくてもいい。その歌による空気の振動が伝わる範囲、それがこのスタイルの効果範囲。

その効果範囲に入った故にめだか達は幼くなつてしまつたのだ。瑛嗶が同じ位幼くなつていないのは、ただ生きてきた年月が多すぎているだけだ。

というより、瑛嗶はこの世界に生まれた時から現在と同じ肉体年齢だったのだ。とい

うことは、瑛噺は生まれた直後まで若返らせられたとしても、赤子になることはない。このスタイルの天敵みたいな男なのだ。

「ははは、まあアレだ。どうやら不知火半袖はもう此処にいるみたいだね。それに、寿常套と杠かけがえも居るみたいだ。ずいぶんとまあ……役者が揃ったもんだ」

「瑛噺さん、そんなの言ってる場合ではないかと……」

「まあこのまま赤ん坊になっても困るし、俺がちよいと捻ってやつても良いんだけど……めだかちゃん、お前は此処にスタイルを学びに来たんだ。現スタイル使いを相手にしてみるのも勉強になるだろ。という訳で、自分で何とかしろ」

瑛噺はそう言うと、そのままゆらりと笑ってスキルで転移した。向かい先は、鶴喰臯の居る院長室である。



「！ おや、随分とまあ大物が来た物だな。泉ヶ仙瑛噺、私は君を招いたつもりは無いのだが……まあいい、俺は我慢して、君を歓迎しよう」

「やあやあ鶴喰臯。死んだとか世間は言ってるけど、幽霊になった気分はどうだ？」

まあ興味は無いけどさ。とりあえず、面白そうだから俺はお前に歓迎されてやるよ」

瑛叟がやってきた院長室には、鶴喰梟と檻に入れられた潜水傀儡しかいなかった。どうやら不知火半袖は既に善吉達の下へ言った様で、杠かけがえも居なくなっていた。

「で、何の用？」

「用なんかねえよ。死人に用が有るとしたらなじみの方に会いに行くわ。自惚れんなよ小僧」

瑛叟はそう言って少しだけ惚気た。だが鶴喰梟はそんな瑛叟にめくじら立てる事もなく笑った。どこかダンディーな笑みを浮かべながら瑛叟に対して会話を続ける。

「まあお前に何かした覚えは無いし、最低限関わりたくない様にして来た筈だからな。ま、ゆっくりしてけよ化け物。俺は居て欲しくもないが我慢してお前と会話しよう」

「そいつはどうも。つってもお前と話す事は何も無いんだけどね？ 正直なところ、俺の目的はお前のスタイルを見る事だからね」

「なるほど、それならばそれを見せたらお前は帰ってくれるわけだ。いいだろう、見せてやるよ。獅子目言彦に唯一対抗出来る手段をな」

鶴喰梟は立ち上がり、両手を広げてそう言った。瑛叟の目的はスタイルを習得すること。ついでにめだかに習得させてみよう的な考えなのだ。正直なところ、スタイルを習得しなくてもいいのだが、アブノーマル、マイナス、スキルと色々な玩具を手にして来

た瑗嗶からすれば、スタイルという新しい玩具が目の前に転がって来たこの状況で、欲しいなあと考えるのも当然の事。

やはり瑗嗶は瑗嗶。面白い事には貪欲な男なのだ。

「それで、お前は何か見たい？ どうせ漆黒宴で色々見たんだろう？ 贅波の逆説使い、叶野の漢字使い、潜木の誤変換使い、桃園の名札使い、そしてついさつき寿常套の童幼使い。あと見てないのは……まあ一つだけか。いいぜ、じゃあ俺の生み出した最後のスタイル。嘘八百使いを見せてやる」

『結構使い勝手がいいんだぜコレ。いろんな作業が短い間で終わるからな』

鶴喰梟がそう言い終わった後、鶴喰梟が続いて言葉を吐いた。瑗嗶の目の前には鶴喰梟が二人。嘘八百使いとは、嘘を重ねて自分の分身を生み出すスタイル。他にも色々出来そうではあるが、主立った使い方は分身の生成のようだ。

「へえ……随分とまあ面白いスタイルも有ったもんだ。それじゃあまあ……一人に戻れ」

ばきゆん。この音が瑗嗶の指から放たれ、分身の鶴喰梟が消し飛んだ。

「……随分とまあ……物騒な力を持つてるなお前……流石の化け物。とりあえず、征獄うちくなよ」

鶴喰梟がそう言うと、瑗嗶は潜木傀儡の様に突然現れた檻に入れられた。

「……なるほど。獄中って訳か。動くど征獄を間違えた誤変換……ま、こんなのは俺を捉えておくには少しばかり小さすぎる」

すると、瑛暎を囲ってた檻が消え失せた。それこそ、霧の様に消え失せて行つた。

「……驚いたな。スタイルをこども簡単に使いこなすとは……」

獄中にある瑛暎の使つたスタイルは、同様に誤変換。極小と獄消を間違えた誤変換。

そして、瑛暎がスタイルを使つたという事は、誤変換以外にも使えると見た方がよい。今や全てのスタイルを視た瑛暎は、新たな玩具を手に入れたも同然なのだから。

「とはいえ、使い勝手が良いのは認めてやるよ」

瑛暎は青黒い着物の裾をゆらりと揺らし、『青黒い』瞳を輝かせてそう言った。

そして、スタイルを習得した瑛暎はもう興味が無いといった表情で、空気椅子を開始。足を組んだ状態でめだかを待つ事にした。

「おいおい、帰つてくれるんじゃないやなかつたのかよ」

「俺は帰るなんて一言も言つて無いぜ」

「……………」

瑛暎は鶴喰臍に飄々とそう言つて、黙らせた。

「さてさて……………めだかちゃんはどうなるかな？」

———喧嘩、しょうぜ（ぞ）

箱庭病院には現在、11人の人間が居た。鶴喰梟、杠かけがえ、寿常套、黒神めだか、不知火半袖、人吉善吉、球磨川禊、鶴喰鴟、贅波生煮、潜木傀儡、そして泉ヶ仙瑛嘎。

そして現在、この中で寿常套は黒神めだかの前に沈み、潜木傀儡は鶴喰梟のスタイルで監禁中で動けない。

残った9人の動向を言うのなら、鶴喰梟と泉ヶ仙瑛嘎は共に院長室でめだか達を待つており、めだかは現れ、スタイルで64万人に増えた杠かけがえと戦闘中、球磨川禊と人吉善吉は不知火半袖と対峙しており、鶴喰鴟と贅波生煮は院長室へ走っていた。

直に鴟と生煮が院長室へ辿り着き、最終的にはめだか達も来るだろうと瑛嘎は思っている。スタイルを全て見て見て会得してしまった瑛嘎としては、最早何もすることがないのだ。

だが

この世界において、原作とは少し違う事が起きてしまった。獅子目言彦、この存在だ。

本来なら、鶴喰親子のあれこれが起き、球磨川達が乗り込んで来て、そこで獅子目言彦が鶴喰梟を踏みつぶしながら現れる筈だった。鶴喰梟はそこで死亡するが、確かにそうなる筈だった。

なのに、今、たつた今、その未来は変わった。

泉ヶ仙瑗の前に、潜水傀儡の前に、鶴喰梟を踏み殺して、獅子目言彦は現れたのだ。鶴喰鳴がやってくる前に、球磨川禊達がやってくる前に、獅子目言彦はやって来てしまった。

「新しい！ 儂の新しい敵は！ どこだあああああああああ！！！！」

咆哮の様な大声で、建物にビリビリと振動を与えながらそう叫んだ獅子目言彦。この事で、この病院内にいる全員が獅子目言彦の到着を察した。

そして、この場において、獅子目言彦に対峙できるのは泉ヶ仙瑗のみ。

「——久しぶりだな。言彦」

「む？ お前は……成程コレは新しい！ 安心院なじみに続いてお前とも再会できるとはな娯楽主義者！ 久しぶいな！」

空気椅子から立ち上がり、『青黒い』瞳を揺らす瑗。口元を吊り上げ、獅子目言彦を

見据えた。

そして、その状態から凄まじい殺気を発する。それこそ、潜水傀儡が後方へ飛び跳ね、身体の底から震えあがるほどの。

「む……………」

「つと……………」

言彦はその殺気に気圧され、一步足を後ろへ下げた。すると瑛嗶は気が付いた様に殺気を抑える。どうやらつい放つてしまった様で、軽い調子でゆらりと笑った。

「悪い悪い。ちよつとなじみが殺されたから少し気が立つてみたいだ」

「なるほど、確かに貴様と安心院は昔から仲が良かったからな。それは悪い事をした」

「いやいや、別に気にしてないぜ。言いたい事はお互い伝えたしね。復讐なんて考えてないぜ?」

『青黒い』瞳を鋭くして、瑛嗶はそう言った。言彦はそんな瑛嗶に嘘つけと心の中で突っ込んだが、自身の行動という事で口には出さなかった。

「で、まあ新しい敵といつても今は俺しかいない訳だ。つてことで言彦」

「ああ、そうだな。昔から貴様とは他愛ない理由でこう言った物よ」

二人は笑い、互いにその殺気をぶつけあいながら言った。

「——喧嘩、しようぜ(ぞ)」

◇ ◇ ◇

ズンツ……！

地響きが病院内にいる全員に伝わる。全員が真つ先に言彦と瑛嗶の戦闘が始まった事を察した。64万人の杠かけがえと戦っていたためだかも、やりくるめられ泣いた不知火半袖や、善吉に殴られた球磨川禊や殴った人吉善吉も、院長室に向かっていた鶴喰隼と贄波生煮も、倒れた寿常套も、分身した杠かけがえも、全員。

絶え間なく続く地響き。聞こえてくる瑛嗶と言彦の笑い声と打撃音。古い病院は衝撃に耐えきれず地響きの度に崩壊へと向かって行く。

「これは……瑛嗶さんか……！」

『あらあら、やはり瑛嗶様。あの獅子目言彦と対等に戦っておられるのですね。流石は私のお慕いしているお方』

めだかの言葉に残り23万人の杠かけがえが同時にそう言う。だが、そんな流暢な事

を言っている場合では無い。むしろヤバい状況なのだ。

瑛嗶は言彦など一捻りと言ったが、当然無傷で済むほど言彦も長く生きてないだろう。昔は有った経験の差は縮まり、昔ほど簡単に行く筈がない。

「この……仕方ない。スタイルの習得故に観察しつつの戦闘だったが……時間が無い、本気で行かせてもらおうぞ！」

黒神めだかはそう言つて、乱神モードを発動させた。所謂、話を聞かないモードである。これなら、コミュニケーションを必要とするスタイルに対抗出来るのだ。

何故なら、激昂した相手にスタイルは通用しないのだから。



鶴喰鴟と贄波生煮が院長室に辿り着いたと同時に、病院は崩壊した。ガラガラと瓦礫に変わっていく病院。彼らは床が崩れ、地面へ落ちて行く中で見た。

言彦と瑛嗶が落ちている瓦礫を踏み台に移動し、尚戦闘を続けているのを。

瑛嗶が殴れば、言彦も殴り返す。言彦が蹴れば、瑛嗶も蹴り返す。

オウム返し繰り返しとばかりにお互いがお互いを傷つけあっている。そして、この

時初めて、瑛唄は生まれてきて初めて、その身に傷を負っていた。

「げげげげげげ!!」

「はははははは!!」

笑う。お互いが口から、鼻から、腕から、足から、血を流しながら殴る。コレは最早戦闘ではない。誇りのある戦いではない。コレはただの喧嘩だ。物をとられた子供の様な、路地裏の不良の様な、何処にでもあるありふれた喧嘩。

破壊屋と人外はそんな喧嘩を地形を変えるレベルで行なっている。

「げっげっげ、ようやくだ。ようやく貴様に一撃を届かせたぞ!」

「何言ってるんだよ。これ位で満足してるようなら拍子抜けだぜ?」

ゆらりと口元を吊り上げて、青黒い着物をはためかせ、面白そうに笑う瑛唄。言彦はそんな瑛唄に対し、また笑って構えた。

「全く持つてその通り。では次は勝利をもぎ取るとしよう。この言彦、珍しく滾って来たわ!!」

「最近どうも面白い事が無かったからな。憂き晴らしに付き合えや!」

再度ぶつかる瑛唄と言彦。原作で黒神めだがあれこれ考えた空気の壁とかは余裕で破壊し突破していく二人。もはやその速度は黒神ファントムを優に超えていた。

「さて、続けようか」

「無論」

言彦と瑛夏の喧嘩は、更なる破壊を生みながら、再開された。

ささて、聞いて驚け、見て沈め、異世界を渡った俺に出来る、 最高最大の娯楽言葉

瑛嗶と言彦の喧嘩は意外にも、言彦が優勢だった。逆に言えば、あの人外、泉ヶ仙瑛嗶が劣勢だったのだ。

そして、その劣勢の状況のまま三十分ほど喧嘩は続いていた。既にそれぞれの戦闘を終え、この瓦礫と化した箱庭病院に居るメンツは全員その喧嘩を見ていた。故に、瑛嗶の劣勢という事実はその場にいる全員に驚愕の表情を浮かばせた。

現時点で、瑛嗶の攻撃は言彦に通用しない程威力が下がり、逆に言彦の攻撃は絶え間なく瑛嗶の身体に傷を付けていた。やはり、傷が治らない事と、スキルが通用しない事は言彦を相手取るには重いハンデだったのだ。

だが、瑛嗶の表情はあくまでゆらりとした笑顔。その『青黒い』瞳を爛々と輝かせ、着物はボロボロになりながらも言彦に肉薄していた。そして、ここまでで瑛嗶は一度も、スタイルを使っていない。その事はスタイルの習得を見ていた潜木傀儡にとつて疑問だったが、それでも瑛嗶の劣勢に箱庭学園のメンバーは悔しさに歯噛みするのだった。

「はあっ……はあっ……!」

「げげげ……どうした瑛唄……この程度か？ 昔の貴様はもう少し骨が有ったぞ……！」

息を荒げる瑛唄と、息切れしつつもまだ余裕が有りそうな言彦。お互いの身体には多くの傷が付き、かなりボロボロだ。

「そいつは残念……俺としちゃあお前の成長ぶりに吃驚だぜ……」

そう、瑛唄にとって、言彦の成長ぶりは予想外だった。5000年前とは違って、経験を多く積んでいる様だ。その5000年間の間、瑛唄は石動式語との戦闘以外でまともな戦闘を行なっておらず、逆に言彦はその間瑛唄に匹敵出来る程の戦闘経験を積んでいた。

それが瑛唄が劣勢を強いられる理由だった。

「げげげ、それで？ もう手詰まりか？」

「まさか……しかたねーな。正直、コイツは奥の手というか……まあもう少し後の方で瑛唄さんかっくいー、的な状況で使いたかったんだけどなあ」

「ほう？ まだ手があるか、どこまでも新しいなあ！ 瑛唄よー！」

瑛唄はふーっと息を吐いて、目を瞑る。そして次の瞬間、とある構えを取った。その両手は、何か杖を前に突き出している様な、そんな体勢。

「俺の、俺による、俺だけの、俺にしか使えない、スタイル言葉」

劣勢からの、逆転。青黒い瞳は真つ直ぐに言彦を射抜き、瑛嗶は舌を出した。その下には、ただ一文字、『言』と書いてあった。これだけでは何のスタイルなのか、分からない。

「さて、聞いて驚け、見て沈め、異世界を渡った俺に出来る、最高最大の娯楽言葉」

「!？」

瑛嗶は舌を引っ込めて、ゆらりと笑った。そして、瑛嗶の構えがより『それらしく』なり、めだかや言彦達の眼に、見た事もない記憶にもない、桃色の柄に赤い宝石が先端に付いた杖が、瑛嗶の手に握られている様に見えた。

それは、瑛嗶がこの世界に来る前の世界の主人公の、魔法少女リリカルなのはの主人公、高町なのはの、相棒レイジングハート。

『これが私の全力全開、スターライトブレイカー』

幻覚の杖の先、桃色の光が収束され、放たれた。その威力と規模は、まさしく星を砕く程の一撃。そして、前世での力——魔法。

これが、瑛嗶がスタイルを習得し、新たに作り出した瑛嗶だけのスタイル。

『名言使い』

名言を駆使し、その名言を言った過去の登場人物達の技を使ったコミュニケーション。
ン。

「ぐう、ああああああああ!!!?」

言彦が桃色の光に包まれ、叫び声を上げた。そして、地面を大きく抉りながら吹き飛ばされる。桃色の光が消え、残ったのはボロボロの言彦。

「思い知ったか、言彦。何も俺の手札はスキルや身体能力だけじゃねーぞ」

瑛叟の使う名言。それは、普段使う言葉以上に人の心に大きく影響を齎した言葉だ。それはつまり、自身の心をまさしく体現した言葉。いわば心そのもの。

そして、その言葉に含まれた技名やその言葉を伝える為の行動もまた、心といつても良い。ならば、その言葉と行動はイコールで繋がられる。

つまり、その名言はそのままそれを伝える行動を体現出来るという事になる。これが名言による体言の体現。故に名言使いである。

そして、これは異世界を渡り、数々の名言を読みあさって来た瑛叟にしか使えないスタイルである。

「じゃあこんなのはどうだ?」
『——コイツはくせえ! ゲロ以下の匂いがぶんぶんするぜ!』

「っ!」

身構える言彦。先程の桃色の光を体験して、警戒し、身体に力を込めて防御の姿勢を取る。次はどんな規模の攻撃が来るのかと。

だが

「残念。この名言はただの蹴りだ」

メキツと音を立てて瑛嗶の蹴りが言彦の脇腹に入り込み、言彦の顔を歪めさせた。体力や筋力が疲労で落ちているが、そこは流石のスタイル。普段通りの全力蹴りが言彦に伝わった。

「くっ……ござかしい真似をしおつてええええ!!」

激昂。瑛嗶という強者が、自分に対して小細工をして来ている様で腹が立ったのだ。スタイル、スキルといった武器は言彦にとつてござかしい事この上ないのだ。

「ちっ、気の短い奴だな……こうも簡単に激昂するか……まったく、俺は別に挑発使いを会得した覚えも使った覚えもねーんだけどな」

だが、それでも瑛嗶とおなじく言彦も満身創痍。互いに息は荒く、もはや身体に力を入れるのも一苦労だ。もう少しすれば、この喧嘩は終わる。

「これで最後だ。俺は後一撃位しか動けそうにないんでな」

「ふん！ いいだろう、それでは俺はお前を殺してこの喧嘩に終止符を打つとしよう」

瑛嗶の言葉に幾らか冷静になった言彦。瑛嗶はそんな言彦に、ゆらりと笑う。

互いに地面を蹴った

互いに拳と手刀を構えた

互いに笑みを浮かべた

互いにその拳と手刀を振りかぶった

そして互いが衝突する寸前、瑛嗶はもう一度スタイルを発動させた

「——お前の次の台詞は、地に沈め、娯楽主義者。だ！」

「地に沈め、娯楽主義者——はっ！」

「——震えるぞハート、燃え尽きるほどヒート！ 刻むぞ、血液のヒート！
山吹色の波紋疾走!!」サンライツイエローオーバードライブ ってね」

瑛嗶の手刀にオレンジ色の火花が奔った。そしてそれが言彦の拳を弾き飛ばし、その大きな胸板に突き刺さる。そして、ジョジョの奇妙な冒険に出てくる波紋エネルギーは

言彦の身体を伝わり、身体の内にある心臓に大きな衝撃を伝えた。

「ぐう……ううううっ?!」

呻き声を上げる言彦。瑛嗶はそこで、これで終わりだと思った。だが、言彦は歴戦の英雄。意識を無理矢理保ち、弾かれなかった方の手で瑛嗶の心臓に、

その爪を突き立てた

「——んんん……?!」

血を吐く瑛嗶。その爪は、心臓を突き破り、破壊していた。そして、言彦による破壊は、何をしてもしも治る事は無い。

「ぐ……う……!」

「瑛嗶さん!!」

めだか達が瑛嗶にそう叫ぶ。だが、非情にも瑛嗶の心臓は治らない。言彦と瑛嗶は互いに心臓を止められ、破壊され、仰向けに倒れた。

「くっそ……マジかよ」

瑛嗶はそう言うと、その『青黒い』瞳から光を失う。流れ出る血液と共に命が零れ落ちる。あの人外、安心院なじみの様に、瑛嗶の命が消えていく。

「げげげ……この世で最も激しい喧嘩だったぞ……前にも言ったか、儂はこの喧嘩を生涯忘れない……!」

言彦は、首だけ上げて対面に倒れる瓊瓊の命が終わる瞬間を見届け、そう言った。そして、同じ様に脱力し、その瞳から光を、その身体から体温を失った。こうして、一人の人外と一人の英雄が命を落とす、

筈だった

「そしてこの喧嘩、儂の勝ちだ」

めだか達の後方、不知火半袖からそんな声が聞こえた。全員が同時に振り向く。そこには、

獅子目言彦と化した不知火半袖が、不気味に笑っていた。

「不知火が……言彦になっちゃった……!?!」

善吉がそう言って、不知火半袖だったものから距離を取る。そして、めだかは問いか

けた。

「獅子目言彦、貴様……何故……」

「何故？ げげげ、おかしな事を言うな少女よ。瑛嗶と喧嘩し、儂は奴を殺した。そして儂は生き残った、それだけのことよ」

「何が生き残っただ……不知火の身体を乗っ取って、生きながらえただけだろうが！

私は断じて、貴様が瑛嗶さんに勝ったなどという戯言は認めない！」

「だがそれが真実。奴が死んで、儂が生きている以上、勝敗は歴然であろう？」

獅子目言彦が不知火半袖の顔で笑った。

「さて、それでは瑛嗶の奴との喧嘩も終わった事だし、四年早い退避だったが……まあ不都合は無さそうだ。貴様らを殺して儂も帰るとしよう」

言彦がそう言った瞬間、めだか達は身構える。瑛嗶の勝てなかった相手、なじみの勝てなかった相手、それでも逃げる事も出来ない相手。獅子目言彦。

だがめだか達は退く気は無かった。不知火半袖を取り戻す為に、戦う事を決めているのだ。

「げっげっげ、まあそう身構えるなよ。痛みも無く殺してやる」

言彦は、不知火の顔で笑い、ゆっくりと歩み寄ってくる。めだか達は一步も引かずに構えた。そして、言彦の両の手がめだか達の身体に届く寸前、空から、不意に、振って

来た。

「いやいや、お前程度がそんな簡単に俺に勝てるわけないだろう。言彦」

まるで、冷水を頭から浴びせかけられた様だった。身体が凍りつき、誰もが瞳を見開く。中でも、言彦が一番驚いていた。だが、その視線はめだか達から離せない。

（そんなわけは無いそんなわけは無い、確かに殺した、殺した筈だ！ 生き返る筈が無い、生きている筈が無い！ だが何故だ、何故だ、この威圧感、この圧力！ どういうことだ!?!）

言彦はゆっくりと空を見上げた。そこには、ゆらりと笑いながら、安心院なじみと同じ『赤い』瞳を揺らす瑛嗶が、同じく安心院なじみの黄色いリボンを腰に揺らしながら、見下ろしていた。

「瑛嗶さん!?!」

「おう、めだかちゃん達。随分としけたツラしてんな、面白い」

「何故だ！ 何故生きている、何故死んでいない！ 確かに殺した筈だ、確かに心臓を潰した筈だ!! 現に——!?!」

言彦の指差した先、そこには心臓を潰され、『青黒い』瞳から光を失った瑛嗶の死体が

あった。

「おう言彦。久しぶりだね、相も変わらず小物臭が半端無いな」

「瑛嗶さん、言彦の言葉は尤もだ。なぜ生きて……」

「おいおいめだかちゃん。お前は分かるだろう。なんせ、杠かけがえと戦ったんだから」
「……？ ……まさか!？」

そう、瑛嗶は元より言彦と戦っていない。さきほどまで言彦と戦っていた瑛嗶は、スタイル『嘘八百使い』によつて生み出された分身。本物の瑛嗶は言彦が来る前に分身を置いて、外に出ていた。そして、これまでの戦いをずっと面白半分、野次馬根性で觀賞していたのだ。

「嘘八百使い、最近知ったスタイルだ」

べつと舌を出した。そこには嘘という文字が書かれており、瑛嗶は悪戯を行なう少年の様に、笑った。

「さて、言彦。俺を殺した気分はどうだ？ 儂い夢だったみたいだけど」

瑛嗶はそう言いつつ、言彦に皮肉と悪意を込めていつも通り、ゆらりと笑った。

見せてみるよ、俺に。週刊少年ジャンプみたいな逆転劇を

嘘八百使い。杠かけがえが使用するスタイルの一つである。自身に嘘を重ねる事でもう一人の自分を生み出すスタイル。所謂分身である。

原作ではそのスタイルを使い、嘘八百の名の通り八百人の杠かけがえを生み出し、さらに嘘を重ねて800×800、64万人の杠かけがえが黒神めだかに戦いを挑み、時間稼ぎを行なった。

そして今回、獅子目言彦と戦った偽物の泉ヶ仙瑛嗶は本物とは違ってかなり違う点があった。一つは安心院なじみと別れて以降赤く変色した瞳が元の青に戻っていた事、一つはなじみの形見である黄色いリボンを腰に括りつけていなかったことだ。更に言えば、スタイルを学んだにも関わらず使用しなかった所もそれに当たる。

結果的に分身の瑛嗶は獅子目言彦と相討ちになり、その身を不知火半袖の身体に退避させた。言彦はそれによって随分と調子に乗っていた様だが、本物の瑛嗶の登場によって青ざめた顔をするのだった。

「さて、ここめでだかちゃんに問題だ。杠かけがえの嘘八百使い、これは自身の分身を何

処まで増やしたでしょうか？」

「——まさか!？」

「そのまさか。嘘八百使いの分身——800×800で、64万人の俺だ」

空中で佇む瑛嗶を見上げる一同の視界は、一気に大勢の瑛嗶で埋め尽くされた。一人でも言彦を相討つた瑛嗶が、64万人。その火力は、未知数。

言彦はその表情をさらに青褪め、汗をダラダラと流す。浮かんだ感情は恐怖、思った感想は

(死ぬ)

短くこれのみ。まためだか達はそんな瑛嗶のオーバーキルにどん引きしていた。

『「えーと」『めだかちゃん』『あれが瑛嗶さんの鬼畜っぷりだけど……』『勝てる?』』

「無理無理無理無理無理! 何も悪い事してないけど土下座して何が何でも許しを乞う!」

『『ですよー』』

球磨川とめだかがそんな事を言い合う。だが、言彦にとつてはそんな事言ってる場合かと言いたくなるほどヤバイ状況だ。一人相手に一度死ぬ相手、それが64万人。流石の言彦だとしても、64万の残機は無い。死ぬ時は死ぬのだ。

だが、今回だけは瑛嗶の気分で、言彦のピンチは消失する。

「ま、今は俺が手を出す時じゃあないんでね」

瑛唄はそう言って、また一人に戻った。そして、ふっとその場から姿を消す。その速度は、言彦が見失う程。

気が付けば言彦の顔面に、瑛唄の拳が入っていた。めり込み、痛みが奔るまえに身体が後方に吹き飛び、殴られた頬から痛みを感じ取った時、言彦は自分が殴り飛ばされた事に気付いた。

「な……がああああ!!?」

激痛。殴られた皮膚から痛覚を通じて脳へと刺激が伝わり、痛みを理解する。立ち上がる事も出来ず、地面を転がり悶える。

かつての英雄、獅子目言彦は痛みに打ちひしがれる中、自身の愚かさを思い知る。5000年前、瑛唄と戦った時、自分は為す術なく地に沈められた。そして現在、再度戦って見て今更ながらに思う。この怪物は、此処まで弱かったかと。

答えは否だ。かつての怪物は、これほどまでに善戦できる相手では無かった。全力を振り絞って、その限界を超えて、尚圧倒的な差が有る相手だった。ただか5000年程度、経験を積んだ所で適う筈もない。

「とりあえず一発だ。鞆負ちゃんの両親と街を破壊した件については、これでキャラにしよう。んで……これは——」

「むう……!?!」

瑛嗶は倒れた獅子目言彦の身体、つまり不知火半袖の胸ぐらを掴み、持ち上げた。そして拳を再度振りかぶり、音もなくその腹を殴り飛ばす。

「——なじみの分だけ」

その言葉と同時に、ぱあん！ と何かが割れた音が響く。ハンターハンターで身に付けた、音を置き去りにする正拳突き。言彦は眼を見開き、口からごぼつと血を吐きだして吹っ飛んだ。そして瓦礫に衝突し、その勢いを止める。

「ふう……スツキリした」

「く……の……」

瑛嗶の本当の攻撃を受けて、尚立ち上がる言彦。反応すら出来なかったのだ。おそろく、全快時に戦ったとしても、昔と同じ様に手も足も無かっただろう。

先程まで分身と接戦出来たのはおそろく、覚えたてのスタイルで分身が完全に出来ていなかったから。もとより言彦が適う道理もない。

「さて、それじゃ俺はもういいや。おい言彦。俺はもうお前とやり合う気は無いから、そこにいるめだかちゃん達と戦うなりしてとつと帰れ」

だが瑛嗶の言葉はすでに言彦から興味を失っている。目的は達したのだ。なじみの恨みは一発かまして晴らし、分身とはいえ喧嘩もした。故に、もう言彦と戦う理由も興

味もない。

だから、不知火半袖が獅子目言彦になっていようが、乗っ取られていようが、囚われていようが、どうでもいい。ここからは瑛嘎の出る幕じやない。

「ここからは、お前達の番だろう？ 黒神めだかと愉快な仲間達」

そう、ここからは主人公達の出番だ。転生者でも人外でも化け物でもない、この世界の主人公達が頑張る番なのだ。

故に娯楽を求める人外は、手を出さない。

「見せてみろよ、俺に。週刊少年ジャンプみたいな逆転劇を」

——それもまた、面白い。

瑛嘎はそう言って、ゆらりと笑った。

不知火ちゃんを取り戻すんだらう？　こんな所で何をもたもたしているのかな？

黒神めだかは、主人公である。

この作品の主人公は当然の事瑛噺であるが、それ以上にこのめだかボックスという世界では彼女が主人公だ。

故に、敗北する事は無いし、死ぬこともない。この世界においては蘇生がかなり安易な手段として存在している故に、死亡は多々あるが最終的には復活している。

それは単に、主人公というポジションを持つているからの事であって、彼女が誰よりも強いからという理由ではないのだ。

確実に彼女より強いだろうと読者が思っているように、彼女は何かしらの手段を取ったり、都合良く覚醒したりして、結局その強敵を打ち破る。

それが少年漫画の鉄則であり、過去様々な作品でも描かれてきた王道である。

だが、今回は主人公のポジションを瑛噺というイレギュラーが取っている。それはつまり、彼女は都合よく覚醒しないし、良い作戦もタイミング良く思い付かないし、強敵相手に死んでしまう事もある。

する？ 此処で殺すか？」

「さつきまで顔を青くしていた奴が良く吠えるじゃないか。言つた筈だぜ？ 俺はお前に微粒子程の興味もない。気が済んだなら帰れば？」

それでも、瑛嗶という人外は手を出さない。

——仲間が死んだ、だからなんだ。

——逆転は起きなかった、だからなんだ。

——目の前に言彦が居る、だからなんだ。

だからと言つて、瑛嗶が動く理由にはならない。勝負を挑み、負けたなら、勝者に敗者は何も言えない。瑛嗶はそれを見届けたのだから、終わった戦いに手を出すなど不屈き千万。

「でも、まだ戦いは終わらないようだけど？」

「何……!?!」

言彦の後ろ。まだ立ち上がる者がいた。

「なんだ貴様……まだ儂に齒向かうというのか！ 貴様は一体何がしたいのだ！」

「いやいや、私は何もしないよ。ただ生きてるだけの、なんとなくな人間だし」

「じゃあ何故儂の前に立ちはだかる！ 何が狙いだ！」

立ち上がったのは、贅波生煮。その鋭い刀を構えて、死体の転がる瓦礫の中、言彦に
対峙する。

「受け狙い」

立ち上がった贅波生煮は言彦の問いに、そう答えた。



瑛 嗚 side

言彦の実力は確かに強い。俺には劣るものの、安心院なじみを有無を言わさず殺して
みせた実力は、俺というイレギュラーを除けばこの世界で随一と言っても良いだろう。

黒神めだかはまだ人間離れしているだけの人間だ。化け物に勝つにはまだ力が及ば

ない。

それでも、俺は見てみたい。この世界が週刊少年ジャンプというのなら、主人公であつた彼女とその仲間はこの逆境を乗り越えていける筈だ。

この場にある力、登場人物の心、抱えた思い、全部の要素を掛け合わせて、正しい道を示してみせて欲しい。

これもまた娯楽。彼女達が役者で、俺が観客。最後には必ずハッピーエンドを迎えて見せる演劇を、俺は見たい。観客参加型など、観客が自由に物語を変えていいと言つて様な物じゃないか。

「ほら、だから君の出番なんだぜ。『人吉君』」

だから、少しだけ背中を押そう。死人は何も言わない、言えない。逆を言えば、生きているならば言葉は伝えられるのだから。

「っ！……は……っ？」

「やあ人吉君。随分とまあ弱気になつてる様だね」

「!? あ、安心院さん!?!」

俺は先程杠かけがえが使つて自身を贄波生煮に置き換えたスタイルを使った。

『換喻使い』

ある言葉を概念の近しき他の言葉に置き換える事が出来るスタイルだ。

これにより、俺の事を人外という言葉で表現し、人外という言葉、『瑛唄となじみ』という言葉に置き換える事で、俺の姿をなじみに置き換えたのだ。

「ほら、見てみなよ。君達がやらなくちやいけけない事を、何も関係ない子がやってるよ？」

「！ 贄波……じゃない、杠!？」

「不知火ちゃんを取り戻すんだらう？ こんな所で何をもたもたしているのかな？」

「……でも、俺は元々この場の誰とも話せない様な普通の奴なんだ……」

「クソみてーな弱音なんか聞きたくねーな。君は君だよ、そこに普通とか異常とかは関係無い。僕からしてみたら皆平等だ」

人吉善吉、お前は一番不知火半袖を分かっている。一番不知火半袖を理解している。だからお前じゃないといけけないのだ。

「今は瑛唄が童謡使いで君を蘇生させているんだ。永続性は無いし、どうせ死ぬなら最後に親友位救って見せろよ。僕にめだかちゃんを倒すって啖呵切った時の威勢はどうしたんだい？」

「安心院さん……」

「いつまでもグダグダ言っつてねーで早く行け。彼女に言葉を伝える方法位なら僕が示してやるからさ」

手を取つて、伝える。スタイルはパターン。振動として伝えられる。伝授するのは贊波生煮の『逆説使い』。だからこそその逆説だ。

「全く、死人に此処まで鞭打つなんて鬼畜だぜ。おちおち寝てもいられない。ほら、伝授は終わったよ。行つてらっしゃい、言つてらっしゃい」

「——ああ、ありがとう」

それでいい。死ぬ気で親友を救えよ人吉善吉。それがお前の人間としての価値で、それがお前の出来る最大の事だ。

平等な人外を利用した、自由な人外の、ほんの少しの手助け。心苦しくはあるが、それでもこの役目だけはきつと、安心院なじみしか出来ないのだろう。人吉善吉を4カ月 に渡つて根気よく修行を付けた彼女しか。

「全く、俺も焼きが回つたもんだ」

きつとこれが、人間らしい行動なのだ。困っている人の背中を押して、頑張つてる奴を応援する。人外を自負する俺だが、やっぱりこう言う行動を取るのも、たまには悪くない。

だつてこれもきつと、いや確実に、俺にとって面白いと言える展開なのだから。

そうかい、俺は人吉善吉。一秒だって一人じゃ生きていけない普通の格好良い男子高校生だよ

「それにしても、だ。言彦の不可逆の破壊つてのはどういう理屈なんだろうねえ……もしかしたら倒せばその効果は無くなる、とか都合の良い物だったりするのかな？」

さて、不知火（言彦）と一時的だが晴れて逆説使いのスタイルを見に付けた人吉善吉が戦っている中、瑛嗶は地べたに寝っ転がりながらもその戦いを眺めていた。

ふと思った事を呟きながら、周囲に転がる瀕死の仲間達を一瞥し、溜め息を吐く。

「とはいえ、主要キャラが死ぬのはジャンプの定番と言っても死にすぎは良くないか……」

瑛嗶はそう言って、名札使い宜しく何も無いがカードを掲げる様な動作をする。そして、赤い瞳をすつと開いてオリジナルスタイル、名言使いを発動させた。

『——魔法カード発動！ 死者蘇生！……ばい、武藤遊戯——』

死者蘇生。某遊戯王で主人公武藤遊戯が発動させたカードである。効果は、死者のリスク無しでの蘇生。また、これはスタイルという道具を使って使用される技であるが故に、瑛嗶が死んだとしてもその効果を失う事はない。

例えるのなら、水鉄砲。瑛叟の名言使いは水鉄砲本体であり、そこから出される技は発射された水だ。その水によって濡れたとして、水鉄砲本体が壊れたからといって濡れた事が無かつた事になる訳ではない。つまり、そういう事だ。

「あれ？ これ使えばなじみの奴復活出来るんじゃないやね？」

おつと気付いてしまった驚愕の事実。瑛叟の名言使いは他のスタイルとは少し違つて効果を發揮する威力や条件が違う。思い付きだつたが随分と規格外のスタイルを作つちやつたものだ。反省。

「あーあ、そう考えたら急にやる気無くなつてきた。あ、ーめんどうくせー……」

両手を後ろに着いて上体を少し後ろに倒す。そしてそのままぐだつと空を見上げた。ぼーつと眺める中、響くのは言彦と善吉の一撃必殺が空振る音だけ。めだかは死者では無かつたから未だに倒れ伏しているが、球磨川達は生き返っている。それこそ、無傷の状態だ。まあ気絶してるから動かないけど。

「さて、そろそろ善吉君の勝負も終わるかな？」

視線を前に戻すと、言彦と善吉の勝負は終盤を迎えていた。止まる言彦の腕、不敵に笑う人吉善吉。

「一瞬だけ、不知火に身体の主導権を戻した？ ばーか！ その一瞬を狙い澄ますのが、俺の親友不知火半袖だぜ！」

「ぬ、ううう!!」

「破壊されれば二度と元には戻らない。なら、そんなお前が、お前自身を殴ったらどうなるんだ?」

一撃必殺を持つ相手には、その一撃必殺をぶつけるべし。ずっと昔から決まっている攻略法の一つだ。誰も、自分の力には勝てないだろう。何せ、その力を鍛えて来たのは自分自身なのだから。

そしてそれを実行する様に、言彦から身体の主導権を奪い取った不知火半袖は、自身の身体にその拳を向ける。

「半袖、貴様分かってるのか! 俺がどれ程稀少で! 未知で! 保存すべき者なのか! 不知火ならば貴様も十分も理解出来る筈だろう!」

「……………」

「——おい善吉、何を黙っているのだ。勝者ならば格好良く名乗りを上げて引導を渡してやれ。ああそうだ、ついでだから言っておけよ。ほら、私の幼馴染はどんなふうにな格好いいんだっけ?」

焦る言彦を置いて、善吉に語りかけるめだか。満身創痍だが、その顔は善吉の勝利に満足気だった。

「お、おとおお! 俺は! 俺は過去に存在した、唯一、たった一人の英雄! 獅子目言

彦だぞおおお!!」

「———そうかい、俺は人吉善吉。一秒だつて一人じゃ生きていけない普通の格好良い男子高校生だよ」

骨の鳴る音と、破壊されていく言彦の魂が崩れる音が響く。それを見て、瑛嗶はゆらりと笑った。獅子目言彦の敗北と、戦いの終わり。

破壊の権化、デストロイヤー獅子目言彦は、普通の凡庸な男子高校生人吉善吉の前に、多くの心を背負った男の前に敗北した。

———こうして、獅子目言彦はその長い生涯における戦いを終えたのだった。

「———予想通り」

それと同時に、なにやら自分の腕に視線を落としていた瑛嗶の口元が、今までにない程に、ゆらありと吊りあがった。

ばいばい、人間

この展開、この状況は、瑛叟が善吉達に戦況を任せた時から、予想通りだった。瑛叟が投げ、善吉達がやられ、安心院なじみが背中を押し、ジャンプの様な展開で言彦を打倒せしめた。何もかも予想通り。ただ、言彦の破壊が言彦の敗北によって可逆になるとは予想外だったが、それもプラスに働く展開だった故に、特に気にはしなかった。

だが、ここからが問題。瑛叟は言彦が敗北して終わり、というのは今までの物語を見返してみてもあり得ないと思っていた。また、あんなに話題に出ていた鶴喰梟がささつと死んでいったのが気にかかる。寧ろ、あの妥協しまくってた男が自分の死に対して何も考えていなかったとは思えないのだ。

スタイルの創始者、なら伝授したスタイル以外にも自分専用のスタイルが有ってもおかしくない。となれば、ここまで都合のいい展開がきておいて、ただ帰るだけというのはいただけない。

そしてその予想は当たる。鶴喰梟の最期のスタイルが発動したのだ。

自身の最期の言葉を現実の物とする一世一代のスタイル。その名も――

【遺言使い】

鶴喰梟は最期の言葉として、自身の死と共に宇宙に浮かぶ衛星、月を地上へと落とす事を計画していたのだ。つまり、地球上の生物全員との無理心中。それが鶴喰梟の死を飾る言葉だった。

その事実が、月水会の兎洞武器子並びに名札使いの桃園喪々より電話で黒神めだかに伝えられた。

「月が落ちる、か」

「それが本当なら私は黒神家の家長として、死なねばならんな。では皆、ちよつと月を壊してくる」

善吉の呟きに黒神めだかはそう言った。

月は黒神家の月面基地がある場所、ならば黒神家の家長は地球へ迫る月の責任を負わなければならない。それは己の死と同等である。

「何言つてんだよめだかちゃん！俺達は仲間じゃねえか！」

「そうだよ、此処まで一緒に戦つて来たんだから、最後まで一緒に戦う！」

善吉と不知火半袖がそう言う。が、二人は球磨川の【却本作り】ブックメーカーによつて封じられてしまった。

「『……………これでもいいんだよね』『めだかちゃん』」

「ああ、貴様は悪くない。いつも嫌な役を押しつけてすまないな、球磨川」

「『いいよ別に』『慣れてるし』『それに、めだかちゃんの事だからどうせ』『まーた生き残るに決まってるしね』『そして卒業式の日に愛しの僕から第二ボタンを貰うのさ』『賭けたって良いぜ』」

「ははは、貴様の第二ボタンか。そいつは欲しいなあ」

「……………」

球磨川禊と黒神めだかがそんな事を話している。瑛嗶はそれを眺めつつ、欠伸を漏らしてこう言った。

「なあ二人とも。空気ぶち壊すように悪いんだけど、俺此処から月壊せるけど」

「……………」

そう、瑛嗶ならば指先を向けてスキルを発動させるだけで月を消滅させる事が可能。

「……………ま、まあこれは私の責任だ。瑛嗶さんは手を出さないでくれ」

「ならいいけど」

瑛嗶はそう言って黙る。めだかと球磨川はまた向かい合い、笑った。

「……………はあ……………なんとというか空気が妙な方向へなまってしまったが……………末長くお幸せに、禊！」

「……ばいばい、人間」

二人は括弧付けず、互いにすつきりとした表情で、そう言ったのだった。

◇ ◇ ◇

かくして、黒神めだかは一人、箱庭病院跡地に残っていた。

「でだ。めだかちゃん」

否、一人では無い。そこには人外、瑛嗶がいた。膝を抱えて体育座りをしていた黒神めだかの背後に立つ彼は、めだかの表情を見ずに月を見上げていた。

「瑛嗶さんか……ははは、情けない事に震えが止まらないのだ」

「まあそうだろうよ。死ぬのは誰だつて、怖い物だ」

「……」

「でもまあそう気にする事も無い。俺を誰だと思ってるんだ？」

「え？」

そう言った瑛嗶の方へ振り向くめだか。そして視線に入ってきた瑛嗶の表情は、いつも通りにゆらゆらと笑っていた。

そしてめだかは今までの瑛嗶を思い出す。その行動は奇抜かつ規格外の物ばかり

だったが、全てが丸くおさまっていた。そう、バッドエンドにはならなかったのだ。

「まさか……」

「そのとおり。俺はお前を死なせないぜ？ なんせ、お前はなじみのお気に入りだからね」

肩の力がふっと抜けた。先程まで確定的だった死が何時もの様に軽い物へと変貌してしまった。月を壊しても死なない事が確定してしまった。これでは緊張感もあった物ではない

「さて、言彦」

「う……げげげ、どうした瑛叟よ」

「敗北したから仕方ないとはいえ、残響になってまで残るのかお前は。しぶとい奴だよ本当」

獅子目言彦。彼は敗北して尚、生きていた。可逆となった破壊は、言彦の死をギリギリで食い止めたのだ。

「ちよつくら月を壊しに行くめだかちゃんをサポートしてくるから、お前この事内緒にしとけよっ」

「ふむ……なぜだ？」

「ドツキリってのはいつの時代も人を楽しませるものさ」

「げっげっげ、そいつは良い。良からう。この言彦、口が裂けてもこの事は言わんよ」

言彦と瑛叟の会話はさらに雰囲気を和やかにしていく。めだかは先程までの化け物とそれ以上の化け物がドッキリについて語る様子について笑ってしまった。

「それじゃあ行こうかめだかちゃん」

「ああ、瑛叟さん」

そうしてめだかは月へと向かう。

そして、そんな二人とは裏腹に、箱庭学園は卒業式を迎える事となった——

御帰り、愛してんぜ。人外

卒業式、それは如何なる学校といえど行なわれる事が確約された正式な行事である。

高校でいえば、平均的な勉強期間である三年間を過ごした者が晴れて卒業する式典。社会へとその立場を進めて行く為の行事だ。

それは箱庭学園も同じ。卒業式は行なわれるのだ。この場合、此処までの登場人物の中でこの卒業式で送られる側の生徒は、人類最弱の過負荷、球磨川禊や元英雄である日之影空洞がそれに当たる。そして、黒神めだかと共に月へと向かって行つた、あの平等な人外を愛した人外もそうなのだ。

だが、箱庭学園の全生徒から好かれた黒神めだかも、過去多くの戦いでずっと笑つていたあの人外も、月から帰ってくる事はなかった。否、未だ帰つて来ないだけだ。何処で何をしているのかは知らないが、彼女達は必ず帰ってくる。そういう確信が送る側である善吉達や送られる球磨川達にはあつた。

なんせ、あの人外が付いているのだ。月を破壊した所で死ぬとは到底思えない。だから――

「いやはや、中々見事な送辞であつたぞ善吉。そして禊お兄ちゃん、遅刻とはいえこれで賭けは私の負けだな。だが直ぐにリベンジするから油断するなよ?」

黒神めだかは卒業式の真つ只中、善吉の送辞、球磨川の答辞が終わつた直後、その姿を現した。いつもの様に凜とした雰囲気を感じながら、誰もが待つていたであろう到着を、遅れ馳せながらちゃんと間に合わせて見せたのだ。

「——『ほら、どうだい。面白いだろう?』『僕の人生は』……また勝てた」

球磨川はそんな黒神めだかに涙を流しながらそう言った。球磨川禊は過去に一度、めだかに勝っている。故に、二度目の勝利。しかも今回は完全勝利だ。

「ただいま皆。そして、卒業おめでとうござります。先輩方?」

黒神めだかは凜とした立ち振る舞いの中、歯を見せて笑いながらそう言った。



——瑛嗶宅

「それにしても、月の破壊とは中々に面白かつたねえ」

瑛嗶は卒業式にも関わらず、卒業式には出ずに自宅で寛いでいた。現在この家には瑛嗶しかおらず、其処にいるだけの人外不知火半纏も、瀕死状態だったがどうにか蘇生が間に合った帯刀鞆負もいなかった。真正正銘、瑛嗶唯一人である。

「まあ月は壊した後元に戻したし、不知火半袖も学園に戻ったし、めでたしめでたし、か」
 だが、瑛嗶はそう言うもどこかまだ満足していない表情だった。

「……いやいや、そういう訳にはいかないだろう」

瑛嗶は立ち上がる。他の全員が満足してい様と、していなかうと、自分自身が満足していないと気が収まらないのだ。それが娯楽主義者であり、瑛嗶という人物の人間性である。

——そんな時、不意にインターホンの音が鳴り響いた。

瑛嗶の家は普段滅多に人が訪れない。それなのに來客が來た。瑛嗶はその音が鳴って一拍置いた後、ゆらりと笑った。そして立ち上がり、軽い足取りで玄関へ向かう。

「」

扉を開けると、そこには瑛嗶が待ち侘びた人物が佇んでいた。瑛嗶とその人物は互いに微笑んで、何も言わずにその手をお互いに伸ばした。

——御帰り、愛してんぜ。
なしみ 人外

——ただいま、愛してるよ。

人外^{おうか}

見間違う事もない。それは、瑛嗶を想って死んだ少女。安心院なじみだった。

百輪走

出会いがあれば、別れがある。別れがあれば、新たな出会いがある。それがこの世界の中で何度も行なわれる自然の摂理である。元よりこの地球上で人間が人間に出会う事の出来ない場所など、それこそ危険地帯や動物達の世界くらいなものなから。

そして、この物語にもそれは確かに存在する。黒神めだかを中心として構成されたこの世界で、多くに生徒が彼女と出会い、仲間と出会い、最後は1+1が二人になり、三人になり、やがて皆になっていく答えを得た。

故に彼女はこの出会いの場所を去り、次なるステージへとその歩みを進める。箱庭学園から去る事を決めたのだ。黒神家の家長を継いだその時から、この事は決定事項、黒神めだかは退学届を出した。

だが、そんな別れを人吉善吉を始め、多くの生徒は認めない。いや、認めたくは無。彼女と共に過ごし、彼女と共に卒業したいと思うのだ。

故に、人吉善吉は彼女と対話する。言葉が心を通じさせる事は嫌という程学んだ。お互い好き同士の少年と少女は会話し、対話し、分かり合う。分かりあった先で、少年は少女の隣にいる事を止めた。

——一緒に居たいけれど、居られない

——一緒に居て欲しいけど、居られない

二人の想いは前を向いていた。少女は前に進み、少年はその背を見送る。十四年間隣に居続けた少年は

、少女の隣を外れてその背を押した。

でも、しかし、だからこそ

少年が背を押す事を決めた所で納得がいかないのも事実。行って欲しくないのも、一緒に居たいのも本心。

ならばどうするか？

少年は少女を送り出すべく全校生徒を巻き込んで少女の壮行会を壮大に行なう事にした。送り出す、が簡単には行かせない。それが少年が敵を好んだ少女に送る最高の贈り物であり、最大の試練。箱庭学園が黒箱塾だったときからあつた一人の生徒を制裁するための試練。その名も、

『百輪走』

生徒会が厳選に厳選を重ねて選び抜いた100人を相手に戦い、勝ち抜き、その10

0人の持つコサージュを全て奪い取った先に出来る上がる花束を手に入れる事で、晴れてこの学園を去る事が出来る。

——去れる物なら去ってみろ

これが、少女に恋した愛された少年の出した答えだった。最後の最後まで、格好付けよう。まだ、少女は自分を見てるじゃないか。ならば最後まで、彼女が振り向いた時自分の姿が見えなくなる程進んだ時までは、俺は格好付けて見せようじゃないか。お前の幼馴染は最後まで格好良いんだと見せつけてやる。

それが、俺に出来る最高の意地なんだから。

かくして始まるとある少女の壮行会。相対するは100人の精鋭、去るべき場所は己が母校。抜けられるモノなら抜けてゆけ。箱庭学園壮行会編。『百輪走』、始まり終わり



「……なるほど、なじみの考えたアレ。マジでやるんだ？ それで俺にもその100人の中に入って欲しいと」

「はい、お願いします。瑛嗶さん」

「面白い、承ったぜ善吉君。この一輪、俺が預かろう」
「ありがとうございませす！」

少年、人吉善吉は百輪走を行なうべく100人の選拔生徒にコサージユを渡してその役を頼みこんでいた。一応生徒主催な物の、卒業後もしばらくは箱庭学園の生徒であり続ける決まりなので卒業生である瑛嗶もまだその役目を負う事が出来るのだ。

「で、善吉君。俺はめだかちゃんを引き止めればいいのか？ それとも、押し出せばいいのか？」

「……それは……」

瑛嗶の言葉に、善吉は言い淀む。頼めば瑛嗶はどちらでもこなしてみせるだろう。つまり、ここは分岐点だ。めだかを引きとめて欲しいと言えば引きとめられるし、送り出して欲しいと言えば送り出すよう動いてくれるのだから。

「……っ……」

「ふむ……ま、いいや。俺は俺の好きなようにやろう。その方が面白い」
「……は……」

「だが、迷ってる様じゃめだかちゃんは満足してくれないぜ？ いつもみたいに反骨精神を剥き出しにして精一杯格好付けろよ一般^{ノーマル}人」

瑛嗶はそう言って、ふっと笑った。善吉は瑛嗶の言葉に拳を握り、思い直した様に大

きな声で返事をした。

「……全く、恋愛つてのは何時の時代も難しいものだな」

歩き去つていく善吉の背を見ながらそういう瑛唄。だが、そう言いつつもその表情は笑みを浮かべていた。そしてそんな瑛唄の隣にすつと別の人影が現れる。

「この僕もその恋愛に捕らわれちゃった一人の少女だものね」

「人外を捕まえるなんて最早無敵だね」

「でも、悪くは無いい気分だぜ？」

「違うない」

隣に現れたのは安心院なじみ。未だに瑛唄と靱負以外復活を知らない平等な人外である。

「ところでそのコサージユ、ちよつと見せてくれないかな？」

「ん、ほら」

「へえ……なるほど。瑛唄、面白い事考えた。耳貸して」

「ん？」

「あのね——」

瑛唄はなじみの耳打ちの無い様にとても楽しそうにゆらりと笑う。その表情は何処か悪戯を思い浮かんだ少年の様に純粹で、犯罪を計画したテロリストの様に凶悪だつ

た。

「いいね、流石はなじみ。思わず抱きしめたくなるくらいだ」

「そいつは重畳、構わず抱きしめてくれて構わないんだぜ？」

少女を送り出す相手として、少年は人選を間違えた。相手は人外同士のペア、早々簡単に事が運ぶと思つてはいけない。

「さて、楽しい楽しい壮行会の始まりだ」

瑛嗶はゆらりと笑い、なじみは瑛嗶の楽しげな横顔に微笑みを浮かべた。

最初の一輪を、お前に贈ろう

百輪走。このイベントは黒神めだかという少女を送り出す為だけに大勢の敵や友人、父兄や教師達が集まる壮行会だ。

人吉善吉を始め、生徒会の面々や卒業生、果ては世界を守っていた里までもが彼女の為に動いた。彼女と多くの人が出会った結果がこれなのだ。人を愛し、愛された少女の最後はどうなるか、それが今から始まり、瞬きの間に終わる。

見届けよう、彼女の最後を。

見送ろう、彼女の背中を。

戦おう、彼女の思い出の為に。

笑おう、彼女との友情の為に。

拳を握れ、スキルを振るえ、言葉を届かせろ。異常や過負荷でなくてもその凡庸さで牙を剥け。それが少女の対する友情であり、少女に対する対抗であり、少女に対する送迎である。

始めよう、百輪の花を奪い、百輪の花を守る戦いを。

これが最初の一輪目だ。

心置きなく、容赦なく、己が愛した男から、その拳で奪って行け。男はそれをみつともなく阻むだろう。

少女を送りたい、だが送りたいくない。それが男の想い。なんと格好の悪い事だろうか。故に、彼に格好良く自分を送らせる。自分を愛し寄り添い続けた彼に、最後の最後まで格好付けさせろ。

「俺は、お前をみつともなくても引きとめたい。だから、俺に格好良くお前を送らせてくれ。相談だ」

「ああ、受け付けた」

「それじゃ——最初の一輪を、お前に贈ろう」

少女は拳を握り、少年は腰を落として構えた。勝負は一瞬、一撃の下に決まる。

「ところでめだかちゃん。お前にはねーのか？ みつともなくても此処に留まりたいって思いつか」

「ふっ、そんなもの——」

二人はその口端を吊り上げながら動きだす。お互いの拳はお互いの顔面を狙い、進む。

「あるに決まっているだろう！」

そして少女の拳が少年の顎を打ち抜き、少年はその威力に足を地から離して吹き飛ん

だ。背後にあったテーブルをその身で壊し、持っていた一輪目を奪われる。

「だから感謝しておるよ善吉。こうして私を格好良く去らせてくれる事に。さらばだ善吉、私は貴様のおかげで幸せだった！」

少女は駆けだす、少年に背を向けて。ここで二人の道は違えるのだ。少女は進み、少年は2歳の頃より付き添って来たこの14年間に終止符を打つ。

「あーあ……結局、最後の最後まで格好悪かったなあ俺……まあいいか、もう格好付ける相手もいねえ。じゃあな、めだかちゃん……俺も普通に幸せだったぜ……！」

別れたくは無い。だが、少年は最後の最後まで少女から格好良く映っていた。故に、こうして格好悪く涙を流し、そう言った少年は、どこまでも惨めでみつもなかつたが、どこまでも美しく格好良い輝きを放っていた。

こうして百輪走は始まる。残り時間は90分、残りのコサージュは99輪。少女は振り向かず、進みだした。



「さて、善吉を倒したのは良いとして……他の奴らは何処にいるのやら……この学校は広い故、隠れられたら私もお手上げだ」

少女、黒神めだかは人吉善吉と別れた後、その足で他のメンバーを探していた。祭はまだまだ始まったばかり。とりあえず手近な校舎の扉に手を伸ばす。

そして開けた先、そこには

「ようこそ黒神めだか。まずは俺達雑魚キャラ群団がお相手するぜ?」

廊下にめだかを見送る様にズラリと並んだ初期の敵キャラ達。スキルでの勝負が始まる以前の普通や特別といったクラスの面々だ。

めだかが生徒会長になった際の最初の投書で敵対した剣道部、水中運動会で元会計の喜界島を含めて敵対した競泳部の屋久島と種子島、対立候補だった鹿屋や、『十三組の十三人』への加入を競って対峙した平戸ロイヤル、フラスコ計画阻止の為に視察に言った時計塔の門番だった対馬左脳と対馬右脳ら等々、多くの雑魚キャラを名乗るメンバーがめだかに再度牙を剥く。

「なるほど、最初は貴様達か。だが私の知る限りこの学園に雑魚キャラなど存在しない。故にいきなり失礼、最初から最終奥義、終神モード黒神ファイナルで行かせてもらう!」
だがそんな彼らに対して彼女は手加減をしない。いつも全力で相手にぶつかっただけ、それが黒神めだかなのだから。

クラウチングスタートの状態から駆け出し、かの英雄獅子目彦ですら一度沈めた威力を誇るめだか最大の矛が彼ら雑魚キヤラ達を一走の下に薙ぎ払う。

だが彼らは薙ぎ払われて尚、笑った。元より止められるとは思っていない。寧ろ最終奥義を使つてまで自分達を全力突破してくれた事を嬉しく思った。

いつでも全力で、いつでもまっすぐな彼女に自分達は魅せられ、そして好きになつたのだ。

その献身さに魅せられ、前を向く事が出来た。

その愚直さに感化され、人を信じる事が出来た。

その輝きの眩しさに近づきたくて、ぶつかる勇気が持てた。

たったの一年の中に過ぎない思い出だつたけれど、ほんの一瞬のまばたきの間に過ぎ去つてしまう様な短い時間の中だつたけれど、自分達は黒神おめだかまと競う事が出来た事が楽しかった。お前と戦つて負けた事を誇りに思う。

——なあどうだい黒神。俺達は、お前の思い出になれたかい？

答えは返つて来ない。だが、自分達を薙ぎ払つた少女の自分達を見る瞳の輝きと眩し過ぎる程の自信に満ちた笑みを見れば、自然とその答えは分かるだろう。

雑魚キャラを雑魚キャラとしてではなく、対等の相手として見てくれる。その事の何と嬉しい事か。

だから去りゆくお前に花と共にこの言葉を贈ろう。

——ありがとう。そして、頑張れ

これで良い。お前が築いたんだぜ？ だってよ、頑張る奴を応援するのが、この学校の校風なんだろう？ なあ、黒神めだか。

やられた方もやった方も悔いはない。互いに笑みを浮かべて清々しい程の終わりを迎える。黒神めだかに最初に齒向かって行った猛者達は、こうして少女の背中を力強く押していった。

現在奪った花の数、『26』輪。原作との違いは、後々少女へと降り注ぐ。

そいつはいいな。さて、しばらくぶりに本気を出すとしよう

黒神めだかが雑魚キヤラ群団を一走の下に薙ぎ払う前、人吉善吉による一輪目を得た辺りの時点で瑛唄はコサージユを胸に付けて何かとよくいた場所である時計塔の頂上に座っていた。風が吹き荒ぶ中、安心院なじみと共にめだかの様子を見ていた。

「あ、ほらめだかちゃんか善吉君と別れたよ」

「ああ」

下を見れば、めだかによつて殴り飛ばされた善吉の姿があり、去り行くめだかの背後で肩を震わせていた。涙を流している事くらいは人外の二人でも分かる。いや、この二人だからこそ分かるのだろう。ある意味この二人もめだか達と同じで、長い間ずっと隣に居続けた者同士なのだ。違ふとすれば、めだか達は別れ、瑛唄達は繋がったという点だろう。

「切ないねえ」

「でも、青春だぜ」

「なるほど、残酷な程に優しい言い方だ」

「違うない」

お互いに笑みを浮かべ、そしてまた視線を黒神めだかに移す。なじみは瑛嗶の地に付いている手を見てその手に自分の手を重ねた。瑛嗶はそうして重ねられた手を一瞥し、ゆらりと笑ってその指を絡ませた。

正真正銘のバカツプル。ラブラブにも程がある。

「ねえ瑛嗶」

「なんだよなじみ」

なじみが視線はめだかに固定したままに瑛嗶の肩に頭を乗せ、そう言い、瑛嗶はそれに視線をなじみに向けながら答える。

「僕は、幸せだぜ」

「……そうかい。でも、これから俺達はもつともつと楽しい思い出が出来て、その分もつと幸せになれるさ」

「わはは、くさい台詞だね」

「そりやそうだ。どっかの漫画の引用だからね」

「ふふふ。でも、そういうのも悪くない」

安心院なじみは立ち上がる。瑛嗶もそんななじみに習う様に立ち上がった。

「行こうか。めだかちゃんを送り出してやろう」

「やれやれ、大変なお仕事だな」

「大丈夫、僕と君が一緒なら、なんだって出来るさ」

瑛嘎の腕に自分の腕を絡ませて笑う安心院なじみの表情は若干頬を紅潮させており、傍から見ればただの可愛らしい恋する乙女。人外という要素は此処には入って来ない。なにせ相手もまた人外、数十億年という時間を超えて繋がったこの絆は、断てる者など居はしない。

「そいつはいいな。さて、しばらくぶりに本気を出すとしよう」

瑛嘎はゆらりと笑って、その足を進めた。目指すは黒神めだかの下、二人の人外は進み始めた。



現在黒神めだかは57輪のコサージュを手に入れていた。瑛嘎達が時計塔から動きだして約45分程、残り時間も半分を超えた所だ。ここまでで倒したのは、人吉善吉、雑魚キヤラ群団、委員会連合委員長勢、十三組の十三人裏表全員、教師及び父兄のメンバー、マイナス十三組の志布志と蝶ヶ崎、という粒揃いの57名。

彼女はこれをモノの45分で倒してきたのだ。全く持って驚嘆の至りである。

「はあ……はあ……全く、先の父兄方にはすっかり遊ばれてしまったな……まあコサー
ジユを手に入れたので良いでしょう」

だが、この時点で花の数も時間も半分を超えている。そして此処で現れる敵は、今までの戦いでも今回のイベントの中でも最大の敵だった。

「そうか、ここに貴様か——不知火！」

現れたのは、黒神めだかの奮闘と瑛叟の怒りによつて学園に戻つてきた友人、不知火半袖。彼女はなんと影武者達と不知火半幅、そしてそこにいるだけの悪平等ノットイコール不知火半纏とかの英雄の残響である獅子目言彦を引き連れて、黒神めだかの進む道を阻む。不知火の里の最大戦力である。

「悪いけどあたしは全力で引きとめさせてもらうからね！ めだかちゃん！」

楽しそうに笑う半袖の瞳には大きな闘争心が宿り、なにがなんでも引きとめるといふ気概がその言葉に宿っていた。

そんな半袖に対して黒神めだかは歯を見せて笑う。何せ二人にとつてこれが初めての戦いだ。消耗戦の最中とはいえテンションも気合も上々だ。

「言彦に反転院さんとか、ゲストにも程があるぞ。友情万歳だ、不知火！」

故にめだかは拳を握る。これほど楽しい戦いが今までにあつただろうか、歯向かう全ての敵が自分の為に拳を握ってくれるなど、学園生活において最高の贈り物だ。

百輪走も佳境を迎える。光陰矢のごとし、時が過ぎ去るのは早すぎる。だが、彼女の前に現れるのは英雄の残響以上の化け物。この楽しい壮行会も、終わりは近い。

『ていうか、さつきからちよくちよく惚気てくるのは嫌がらせ?』

百輪走を始めて約半数以上のコサージユを集めた黒神めだかの前に現れたのは、不知火一族。そこには人外組の三人の内の一人、不知火半纏や英雄の残響である獅子目彦までもが立ちはだかつていた。

だが、彼らもまた黒神めだかを送る為にこのイベントに参加した者達。めだかと戦い、笑って、散って行った。不知火半纏もそのコサージユをめだかに渡し、変態影武者達も倒れ、不知火半袖は黒神めだかの言葉で諦めるに至った。

「半袖、あのお嬢様はなんだって?」

「……私の分まで青春を楽しんでくれ、だってさ。めだかちゃんが居ないと楽しさ半減なのね……でもまあ友達の頼みだしなー、仕方ねー聞いてやるか! あひやひやひや☆」

楽しげに笑う半袖。めだかの背中を押す、そんな重要な役目を果たせた後の気持ちは、清々しいよりも爽快だった。

「いやいや、随分と楽しそうだねえ」

「——っ！　なんだ、瑛嗶さんじゃないですか！　あひやひや、そう言う貴方は何故此処に？　めだかちゃんは今もう行っちゃいましたよ？」

「決まってる、俺も彼女の相手を頼まれたんでね。ちよつと本気を出そうかと思つて「！」

そこに現れたのは瑛嗶。ゆらゆら笑いながらもコサージュを胸に付けて、楽しそうな口調で言う。

「とはいえ、瑛嗶の言ってる本気つてのは全力でその力を振り回すつて訳じゃねーぜ？」
そして半袖の背後から聞こえた聞き覚えのある声。半袖はぱつと振り向いた。

「やあ半袖ちゃん。お久しぶり」

「安心院さん……!?!」

「おいおいそんなに吃驚する事かい？　僕の大好きな瑛嗶が僕を死んだままにするとか本気で思つてたのかい？　全く、いつもの事ながら君は少し頭が回らない所があるよね」

そこに居たのは安心院なじみ。瑛嗶によつて復活した人外組の三人の内の一人だ。奇しくもこの場にその人外が三人集まつてしまったのだが、特に気にする事も無い。

「さて、僕達は今球磨川君を探して学園中を歩き回つてるんだけど……ここまで捜して居ないとなるといよいよスキルに頼らざるを得なくなるなあ……ていうか、もしかして

入れ違つちやつたかな？」

瑛唄になじみは歩み寄り、そう言う。すると瑛唄はそんななじみの言葉に少し考えた後、まあそうかと短く呟いてくるりと踵を返した。

「ああ、そうそう。忘れてた忘れてた……言彦」

「む、なんだ安心院」

「よくも殺してくれたなこの野郎」

「むっっ!？」

安心院なじみはそう言つてげしつと横たわる言彦の腹を踏みつけた。その攻撃に言彦は呻き声を上げた物の、子供っぽいや安心院なじみの行動に、

「げっげっげ……随分と人間らしくなったものだな安心院。うむ、新しい」

「ふん、僕の事は親しみを込めて、安心院さんと呼びなさい。5000歳と少しした」

「げげげ……それは失礼したな。では改めよう。今の貴様は、新しいぞ3兆歳ろっぼ」

「へえそんな事を言うのか言彦。今ここで殺してやろうか？」

「げげげ、そう言つて儂に勝つた事があつたか馬鹿め」

バチバチと火花を散らす二人の姿を見て、瑛唄はゆらりと笑った。

「どつちもどつちだ」



さて、それから若干の時間が経つ。黒神めだかは現在、不知火一族を倒した後駆け足で進み、鍋島猫美と勝負を延長させたり、婚約者候補である言葉使い達を相手取り、言葉遊びの勝負で勝利したりして順当にコサージユを集めていた。

「次は貴様らか。ふむ、此処でもあの男が居ないとなると……来てないのかと不安になるな。というかお姉様、さつきも居ませんでしたっけ？　十三組の十三人の所で」

「……私は意見を有さない。思うことなど何も無い」

「キャラ崩壊も甚だしいですよ!」

そして終盤、次に現れたのは生徒会の面々。日之影空洞や悪平等の五人、現在と過去の生徒会のメンバーがめだかの前に立ちちはだかる。

「名瀬天歌と黒神くじらは別の人物なんだって。あとあの人ならちゃんとして来るよ。めだかちゃんとは一対一で相対みただよ?」

「ふむ、もがなちゃんがそう言うのなら心配は不要か……ではあやつと会ってやるためにもここは押し通らせてもらおうか」

「そうですね、でも俺達もただじゃ負けませんよ。貴方がこの生徒会室でそうして来たように、全力で戦わせてもらいます——それでは、貴方への感謝に基づき——」

阿久根は答える。すつと構えながら、めだかへの感謝と尊敬と送迎の心を持って全員がにっと笑った。そして、言う言葉は生徒会としていつも言ってきたあの言葉。生徒会は、いつもこの言葉から始まったのだ。

『――生徒会を、執行する!!!』

そして、また彼らは散っていく。散っていく中で、確かに黒神めだかの背中を押す。前へ前へと、彼女を進ませたのだった。



そして、黒神めだかが次なる戦いの場へと移動している時、瑛噎達は元の場所へと戻って来ていた。つまり、時計塔だ。

「ああ、やっぱりいるや」

『！』『安心院さんに瑛噎さん……』『まあもう復活してるだろうとは思ってたけど』『この場に来るなんて予想外だよ』

「まあ僕の瑛噎にイベント参加要請が来たからね。来なかったら当初の予定通りに君に

丸投げしてただけど……ちよつと予定が変わったからさ……僕のコサージユを返してくれ」

「まあいいけど」『それにしてもめだかちゃんは幸せだね』『瑛嗶さん達みたいな人外に送り出されるなんて』

「ん、とはいえここは君の場所らしいからね。俺達は下に行つてるよ、精々頑張つてね」
『うん』『精々頑張るとするよ』

交わす言葉は短い。彼に会いに来たのはコサージユを回収するためだ。瑛嗶が参加する以上自分も参加したいのだろう。安心院なじみは自分の胸にコサージユを付けて満足そうに瑛嗶の腕に自分の腕を絡ませた。そしてそのまま時計塔を去る。

「……『ていうか、さつきからちよくちよく惚気てくるのは嫌がらせ?』『僕の瑛嗶、とか』『アレアレにも程があるよ』『さり気なく腕組みやがつてちくしょー』」

瑛嗶達が去つて行った後、球磨川禊はジト目になってそう呟いたのだった。通称、執心院さんは進行形で惚気まくりである。

—— お前は『最高』だ、めだか

さて、それからしばらく。残り時間はもう30分を切った辺りで、黒神めだかは97輪のコサージユを回収し終えていた。残るコサージユは3輪、その内の1輪をその胸に付けた球磨川禊とめだかは対峙する。

ここまで様々な相手が彼女の前に立ちはだかり、散って行った。人吉善吉を始め、雑魚キャラを自称した面々、委員長勢、マイナス13組、十三組サートイーンパーティの十三人、風紀委員、生徒会、不知火一族、鍋島猫美、保護者勢、挙げれば多くの強敵達。それだけの数の強者達に背を押され、黒神めだかは此処にいる。

『……やあめだかちゃん』『待ってたよ』『本当は僕の以外に安心院さんのコサージユも渡すつもりだったんだけど』『さっきご本人の登場って感じに回収されてね』『残念だけど僕の後はその二人だ』

「ああ、分かっている。というか、球磨川。お前それ以外に何か言う事は無いのか？ 私に負けた後では喋る事が出来ると思うなよ？」

「『あははまさか』『そっちこそだよめだかちゃん』『97輪も集めておいて気付いてないのかい？』」

「？」

球磨川禊は薄ら笑いを浮かべながらも自分のコサージュを手に取り、そのコサージュに人吉善吉が仕込んだ仕掛けを公開する。

『このネームプレートが二枚重ねになっていること』『そしてどうしてナンバーリングされているのか』『不思議に思わなかったのかい？』

「！ 二枚重ね……ナンバリング……あ！ ……あ、ああ!!」

二枚重ねになったネームプレートはペリペリと二枚に分ける事が出来て、そのナンバーリングにならって並べてみると、そこには一枚一枚に書かれた97名のメッセージと、パズルの様に描かれていたためだかへの全員からの送る言葉。

——めだかちゃん、ありがとう！

目頭が熱くなる。頬が緩む。気付けば涙目で、ふるふると歓喜の感情が身体を駆け巡り、肩を震わせていた。

「……こんな時、なんて言えばいい？」

『何も言わなくていい』『皆から受け取った言葉の花束』『ただ受け取ってあげなさい』『ふん……善吉の奴め。私が何処へ行こうと何れ追いついてくる奴だと思っていたが』

……あの男、最後の最後で私を追い抜きおった」
心底楽しそうにめだかは言った。

『さて、それじゃあ始めようか』『ああ、お願いだから負けてもらえろとか思わないでね』
『全力全開、全身全霊、全速前進』『全力で来てよ』

「ああ、任せておけ。それではいざ——勝負♡」

球磨川禊と黒神めだか。生まれながらの勝者と敗者は何度目かの衝突を始め、そしてその一瞬の攻防の後……決着は着いた。

——あはは、また勝てなかった。



残り時間も疎らな終盤戦。最後の最後……黒神めだかと対峙した最後の相手は、勿論の事二人の人外達。人外の女は余裕そうな笑みを浮かべて佇み、人外の男は楽しそうにゆらりと笑って座っていた。

場所は、箱庭学園の校庭。その中心で対峙する黒神めだかと人外達の周りには、多くのギャラリーがいた。球磨川を含む、98名の猛者達と箱庭学園の全校生徒、校外の関

係者達。ぐるりと囲むように三人の周囲は人で覆い尽くされていた。

「やあ、めだかちゃん。待ってたよ」

「ああ、安心院さん。まさかこんなに早く再開出来るとは思わなかったぞ。まあまずは言っておこうか……お帰りなさい」

「ただいま、めだかちゃん。まあ挨拶はこれ位にしようか……僕と瑛叟が最後の2輪だ。で、二人一片に相手するのは流石にめだかちゃんもキツイだろうからさ」

「まあそうだな」

めだかとなじみは友人の様に、敵として会話する。瑛叟はそんな二人を眺めながら笑っているばかり。

「だから——先鋒は僕だ」

何処かで聞いた事のある台詞。果たして、それは漆黒宴で影武者を相手取る時の台詞だった。

「うむ、3兆年生きた人外である貴女に……一つ、御指導いただこうか」

「何処からでも掛かって来なさい。今なら特別サービスで、全力で叩き潰す事くらいしかしてやれないぜ？」

前置きはこれくらいで良いだろう。二人の少女は楽しそうに笑ってなんの予備動作も無く動きだした。衝突は一瞬の間。衝撃波を撒き散らし、周囲のギャラリーの応援の

声を掻き消す轟音が鳴り響く。

人外がスキルを発動させる、人間はそれを躲してスキルを発動させた。

人間のスキルが人外に届く、だが人外はそれを真つ向から掻き消した。

人外の蹴りが人間を吹き飛ばす、だが人間はすぐさま体勢を整え迫った。

人間は人外の腕をとり、投げ飛ばした。だが人外は天地を反転させて逆に投げ飛ばした。

人間の拳が届く――

人外の頭突きが届く――

そうして数秒の中で行なわれた攻防を見届ける事が出来たのは、おそらく数名。その他大勢のギャラリーは、ただただその暴れっぷりに笑みを漏らし、負けじと大声で応援の声を張り上げた。

「――瑛嗶は手強いぜ？」

「――無論、だが私は去って見せるぞ」

短く交わされた一瞬の会話。めだかの凜とした笑みに、安心院なじみはにこりと笑つてわざと隙を見せた。めだかはその隙を的確に衝いてなじみの胸に付いたコサージュ

を奪い取ったのだった。

「ありがとう、安心院さん。私は貴様のおかげで強くなれた」

「よせよ、僕は何もしてない。なにせ平等で平等なだけの、ただの恋する乙女だからね」
安心院なじみは、にこりと普通の少女の様に笑って言った。

◇ ◇ ◇

瑛嘎 side

なじみが負けた。とはいえ、この結果は予測済みだ。あの人外はめだかちゃんを大層気に入ってたみたいだし、これは元々めだかちゃんを送る為のイベントだ。空気を讀んだといった所か

さて、めだかちゃんがこちらを振り向いた。最後が俺とは中々に面白いじゃないか。足に力を込め、立ち上がる。いつも着ていた青黒い着物の裾がひらりと揺れた。

思えば、真面目に戦うのはいつ以来か……うん、きつと4000年くらい前になじみをボコボコにしてた石動式語の時かな？ あれはムカついたね。今じゃいい思い出けどさ。

「瑛嗶さん、貴方で最後だ。心置きなく戦おうではないか」

めだかちゃんがちちらにそんな言葉を言ってくる。主人公とは如何にもそれらしい雰囲気纏っている物だ。全く、俺には到底なれそうにもないな。なる気も無いけれど。

「そうだね。このコサージュが、最後の1輪だ。だが、俺はそう簡単には負けてやらないぜ?」

とりあえず、軽くそう返す。構えるめだかちゃんの瞳は、とても楽しそうだ。そういえばめだかちゃんとマジバトルするのは初めてか……いやはや感慨深い物があるね。これもある意味、人間らしいというものかな?

「ギャラリーが静かだね」

「瑛嗶さんが真面目に戦おうとしてるからだ。なんせ瑛嗶さんは学園……いや世界最強だからな」

「おっと、そいつは持ち上げ過ぎだぜ」

「それだけ認められているのだ」

「嬉しい限りで」

なるほど、俺の強さはそこまで人を惹き付けるものがあるのか。転生人生を始めてからもうかなり長い事過ぎしてきたけれど、ここまで認められたのなら鍛えてきた意味も

あつたという物だ。

「それじゃ始めようか。時間ももう無いだろうし」

腰布を解いて青黒い着物を脱ぎ捨てた。なじみが回収して嬉しそうに羽織っているから汚れはしないだろう。今の俺の格好は黒いインナーに黒袴のみ。随分と身軽になった。

「つ……ははは、着物を脱いだだけなのになんか変わるな……迫力で倒れそうぞ」

「怖気づいたか」

「まさか」

めだかちゃんは腰を落とした。後は地面を蹴るだけ。

さて、それじゃあ戦いながら……めだかちゃんについて考えて行こうか。めだかちゃんが突っ込んできた。黒神ファントム（ちゃんとした版）だ。そんなに速くないので適当に投げ捨てる。

「はああああああああ!!」

思えば、めだかちゃんと出会ってから俺の原作は始まった。小さな主人公の瞳には多大な可能性が詰まっっていて、胸を躍らせたものだ。そこから成長していく彼女の周囲には、既に主要キャラの影がちらほらと感じられたし、彼女の起こす偉業の数々は数十億年待ち侘びた意味もあつたという物だ。

「ぐっ……！　まだまだ！」

人吉善吉を始めとして、多くの人間を魅了してきた彼女の人生は本当に面白かった。まるで漫画の様な異様さと、怪物の様な異形さと、人間の様な人間らしさが混ざり合っていて、女の子の様な女の子である彼女が出来ていた。

その頃から俺はなじみ曰く最強無敵の馬鹿とか世界最強とか呼ばれていたけれど、俺としてはそんな物よりも彼女の存在は面白く感じたよ。彼女、というより彼女を取り巻く環境と彼女を中心として騒動が、だが。

「終神モード……！　黒神ファイナル！」

いやはや、それからという物随分と楽しませてもらった。生徒会の活動から最近の不知火一族とのいざこざまで、休む暇なく楽しかった。球磨川君を勝たせるのに協力した事も、なじみに現実を思い知らせた事も、善吉君とめだかちゃんの選挙戦も、漆黒宴での言葉遊びも、言彦との喧嘩も、月の破壊も何もかもが変わらず面白かったよ。まさしく娯楽主義者にぴったりの娯楽生活だった。

だから、俺は今こう思う。めだかちゃん……いや、黒神めだか、お前は――

「――お前は『最高』だ、めだか」

さて、めだかのことを考えるのはそろそろお終いにしよう。これ以上は善吉君に嫉妬されてしまうし、なじみも良い気はしないだろう。何せ、アイツは嫉妬深く、独占欲が高いからね。

「おや、考え事は終わったのですかな？」

「ああ、終わったよ。今まで適当にあしらって悪かったね」

考え事の最中、俺に掛かって来ていためだかを単純作業の様に投げ飛ばしていたのだが、そのせいでめだかの身体にはそこらじゅうに擦り傷が出来ていた。

「で、先程は何と？」

「ああ、俺は改めて思ったよ。いいか黒神めだか、俺は自他ともに認める世界最強の人外だ」

「ええ」

「でも、俺はそんな称号には意味は無いと思ってるんだよ。そんな物より、俺はお前にこそ相応しい称号の方が、随分と面白いと思う」

「そうだ、最強なんて面白みの欠片も無い。ただ強いだけの何かに何の意味があるというのだ。だから俺は最強よりも最高を良しとする。」

「お前は最強以上に最高だよ。お前の周りで起きた全ての騒動に、感謝しよう。さあ掛かって来い、俺は今気分が良いから、お前に言葉を送る事しか出来ないぜ？」

「それで十分。瑛嗶さん、貴方は知らないかもしれませんが……私は中学時代から貴方を尊敬してましたよ。だから、その言葉だけで私は——何よりも滾って来たぞ!!」

凜と笑う少女とゆらりと笑う人外。

「ガッ!?!」

「今までの戦闘は戦闘じゃない。ただのお遊びだぜ、めだか」

少女が動きだそうとしたその時、スタイルの先読みと異常な速度を駆使してめだかの懐に潜り込み、腹に掌底をぶつけて吹き飛ばす。

「ごふ……あれ、瑛嗶さん今までより速くなってないか?」

「俺の着物は幅が広いから空気抵抗も激しいんだよ。頑丈だから通気性も悪いし。だから着てるだけで速度が若干落ちるんだよね」

「そんな週刊少年ジャンプみたいな設定今出しますか……!」

「面白いだろ? まるで打ち切り漫画みたいで」

「確かに!」

笑いながらぶつかる俺とめだか。楽しいね、こんな戦いは今までの人生でも一番楽しいぞ。

「制限時間はあと10分。10分もあるんだ、楽しもうぜめだかちゃん? 大丈夫、この勝負が終わった頃には地面に倒れて嬉し泣きしてるだろうよ」

もとより、俺はこの勝負で勝つつもりはない。これはめだかを送り出す為のイベントだからね。

さあ黒神めだか、格好良く最高のお前を出し切って、俺に負けろ。お前は最高だが、最強に勝てると思うなよ？ 俺は敗北したお前を笑って送り出してやるよ。

まあこれからじつくり分かりあつていこうよ。箱庭学園へようこそ！

舞う血飛沫、弾ける火花、進む時間、空間が捻子曲がり、時は巻き戻り、技術を真似て、追い続ける。一切の傷を負う事の無かった人外に、少しでも手を届かせようと必死に手を伸ばす。ゆらりゆらりと躲して、逆に投げ飛ばす人外は、その一切の攻撃を己が身に届かせる事は無かった。

悔しい、悔しい。でも楽しい。これほどまでに自分の攻撃を届かせてくれない相手が、めだかにとつては何処までも楽しくて、嬉しくて、そして尊敬出来た。本当の所は小さい頃より出会っていた二人だが、本当の所で出会ったのは中学時代。そこで彼女は彼を尊敬し、自分もいつかあんな風にとさえ思った。

最初の印象は、不真面目な先輩。生徒会に入つてからは、少しは考えを持っている先輩。彼が卒業する頃には、敬愛しとても強い人になった。今でこそ完璧な人間などないと言っている物の、あの頃はこの人こそ完璧だとも思つたのだ。

「——お前の学校生活はどうだった？」

「最高でした」

そんな敬愛し、される二人は激戦を繰り広げる中でそんな会話をする。攻撃の手は一切緩まない。

「——瑛喰さんは私と居てどうでした?」

「最高だった」

お互いが今までに悔いを持っていない。お互いはお互いの存在があつたからこそこの学園生活の多くで大切な事を学んだし、面白い日々を送る事が出来た。そこには他の仲間も入るだろうが、めだかは瑛喰に助けられた事が多く、瑛喰はめだかによつて楽しく日々を送る事が出来たのだ。

「出来る事なら、ずっとこうしていたい」

「でも、時間は有限だ。今で言えばもつと短い間」

「ええ、だから」

「そろそろ終わりにしよう」

瑛喰の言葉と共に、一度距離を取つて音が止む。歓声も、打撃音も、無い。しんと鳴りやんだ空間で、二人だけが相手を見ていた。

「これが最後です。私の最高の一撃、受けてくれますか?」

「いいぜ、胸を貸してやろう。来いよ黒神めだか——俺に届かせてみな」

瑛喰はゆらりと笑つてちよいちよいと手招く。そこにあるのは、圧倒的なまでの実力

差と自身への自信。黒神めだかが少しでも瑛嗶に攻撃を届かせる事が出来れば、それが一番の誇りに出来るだろう。

「では、不肖この黒神めだか——参る！」

地面を蹴るめだか。瑛嗶はただ待ちうけるのみ。その距離はおよそ10m程で、一瞬でそれは縮められる。めだかが一步踏み込み、髪が漆黒に染まる。それは、ずっと前に会得した最初の完全なモード。

改神モード

めだかはこので瑛嗶に挑む。そして最近会得したスタイルの基礎を使って相手の気持ちを読み、先手を取る。瑛嗶の気持ちを完全に理解するのは無理で先手は半分ほどしか取れていないが、それでも十分。

「ああああああああああ!!!」

咆哮を上げて瑛嗶に突っ込んだめだか。瑛嗶はめだかのその黒神ファントム通常版による速度に反応し、受け止める。力と力は鬩ぎ合い、お互いの刃を相手に届かせようと前へ前へと進む。

その衝撃は地面へと伝わり、地割れを起こした。砂煙が舞う。二人の姿が隠れる。そ

して、ギャラリーが全員その中心に視線を向けて、二人が現れるのを待った。

「——わはは、やっぱりお前は最高だな」

瑛嗶の笑い声。それと共に煙が晴れ、二人の姿が見えた。そこには瑛嗶が立っており、めだかが倒れていた。どう見てもめだかの負けだ。

「めだかちゃんの……負け?」

善吉の呟きが周囲に響く。そして、制限時間が過ぎた事を告げるチャイムが鳴った。これで真正正銘、めだかの負けだ。

「おめでとうめだかちゃん。お前の一撃、確かに届いたぜ」

だが、瑛嗶はそんな言葉をめだかに言う。その視線の先、めだかの手の中には……確かに瑛嗶のコサーージュが握られていた。めだかは最後の「一撃で瑛嗶を打倒しようとした」のではなく、その胸に付いたコサーージュを奪う為だけに全力を注いだのだ。

「——うむ、清々しい結末だった!」

黒神めだかは仰向けのまま、にっと笑ってそう言った。百輪走、これで100輪の花束が揃った。黒神めだかは、こうして箱庭学園を去ったのだった。



—— 4月

箱庭学園は人吉善吉達生徒会が指揮つて行なわれた入学式を迎えていた。卒業したメンバーと同じ位濃い新入生や、扱いの難しそうな新入生がいて退屈はしなさそうだと思う。

勿論、めだかの宣言で一年からやり直していた安心院なじみはまだ学園に通っているし、瑛叡は卒業したので此処には居ない。

「——以上です」

そんな中、善吉の挨拶は終わり、続いて新任の教職員の紹介になった。まずは理事長。不知火理事長が辞めて、次なる理事長はというと、

「新しい理事長の黒神めだかだ。よろしく」

黒神めだかだった。凜と笑つて自己紹介する彼女は、箱庭学園に教師として戻つてきた。それを見て、送り出した善吉達は嬉しそうに笑う。まだまだ、彼女の周囲では騒動が起こつていくのだろう。でも大丈夫だ。何故なら、学んできたからだ。

めだかの紹介も程々に、彼女へ襲い掛かる血気盛んな新入生が三人。だが、彼女にやすやすと吹き飛ばされる。

「まあこれからじっくり分かりあつていこうよ。箱庭学園へようこそ!」

人と人との出会いは、無かつた事にはならない。一人と一人が出会つて、皆になつていく。言葉を繋げて、分かり合う事が出来るのだから、このさきじっくりと繋がつていこう。それが、箱庭学園で黒神めだかという人間が伝えた言葉なのだから。

めだかは壇上を降りるなか、天井に遮られた空を見上げる。その表情は晴れやかで、清々しい物がある。

「ふふふ、まだまだ楽しい日々が送れそうだな」

そんな言葉に、人外の男が何処かでいつも通り——ゆらりと笑つた気がした。

完

番外

結婚しようぜ

箱庭学園で、黒神めだかが理事長として就任し、彼女を中心とした物語が一旦幕を閉じた後の事。彼女の世代は、箱庭学園の黄金世代と呼ばれ、それぞれの生徒がそれぞれの部門で世界を取れるとまで言われた程だ。といつても、その中で本当に世界を取った卒業生は、あの柔道の反則王、鍋島猫美だけだった。

黒神めだか達は20歳を過ぎた頃に、スキルと呼ばれる不思議な力を失った。だが、その頭脳や身体能力に関してはスキルでは無く生来のモノ故に、失つてはいない。それぞれがその才能で頭角を現し、それぞれが己の居場所で頑張っている。雲仙冥利など、自分で自警団を作ってしまう程だ。

とはいえ、そんな話は今回特に関係無い。

今回はそんな黄金世代の中で、人外と呼ばれていたあの安心院なじみと、世界最強と呼ばれた泉ヶ丘仙瑛が、どうしているかという話だ。彼らはめだか達が失ったスキルと呼ばれるスキルを失つてはいない。寧ろ、20歳などとうに超えてしまっているのだから、今更という所だが。

知つての通り、瑛唄となじみは恋人同士だ。数十億年という時間を共に過ごし、健やかなる時も、悔やまれる時も、共に乗り越えて来た、言つてしまえばパートナーの様な関係なのだ。そんな中で、なじみは瑛唄に恋心を抱き、瑛唄はそれに応えた。

そして、恋人になつてから経つた時間は、たつたの5年程。数十億という長い年月を生きて来た事に比べれば、とんでもなく短いだろう。だが、そんな短い時間の中で彼らはとても濃い生活を送つていた。

これはその生活の一部の切り抜きだ。



「ねえ瑛唄」

「ん?」

「結婚しようぜ」

「めんどくせえ……」

瑛唄となじみは、そんな会話をしていた。

場所は瑛唄となじみの家。ソファに座っている瑛唄の膝に、なじみはコロコロと笑いながら気持ちよさそうに頭を乗せている。家に居る時のデフォルトの位置である。食

事も睡眠も特に必要なが無い二人なので、家事などで時間を取られる事が殆ど無い。故に、こうして一日中ゴロゴロ寝つ転がりながらいちやいちやしてられるのだ。

そして、恋人生活を送って早5年。そろそろ結婚の話が話題に挙がるのも、少しづつ日常の一コマになっていた。

「めんどくさいって……僕達もう恋人生活送って5年だぜ？　そろそろ関係を変えてもおかしくないと思うんだけどなあ」

「まあそうだろうな」

だが瑛嗶はその話になると、途端に面倒そうな顔をする。あまり乗り気ではないのかと不安になるなじみだが、瑛嗶の事は良く分かっている。恋人と夫婦、どっちでもやる事は変わらないので、結婚してもあまり意味はないと考えているのだろうと、ちゃんと理解はしていた。

だが、それは全然違う。瑛嗶はもう少し現実を見ていた。現実を知ってまだ数年しか経っていないなじみより、全然現実を見ていた。

「でも、俺とお前は結婚出来ないよ」

「え……な、なんで!？」

「入籍出来ないから」

「どうして!？」

「だって俺とお前……………両親いないじゃん」

なじみは固まった。結婚するには、婚姻届という書類を役所に提出する必要がある。そしてその婚姻届には、『夫と妻の両方の両親の署名』が必要なのだ。それは、両親が死亡していた場合でも同様で、必要記入事項だ。

だが、瑛唄となじみには両親がいない。何故なら、瑛唄は転生者として、なじみは人外として、『何も無い所』から生まれたからだ。つまり、

「入籍が出来ない……………!？」

「そういうこと」

「つまり……………正式な結婚は出来ないって事？」

「そういうこと」

「……………ごはあつ!？」

なじみは瑛唄の膝の上で血を吐いた、様なイメージが見えた。それほどまでに精神的ショックを与えたのだろう。

「まあそういう訳で……………結婚は出来ない訳だ」

「うう……………ぐす……………」

「出来ないが……………」

瑛唄はそう言つて一旦言葉を止める。なじみはそんな瑛唄に少しだけ疑問符を浮か

べた。すると、瑛嗶は少し照れ臭そうに笑みを浮かべて、膝の上に乗ったなじみの頭を見下ろす。そして、おでこにピトツと何かを乗せた。

「? 何に乗せたの?」

「ま、見てみれば分かる」

瑛嗶の言葉に、なじみはまた疑問符を浮かべたが、おでこに乗っている物を手で取つてその視界に入れた。それは、小さく、銀色に光る綺麗なリング。赤く小さな宝石がリングを彩っていた。

「こ、これって……!?!」

「まあなんだ、結婚は出来ないが……結婚してくれ、なじみ」

「……………っ!! うん……………うんっ……………喜んで!」

なじみは左手の薬指にそのリング……婚約指輪を着けた。白く長い指に、赤く輝く宝石とリングが良く似合っていた。

「好きだよ、瑛嗶」

「知ってるよ、なじみ」

なじみはこの時、世界で一番幸せなのは自分だろうと、自信を持つて言う事が出来たのだった。



その後、瑛嗶となじみの夫婦とは言えなくも、限りなく夫婦に近い、恋人関係はずつと続いていった。それこそ、地球が滅んでも続いていく。だが、その前に死んでいく者が確実にいる。あの黒神めだかも、球磨川禊も、かつて箱庭学園に名を轟かせた人物達は、死んでいく。

——兵どもが、夢の後

「どれだけの功績を、名誉を得ようが関係無く皆死んでいくのだ。

「にしても……」

「……？」

「コレはちよつと予想外だわ」

だが、そんな中でスキルも何も関係無く、ただちよつと長生きしている子がいた。瑛嗶が拾ったあの子、帯刀鞆負だ。

彼女は獅子目彦に挑み、瀕死の大怪我を負ったのだが、その結果スキルを失っていた。故に、その時から彼女は普通の人間になり、普通に老いて死ぬ事が出来る身体に

なったのだが……現在はその時から70年ほど経っており、彼女の年齢はスキルを失ってから数えて、88歳になっていた。

「……どうしたの？」

「いやお前がどうしたんだよ。何があつたんだよお前の中で」

瑛嗶が珍しくツッコミに回っている。それほどまでに、鞆負の容姿は驚愕に値するのだ。

「どんな奇跡でこんなことになつたんだろうなあ……」

帯刀鞆負、その年齢は88歳。そして、その容姿は——年老いるどころか若返っていた。肉体年齢で言えば9歳程に見える。何処のベンジャミンバトンだ。

彼女は何故か老いなかったのだ。いや、内面は老いているのだろう。何故なら体力面で言えばちゃんと老人らしく減少しているし、動くのも億劫になっているのだから。

「最近、眠いの……」

「……まあ外見が若いだけでちゃんと老いてるみたいだけど……見た目幼女なんだよなあ……少女肌だし、しわもないし……なんでだろうなあ……」

帯刀鞆負。瑛嗶となじみに60歳の時に正式に養子として引き取られた少女。彼女はこの1年後にいきなり眠る様に亡くなったが、その時彼女の容姿は、やはり幼女だっ

た。

そして、最後の最後に、人外である瑛嗶を驚かせることに成功した少女だった。

番外編 I F 悲恋の人外

——僕が、この『好き』だという感情を、正しく『恋』だと認識したのは、いつだっただろうか？

あの荒野での出会いから始まった僕と『彼』の物語。いや………今はもう、『物語』ではないかな。僕と『彼』の『人生』だ。不思議な程に自然で、嘘みたいな現実で、不幸とも言える幸福の日々。

数十億年という、僕という人外から見ても長い時間の中で、『彼』だけが僕の傍から離れず、ずっと一緒にいてくれた。

めだかちゃん達と会うまでの、読者が知らない知られざる歴史の中で、僕に好意を持った男は確かにいた。僕が好きだと、はつきり伝えて来てくれた人がいた、僕を愛していると、自分の全てを捨てて言ってくれた人もいた。地位も名譽も金も人も、何もかもを使って僕に陶酔した奴もいた。少なくとも僕にそう言った想いを伝えて来た人は、数えて52人。結構多いなと思うかもしれないけれど、三兆年という人生の中で、という条件を付ければ、そう多い訳ではないね。

でもね、その全ての人が僕の心を射止められずに、あらゆる理由で死んでいったよ。

寿命で、事故で、殺害で、病気で、戦争で、処刑で、飢餓で、自殺で、僕に恋してくれたあの52人の男達は、死んでいった。僕に看取られた人もいたかな。

彼らの不幸は、僕という人外に恋をしてしまったこと。そして、僕という人間が『恋愛感情』を理解していなかったこと。

今となつては、こんな苦しくて、切なくて、愛おしくて、辛くて、幸せで、甘酸っぱい想いを、僕なんかに向けてくれていたことに、罪悪感すら浮かぶ。返答を有耶無耶にして、その想いに応えなかったことを、頭を下げて謝りたい位だ。

でも、今生きているこの世界は現実だ。『彼』が教えてくれた、現実だ。人が生き返るなんて、ありえる筈が無い。球磨川君の『大嘘憑オールフイクションき』だって、所詮は死んだ事を嘘に変えるだけ。死んだ人は、確実に、死んだのだ。だから、僕は僕を最後まで、それこそ『最期』まで想ってくれた人達に、応えよう。身勝手かもしれないけれど、それでも、僕はそうするべきだと思うのだ。

——僕なんかを好きになってくれて、ありがとう。でも、僕は君達の想いには応えられない

僕は、君達の想いには応えちゃいけない。嘘でも良いから、この一時だけでも良いか

ら、なんてふざけたことを言うつもりはない。これが僕の、正真正銘本心からの応えだ。僕は、君達の想いを踏み越えて、先に進む。

あのね、僕にも好きな人が出来たよ。君達が僕を想ってくれた感情と同じように、僕も恋をしたよ。だから、君達と同じように想いを伝えようと思う。それが、不幸に繋がろうと幸福に繋がろうと、関係無い。君達が見せてくれたあの勇気を、僕も振り絞ろうと思う。

『彼』は我儘で、マイペースで、どこまでも自分勝手だけど、僕とずっと一緒にいてくれた唯一の人だ。だから、応援してくれとは言わない。精々失敗してしまえと悪態を吐きながら、見守ってくれ。

深呼吸して、激しく高鳴る心臓の鼓動を落ちつかせながら、僕は教室の扉を開けた。

「ああ、なじみ。遅かったじゃないか、待ちくたびれたぜ」

茜色の光が差し込む教室で、『彼』はゆらりと笑った。いつも通りで、普段通りで、通常稼働で、変わらない。『彼』は僕が何をしても変わらなかった。人外の僕が、何をしてもだ。

だからこそ、僕は彼に恋心を抱いたのかもしれない。顔に熱が宿るのが分かる。あ

あ、本当に、僕はおかしい。この想いに気付いてから引つ掻きまわされてばかりだよ。適わないなあ。

「うん、ごめんね。少しだけ……緊張しちゃって」

僕はここで想いを伝える。そうすることで、僕の恋に決着を付けよう。数十億年に渡るこの恋心に、終止符を打とう。たとえそれが悲恋となつたとしても、恋愛となつたとしても、構わない。僕はそれを受け入れる覚悟を決めたのだから。

「で、何の用だ？ こんな時間に教室に呼び出して」

彼が問う。

「うん、大事な……話があるんだ」

僕は答えた。

すると、『彼』は僕の真剣な表情を見て、その真剣さが伝わったのか笑みを潜めた。そして、僕に向かい合う。思えば『彼』の真剣な表情を見るのは、いつ以来かな？ 僕があの石動式語に満身創痍にされた時かな？ ああ、やっぱり——愛おしい。

「あのね、僕は君と出会ってから……ずっと、胸の中が苦しいんだ」

熱い想いが込み上げてくる。胸の前で両手を握った。信じられない程、熱かった。

「でも、それが嫌じゃなくて……嬉しくて、たまに辛くて」

『彼』は黙って聞いてくれる。用意してきた言葉は出てこない。もう、胸の内から零れ

るように、言葉が出てくる。きつと、僕の想いがそのまま言葉になっているのだろう。「君と話していると胸が暖かくなって……君と触れ合うと笑顔になれて……君といると……嬉しくて……！」

絞り出す様に、想いを言葉に変える。ああ、もう……滅茶苦茶だ。自分の気持ちを伝えるのが、こんなにも難しいだなんて思ってもみなかった。

「君が僕以外のことに興味を向けていると嫉妬しちゃって……女の子が君と仲良さそうにしていると柄にもなく焦っちゃって……」

幸せだったけど、不幸だった。笑顔だったけど、陰りはあった。今まで僕の世界には、色が無く、感情もなかったのに、君が関わりと一気に色んな色が広がって、色んな想いが溢れて来て、これまでの自分が見れば眼を丸くして驚くだろうと思う位頑張ったり、笑ったり、怒られたりしてた。

「だからね、もう抑えきれないんだ……」

そこで切って、もう一度深呼吸。瞳を閉じると、これまでの思い出が思い浮かんでくる。

——何してんだよ、馬鹿だなあなじみは……はははっ！

—— おお、今度はそれに挑戦か？ まあ頑張れよ

—— お前はもう少し大人っぽくなったらどうだ？

—— 俺は面白いことが大好きなんだよ。知ってるだろ？

—— 俺がお前の現実だよ。なじみ

他人から見れば他愛のない思い出だろうと思う。でも、この思い出は僕の愛を注ぐには十分な思い出だ。僕なんかにはもつたいたい位、幸せな思い出だ。だからこそ言える、だからこそ言いたい。僕の想いはこれだけだ。

「—— あのね、玖噺……僕は……君が好きだ。人外じゃなく、一人の女として……君が好きだ」

言った。言いきった。これ以上ない位、僕の想いが籠った言葉で、伝えられた。もう言うべきことは何も無い。あとは『彼』の答えを聞くだけだ。

正直、怖い。拒絶されるのは怖すぎる。僕の心が耐えられるかも分からない。でも、僕はこの答えが聞きたい。だからこそ、僕は死んでいった僕に想いを伝えて、聞きたかったであろう答えを聞かずに死んでいった、尊敬すべき彼らに今更ながらに応えたのだから。

——ごめん

短い言葉が聞こえた。呆然となつて、眼を丸くしながら『彼』を見る。彼は、触れれば壊れてしまいそうな程、痛々しい表情を浮かべていた。僕も見ることが無い、辛そうな顔。

止めてくれ、僕にそんな表情を見せないでくれ。そんな表情をさせてしまったら……泣いてしまいそうになる。

「……俺は、お前が好きだ。でも、それは恋じゃない」

はつきりと、言われた。僕にとつて、この世界のどんな武器よりも強力で、無慈悲で、致命的な言葉。衝撃が身体が震えた。心が揺れる。言葉が出ない。

「俺は、お前を家族として……好きだったんだ。だから……ごめん、俺はお前とは付き合えない」

悲恋。悲しい恋と書いて、悲恋。まさしくその通り。恋をして、こんなに悲しい思いをするのなら、いつそのこと恋なんてしたくなかった。『彼』と、会わなければよかった。そう、思ってしまう。

でも、そうじゃない。この瞬間、僕は『彼』との思い出が、積み重ねが、とても辛いものになったけれど、積み積みもった想いは崩れ去った。もう、元には戻らない、戻れない。

「そ……………つか……………」

だからこそ、僕は全力を振り絞って言葉を出す。

「つ……………ありがとう、答えてくれて……………それでも僕は——君に会えてよかった」

言えた。言って、僕は教室を出た。扉を閉めて、そのまま扉に凭れ掛かる。きつと、この場で泣いてしまったら中にいる『彼』に聞こえてしまうだろう。でも、

「もう……………我慢、出来ないや……………つ……………！」

僕の眼から、一筋、涙がこぼれた。すると、それを皮切りに次々と溢れてくる。もう、抑えきれない。せめて、口を手で抑え、勝手に出て来てしまう嗚咽を塞ぐ。『彼』に、聞かせてはいけない。聞かせたくはない。

この想いは、僕だけのものだ。僕だけの想いで、僕だけの悲しみで、僕だけの傷だ。

「つ……………うっ……………ぐしゅっ……………それ……………それでも……………僕は、君が好きだよつ

………！ 瑛嗶………！」

それでも、僕は君が好きだ。それだけは、この先何十年経とうが変わらない。僕は、君は好きで、好きで——大好きだった。愛してたよ、瑛嗶。

僕は零れた涙を拭って、いつまでも、いつまでも、その場でポロポロと、数十億年分の想いを吐き出す様に、泣き続けた。

◇ ◇ ◇

泣き声が聞こえた。扉の向こうから、俺が家族として愛するなじみが、泣いている声がか聞こえた。本来の家族であれば、すぐに駆けつけて、抱きしめながら慰めるのだろう。だが、俺にはそれが出来ない。抱きしめて、慰める………たったこれだけの事が、俺には出来ない。やってはいけない。

「………駄目だ、いつもみたいに、笑えない」

口元を吊りあげようとしても、面白いと笑えない。多分、なじみの想いが本物だったからだろう。本物だったから、それを壊した俺は笑ってはいけない。

「人生、ままならないなあ………」

これが現実。なじみに現実を教えた俺だが、案外、だれもが現実を思い知ってはいないのだろう。皆いつも現実から目を逸らしている。現実逃避、やって後悔するよりも、やらないで後悔しない方を選んでしまうのだ。

人外であろうと、感情と心を持つている以上、それからは避けられない。

「……………なじみは凄いな……………本当、俺なんかじゃ到底及ばないくらい、強い心を持つてるよ」

俺はそう言つて、笑わなかった。

「ありがとう、なじみ。こんな俺を好きになつてくれて」

扉の向こうにいるなじみは、多分聞こえていないだろう。だからせめて、俺は感謝の言葉を空間に響かせ、これ以上なじみを踏みにじらないよう、傷付けないよう、その泣き声から逃げるように、スキルを使ってその場から消えたのだった。

「聞こえてるんだよ……………ばーか……………」

誰もいない教室の廊下で、涙交じりのそんな言葉が響いた。一つの恋が、こうして終

わ
っ
た。
。

番外箱 江迎怒江と泉ヶ仙瑛叟の接点 上

瑛叟がまだ、箱庭病院で職員として働いていた頃の話。ある時、病院に一人の少女がやってきた。本当に小さい子供で、普通の子ならばまだ物心が付いているかも怪しい年齢の少女だ。なのに、少女を連れて来た両親らしき人は少女に一切触れようとしていなかった。しかも、少女の服はボロボロで、両手は土塗れだった。そしてなにより特徴的なのは、あの球磨川禊の様に、絶望と不幸に塗れた濁った瞳。

瑛叟は彼女を見て、ただただ簡単に感想を抱いた。

——あ、不幸な子供だ

マイナス 過負荷なんて、この世界で珍しいものでも無い。両親に嫌われているのも、身形が綺麗でないのも、別段予想外の光景ではなかった。

そして、少女の両親らしき二人は少女を瑛叟に押し付けて、帰って行った。少女はぼつんと瑛叟の前で立ち尽くしている。俯き、服をボロボロにしながら気味悪く笑っていた。

「ふむ……お嬢ちゃん、名前は？」

「江迎……怒江、です」

「そうか、俺は泉ヶ仙瑛唄。面白いことが大好きな君の担当医だよ。よろしく」

これは、瑛唄という人外が、初めて請け負った患者の話。瑛唄が担当した、最初で最後の患者である過負荷^{マイナス}、江迎怒江という不幸な少女の話である。



江迎怒江は、両親から病院に置いて行かれた少女である。とはいえ、病院側としては両親の住居や電話番号等を把握しているの、言ってしまうえば怒江を両親の下へ帰すのは簡単だった。故に、病院側としての対応は、とりあえず怒江を病院で預かる事だった。だが、その担当医になりたい者はほとんどいなかった。好き好んで過負荷^{マイナス}に関わろうとする人間は、箱庭学園やこの病院でも稀だ。

だから、そこで起用されたのは、新人でまだ仕事がなく、かつ過負荷^{マイナス}に嫌悪感を抱いていない人物である、瑛唄だった。

「やあ怒江ちゃん、調子はどう？ 悪い？」

「うふふ、だいじょうぶですよお……いつも通り最悪です」

「そいつは結構。で、そのスキルの方はどうよ？」

「……まあ……これは私にはどうにも出来ませんからねえ？」

「だよねー」

瑛唄は怒江のいる部屋にやってきて、怒江の調子と経過を記録する。とはいえ、瑛唄にとつてはそんなのスキルの一つで終わらせられる。だから、スキルでちよちよいと仕事を終わらせた瑛唄は怒江とコミュニケーションを取る事にした。

「なあ怒江ちゃん、君は何がしたい?」

「特に何も」

「ジャンプ読む?」

「じゃあそれで」

瑛唄の取りだしたジャンプを受け取り、まだ文字も読めないのに読み始める怒江。おそらく、台詞は読んでいないのだろう。絵を見て、なんとなく読んだ気分になるのだ。まだ文字の読めない怒江だからこそ、ジャンプ鑑賞法だった。

「面白い?」

「とても」

「ふーん」

面白くない会話。こんな簡単で短い言葉のやり取りが、瑛唄と怒江のコミュニケーションだった。言葉を交わすのは、決まって瑛唄が話し掛けるのが切っ掛けで、怒江はそれに対して短く返すだけ。寧ろ会話することを望んでいる訳ではなさそうだった。

ジャンプを捲る音が、部屋の中で規則的に響く。瑛嗶は壁に凭れ掛かつて座り、怒江はその隣で黙々とページを捲っていた。

「……………」

「……………」

お互い、言葉を発しない。傍から見れば、仲が悪いのか？ 喧嘩でもしたのか？ 他人なのか？ といった疑問でも生まれそうなほど、彼らのコミュニケーションは最低限で、しかしそれが最大限だった。

ただ黙って一緒にいて、黙ってなにもせず、稀に会話する。それが、瑛嗶と怒江の最大限のコミュニケーションだった。

だが、彼らの間に沈黙の空間特有の気まずさは無かった。お互いがお互いを気にかけていないからだ。興味が無い、だが、一緒にいる。あくまで担当医と患者の関係。教師と生徒が恋仲に陥る様な、兄と妹で恋人みたいな関係になる様な、虐めつ子と虐められつ子が親友になる様な、常識的に考えてありえない関係が、瑛嗶と怒江の間にもあった。

担当医と患者が、仲良くなる。

これが、瑛夏と怒江に限っては、ありえなかった。

「怒江ちゃん飴食べる？」

「貰っても食べられませんかよ」

「あ、そうだったっけ……あむ」

「……自分は食べるんですね」

「だから食べれば良いじゃないか、ほれ」

「むぐつ……!?!」

瑛夏は飴の袋を取り出して一口に含む。そして、少し羨ましそうに見る怒江の小さな口に、飴玉を突っ込んだ。すると、コロコロと彼女は飴玉を口の中で転がしている。

「美味しい？」

「とても」

「そう」

また会話が止まる。また一枚、ジャンプのページが捲られた。

◇ ◇ ◇

そうして過ごすこと、三カ月程。相も変わらず瑛夏と怒江は最大限のコミュニケーション

シヨンを行なっていた。黙って一緒にいて、黙って何もせず、稀に会話する。そんな最大限のコミュニケーションを、毎日、毎日、毎日、毎日、24時間ずっと、一緒にいた。なのに、瑛嗶はどこからともなく娯楽品を取り出して、毎日毎日別の事に怒江を誘った。ある時は将棋だったし、ある時はリバーシ、ある時はトランプ、ある時は本、ある時は人形、ある時は図工セットなんてものを取り出した事もある。

怒江はそれらの殆どを、自分には扱えないからと拒否した。だから知らないが、それらはずっと部屋を転がって放置されていた。

彼女には触れた物を腐敗させる力があつた。勿論常時発動していて、彼女自身には制御出来ないものだった。だから両親に嫌煙され、娯楽品を拒否し、飴を自分の手で食べられなかった。

「……………いない？」

さてある時、怒江はいつもの部屋で瑛嗶から初日に貰ったジャンプを読んでいた。何かは知らないが、このジャンプは触つても腐らない。瑛嗶が何かしたのだろうかと思うが、分からない事は考えていても仕方が無かつた。

もう何度も読み返した内容。それでも、怒江は楽しそうにヘラヘラと笑つてた。だが、今日は違つた。瑛嗶がいなかつた。今までずっと居た瑛嗶が、いなかつた。

「……………どこにいったんだろう？」

怒江は、興味が無かった相手を探す。部屋を出て、瑛嗶の下へと向かった。

怒江は依存していたのだ。瑛嗶という心地良い相手に。自分と一緒にいてくれる。手を伸ばせば届く距離にいつもいた瑛嗶。そして最大限で最低限のコミュニケーションを取ってきてくれた瑛嗶。

心地良かったのだ。瑛嗶の傍は。自分が一人じゃない気がしていたのだ。だから、怒江はいきなり手の届く位置に瑛嗶がいなくなっていたことに、恐怖を感じた。自分が一人な気がして、急に寒気が襲ってきた。

「探しに行こう」

言うが早く、怒江は部屋を出た。瑛嗶を探し始めた。

番外箱 江迎怒江と泉ヶ仙瑛嘎の接点 下

瑛嘎が何故怒江の傍にいなかったかというところ、少しばかり所用を頼まれていたからだ。カルテの整理。だからちよつとばかり席を外していたのだ。

「さて……と、これで終わりか……じゃあ怒江ちゃんどこ行くとしよう」

瑛嘎はそう呟いて白衣を翻し、怒江の所へと歩き始めた。

元々、瑛嘎は彼女をどうしようと思っていない。ただなんとなく患者の担当として任されたからなんとなく一緒にいるだけだ。というか、過負荷^{マイナス}を預かってどうすればいいのか瑛嘎は知らない。スキルを封じれば良いのか、それとも社会でやっていけるように更生すればいいのか、それとも両親に叩き返せばいいのか、さっぱり分からない。

「怒江ちゃんを預かってからもう3カ月……進展は無しだ。わはは、困った困った」

別段困った様子もない瑛嘎。ゆらゆらと笑いながら歩く様は、この箱庭病院では一つの名物的なものになっている。

「あら、瑛嘎君じゃない」

「おや、瞳センパイ」

「江迎ちゃんはどう?」

「俺の恋人にするには些か年齢低過ぎでしょ」

「そんなこと聞いて無いわよ!？」

瑛叟は人吉瞳に遭遇した。ちようどいいからこころで何をすればいいのかを聞いておこうと思った。

「とうか、俺はあの子をどうすればいいんすか」

「ソレ分からないまま3カ月過ごしてたの!？」

「まあね!」

「自信満々に言うな! ……はあ……全く、貴方はあの子を社会でやっていけるように更生させて、親の下へ帰してあげるのよ」

全部だった。つまり、スキルを封じて、社会で生きていけるように更生させ、親へ叩き返す訳だ。瑛叟はこの病院の方針に若干苦笑するのだった。

「じゃ、あの子の事、頼んだわよ?」

「はいはい、わかりましたよー」

瑛叟はそう言って、瞳と別れた。



それからしばらく歩いてみると、瑛噎は怒江が目の前から歩いてくるのを見つけた。その手にはジャンプを持っていて、キヨロキヨロと周りを見渡していた。

「おー怒江ちゃん、なにしてんの?」

「! 見つけた……」

「なんだ、俺を探してくれてた訳か……そいつは面倒掛けたね」

「——すか?」

「え?」

怒江の様子がおかしかった。瑛噎は雰囲気の変わった怒江に少し眉を潜める。どこか暗い雰囲気を纏った2歳の少女は、いつもよりもっと暗い瞳でぺらぺらと流暢に話し始めた。

「なんで私の傍にいないんですか? 貴方は私の担当医ですよ? ならずつと私の傍に居るのが当然じゃないんですか? 当然なんですよ、この三カ月間ずっと私とずっと一緒にいてくれたのになんで今更になくなつたんですか? 私みたいな子供の世話はもう飽きちゃつたんですか? そんなことないですよ、私は貴方に何もしていませんの、だから貴方は私と一緒にいてくれないと困るんですよ。傍にいて下さいよ。私がジャンプを読んでいる傍らにいて下さいよ。どうしてどうしてどうしてどうしてどう

して離れて行っちゃうんですか、おかしいじゃないですか、担当医って言ってくれたじゃないですか、仕事ならちゃんと全うして下さいよ。私の何がいけないんですか、迷惑掛けて無いじゃないですか。ご飯だって残さず食べてます、好き嫌いもしてません、お風呂だって暴れないで入ってます、言うことだつてちゃんと聞いてます。私は良い子です。だからずっとずっとずっとずっとずっと一緒にいて下さいよ」

「わはは、ヤンデレの素質たつぷりだなオイ」

瑛叟は怒江の頭に手を乗せて、笑う。

「はいはい。ほら、部屋に戻るよ」

「！」

瑛叟は怒江を抱き上げて部屋へと歩き始める。すると、怒江は自分に触れられている瑛叟にびつくりした表情を浮かべた。何故なら、彼女の力は人であろうと、触れれば腐らせるのだから。

「俺にはお前の力なんて効かないよ」

「……なんで」

「俺が、俺だからだ」

「……意味が分かりません」

「分からないよ。お前は俺じゃないからな」

瑛唄は怒江の頭をぼんぼんと叩きながら元の部屋へと辿り着き、中に入る。そして、怒江を下ろした。

「いいか怒江ちゃん。お前の力をいつか受け入れてくれる奴らがきつと現れる。俺が保証するよ」

「……………」

「その時、お前は誰かに恋をしてるかもしれないな、人並みに喧嘩したりしてるかもしれないし、人並みに友達と遊びに出掛ける事もあるかもしれない。もしかしたらその力を制御出来るようになってるかもしれない」

「……………そんなのもしもの話です」

「でも、ありえない話じゃない。もしも、そうだったとして、まだその力が怒江ちゃんを苦しめるようなら、その時は俺を頼れ。確実に何とかしてやるよ」

瑛唄はそう言つて、ゆらりと笑う。怒江はそんな瑛唄に対して、本当に何とかしてくれそうな気すらしてきた。

もしも、本当にそんな未来があるのなら、自分はいつか幸せになれる時が来るのかも知れない。誰かに恋して、誰かと喧嘩して、誰かと遊びに行つて、この力も制御出来る様になっているかもしれない。

「……………なんで、そこまでしてくれるの?」

「決まってるんだろ。最初に言った通りだ」

「?」

「俺は泉ヶ仙瑛叟、面白いことが大好きな——『お前の』担当医だよ」

瑛叟はこの後、この病院に飽きて退職するのだが、この約束だけは覚えていてる。だから、瑛叟はいつまでも怒江の担当医であり、彼女が社会で生きていけるように支えるのだ。最初で最後の患者だからこそ、それを最初で最後の失敗にしない。

「……………そう、ですか」

「ああ、精々頑張つて幸せになるといい。まあ、マイナス過負荷のお前がどう幸せになるのか、知らないけれど」

「……………はい」

「まあただの担当医の言葉だ。忘れてくれて構わないよ」

「忘れませんよ。私にそんな事言ったのは、先生が初めてだから」

瑛叟と江迎はそうして笑い合つた。

そして、この数日後、江迎怒江は家族の下へ戻つて行つた。瑛叟に見送られて、帰つて行つた。相変わらず、その手に古びたジャンプを持っていたのは、記憶に残っている。

二人が再会したのは、この13年後。箱庭学園でだ。

その時彼女は、瑛叟の言つたもしもの話が現実になつたように、誰かに恋し、誰かと

喧嘩し、誰かと遊びに行くような、幸せな日々を送っている。そして、恋の生涯になり
そうなの力は、瑛暎が約束通りなんとかしているのだ。

彼女は今でも覚えている。瑛暎の言葉を。自分の担当医だと言ってくれたあの時の
言葉を。

瑛暎は今でも覚えている。怒江の笑顔。ジャンプを片手に自分から帰っていった
時の笑顔。

「やあ怒江ちゃん。学校生活はどう？」

「こんにちは瑛暎さん。勿論、面白いですよ」

「そいつは良かった」

箱庭学園で、たまに二人は会う。その時、昔の様に瑛暎が話し掛け、それに怒江が簡
潔に答える。それが二人の最大のコミュニケーションだ。それだけで良い。瑛暎はゆ
らりと笑い、怒江は昔にはない柔らかな笑みを浮かべる。もしもの話は、現実にそこに
実っているのだから。

二人は擦れ違い、各々廊下を歩き去っていく。

そして、怒江はマイナス十三組の教室に入り、席に付いた。机から古びたジャンプを取り出して、パラパラと読む。

『あれ?』『怒江ちゃん、それは?』『随分と古いジャンプみたいだけど?』

「はい、13年前のジャンプです。でも、私の宝物です!」

『ふーん』『そっか!』

球磨川禊にはソレが何か分からなかったが、おそらくそのジャンプは『大嘘憑き』でも無かった事には出来ないのだろう。そう、思ったのだった。

番外箱 瑛嗶の異世界旅行

さて、めだかボックスの時点で、瑛嗶には『嗜考品』プレフェレンスと呼ばれるスキルがある。これは、言うまでも無く考えた事象を実現させるスキルを作る、という二度手間スキルだ。瑛嗶はこのスキルで様々なスキルを作り、今まで過ごしてきたのだが、その中にはこういうスキルがある。

異世界を渡るスキル『異世^{ポトイ・ミーツ・ワールド}会見』

これは、めだかボックスという漫画の世界に転生した瑛嗶だからこそ思い付いたもので、他の漫画の世界に移りたいと考えた際に思い付いたスキルだ。瑛嗶はこれで、幾つかの世界へと遊びに行ってみる事にした。安心院なじみにも同様の効果で別名のスキルを譲渡してあるのだが、現在なじみは不在である。

「さて、どんな世界になるかな？」

瑛嗶はこのスキルを敢えてランダム性のある物にしている。行く世界が瑛嗶にも分らないのだ。もしかしたら変な世界に行くかもしれないし、もしかしたら平和な世界に

行くかもしれない。殺し合いのない世界もあり得るだろう。

「楽しみだ」

瑛嗶はそう言つて、スキルを発動させた。そして次の瞬間。瑛嗶はその姿を消したのだった。

◇ ◇ ◇

——瑛嗶 in ダンガンロンパ——

瑛嗶が眼を開けた時、視界に入つて来たのは鉄と球磨川を彷彿とさせる無骨な螺子で密閉された静かな教室だった。状況を考えて、どうやら瑛嗶は監禁されているようだ。

とりあえず瑛嗶は鉄板で覆われた窓に近づき、螺子を回してみた。

「あ、回る……」

瑛嗶がちよつと力を込めたら螺子はキュツと甲高い音を立てて外れた。瑛嗶は少し気まずそうな表情を浮かべた後、何も無かつた様に螺子を元に戻した。

そして、その後教卓に眼を向けて、プリントがあるのを見つけた。

「つと、なんて書いてあるのかなー……つと……」

プリントにはこう書いてあった。要約すると、

『オマエラ、八時に体育館で、入学式を取り行います。』

まあそういうことだ。時計を見ると、8時10分。

「さーて遅刻だ、どうしよう」

瑛嗶はそう言つて、頭を掻き、体育館へ向かった。



体育館に辿り着いた瑛嗶は、ドアに耳を近づけて中の様子を窺った。すると、中々物騒な話をしているのが分かった。

『殺し方は、問いません！ 誰か殺した人は、ここから出られます！』

何処かで聞いた事のある声が聞こえてくる。すると、十数名の反抗的な声が聞こえて来た。いよいよもつて遅刻の様だ。

まあそんな事を気にする瑛嗶でも無い。気楽に考えながら音を立てて入った。

「ちーす」

『!?』

「転校生の泉ヶ仙瑛嗶です。敬意を込めて瑛嗶さんと呼びたまえ」

「いや、入学式に転校生は無いと思うんだけど……」

パーカーを着たアンテナ君がそう言った。瑛嗶はとりあえず気にせず周囲を見渡す。すると、壇上に、白黒のクマがいた。なんというか、趣味の悪いぬいぐるみである。

瑛嗶はとりあえず、考えるのを止めた。いつもどおり、思った通りに行動する事にした。

「遅かったね、瑛嗶君！ 8時集合って言ったでしょ！ 遅刻するなんて、寝坊すけさん

だねえ〜」

「なあその不良、アレ何？」

「あん？ 俺の事かそりやあ？ モノクマっつー趣味の悪いぬいぐるみだよ、さっきから妙なことばっかり抜かしてやがる」

「へー……モノクマ？ ははは、そりや変な名前だ」

「馬鹿にするなっつーの！ それに、ぬいぐるみじゃなくて、学園長なんですけど」

モノクマの言葉に瑛嗶は面倒そうに首を振った。そして、スキルを使ってその場にいる全員の詳細を情報取得していく。スキルなんて誰も知らないから使ってもバレない。

人数は瑛嗶を含めて16人。どうやら、此処にいる者はそれぞれ『超高校生級』と呼

ばれる才能を持つているらしい。

苗木誠 『超高校生級の幸運』

大和田紋土 『超高校生級の暴走族』

桑田怜恩 『超高校生級の野球選手』

江ノ島盾子 『超高校生級のギャル』

腐川冬子 『超高校生級の文学少女』

十神白夜 『超高校生級の御曹司』

舞園さやか 『超高校生級のアイドル』

霧切響子 『超高校生級の???』

セレス以下略 『超高校生級のギャンプラー』

山田一二三 『超高校生級の同人作家』

朝比奈葵 『超高校生級のスイマー』

大神さくら 『超高校生級の格闘家』

石丸清多夏 『超高校生級の風紀委員』

葉隠康比呂 『超高校生級の占い師』

不二咲千尋 『超高校生級のプログラマー』

なるほど中々愉快的な面子である。ちなみに、瑛嘎は『超高校生級の人間』となってい

た。なんだその才能は。霧切響子は何故か情報制限みたいに謎のままだった。神の見える手か。

「まあいいや、遅刻した瑛嗶君は、他の人から詳細を聞いてね！　じゃ、これで入学式は終わりとなります！　豊かで陰惨な学園生活を、どうぞ楽しんでくださいねー！」

モノクマがそう言つて消えて行つた。

「なんか頭の悪そうなクマだな」

「それでも、この状況を支配しているのはあのモノクマよ」

「霧切響子だっけ？」

「何故貴方が私の名前を知っているのか気になるけど、まずは情報把握が先ね。私達はこの学園に閉じ込められたのよ。そして、此処から出るには、この中の誰かを殺さなくてはならない。貴方もこれを持っているでしょ？」

霧切が取りだしたのは、学生手帳型スマートフォン。瑛嗶は着物の袖を探り、同じものを取りだした。なんとというか、用意周到というか、状況に優しいスキルである。

「まず、重要なのは今話した事と、この学生手帳に書かれている校則を守ること。さしあたって今注意すべき事はそれだけよ」

「そう……ちなみに校則破つたらどうなの？」

「おそらく、殺されると思うわ」

「モノクマを攻撃しても、か」

「ええ、先程大和田君……そこにいる彼がモノクマに食い掛かった時、モノクマは爆発したわ」

「へー、で……どうすんの？」

「それは今からこの学園から出る方法を模索してから考える事になるでしょうね」

瑛嘎に大体説明してくれた霧切響子は、そう言うのと、さっさと何処かへ行つてしまつた。それに続く様に全員が体育館から出て行つた。

「なんだアイツら。此処から出たいのか……」

瑛嘎は体育館にも張られている鉄と螺子に眼を向けた。とりあえず、皆が戻ってくるのを、螺子を外したり付けたたりしながら待つ事にした。瑛嘎は自力でいつでも出れるし、今更人殺し位で揺れ動く精神もしてない。大した脅威でもなかった。

「ちよちよちよちよ！ 何してんの瑛嘎君！」

「あ、モノクマ。去つて言つた割には再登場早かつたな」

「その螺子なんで取れるの!?!」

「馬鹿だなお前……螺子なんだから捻子つたら取れるに決まつてんだろが！」

「めちやくちや正論!!?」

「それにだな、鉄如きで俺を閉じ込められるとでも思つたか！ せめてオリハルコンク

らい持ってこいやこのクマが!!」

「それ伝説の鉱石だよ!!」

「全く……だからクマとか呼ばれんだよ……」

「あれ? これ僕が悪いの? 僕が悪いの?」

瑛嗶が螺子を取り外ししているのを監視カメラで見たのかモノクマが現れた。結果、瑛嗶に弄ばれているけれど、まあいいだろう。

「まあ、俺としては面白そうだから、協力してやるよこんなアホ臭いぬいぐるみなんて作っちゃって悦に浸ってるお嬢ちゃん」

「……うぶ、うぶぶ、うぶぶぶぶぶぶ! 良いね良いね、それは良かった! ここから出られたら困っちゃうからね!」

モノクマはその場でくるくると回りだした。瑛嗶はモノクマの頭を掴んだ。

「え?」

「なんか、その笑い方ムカつく。ドラえもんに謝れ」

「うぎやああああ!」

瑛嗶はモノクマの頭と胴体を引き千切った。すると、頭だけになったモノクマが、ぶんぶんと怒りだす。

「何するんだ! 学園長への暴力は校則違反だよ! やっちゃえ、グングニルの槍!」

「知るか」

「えええ!!」

飛び出て来た槍の全てが、何故か一瞬で全て叩き折られていた。反則過ぎる。

「それは校則以前に全面的なルール違反だよ!!」

「いいかクマ、ルールってのは破る為にあるんだよ」

「守る為にあるんだよ!!」

「そんなもん誰が決めたんだよ!」

「この学園においては僕だよ!」

「ははは、首だけのクマがほざきおる」

「首だけにしたのは君だけど!」

モノクマは首だけなのに中々ツツコミをこなしてくれる。この調子でツツコミ役として頑張つて貰おう。

「……えーと……何、してるのかな? 瓊瓊さん……」

「おや君は苗木君。一番地味なのに主人公っぽいオーラが特徴的だね」

「いや、モノクマの首が引き千切られてると、叩きおられたその棒切れが気になる所なんだけど……」

「ああこれ……いやーモノクマを引き千切ったら、お仕置きとして槍が出て来たから、全

部叩き折ったんだよ」

「ごめん、理解が追いつかないや」

「ま、とりあえず何も無かったんだよ」

「う、うん……とりあえず分かったよ……」

モノクマの頭を投げ捨てて、瑛嗶は苗木の前に立つ。小柄な苗木は背の高い瑛嗶の胸元に頭が来る。瑛嗶はそんな苗木に視線を向けながら、話す。

「で、どうだった？ めぼしいものはあつたかな？」

「うーん……いや、無かったよ……残念だけど」

「あ、そう。まあいいじゃん？ とりあえず誰か殺そうぜ」

「うん……うん？ いやさらつと物騒なこと言わないでよ!？」

「さて……これからどうしようか？」

「急に真面目に戻ったね……でも、皆で力を合わせれば、きつと外に出られるよ!」

苗木がとても真面目に主人公っぽいことを言う。なんとというか、人に好かれる性格をしているようだ。

だが、この場合、瑛嗶の力だけで何とかなってしまう分、他のメンバーの力が蛇足っぽくなってしまう。

「まあ、瑛嗶君だけでなんとかかなりそうだけどね!」

「モノクマ……しぶといね、首だけなのに」

「学園長ですから！」

「学園長関係無いよね？」

「うぷぷぷ、まあ精々頑張ってくださいいねー！」

すると、床がちやつと開いてモノクマの身体と頭が落ちて行った。

「まあいざとなればこうやって螺子外せるし、どうにかなるって」

「うん……そうだよね、何とかなるとよね……あれ？　なんか今重大な事を見逃した様な気が……」

「気のせいだよ」

「……そ、そつか……でもそうだね！　頑張ろう！」

苗木はそう言つて、胸の前でガッツポーズをする。玳唄はそんな苗木の頭上で、ゆらりと笑っていた。

番外箱 瑛嗶の異世界旅行

——瑛嗶 in 黒子のバスケ——

「オイ遅いよ遅いよ！ なにやってんの！ 出来る出来る！ 出来ないと思うから出来ないんだ！ 出来る！ 出来るって！ お前なら出来る！ いいか、お前がこれをやり遂げた時、お前の価値はあの富士山よりも高いものになるんだ！ 出来るんだよ！ お前にはソレが出来るだけの素質があるんだ！ 頑張れ！ 頑張れ！ それをやり遂げた時、お前は今日から、富士山だ!!!」

「暑、苦しい、です……っ……っ……!!」

さて、こんな感じで始まった訳だが。今回瑛嗶が行ったのは、黒子のバスケの世界である。瑛嗶がいつのまにか入らされていたバスケットボール部。ランダムな効果はどうやら物語に強制介入出来るようになっていているらしい。

そこで、瑛嗶が入った学校というのが、誠凛高校バスケットボール部だ。時系列的には桐皇学園リベンジ戦前の仕上げ期間の様だ。瑛嗶はこの時期にバスケット部に入ったと

いう設定らしい。アホか。

そして、現在やっているのは主人公である黒子君の特訓だ。黒子君はどうやら新しいドライブとかいうみょうちきりんな手品技を思いついたらしく、瑛叟は新入部員ということで黒子の練習相手にされてた。仕上げに集中したいからか監督である相田リコの身体鑑定も受けていないし、瑛叟にとつては練習初日なので、まだボールにも触れたばかりだ。

「というか、その消えるドライブ？　ほんとに『キセキの中二病』を抜けるの？　俺まだ抜かれて無いんだけど」

「というかなんで止められるんですか。あと、『キセキの世代』です」

「ボールしか見てないから」

「え〜……」

黒子はバスケット部でありながら体格的にも運動能力的にも恵まれていない。だが代わりに『視線誘導』視線誘導とかいう技術をバスケットに取り入れているらしく、その生来の影の薄さも相まって、あたかも試合中に消えてしまったかのような感覚になるらしい。

だが、それでも『キセキの世代』というとても素晴らしいバスケットセンスを持った5人の選手の1人、青峰大輝という人物のいる桐皇学園に敗北したらしい。

そこで、黒子は新しい必殺技を身に付ける為に、新しく『消えるドライブ』を習得す

ることにしたようだ。視線誘導で自分を見失わせて、その隙に抜くという技だ。だが、黒子の視線誘導は黒子を見ようとする視線を逸らす。ならば、黒子を見ずにボールだけ見てれば良いということだ。

「じゃあ次は俺の番な」

「え」

「へいへーいー！」

「その顔止めて下さい」

瑛嗶は黒子からボールを奪い、ダムダムとボールを跳ねさせる。その際の瑛嗶の馬鹿にした様なドヤ顔が、イラツとさせる。

「じゃあ、俺も消えるドライブやってやろう」

「な……視線誘導が出来るってことですか？」

「いらないよそんなもん……」

瑛嗶はそう言つて、少し腰を落とした。黒子は止められないだろうと思いつつも、全力でディフェンスに務めた。

だが、次の瞬間――

「!？」

——瑛唄が消えた。黒子の肌を風が通り抜ける。抜かれた!? と振り返るが、そこには瑛唄はいなかった。更に困惑する黒子。そして、その背後から

「しゅーとおー!」

「え!?!」

「ゴール、イン!!」

声が聞こえ、再度振り返ると、そこにはなんと瑛唄がシュートモーションに入っており、既にボールを放ったあとだった。黒子は動くこともままならず、放たれたボールはすばつと乾いた音を立ててゴールに入った。

まあ抜いていないとして、消えた事も気になるが、まず最初に驚愕したのはそのシュートを決めた位置だ。

『キセキの世代』の一人、緑間慎太郎は、3Pシューターだ。その特異な才能は、コート何処からでもシュートを決められるという所にある。例えば、ゴールの端から端のゴールであつても確実に入れることが可能なのだ。

ここで瑛唄の決めた位置だが、それはまさしくコートの端から端だった。それは、緑間と同じことが出来るということに他ならなかった。

「案外難しいんだね、バスケって」

「いや今のは……?」

「いやね、ボールをさ、投げる力加減が難しいよな」

「寧ろそれで出来てしまうのがおかしいと思うんですけど……」

「黒子君、人つてのは案外、何でも出来るんだぜ? 黒子君がダンク決めるのも可能なんだぜ?」

「……………どうやってですか?」

「ほら、跳び箱の跳躍台使って」

「それはダンクとは言いません」

黒子は少し疲れた様に肩を落とした。消えるドライブで瑛叟を抜けないので少し不安だったが、どうやら瑛叟も『キセキの世代』レベルの動きが出来らしい。ならば、まだ未完成な技で抜けないのも分かる。少しだけ、安心した。

「さ、練習の続きだ」

瑛叟はそう言つて、キュツとバツシュのスキル音を響かせた。



桐皇戦当日

戦況は、圧倒的誠凛の不利だった。青峰の驚異的なスピードと敏捷性、そしてどんな体勢でも決めてくるシュート能力、青峰一人だけでも誠凛はかなり圧倒されていた。

しかも、青峰以外の四人も自力で誠凛よりも上を行っていた。これは確実に敗色が濃い。

「いいかテツ、お前がどんな努力をして来たか知らねーが……そりゃ無駄な努力だ」

あの黒子の完成した消えるドライブも、エースである火神大我のキセキの世代並みの跳躍力でも、青峰は止められない。挙句、ダブルチームで付いても躲される始末。どうすれば止められるのか、全く分からない。

そこで、誠凛に更なるピンチが訪れる。

「ガッ………!?!」

「鉄平?!」

誠凛の頼れるセンター、鉄心と呼ばれた男、木吉鉄平が倒れた。これは、原作にはなかった事だ。だが、現実是非情だ。彼は以前バスケット中に負った膝の怪我をまだ完治させていない。故に、テーピングなどの処置で騙し騙しやってきていたのだ。いつこうなっても、おかしくはなかったのだ。

「く………これじゃ鉄平は出せないわね……」

「待ってくれ……リコ、俺はまだ……っ……い！」

「うっさい、黙ってなさい。今は強がりなんていらぬの！」

監督のリコはそう言つて、鉄平をドクターストップでリタイアさせた。させ、そこで次に出場する選手を選ばなければならない。普通ならば経験のある小金井や土田、水戸部といった控え選手を出すのだが、ここでは木吉以上のセンサーを務められないと敗北は必至だ。何故なら、ゴール下が明らかにガラ空きだからだ。

「なあ監督」

「何？ 瑛夏君」

「ちよつと俺出してくれない？」

「……………」

リコはそういえば瑛夏の身体能力を検査していなかったな、と考え、縋る様な想いに捕らわれる。

「ちよつと、服を脱いで」

「オツケイ」

瑛夏は上の服を脱ぎ捨てた。上半身が裸になる。そこには、圧倒的美とも言える肉体があった。締まりに締まった筋肉と、無駄な脂肪が一切見当たらない鍛え抜かれた肉体。リコの眼には、あたかも数十億の価値がある芸術品の様に映っていた。

「これは……………！ 瑛嗶君、行ける？」

「無論だ」

「じゃあ、ユニフォームを着て！」

そこで時間切れ。メンバーチェンジで、瑛嗶が出場する事になった。ぐいつと腕を伸ばしながら、コートに向かって歩き出す瑛嗶。瞑目し、その口端をゆらりと吊りあげる。

そして、瞳を開くと同時、その足をコートに踏み入れた

——ゾワツ！

瞬間、コート内にいる全員の背筋が凍った。まるで、目の前から逃れようのない大津波が襲い掛かってきている様に、雪崩が迫ってきているかのようになり、瑛嗶という人間に脅威を感じた。敵だけでなく、味方である誠凛のメンバーも。

それもその筈だ。何故なら、瑛嗶はバスケットマンではない。異なる世界の異なる時間で、多くの実力者と戦い、殺し合いをしてきた人間だ。つまり、瑛嗶が放つのは闘志や戦意などの威圧感ではなく、紛れもない単純な——

——殺気

人も殺したことが無い輩が、人を殺してきた男の殺気に、耐えられる筈が無い。だから、瑛嗶が殺気を放ったのは一瞬。それだけで、十分だった。

全員が瑛嗶を弱者とは思わなかったし、寧ろ今までに会った事もない強者だと思った。見た訳ではないが、感覚で感じた。

「さーて……始めようか。加減無く手加減して、抜かりなく手を抜いて、散々舐めまくった上で、叩き潰してやるよ」

瑛嗶はそう言って、木吉のいたセンターのポジションに付く。ポジションの相手は、それこそ全国区の実力者。なのに、瑛嗶が目の前に『立っている』だけで、その迫力に呑まれた。

「あ……………う……………！」

「どうした少年、足が竦んでるぞ」

試合が始まり、桐皇が攻めて来た。当然、ボールを持っているのは、青峰だ。

「ガングロが来たな……………さて、どれくらいのものかな？」

「さつきはなにしたらかしらねえが……………俺に勝てんのは俺だけだ!!」

前にいた誠凛のメンバーを全て躲して攻めて来た青峰は、瑛嗶の目の前までやってきて、瑛嗶も抜こうとする。だが、瑛嗶は気だるそうに歩きだし、青峰と擦れ違った。

その時、青峰は瑛唄の態度に失望した。やる気もないというわけか、と。だが、そんなのはずっと前に味わっている。今更だ。止める気が無いならこのままシユートしてしまおうと考えた、のだが。

「よーし攻めんどお前らー」

「!?!」

自身の手の中に、ボールは無かった。そして、背後から聞こえて来た瑛唄の声に、振り向く。そこにはボールを持ってドリブルしながら歩く瑛唄の背中があった。

何時の間に取られた、と疑問が頭を過ぎる。だが、今はそんな事考えている暇はない。青峰は瑛唄を追い掛けた。幸い、歩いている瑛唄に追い付くのは簡単で、すぐに回り込めた。

「デメエ……なにしやがった……!」

「わはは、なに言ってるの GANGRO 少年。お前が勝手にボールを取られただけじゃないか」

「チツ……!」

ボールを取ろうと手を伸ばす青峰、その速度は、明らかに常軌を逸している。だが、瑛唄はそれをひよいつと躲した。

「遅い、遅いぞ GANGRO 少年。お前には速さが足りない」

「なんだ——!?!」

「ほら、簡単に抜ける」

気付けば、身体を風が吹き抜け、瑛夏が視界から消えていた。そして背後から聞こえた声に振り向くと、そこには瑛夏がボールを持った状態で立っていた。青峰の方を顔だけ振り向き、馬鹿にするように笑う。

そして、青峰の様にボールを軽く振りかぶり、手首だけでシュートを打った。

「なっ……!?!」

「まずは3点」

瑛夏の言葉と同時に、宙を舞ったボールはシュパツとゴールに入った。これはキセキの世代目線でも異常だった。ゴールの方を見ず、ハーフラインよりずっと後ろで、しかも片手首の力だけでゴールを決める。そんなのはどう考えてもおかしかった。

だが、入ったモノは仕方ない。入ったのだからそれは点なのだ。

「掛かって来いよガングロ少年。俺に勝てるのは俺だけだ、とかいう笑える中二ジョークなんて、鼻で笑ってやるよ」

瑛夏のゆらりとした笑みと、一連の動きをしてなお息切れも汗もない様子に、青峰は久しく感じていなかった、自分よりも圧倒的に強い相手の気配を感じ取っていた。

「さあ、反撃開始だ」

その言葉は、やけに響いた。

番外箱 瑛嗶の異世界旅行

——瑛嗶 in ソードアートオンライン——

瑛嗶がこの世界にやってきて、最初に思ったのが、肉体が違うということ。どう見ても弱体化している。取り急ぎ、スキルを使って確認してみる。どうやら精神があれば、肉体が違っててもスキルは使えるらしい。やはり力は力でしかなく、それは使う側の問題。肉体はスキルを外界へと放出する為の部品でしかない訳だ。ならば、この違和感しか感じない肉体であろうと、スキルを使う精神が宿っていれば、スキルは使えるのだ。

ということ、スキルを使ってみたのだが、どうやら瑛嗶の本当の肉体は昏睡状態であるらしい。この世界はただのゲーム世界だ。ハンターハンターで言う所の、グリードアイランド。この世界で死ぬば、現実世界の肉体は脳神経を焼き切られて死ぬらしい。ゲームをする為に被るヘルメットの様な形の精神ダイブ機械、『ナーヴギア』から発せられる電気攻撃によって。

だが、それを理解した所で、瑛嗶は特に何も思わなかった。何故なら、電気機械の発する程度の電気攻撃で、瑛嗶の肉体が破壊出来る筈もない。あの肉体は、かの獅子目言

彦同等の耐久力と頑丈さを持っているのだから。

さて、差し当たつての状況確認を終わつたので、このゲームの進行具合と現状装備、自分が何処に居て、此処はなんの目的を達成するためのゲーム世界なのか、それを確認する。

そこで分かつたのは、ここは『ソードアートオンライン』と呼ばれる世界で、1から100層のフィールド踏破型RPG的要素を含むゲーム。武器は基本的に刀剣類であり、魔法は存在しない。代わりに、剣を使った『ソードスキル』と呼ばれる、剣技をシステムアシストで発動させることが出来る。

そして、各層には各層ごとにボスが存在し、それを打倒することで次の層へと進む事が出来るのだ。そして、100層のボスを打破することで、ゲームクリアと成る。

重要なのは此処からである。この世界ではログアウトという選択肢を選んで現実世界へ戻ることが出来ない。ゲーム管理者であり、開発者である茅場晶彦によってゲーム世界へ閉じ込められてしまったのだ。そして、先程も言ったが、ここではゲームオーバー……つまりHPを0にした時点でゲーム世界から消滅、現実世界の肉体も死亡することになる。

——ゲームを使った大量殺人。言ってしまうえばそういう事だ。

さて、そこまで分かった所で、現状このゲームは第74層までクリアされているらしい。大幅に出遅れている。これはなんとというか、差は広いな。

そこで、瑛嗶のいる場所は第1層の始まりの街だ。装備は、初期装備。丁度、今ゲーム始めた、という設定らしい。このゲームに限ってはありえない、『第2陣』と言うべきプレイヤーなのだろう。

「さて……と、それじゃあ取り敢えずボスにでも挑もうかな？」

瑛嗶は少しだけ楽しくなって来ていた。何故か、それは瑛嗶であつても視界左上にあるHPバーが失われれば、この世界から消滅する、という事に他ならないからだ。しかも、この世界では瑛嗶も普通に攻撃が通るし、普通に全力が出せるし、普通に楽しむ事が出来るのだ。

楽しくない、訳が無い。

「ふむ、その前に剣を刀に変えて来ようかね……今まで使ったことがある武器なんて、基本『陽桜』だけだし、代わりになる刀があればいいや」

とりあえず、瑛嗶はそう呟いて、武器屋へと歩いていくのだった。



そして、武器を刀に変えた。何故かは知らないが、とりあえず武器として瑛唖が求めたのは、耐久力だった。故に、瑛唖はこれを選んだ。

『冒険者の刀』

STR20%減 耐久力∞

↓この武器は破壊されない。代わりに攻撃力を下げる。

初心者がまず間違いなく選ばない武器である。確かに破壊されないのはかなりのメリットだが、初心者の少ない攻撃力を2割も下げるのだ。これは大きな痛手だ。だが、瑛唖に限ってはこれが上手く働くことになる。

瑛唖は戦闘において並外れた経験を持っているのだから、肉体が弱体化していても問題ない。それ位の誤差は修正可能だ。今までだって、敵の攻撃で弱体化やピンチの状況での戦闘は幾らでもあったのだから。

「じゃ、とりあえず……迷宮行こうか、ボスを見てみたい」

瑛唖はそう言つて、目の前にある迷宮への入り口へと入っていく。

この時瑛唖は自分の勘違いにより、一つの間違いを犯していた。迷宮というのは地下

にあると思っていたのだ、瑛嗶は。故に、瑛嗶は第1層のボスのいる迷宮、ではなく――
――地下にある迷宮へと入り込んでしまっていた。

「……………これは、どういうことかな……………」

瑛嗶が迷宮に入っただけでしばらく進んだ所で、一匹のモンスターに出会った。名前表示はスカベンジトード。ステータスは一切読みとれない。おそらくレベル差が激しいのだろう。

だが、瑛嗶は持ち前のスキルで詳細を知る。おそらくは60層相当のモンスターであろう。

「倒してみようかな？」

瑛嗶はとりあえず刀を抜いた。すると、スカベンジトードは瑛嗶の方を向いて、飛び掛かって来た。おそらく、一撃でも喰らえばHPは全て持っていられるだろう。

瑛嗶はその飛び掛かりを躲し、刀で一閃。ソードスキルは使っていない。というか、使い方が分からない。

「つと……………わーお、一切HPが減ってない。防御力がこっちの攻撃力を軽く超えちゃってんな……………」

瑛嗶は負ける気はしなかったが、勝てる気もしなかった。攻撃が一切通用しないのだから。だが、ダメージが皆無という訳ではない。でかいカエルのモンスターである故

に、装甲なんかはない。刀は通る。

HPをドドツト、削っていた。つまり、ダメージを与えていた。

「一撃でダメージか、面白い」

瑛嗶は再度刀を構える。この世界には恐らく、瑛嗶だけが出来る戦闘技能がある。それは、気配の察知。このゲーム内では恐らく『索敵』スキルなんかを使って不意打ちやモンスターの接近を知るのだろうが、瑛嗶はそれを地で行うことが出来る。幾多の戦いで身に付けた、技能だ。

故に、瑛嗶は分かっていた。このスカベンジトードが何匹もいる事を。そして、肉眼でも確認出来た。おおよそ数十匹のスカベンジトードが瑛嗶を取り囲んでいた。

「だーいピーンチ……でもまあ、いざとなればスキルもあるし……掛かって来いよ、カエル共」

瑛嗶がそう言うと、一斉にスカベンジトードが襲い掛かる。瑛嗶は大量に飛び交うカエルの隙間を正確に、的確に抜けて、その中で刀を振るう。連続して岩を刀で叩く様な音が響く。そう、絶え間なく、途切れることなく、さも連撃のソードスキルであるかのように、その音は途切れぬ。ガリガリと地面を削り、カエルを叩き、飛び掛かってくる軌道をずらし、一切の攻撃を受けないままに、自身の弱々しい攻撃だけを届かせる。

弱々しくも、確実に奴らのHPゲージを削る攻撃を届かせる。

「——弱い、今の俺よりも断然速いけれど、弱いぞお前ら」

「ゲガアアア!?!」

一匹、ゲージが0になって消し飛んだ。実際、どれだけ実戦経験があろうが、圧倒的な性能の差がある。勝てる筈が無いのだ。

だが、瑛叟はそこで、此処がゲームであることを利用する。敵の動きも攻撃も全てがゲームでシステム設定されたものだ。故に、瑛叟は設定された動きのパターンを読み、数多くのカエルをどう動けばどう動いてくれるのかを先読みしているのだ。

つまり敵を自分の思ったパターンでの攻撃で、自分の思った場所へと誘導することで、敵の攻撃を完封しているのだ。だから攻撃は当たらない。瑛叟の攻撃のみが当たる。何故なら、誘導した場所へ刀を振れば、当たるのだから。

「——案外、簡単じゃないか」

二匹、三匹と、次々カエルが吹き飛び、ドットとなって消えていく。そうしている内に、瑛叟のレベルが戦闘中にも限らず上がっていく。まさしく鰻登り、1だったレベルは、10、20、30と上がっていく、それにつれてステータスもぐんぐんと向上していく。

それにより、カエルを倒すのも容易になっていく。カエルが吹き飛んで行く間隔は短くなっていき、そしてついにはその数は0になった。

「……………つと終わりつと」

総計89匹のカエルが死んだ。瑛嗶のレベルは、異常な伸び方をして、戦闘が終了した時点で78レベルになっていた。初期装備なのに、レベルは78。おおよそ60層レベルだ。現在の時点で74層までクリアされているのだが、おそらく攻略組はおおよそ100レベルと言っても過言ではない位のレベルだろう。今の瑛嗶はまだ攻略組には到達していないだろう。

「さて……………進むか」

瑛嗶は刀を抜き身のまま進む。ハンターハンターで戦っていた頃の『陽桜』を思い出して、少し懐かしかった。

「……………」

そして、数歩進んだ時点で、瑛嗶は気付いた。前から近づいてくる大きな一つの気配に。

「まあモンスターだろうな。ボスかな？」

瑛嗶が刀で地面を叩く。すると、甲高い音が響き渡った。それに気付いたのか、目の前に一つの大きな影が現れた。巨大なモンスター、ボスのモンスター、ステータスが見えない、ということとは60層以上のモンスターであろう。だが、瑛嗶はスキルで理解する。これは90層以上のレベルのモンスターだと。

名前は、ザ・フェイタルサイズ。まさしく死神と言っても良い位の容姿をしている。その大きな鎌は、おそらく喰らえば一撃で半分以上のHPを持つていかれるだろう。

「いいね、面白い。来いよイカレ髑髏——叩きのめしてやる」

瑛嗶の言葉と同時に、死神は動きだす。目の前から消え、瑛嗶は頭を下げる。気配を感じたのだ。すると、先程まで瑛嗶の頭があつた所を鎌が通り過ぎた。そして、瑛嗶はバックステップで近づき、死神に刀を届かせた。やはりHPは減らない。減つても1ドットだ。

「……仕方ないな」

瑛嗶は呟きながら、首をコキツと鳴らした。



この世界の攻略組の一人、ソロプレイヤーのキリトは結婚相手であるアスナ、一時的な娘であるユイ、そして依頼者である女性、ユリエールの四人で、地下の迷宮へとやって来ていた。目的は、ユリエールの仲間であるシンカーを救出する事。彼は此処に取り残されてしまっているのだ。瑛嗶の戦ったあのカエルといい、あの死神といい、高レベル帯のモンスターがうじゃうじゃいる中で、勝てる筈もない。

番外箱 いつか言つてたなじみへのドツキリ話 ①

少しだけ昔の話をしよう。そう、あれはまだ箱庭学園が無かつた頃、言つてしまえば人間がまだ文明的な発明をする以前の話。具体的な年数はもう忘れてしまつたが、顔を上げればまだ自然の方が多かつた時代の話だ。

二人は誰もいない草原で、今でいう所のピクニックをしていた。特に何か用意していた訳ではない。女子が料理をバスケットに入れて持つてくるような展開は無いし、男子が女子の服装を可愛いと褒める事も無い。恋愛漫画みたいなやりとりは特になく、ただ草原の中で吹き抜ける風を感じながらのんびりと時間が過ぎ去るのを感じていた。

会話はあまりなかつたけれど、二人の間に気まずさはなく、寧ろ風の音だけが聞こえていたその時間は、二人にとって心地良いものだった。

安心院なじみはこの時、まだ瑛叟への恋愛感情を自覚していなかつたが、それでも少なからず瑛叟へ好意を寄せているのは確かだった。だからか、今思うと無意識的にそういう好意に従つて動いていた事もよくあつたと思う。

安心院なじみは、隣に座つて身体を撫でる風に気持ちよさそうに眼を細めている瑛叟を見た。いつもと違つて自然な微笑みを浮かべている瑛叟に、少しだけ心が浮かれた。

「ねえ瑛嘎」

「ん?」

何か話題がある訳じゃなかったけれど、思わずなじみは瑛嘎に話し掛けていた。少し慌てたものの、瑛嘎に悟られないように無難な話題を考えて、そのまま口にした。

「瑛嘎って昔は何をしてたの?」

「昔?」

なじみは、瑛嘎を自分と同じ人外だと認識している。だが、瑛嘎がいつ生まれたのかは知らないのだ。この世界においてはなじみと初めて会った時に生まれた。ということになっていくが、なじみにとっては空から瑛嘎が落ちて来たという認識であり、瑛嘎が生まれたという認識はない。

つまり、自分と出会う前に瑛嘎は何をしていたのかという疑問が生まれるのは、当然と言えば当然だった。

「昔ねえ……」

瑛嘎はその問いに空を見上げて考えた。昔の事、それはつまりこの世界に転生してくる以前の世界の事になる。思い出せば切りがない。ハンターハンターの世界や、リリカルなのはの世界で作った思い出は、おそらく1300年程の年数になるだろう。

親友や義理の妹、教え子や娘、ペット的な感覚だったが家族になった者もいた。話せ

ば尽きることなく話し続けられるだろう。

「そう言えば、今の俺は何でも出来るよなあ……そうだな、一回会ってみる？」
「え？」

瑛嗶は考えた。今の自分だから出来ること、『死者の蘇生』や『異世界旅行』といった規格外の事が行なえる今だから出来ること。それは、『過去の友人や家族に会う』ということだ。スキルでなら、それが出来る。出来てしまうのだ。

「会うつて……誰に？」

「俺の親友とか、娘とか、ペットとか、義妹とか……もう死んでしまった奴らだけど」

安心院なじみは少し眉を潜めた。特に、義妹と娘のあたりで。何故か分からないが、少しだけ気になったのだ。

「まあ……興味が無いっていえば嘘になるかな？」

「それなら良いじゃないか……じゃ、会ってみますか」

瑛嗶は発動させる。たった今作りあげたスキルを。そして再会する。数億年ぶりの

——親友たちに

安心院なじみは会う。瑛嗶がずっと昔に築き上げた——絆に

— 異世界を纏めるスキル 『集約する絆』 —

Cさあ、
o
m
e
o俺
nの
,
L家
e族
t
,
s
g
oに
t会
o
s
eい
e
nに
y
f行
aこ
m
i
l
l
y.う

番外箱 いつか言つてたなじみへのドツキリ話 ②

瑛嗶となじみは、光に包まれたかと思つたら、教室の扉の前に立っていた。見れば、廊下がどこまでも続いており、目の前の扉以外は全て壁だった。そして、瑛嗶はそんな中でとなりに立つなじみを見た。彼女も少なからず驚いているようで、きよろきよろと当たりを見ながら少し慌てていた。

そして、そこで瑛嗶は気が付いた。自分の身体に起こっている異変に。

念能力と魔法の力が戻っている。昔と同様に自分の身体をオーラが纏っているのが分かるし、全ての魔法の知識と展開の方法が頭の中を駆け巡る。どうやら、この別次元においては昔の力が使用可能の様だ。

「な、なんか瑛嗶から物凄い威圧感を感じるんだけど……」

「気のせいだよ」

瑛嗶はそう言つてスルーする。元々、ハンターハンターの世界から既に数億年の時が経っている。瑛嗶のオーラの量もそれに応じて増えているし、その質もそれに応じて向上している。普通に纏をしているだけでメルエムと戦った時並に他人へ威圧感を与えてしまっていた。

更に言えば、それに魔法の力と人外のスキルが加わるといふ凶悪な掛け合わせが為されているのだ。威圧感どころか常人ならショックで気絶か死ぬくらいありえそうだ。

「まあ今の俺なら世界の二つや二つ簡単に吹き飛ばせそうだ」

「さらつと怖い事言うね……」

「まあいいじゃないか、ほら行くぞ」

「あ、待つてよ!」

瑛嗶は扉を開けて、中に入った。それに続くようになじみもパタパタと付いてくる。扉を開けた先には教室があり、そこには二人の人物がいた。

手入れのされていないボサボサの黒髪に、黒いタンクトップの上に黒いコートを着て、こちらを吃驚した眼で見る男と、癖のある白髪ショートの髪に、太ももまで隠す薄手の白いロングコートを着て、大きな帽子を被つており、猫の様な吊り目を丸く見開いている女だ。

二人とも視線は瑛嗶に集中しており、お互いに対しても驚きを感じているようだった。

「よう、久しぶり!」

瑛嗶がそう言うと、二人はびくつと反応する。そして、瑛嗶がどういふ状況なのかと困惑している二人に対してゆらりと笑つてみせると、二人は脱力したように歩み寄つて

きた。

「久しぶり、オウカ」

「久しぶりだね、オウカ！」

「ああ、そうだな。クロゼ、ネコー」

「ピトーだよ!!」

そう、相手はクロゼとピトーだった。瑛嗶とピトーの懐かしいやりとり三人で嘖き出す様に笑

う。なじみはそんな三人の表情を、特に瑛嗶のそんな表情を見て、疎外感を感じた。久しぶりに会った親友やペット?との会話で開放的な笑顔を浮かべる瑛嗶は、なじみも見たことが無かったのだ。

見れば分かる。瑛嗶にとって、彼らは自身と対等の存在なのだ。実力が下だとしても、親友で、対等で、無条件で信頼し合える関係なのだ。だから、ああも開放的な笑みを浮かべているし、ああも警戒心なく接する事が出来るのだろう。

少しだけ、嫉妬した。

「それにしても、これはどういう状況だ? 俺は確か死んだと思ったんだけど?」

「ボクも」

「ああ、蘇生した」

「さらつと凄いいこと言つたな今」

「どういふことなの……」

瑛嗶とクロゼ達が話しているなかに、なじみは入つていけない。とりあえず近くの机に腰掛けて、三人の会話が終わるまで静観することにした。

「実は俺最近面白い力を手に入れてさ。それで二人を蘇生させてみた」

「なるほど……お前の規格外はそこまで行つたのか」

「でも……また会えて嬉しいよ……オウカ」

瑛嗶に対して、ピトーとクロゼはとても嬉しそうな表情を浮かべた。

「ああ、そうだ……紹介したい奴がいるんだ」

「ん？ そういえばその子は？」

「オウカ、まさかまた女の子を誑かしたの？ 全く……何度目だと思つてるの？」

クロゼとピトーはなじみを見て各々反応を返した。クロゼは普通にオーラを垂れ流している一般人の女の子だと判断し、ピトーは瑛嗶が誑かした少女だろうと判断した。

実の所、瑛嗶とピトーの旅は100年近く続いたのだが、その間瑛嗶は出会う女の子に何故かモテた。瑛嗶が何かをした訳ではない、寧ろ何もなかったのに勝手に恋が始

まっていたのだ。

恋が始まるのは決まっただけで、しばらく経ってからのので、一目惚れという訳ではないだろうが、今までそんな素振りも無かった相手がいきなり恋を始めているから厄介だった。ピトーはいつもその恋愛に巻き込まれていた。

「知らん」

「だろうね」

「まあとりあえず……安心院なじみ、今はコイツと一緒に楽しくやってるよ」

「どうも、僕の名前は安心院なじみ……親しみを込めて安心院さんと呼びなさい」

なじみは紹介されたので、そう自己紹介した。すると、クロゼとピトーはニコツと笑った。

「ははは、面白いお嬢ちゃんだな。それじゃ安心院さん、俺はクロゼだ。一応オウカの親友をやってる、コイツの事、これからもよろしく頼む」

「ボクの名前はネフェルピトー。ネコーじゃなくてピトーって呼んでね、良いかな？ピトーだよ？ よろしくね」

二人はなじみの言葉に自己紹介で返した。そして、それぞれ握手を交わす。

「ちなみに、オウカは渡さないよ！ オウカはボクのだからね！」

「何言ってるんのお前？」

「100年一緒に旅したんだから、ボクとオウカはもう家族みたいなものだよ」

「いやそうじゃなくていきなり何言いだしてんだよ」

「……死人が何を言おうが僕には関係ないね。それに、たかが100年ちよつとじやないか」

何故か張り合いを始めるなじみ。瑛嗶はピトーとなじみの板挟みで苦笑する。

「ボクの方がオウカの事をよく知ってる!」

「僕の方が瑛嗶を面白くさせてあげられるよ!」

わーぎやー騒ぎ始めた女子二人。瑛嗶はそんな二人の間に立ちながら顔だけ振り返ってクロゼを見る。そして、困った様に笑みを浮かべると、クロゼもそれに対して困った様に笑みを浮かべた。

番外箱 いつか言つてたなじみへのドツキリ話 ③

教室の中で、かつての仲間と再会した瑛嗶と連れて来られた安心院なじみは、少しばかりの談笑を踏まえながら、次の教室へと向かうことにした。入ってきた扉とは別にもう一つ扉がある。その扉を潜ることで、次なる世界へと移動する事が出来るだろう。

「コラコラ、ピトーもなじみもそろそろ落ち付け」

「ここだけは譲れないね」

「僕の台詞だよ」

「うるせえな、別に俺はお前らのモノじゃねえよ。喧しい」

「うおーい!? 随分見ない内にお前結構辛辣になつたな!?」

瑛嗶が未だにぎやーぎやーと騒ぐピトーとなじみに冷たく言い放つと、クロゼは心底驚いた様にツツコミを入れた。

なんとというか、瑛嗶と相性のいい者同士が一同に会すると、相性は悪い様だ。

さて、瑛嗶の言葉で不本意ながらも、むくれながらも、一旦落ち付いた二人を見て、瑛嗶は次の世界に行くこうとする。

「で、だ。二人に説明しておこうか……とりあえず俺が昔に出会った仲間……つていう

のもお前らが死んだ後に出会つた奴らに会いに行くんだけど……一緒に来るか？」

「へえ、どんな奴らだ？」

「俺の娘だ」

瑛唄の言葉で沈黙が訪れた。時が止まったようにも思えた。全員の思考が、等しく停止していたのだ。そして、数秒の後——三人は同時に自分の時間を取り戻す。

ハツとなつた後、同時に瑛唄に詰め寄つた。

「ど、どういふことだい!? 娘つて……瑛唄、何時の間に娘なんて……!」

「そうだよ! ボクとは遊びだつたの!」

「お前娘出来たのかよ! つていふかオウカの娘とか……全然想像付かない……!」

三人の反応は三者三様。娘がいた事実を問うなじみ、自分との関係が幻想だつたのかと問うピトー、そして瑛唄の娘がどんな子なのかと想像するクロゼだ。

とはいへ、瑛唄は慌てず一つずつ答えた。

「お前と出会う前に出来た子だ。お前とは旅の仲間だつたらうが、変なこと言ふな。俺の娘を馬鹿にすんな、純粹で友達想いの可愛い娘だぞ」

「ゴメンゴメンゴメン! 謝るから許してくれその顔怖い!」

瑛唄は最後にクロゼの胸ぐら掴んで無表情に詰め寄つた。クロゼは即座に謝る。瑛唄の表情が滅茶苦茶怖かつたのだ。しかも、放つ殺意が尋常じゃない。

「ま、良いか。お前らも一緒に来るか？」

「ん、俺らも行けるのか？」

「瑛嗶の娘……一度会ってみたいかも」

「ボクとしてはその娘の母親に会ってみたいけど」

「あ、母親なんていねーよ。養子だから」

「「あ、そうなんだ!?!」」

瑛嗶は二人の反応に苦笑しながら、続く扉に手を掛けた。三人は瑛嗶の後ろに歩み寄り、同じく扉を潜る意思を見せた。

そして扉を開ける。その先は、空間の歪みようになっていた。此処を通れば次の世界に行けるのだろう。

「じゃ、行くよ」

「なんだか懐かしいな、お前と未知の世界に足を踏み入れる感覚」

「ボクもだよ」

「……………」

瑛嗶がその空間の歪みに姿を消すと、クロゼ、ピトーが続いて入る。そして最後に残ったなじみは、少しだけ複雑な表情を浮かべながら、その歪みを見つめる。だが、ぶんぶん顔と顔を振った後、もやもやとした気持ちを振り払うようにその歪みの中へと飛び

込んだ。



「パパ?」

「よう、ヴィヴィオ。久しぶり」

空間の歪みを抜けた先、そこにあつたのは同じく教室だった。但し、小学校の教室だ。机や黒板が、高校用よりも一回り小さく、まるで子供の世界に來た様な感覚だった。

そして、そこにいたのは金色の髪をサイドテールに纏め、紅と翠の虹彩異色を持った少女と、銀髪に青と藍の虹彩異色を持った少女、金髪に青い瞳の女性、茶色のショートカットの女性の、計4名だ。

「パパ!」

「おっと……大きくなっても甘えん坊なのは変わらないな」

「うん……でも、会えて嬉しい……! 本当にパパだ……!」

ヴィヴィオは、何故此処に瑛嗶がいるのか、全く理解できていなかったが、それでも父親に会えた感動でどうしても良くなった。とりあえずは、この再開を喜びたい。

「師匠、お久しぶりです」

「おーアインハルトちゃん、調子はどうよ？」

「とりあえずは健康みたいですよ？」

そこへ近づいてきたのは、銀髪で虹彩異色を持つ少女。かつて、瑛嗶の弟子として『不知火』を教わった少女だ。また、ヴィヴィオは瑛嗶の娘であり、同様に『不知火』を教わったことがある。

「瑛嗶……その子が瑛嗶の娘？」

「ん、そうだよ。泉ヶ仙ヴィヴィオだ」

「あれ？ パパ……その人達は？」

「面倒だ、纏めて紹介するよ。そこで空気になってる二人もこっち来い」

「あ、忘れられてなかったんや」

「お兄ちゃんは意図的に空気になる人をスルーするからね……」

瑛嗶の呼びかけで、とりあえずたくさんある椅子に全員が座った。瑛嗶は幹事よろしく両陣営の中心に立っている。

そして、瑛嗶は双方の紹介を始めた。

「まず、俺と一緒にやってきた奴らだが……アインハルトちゃんには一回話したかな、コイツは俺の一番弟子で親友の……」

「クロゼだ。よろしく頼む」

「む……女の子では私が一番です」

「瑛嘎ーなんかすっげえ敵視されてるんですが!？」

「死ね」

「めんどくさくてもその言い方は止めて欲しかった!!」

一人目でもう面倒臭くなってきた瑛嘎だが、紹介を続ける。続いて示したのは、ピトー。

「で、またアインハルトちゃんに話した覚えがあるコイツ。元蟻の王の配下で、俺の旅仲間
のネフェルピトー、ネコーと呼んであげてくれ」

「ボクの名前はピトーだ!! その呼び方は断じて認めない!!」

「よろしく願います! ネコーさん!」

「流石はオウカの娘だね人の魂の叫びをガン無視だ?」

無視して続ける

「で、最後に現在俺と一緒に暮らしている……同類、安心院なじみだ」

「僕の名前は安心院なじみ、親しみを込めて安心院さんと呼びなさい」

「同類ってどういうことや? 兄ちゃんみたいに怪物染みてるんか?」

「年齢で言えば3兆歳を超えたクソババアです」

「瑛嘎、その首刎ねてやろうか?」

「やってみろやその顔に皺でも刻みこんでやろうか？」

瑛嗶となじみが睨み合う。人外同士の睨み合いは、周囲にいたクロゼ達に寒気と重圧を与えるほどに威圧を振りまいていた。

だが、それを止めることが出来たのは瑛嗶の娘、ヴィヴィオ。

「パパ、喧嘩は駄目だよ？」

「……………はいはい、分かったよ」

瑛嗶が素直に言うことを聞いた!? と驚愕の表情を浮かべると共に、ヴィヴィオに対して畏怖の念を送るクロゼとピトーだった。リリカル組はいつも通りの光景なのか、苦笑しているが。

「さて、次はこっちの紹介だな」

瑛嗶はそう言つて、今度はリリカル組の紹介を始めたのだった。

番外箱 いつか言ってたなじみへのドッキリ話 ④

「えー、これが俺の義娘のヴィヴィオ、不知火の継承者です」

「なんてもん教えてんだお前は!？」

「泉ヶ仙ヴィヴィオです、よろしくお願いします!」

「お、おお……」

瑛嗶がリリカル組の紹介をする。

不知火の後継者ということでクロゼが物凄い形相で突っ込んできたが、ヴィヴィオが純粋な表情で自己紹介すると、その綺麗な瞳と子供ということとどういふ対応をすればいいのか分からずクロゼは身を小さくしてしまった。

瑛嗶はそんなクロゼを内心鼻で笑いながら、紹介を続ける。

「で、この子が俺の弟子のアインハルトちゃん。この子にも不知火教えました」

「お前はなに?　なんで貧者のミニチュアローズの薔薇並の爆弾ほいほい増やすの?」

クロゼが瑛嗶の暴走が止まらないとばかりに突っ込む。ちなみに貧者の薔薇というのは、ハンターハンターの世界で核爆弾の様な威力を持ち、爆発後広範囲に渡って猛毒をばら撒く最悪の爆弾のことである。

核爆弾と評されたアインハルトは一步前に出て、ハンター組……特にクロゼを睨みつけながら自己紹介した。

「師匠の『一番弟子』のアインハルト・ストラトスです、よろしくお願いします」
「よろしくねー」

一番弟子を強調するアインハルト。クロゼはアインハルトに睨みつけに気圧され、一歩後ろに下がった。クロゼは正直瑛叟の弟子である意識はあまりなかったし、最後は親友であったから弟子であることを誇りに思っていた事も無い。

故に、アインハルトに何故睨まれているのか分からないのだ。正直、自分より年下の、しかも美少女から睨まれていることが物凄く悪人になった気がするので、居心地が悪くなった。

対照的に、ピトーはアインハルトに気さくな笑みを浮かべながら挨拶を返した。

「で、この二人が俺の義理の妹で、茶髪が八神はやて、金髪がアリシア・テスタロツサだ。どっちも不知火並の規格外に強化しました」

「なんなの？俺結構強い自信あったのに此処には化け物しかないの？ 帰りたくなってきたんだけど」

「分かる、分かるでクロゼさん……兄ちゃんは本当ぶつ飛んだことしかさせえへんもんな」
「以外とまともだった！ えーと八神、はやてちゃんか……アンタとは仲良くなれそう

だ」

「せやな、改めまして私は八神はやてや。兄ちゃんには小さい頃に家族になつてん」

「実際は住むとこなかったから一人暮らしの小娘に取り入ったんだけどな」

「最悪やだ兄ちゃんなお前!?!」

息の合ったツツコミを繰り返すはやてとクロゼ。瑛嗶はそんな二人を華麗にスルーして別の方向を見ていた。

「ねえお兄ちゃん、私達が死んでからお兄ちゃんはどうなったの？ 彼女出来た？」

「出来てないけど」

「このへたれ」

「うるせえ生涯独身が」

「言つてはならないことを言つたな貴様」

瑛嗶に無視されたはやてとクロゼが肩を組んで愚痴の言い合いを始めたので、瑛嗶は話し掛けて来たアリシアの対応をしたのだが、どうやら言つてはならないことを言つたらしく、アリシアは光を失った瞳で見上げて来た。ので、とりあえず目潰ししてみる。

「うぎやあああああ!!?」

「あ、ごめんとでも濁った眼だったからつい」

「謝つてない！ 謝つてないよねそれ!?!」

「目薬いる？」

「貰う……うー、あー……」

瑛嗶が何処からともなく取り出した目薬を受け取ってそれを点すアリシア。

「あ、ごめんそれシャンプー水で薄めた奴だ」

「おつせい！ 何もかも遅いよ!! ふおおおおおお!!?」

眼の痛みにぼろぼろと涙を流すアリシア。瑛嗶はそんな彼女を見下ろしながらゆらゆら楽しげに笑う。すると、ヴィヴィオとアインハルトが駆け寄ってきた。

「パパ！」

「師匠！」

「なんだ？」

「アインハルトさんがクロゼさんと戦いたいんだって！」

「やります、一番弟子は私のものです」

ヴィヴィオが用件を伝え、アインハルトが妙に鋭いシャドーボクシングを始めた。瑛嗶はそんな二人の幼女に苦笑しながらクロゼの首根っこを掴んだ。

「クロゼ、お前ちよつとこの二人と試合やってやってくれないか」

「は？ ……あーまあ、いいか……どうせもう死んでるから死なないし」

「よろしく」

「おう……じゃあやろうかっ——!?」

「チツ……躲しましたか……」

「オウカ! この子もうやだ! 俺何かした!?!」

「さあ! 行きますよクロゼさん!」

「うわああああああああ……!!」

アインハルトはやる気満々、瑛嗶に助けを求めるクロゼはヴィヴィオによって引き摺られて行つた。瑛嗶はその様子をとてもいい笑顔で見送つた。

全員、久しぶりの再会にテンションが上がっているのかとても楽しそうだ。瑛嗶も、親友や娘、義妹、弟子、ペット等々、普通の家族よりも深く繋がっている家族のような関係の皆との再会を楽しんでいるようだった。

だが、この中で一人だけ不満気な表情を浮かべている者がいた。

そう、安心院なじみだ。

彼女はこの中で一人、瑛嗶の過去を知らない人間だ。だから、瑛嗶達が楽しく話をしているように混じれない。一人だけ仏頂面で机に座っていた。その視線の先にいるのは、瑛嗶だ。

自分の知らない瑛嗶がいる。数億年一緒にいたとしても、けして知る事の出来ない瑛嗶の大事な思い出がある。それが少しだけ、嫌だった。

「……………」

そんな思いは、考えれば考えるほど膨らんでいく。

そして、心の中で溜まった嫉妬は、安心院なじみを無意識に動かした。

「——と……………」

「……………」

「どうした、なじみ?」

気が付けば、なじみは瑛嗶の袖をちよこんと摘まんでいた。瑛嗶はなじみに気が付き、少し様子がおかしいことに怪訝な表情を浮かべた。

だが、なじみはずっと俯いたままだ。

そうしていると、他の面子もその様子に気が付いたようで、きよんとした様子で瑛嗶となじみに視線を送った。

「なじみ?」

「瑛嗶……………」

なじみは俯いたままか細い声で口を開いた——

番外箱 いつか言つてたなじみへのドッキリ話 ⑤

——瑛嘎、僕と一緒にいて。

そう言いたかった。でも、呑み込んだ。

「流石は瑛嘎の家族達だね、皆面白い人達だ」

出て来たのはそんな誤魔化しの言葉で、悪平等である僕らしからぬ嘘。瑛嘎はぎこちなく笑う僕の顔を不思議そうにじっと見つめている。

失敗したかな。

あまりにも蚊帳の外だったから、瑛嘎が僕の知らない所で僕の知らない顔をしていたから、なんとなく胸がざわついた。感情のままに僕が行動するなんて、本当に失敗したと思う。

僕は平等な人外——人間みたいな衝動的行動をするなんて、本当にらしくない。

その証拠にほら、瑛嘎だけじゃなく皆が僕のことを不思議そうに見ている。なんだか無性に帰りたくなってきた。居た堪れない空気に、心が痛い。

「はあ……ほら、見てみるなじみ」

「え？」

そんな僕に声を掛けたのは、この中で唯一僕を知っている人外、瑛叟。

僕の両肩に手を置いて、僕を皆の前にずいと突き出した。瑛叟の意図が分からない——展開に付いていけない。

すると、皆と目が合つて全員の顔が見えた。

そこにあつたのは、呆れ——というよりは親しみを感じさせる表情。なんとというか仕方のない子供を見るような、そんな顔だ。

唐突な僕の行動に憤るでもなく、寧ろ歩み寄る様な感情が向けられていた。くすぐつたくて、さつきとは違う意味で居心地が悪い。慣れてない感情に戸惑いしか出なかつた。

「なじみさん！ こつち来てお話ししましょう！ そつちでのパパの話聞かせてくださいー！」

「お、それは気になるところやなあ……同類つちゆうのも気になるところやし、なによりなじみさんとの関係も詳しく聞かせてほしいわ」

「どうせまた無茶苦茶ばかりやってるんでしょ？ ボクと旅してる時もそうだったし……」

「え？ ……ちよ、何？」

予想外の反応に呆氣に取られてしまう。人外の僕を圧倒する勢いで彼女達は僕に質

問を投げかけてくる。所謂ガールズトークという奴に巻き込まれた僕は、見る見る内に彼女達の中心で椅子に座らされていた。

この僕に何の抵抗もさせずに椅子まで追いやるなんて、何者なんだろう彼女達は。ギャグ補正的な力を感じるよ。

「そいつらは人外も人間も関係ない、確かな絆と想いで強引に歩み寄ってくる稀有な奴らだ。面白いぜ？ なんせ俺と家族の絆を結んだ奴らなんだから……お前程度に歩みよることなんて、呼吸するより容易くやつてのけるさ」

「琰嗶……」

琰嗶が僕の事を見ながらゆらり、いつもの笑みを向けながらそう言った。

僕程度、か。改めて僕に詰め寄ってくる彼女達のことを見る。

皆僕に歩み寄ろうとしているのが分かる笑顔を浮かべて、僕の視線に好意の籠った視線を返してくる。お人好し、という奴なんだろうね。

きつと彼女達は主人公、もしくは主人公になれる素質を持った存在だ。

英雄にだつてなれる。ヒロインにもなれる。その気になれば、誰も傷つかない形で争いを収めることも出来るし、世界を救うことだつてやつてのけるだろう。そういう存在だ。

だからきつと、僕は彼女達にとってただの女の子で、人外の力なんて関係なくて、悪

平等も人格も関係なく接することが出来るんだろう。

絆を紡ぐ力——それはきつと、人外の力もちっぽけに感じさせる程大きく強力な力だ。

「そうだね……流石は瑛嗶の家族だよ。流石の僕もお手上げだ」

「わはは、その家族の内に……お前もいるんだぞ、なじみ」

「！」

「俺がそう思って、今決めた。文句は聞くだけ聞いてやる」

瑛嗶が笑う。いつも通り、普段通り、通常通り、世界滅亡の危機にだって臆さないような笑い声を上げて、僕を指差してくる。その笑い声はきつと、彼が望めばどんな場所どんな世界にだって届くはずだ。

世界を救うことも出来て、世界を滅ぼすことも出来る彼は、きつと全知全能だとかマイナス プラス過負荷や異常なんてことも関係なく自由だ。やりたいことをやりたいだけ、未来なんて捻じ曲げて突き進む。

だから、僕を家族だと言った彼の言葉は折ることが出来ない。彼がそうだと言ったのなら、それはそうなんだ。止めることは出来ないし、止める気すら起こさせない。

全く——だから彼の周りには、僕みたいなのが寄ってくる。

「文句は……ないよ」

「知つてるよ、この寂しがりめ。頭を撫でて可愛がつてやろうか」

「ん、じゃあやつて貰おうかな」

「オーケー、家族サービスだ。ありがたく思いな」

そう言つて彼は僕の頭を撫でる。ちよつと荒つぽく、髪がぐしやぐしやになりそうなその手付きが少し、心地良い。

寂しがりというのも、バレてみたいだ。きつとさつき言おうとした言葉も察していったんだろう。多分、この場に居た全員が気づいていた。

恥ずかしいなあちくしょうめ。この世界が小説だったらラッキーだね、僕の赤面顔なんて読者には見せられないし。僕はいつだってクールでカッコいい知的な人外、安心院なじみさんだ。赤面なんてしないし、実はすごく恥ずかしがつているこの内心だつて文章にされない限りはバレはしない。

完璧だ。今の僕はとりあえず体裁は保てている。

「ふにゃあ……」

「なじみ、顔がだらしないぞ」

おつと、瑛唄に撫でてもらうのが気持ち良くてちよつと気が抜けたみたいだ。危ない危ない、折角体裁を保てていたのに、もう少しで崩れるところだった。セーフセーフ。

「なんにせよ、君の家族はやつぱり君の家族だね。一味も二味も違う」

「今の所、妹とペットと娘がいるから、あとは妻とか姉とか？」

「皆女の子なんだね？ ハーレムでも作るつもりなのかな？」

「まさか、男もいるだろ。クロゼが」

「あれは親友ポジだろ？」

「従兄でいいだろ」

「結構遠いな俺のポジション!!」

いつもの調子で話すと、其処へ先程連れていかれた黒髪の男が戻ってきた。ポロポロだが後ろのしゅんとしてゐる少女を見る限り、勝負は彼の勝利の様だね。

「お前アインハルトに勝ったの？」

「あーまあな……体力勝ちって感じだ」

「ふーん、興味ないわー」

「お前絶対いつか殴るからな」

ゆらゆらと笑う瑛唄が、また皆と話し出す。

でもそこにさつきみたいな居心地の悪さはなくて、僕の知らない瑛唄がいてももはやもやとした感情はない。所か僕も一緒になって笑うことが出来た。

家族、か。

——案外それも、悪くないかな。

瑛唄の家族は皆、人外も人間も関係ない領域の存在だ。秤にかけること自体が間違つてゐるし、かける意味もない。此処では皆家族で、此処では僕もただの女の子——瑛唄といふということとは、そういうことだ。

だから平等な僕は、素直に僕を依怙鼻屑することにした。

「ありがとう、瑛唄」

ぼそりと呟いたその言葉はきつと、皆聞こえていたと思う。

◇ ◇ ◇

「という風になじみが寂しがりを發揮したんだよ」

「ほほーう？ 流石の安心院さんも乙女ですなあ☆」

『あはは』『安心院さんも可愛い時があつたんだね！』

「ああ、だが恥じることではない。寧ろそれを聞いて私は安心院さんに親しみを持てた」
瑛唄が生徒会メンバーに昔のことをバラした。何故か不知火ちゃんがいるのが気に入らない。絶対言いふらすぜこの子。

「まあ昔の話さ」

赤面なんかしていない。不敵に笑って僕はニヤニヤ笑う生徒会メンバーの視線を華麗に受け流す。

超恥ずかしいし、此処で悶え死ぬような思いだけけど、それを隠して僕は紅茶を飲む。カップを持つ手が震えてなんかないし、笑みを浮かべる口端がひきつつてもいない。瑛暁を愛していることに気が付いた僕からすれば、当時から瑛暁を好きだったということに寧ろ誇るべきことだ。うん、そうに違いない。

だから恥ずかしくない。この内心は見た目じゃわからないし、この世界は漫画の世界だ。モノローグでもこの内心を書き綴るには文章が長くなるから大丈夫さ。きつと意味深に不敵な笑みを浮かべた僕が一コマ潰す程度で処理されるさ。この世界は小説じゃないんだからね、うん。

だから恥ずかしくなんて……ないもん。